

東京大学構内遺跡調査研究年報 15

2021 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本書は2021年4月1日から2022年3月31日までに東京大学埋蔵文化財調査室が実施した、埋蔵文化財発掘調査およびそれに関わる研究、教育、普及などの諸活動をまとめた東京大学構内遺跡調査研究年報と東京大学構内遺跡に関わる調査・研究成果である東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要を合冊したものである。
2. 上記期間に行った発掘調査のうち、埋蔵文化財が確認できたものについて略報を掲載した。
3. 遺構の略号は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で採用している方式を参照し、前に遺構の性格、後ろに各調査地点ごとに1から通し番号を付与した。前に付した遺構番号の性格の略称は、個々の報告の凡例を参考にされたい。
4. 本書の作成は室員があたり、山下、小林が編集を行った。
5. 本書（PDF形式）および本書に関わる本文には掲載されていない遺構一覧表（詳細版）、遺物観察表（以上、xlsx形式）、遺構写真、遺物写真（以上、jpeg形式）は東京大学埋蔵文化財調査室公式サイト（<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/index.htm>）に収録した。
6. 本書掲載・収録の諸データは、営利を伴わない学術目的の個人論文などの使用を除いて無断転載を禁止する。
7. 発掘調査に伴う図面、出土遺物等は、東京大学埋蔵文化財調査室が、東京大学駒場Ⅰ教養キャンパス（東京都目黒区駒場3-8-1）、東京大学駒場Ⅱリサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）、東京大学工学系研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）において管理、運用、保管を行っている。

目 次

例 言 目 次

年報編

東京大学構内遺跡の調査	3
東京大学構内遺跡調査一覧	4

第 I 章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）..... 18

第 1 節 その他の地区の事前調査

1. その他 26 東京大学医科学研究所白金台北側囲障改修	19
-------------------------------------	----

第 II 章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第 1 節 調査資料の整理

1. 整理事業概要	52
2. 外部委託	52

第 2 節 調査・研究成果の公開・活用

1. 報告書・年報	52
2. 広報活動	52
3. 教育・普及	52
4. 資料の提供・貸出	53

附 埋蔵文化財調査室要項	55
埋蔵文化財調査室規則	55
埋蔵文化財調査室組織表	55

報告編

東京大学構内遺跡発掘調査報告

基幹整備（流域⑧排水）地点	59
外灯 C-5、C-61 電源改修地点	83
医学部附属病院共同溝給水主管地点	89
農学部 1 号館スロープ等新設地点	97

紀要編

東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 15

前田邸御成記の分析 元和・寛永

湯沢 丈 107

近世江戸遺跡における猫の土人形について

小林 照子 185

年 報 編

2021 年度

東京大学構内遺跡の調査

東京大学は、農学生命科学研究科附属演習林を併せると全国 21 都道府県におよび、326,809,180 m²を所有（一部借入）している。このうち本郷（東京都文京区）、駒場（東京都目黒区）、柏（千葉県柏市）の 3 構内を拠点キャンパスと位置付けている。本郷構内は本郷、弥生、浅野の 3 キャンパス全体で 559,176 m²、駒場構内は I（教養学部など）、II（リサーチキャンパス）全体で 352,180 m²、柏構内は 412,291 m²を所有している。

また、その他周知の遺跡として登録され、現在までに試掘を含め調査を実施した所有地に、研究関連施設では理学系研究科附属植物園本園、農学生命科学研究科附属技術基盤センター（小石川樹木園）、総合研究博物館小石川分館が所在する白山構内（東京都文京区、160,787 m²）、医科学研究所が所在する白金台構内（東京都港区、68,906 m²）、理学系研究科附属臨海実験所（神奈川県三浦市、68,737 m²）、福利厚生関連施設では追分インターナショナルハウス（東京都文京区、1,576 m²）、白金台ロッジ（東京都港区、2,453 m²）、三鷹国際学生宿舎（東京都三鷹市、29,438 m²）、検見川総合運動場（千葉県千葉市、273,027 m²）、目白台インターナショナル・ビレッジ（東京都文京区、28,509.35 m²）がある。

本郷構内では旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期末～前期集落・後晩期包蔵地）、弥生時代（中・後期集落）、古墳時代（前～後期集落）、平安時代（集落）、江戸時代（大名屋敷・武家地・町地・寺社地）、近代にわたる大規模複合遺跡群で、「文京区 No.47 本郷台遺跡群」として登録されている。また、その一部（浅野地区内）は、「文京区 No.28 弥生町遺跡群」として登録され、1975 年に文学部考古学研究室、理学部人類学教室が合同調査を行った「向ヶ岡貝塚」（No.28-C 地点）は、1976 年に国史跡に指定されている。

駒場構内のうち駒場 II 地区は、近年の再開発に伴い構内の試掘調査を実施しているが、遺跡は確認されていない。駒場 I 地区は、旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期集落）、平安時代、近世（農村）の遺跡が確認され、全体が「目黒区 No.1 東京大学駒場構内遺跡」として登録されている。

柏構内（現状所有範囲）は開発前に千葉県教育委員会による試掘調査が行われたが、遺跡は確認されていない。

白山構内は、すでに明治初頭、エドワード・S・モースによって貝塚の存在が紹介されており、「小石川植物園内貝塚」として周知されてきた。また、1918 年には

東京府の旧跡として指定された歴史を持つ。現在では構内全域が縄文時代（前～晩期集落・貝塚）、江戸時代（大名屋敷・幕府御用地・武家地）の複合遺跡「文京区 No.81 小石川御薬園跡」、その一部が「文京区 No.21 小石川植物園内貝塚・原町遺跡」として登録されている。2012 年 9 月 19 日には「小石川植物園（御薬園跡及び養生所跡）」として、161,588.4 m²が国の史跡名勝に指定された。

白金台構内は、2000 年度の発掘調査（白金台 5）で旧石器時代（ブロック）、江戸時代（大名屋敷）の遺跡が確認され、その一部は、「港区 No.135 遺跡」として登録されている。

東京大学構内遺跡調査一覧

本郷構内調査一覧

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	1	1983	(U)	山上会館	事前	1984.3.7~1986.7.17	1500	西田・谷・大貫	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	2-1 2-2	1984	HHB (法) (文)	法学部4号館 文学部3号館	事前	1984.4.1~1985.3.31	2500	大塚	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
本郷	3	1985	HGS(G)	御殿下記念館	事前	1985.7.29~1987.6.30	6000	寺島・大貫・倉林	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	4-1 4-2 4-3 4-4	1984	HHC (病中) (エネセン) (給水) (共同溝)	医学部附属病院中央診療棟 設備管理棟 給水設備棟 共同溝他	事前	1984.10.1~1987.3.31	7700	藤本・小川	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 医学部附属病院地点』
本郷	5	1984	HS7(理D)	理学部7号館	事前	1985.2.1~10.8	750	羽生	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 理学部7号館地点』
本郷	6	1986	-	文京区湯島4丁目~弥生2丁目地先間配水管 布設替	立会	1986.5.12~7.20	-	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	7	1987	-	新タナム棟	立掘	1988.2.15~17	28	成瀬・武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	8	1987	-	弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15~16	-	武藤	近世
本郷	9	1989	VMC	農学部家畜病院	事前	1990.1.31~3.14	1040	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	10	1990	HG	医学部附属病院外来診療棟	事前	1990.6.27~1991.2.21	5500	成瀬・堀内・武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点』
本郷	11	1991	-	農学部ガラス室	試掘	1991.8.12~13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	12	1992	FAL	農学部図書館	事前	1993.3.9~3.25	408	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	13	1992	FA792	農学部7号館I期	事前	1992.10.6~11.16	1170	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	14	1992	K14(工14)	工学部14号館	事前	1992.11.26~1993.2.23	1785	成瀬・堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 工学部14号館地点』
本郷	15	1992	YS	薬学部南館[薬学部新館]	事前	1992.10.21~12.18	1300	堀内・寺島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書16 薬学部南館地点・薬学部資料館地点』
本郷	16	1993	FA793	農学部7号館II期	事前	1993.11.3~26	1000	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	17	1993	FE1	工学部1号館	事前	1993.12.6~1994.2.10	616	武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 工学部1号館地点』
本郷	18	1993	SK	教育学部総合研究棟	事前	1993.11.18~12.28	1007	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
本郷	19	1993	HN	看護職員等宿舎1号棟[看護婦宿舎]	事前	1993.8.4~1994.1.17	746	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書15 医学部附属病院 看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎3号棟地点(1)』
本郷	20	1993	TUM	総合研究博物館新館	事前	1994.2.14~4.8	600	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書11 総合研究博物館新館地点』
本郷	21	1993	MRI	臨床試験棟[MRI-CT棟]	事前	1994.1.18~3.12	400	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書15 医学部附属病院 看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎3号棟地点(1)』
本郷	22	1994	HF	山上会館龍岡門別館	事前	1994.8.17~10.17	593	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	23	1994	HW(病棟)	医学部附属病院入院棟A	事前	1994.4.21~11.16、 1995.1.31~1996.6.6	6096	成瀬・原・鮫島・大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	24	1994	HIKN(医研)	医学部教育研究棟	事前	1994.11.17~1995.4.28、 1997.3.10~4.25、 1998.11.2~12.25、 2002.9.3~12.25	2901	堀内・鮫島・大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書14 医学部研教育究棟地点』
本郷	25	1994	HND	医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場	事前	1995.1.30~3.3	45	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	26	1994	-	法文十字路外灯	立会	1994.9.5	-	成瀬・鮫島	近世
本郷	27	1994	-	理学部1号館	立会	1994.10.3~18	-	寺島	遺構・遺物なし
本郷	28	1995	FPS	薬学部資料館	事前	1995.7.24~9.1	540	武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書16 薬学部南館地点・薬学部資料館地点』
本郷	29	1995	ACC	情報基盤センター変電室1	事前	1995.7.18~31	78	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	30	1995	AFC	工学部風工学実験室支障ケーブル地点	事前	1995.8.22~9.22	63	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	31	1995	-	ATMネットワーク施設整備	立会	1995.11.20~24	-	武藤・堀内・鮫島・原	近世
本郷	32	1994	-	医学部附属病院看護師宿舎電気ケーブル埋設	立会	1995.3.2	-	原	遺構・遺物なし
本郷	33	1996	EQL	地震研テレメタリング地震観測施設	事前	1996.4.15~5.2	360	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	34	1996	-	野球グラウンド	立会	1996	-	寺島	遺構・遺物なし
本郷	35	1993	-	経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28、1994.5.14	-	成瀬	近世
本郷	36	1993	-	農学部ガス管理設	立会	1993.10.15	-	成瀬	近世
本郷	37	1994	-	屋外環境整備等 龍岡門~附属病院	立会	1994.10.13	-	成瀬・原	近世
本郷	38	1994	-	医学部附属病院内エアタンク設置	立会	1994.12.18	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	39	1994	-	史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10	-	成瀬	近世
本郷	40	1995	AFL	工学部風工学実験室	事前	1996.1.22~3.7	252	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』

東京大学構内遺跡の調査

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	41	1996	IML	インテリジェント・モデリング・ラボラトリー	事前	1996.4.15～6.20	626	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・TML地点』
本郷	42	1996	-	医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植	立会	1996.4	-	成瀬	近世
本郷	43	1996	HWK1	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.12～5.18	20	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	44	1996	HWK2	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.27～6.27	102	成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	45	1996	HWK3	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.3～6.20	184	大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	46	1994	-	龍岡門門衛所移築	立会	1994.8.24	-	成瀬	近世
本郷	47	1996	HWK4	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.24～6.28	5	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』所収
本郷	48	1996	HNI	看護職員等宿舍3号棟[看護婦宿舍II期]	事前	1996.11.5～1997.1.31	525	原・大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書15 医学部附属病院 看護職員等宿舍1号棟地点・ 臨床試験棟地点・看護職員等宿舍3号棟地点(1)』
本郷	49	1997	-	外灯整備1	立会	1997.4.13～30	-	原	近世
本郷	50	1997	-	外灯整備2	立会	1997.4.13～30	-	原	近世
本郷	51	1997	-	外灯整備3	立会	1997.4.13～30	-	原	近世
本郷	52	1997	-	農学部(21世紀館)木質ホール	試掘	1997.7.14～18	50	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	53	1998	AFIV	工学部風環境シミュレーション風洞実験室	事前	1999.1.7～25	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	54	1999	HES99	総合研究棟[文・経・教・社研]	事前	1999.5.24～11.2	1000	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	55	1999	HHC299(2中)	医学部附属病院第2中央診療棟	事前	1999.10.12～2000.2.25、 2001.7.23～2002.12.19	4017	成瀬・原・ 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	56	1999	-	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16～17	16	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	57	1999	-	環境安全センター	立会	2000.1.17	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	58	1999	YM	医学部附属病院受変電設備棟II期	事前	2000.2.5～3.31	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12 医学部附属病院受変電設備棟地点』
本郷	59	2000	KK	工学部基幹整備共同溝	事前	2000.7.3～7.12、10.11～ 10.14、2001.2.21～2.28	900	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	60	2000	HWK6	医学部附属病院基幹整備外構施設等	事前	2000.9.21～11.14	200	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	61	2001	TS	工学部武田先端知ビル	事前	2001.6.4～8.7、 2001.11.28～12.28	740	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	62	2001	NSK01	農学部生命科学総合研究棟	事前	2001.9.21～10.19	1800	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	63	2001	-	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5～6	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	64	2001	-	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7	-	成瀬	近世
本郷	65	2002	LS03	法学系総合研究棟	事前	2003.2.17～4.18	946	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66-1	2002	YGS	(YGS02) 薬学系総合研究棟	事前	2002.8.1～2003.2.28	1260	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66-2	2004	(YGS04)	薬学系総合研究棟	事前	2004.7.26～8.4、 2004.11.17～2005.2.4	540	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	67	2002	-	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9～17	32	堀内	縄文・弥生・古墳・近世・近代
本郷	68	2002	INC	インキュベーション施設	事前	2003.3.6～6.7	1051	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	69	2002	-	地震研仮設建物	立会	2002.5.14～16	-	堀内	遺構・遺物なし
本郷	70	2002	-	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28	-	堀内	遺構・遺物なし
本郷	71	2004	HEQ04	地震研究所総合研究棟	事前	2004.8.30～2005.2.28	1474	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	72	2004	SC1	理学部1号館前	事前	2004.11.29～12.3	32	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	73	2004	-	クニニカリサーチセンターA棟I期 [疾患生命研究センター]	試掘	2004.11.29～12.1	24	成瀬	古墳・近世
本郷	74	2008	HHN308	医学部附属病院看護師宿舍III期	事前	2008.4.1～8.1	550	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	75	2005	KOS05	工学系総合研究棟立坑	事前	2005.9.13～14	17	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	76	2005	HVP06	ベンチャープラザ	事前	2006.3.6～5.16	760	追川・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	77	2005	-	農学部弥生講堂アネックス	立会	2006.1.12	5	大成	近世
本郷	78	2006	HJF06	情報学環・福武ホール	事前	2006.6.5～12.8、 2007.2.5～23	1766	大成・成瀬・ 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	79	2006	-	農学部コイトロン温室	立会	2007.1.16	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	80	2006	-	工学部もの作り実験工房	立会	2007.2.22	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	81	2007	HEA07	経済学研究科学術交流棟	事前	2008.3.17～7.11、9.11～24、 2009.2.2～10	451	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	82	2007	HKM07	懐徳門	事前	2007.6.20～7.20	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	83	2007	-	向ヶ丘ファカルティハウス	試掘	2007.10.22～25	50	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	84	1984	NK84	農学部共同溝	事前	1984.7.9～23	50	今村啓爾	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	85	2007	-	薬学部東法面階段設置	立会	2008.3.14	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	86	2008	-	雨水管改修	立会	2009.2.2～16	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	87	2008	HTG08	東京都下水道	事前	2008.12.7～12.25、 2009.11.27～12.8	39	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	88-1	2008	-	耐震対策事業ガス管改修	立会	2008.11.19、11.20	26	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	88-2	2009	-	耐震対策事業ガス管改修	立会	2009.5.11～13、15、23、31、 6.18、8.27	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	89	2008	-	弥生地区屋外ガス配管改修	立会	2008.11.25～12.17	193	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	90	2009	-	薬学部研究実験棟	試掘	2009.4.16	10	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	91	2009	HHP09	医学部附属病院立体駐車場	事前	2009.12.13～2010.2.25	3034	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	92	2009	HGG09	学生支援センター	事前	2009.7.21～7.30	440	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	213	2015	-	理学部2号館前生垣	立会	2016.3.14	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	214	2016	-	低温センターA004室アース	立会	2016.4.19	3	原	遺構・遺物なし
本郷	215	2016	-	第一研究棟西側圃場整備	立会	2016.6.3	21	平石	遺構・遺物なし
本郷	125-2	2015	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟II期(13区)	事前	2016.3.28~4.14	9	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	125-3	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟II期(ガス配管)	立会	2016.4.26	31	追川	遺構・遺物なし
本郷	125-4	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟II期(14区)	事前	2016.8.26~9.2	124	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	125-5	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟II期(ガス配管堅坑)	立会	2016.5.26	0.4	追川	遺構・遺物なし
本郷	125-6	2016	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟II期(15区)	事前	2016.5.19	23	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	216	2016	-	教育学部機械設備改修	立会	2016.7.4	7	小川	遺構・遺物なし
本郷	217	2016	-	附属図書館(教育学部等)改修電気設備	立会	2016.8.29	3	平石	遺構・遺物なし
本郷	218	2016	-	農学部正門ステンレスボール更新	立会	2016.10.19	0.2	原	遺構・遺物なし
本郷	219	2016	-	構内各所サイン設置	立会	2016.11.16~19.21	10	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
本郷	220	2016	-	育徳園内倒木樹木の撤去作業	立会	2016.10.22	1	原	遺構・遺物なし
本郷	221	2016	-	安田講堂北側誘導ブロック	立会	2017.1.12,13	8	原	遺構・遺物なし
本郷	222	2016	-	附属図書館(教育学部等)改修機械設備	立会	2017.1.11	7	原	遺構・遺物なし
本郷	223	2016	-	朱舜水碑現設置場所	立会	2017.2.7,8,16	86	原	遺構・遺物なし
本郷	224	2016	-	朱舜水碑移転先	立会	2017.2.17,20,25	32	原	遺構・遺物なし
本郷	225	2016	-	医学部附属病院内駐輪場	立会	2017.2.13	10	追川	遺構・遺物なし
本郷	226	2016	-	附属図書館ダムウエーター新設	立会	2017.1.24	16	堀内	遺構・遺物なし
本郷	227	2016	-	正門整備	立会	2017.3.9,13,15,16	209	原	遺構・遺物なし
本郷	228	2016	-	医学部本館脇樹木	立会	2017.2.23	0.2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	229	2016	-	農学部サッカー部室	立会	2017.3.1,4,17,8,29	109	堀内・大成	遺構・遺物なし
本郷	230	2016	-	育徳園柵修理	立会	2017.3.22~24,28,30	(35)	原	遺構・遺物なし
本郷	125-7	2017	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟II期(16区・17区)	事前	2017.4.1~7.28	3621	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
本郷	231	2017	HR115	理学部1号館南側外構	事前	2017.5.10,29	7	原	遺構・遺物なし
本郷	232	2017	-	動物センター前土質調査	立会	2017.4.25	1	原	遺構・遺物なし
本郷	233	2017	-	アカデミックcommons雨水排水管	立会	2017.4.12-13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	234	2017	-	アカデミックcommons補給水管盛替え	立会	2017.5.25	11	大成	遺構・遺物なし
本郷	235	2017	HNY	看護職員等宿舍5号棟擁壁	事前	2017.8.4~20	53	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
本郷	236	2017	-	野球場ブルーベン改修	立会	2017.7.14,15,22,23	376	原	遺構・遺物なし
本郷	237	2017	-	理学部1号館ガス管・配水管	立会	2017.8.23,29	15	原	遺構・遺物なし
本郷	238	2016	-	第一研究棟中庭排水切り替え	立会	2016.5.19,20	13	追川	近世
本郷	239	2017	-	御殿下グラウンド西側舗装改修	立会	2017.9.16	5	清水	遺構・遺物なし
本郷	240	2017	-	工学部6号館北立ち枯れ樹木伐採	立会	2017.9.19	8	堀内	遺構・遺物なし
本郷	241	2017	-	列品館西側舗装改修	立会	2017.9.20	13	原	遺構・遺物なし
本郷	242	2017	-	入院棟B棟東側道路改修	立会	2017.9.14	500	追川	遺構・遺物なし
本郷	243	2017	-	中央食堂その他改修(EV新設)	立会	2017.12.4	12	原	遺構・遺物なし
本郷	244	2017	HKO18	基幹・環境整備(言問い通り横断管路)	事前	2018.3.30~4.2,5,12,16,5,10,16,17,12,17	203	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
本郷	245	2017	HCRB17	クリニカルリサーチセンターB棟	事前	2018.1.15~4.4	93	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
本郷	246	2017	-	育徳園石組補修	立会	2017.12.6	0.6	原	近代(裏込から磁器、レンガ)
本郷	247	2017	-	中央食堂改修機械設備	立会	2018.1.18,19	26	原	遺構・遺物なし
本郷	248	2017	-	農学部グラウンド防球フェンス新設	立会	2018.1.16	5	堀内	遺構・遺物なし
本郷	249	2017	-	医学部総合中央館1階改修・既設管接続	立会	2018.2.15	4	大成	遺構・遺物なし
本郷	250	2017	-	山上会館龍岡門別館東側及び広報センター東側実生木伐採・抜根作業	立会	2018.3.20	8	香取	遺構・遺物なし
本郷	251	2017	-	医学部総合中央館中庭照明改修	立会	2018.3.22	1	香取	遺構・遺物なし
本郷	252	2017	-	旧東大出版会北側植栽整備	立会	2018.3.23	3	堀内	遺構・遺物なし
本郷	253	2017	-	外来診療棟西側配管	立会	2018.3.23~24	6	小川	遺構・遺物なし
本郷	254	2017	-	育徳園低木撤去植替え	立会	2018.3.27	50	大成	遺構・遺物なし
本郷	255	2018	-	外来診療棟南側こいのぼり基礎	立会	2018.4.6	0.6	小川	遺構・遺物なし
本郷	256	2018	-	医学部附属病院バス停渡り配管	立会	2018.5.2	10	小川	遺構・遺物なし
本郷	257	2018	-	学生第二食堂横広場整備	立会	2018.5.10	15	大成	遺構・遺物なし
本郷	258	2018	-	学生第二食堂前外構	立会	2018.6.22	506	大成	遺構・遺物なし
本郷	259	2018	-	医学部附属病院南研究棟外構	立会	2018.7.23	53	追川	遺構・遺物なし
本郷	260	2018	-	農学部7号館西側道路漏水	立会	2018.10.9	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	261	2018	-	工学部11号館南側ハンドホール補修	立会	2018.10.22	0.2	小川	遺構・遺物なし
本郷	262	2018	-	プレハブ研究A棟案内表示板設置	立会	2018.10.25	0.5	小川	遺構・遺物なし
本郷	263	2018	-	育徳園倒木	立会	2018.10.01,16,17	7	原	近代盛土、遺物なし
本郷	264	2018	-	向ヶ丘ファカルティハウス中庭整備	立会	2018.11.5	96	香取	遺構・遺物なし
本郷	265	2018	-	最先端臨床研究センター西側喫煙所衛立設置	立会	2018.12.1	3	香取	遺構・遺物なし
本郷	266	2018	HKD18	基幹・環境整備(電気管路)	事前	2018.12.17~21,2019.1.28~2.5	57	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	267	2018	-	東御長屋井戸跡サイン板設置	立会	2019.1.24	0.5	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	268	2018	-	育徳園路等補修	立会	2019.1.21,22,23,25,28,29,30,31,2.1	-	原	池底確認・遺物なし。一段目 護岸杭列園路側10.5m、二段目 護岸杭列池側21m
本郷	269	2018	-	農学部ファカルティハウス外構ブロック補修強	立会	2019.1.31,2.1	9	原	遺構・遺物なし
本郷	270	2018	-	野球場防球ネット増設	立会	2019.2.20,21,27	6	香取	遺構・遺物なし

東京大学構内遺跡の調査

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	271	2018	-	東洋文化研究所北側外構スロープ手摺撤去	立会	2019.2.28	1	小川	遺構・遺物なし
本郷	272	2018	-	野球場フェンス補修	立会	2019.3.6	2	原	遺構・遺物なし
本郷	273	2018	-	第二食堂前植栽帯改修	立会	2019.3.8	105	小川	遺構・遺物なし
本郷	274	2018	-	本郷通り開障改修	立会	2019.3.20	1	堀内	遺構・遺物なし
本郷	275	2019	-	野球場正面入口前マンホール嵩下げ	立会	2019.4.24	3	香取	遺構・遺物なし
本郷	276	2019	-	言問通り横断管路	試掘	2019.7.8-8.2	112	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
本郷	277	2019	HWK19	医学部附属病院基幹整備共同溝	事前	2019.8.5-2021.2.22	281	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	278	2019	-	農学生命科学図書館他ブロック塀改修	立会	2019.8.2	1	原	遺構・遺物なし
本郷	279	2019	-	第2本部棟系統排水管改修	立会	2019.8.3	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	280	2019	-	仮設プレハブ取説	立会	2019.08.23,24,26	16	香取	遺構・遺物なし
本郷	281	2019	-	工学部列品館耐震	立会	2019.10.08	31	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
本郷	282	2019	-	安田講堂サイン設置	立会	2019.10.18	1	堀内	遺構・遺物なし
本郷	283	2019	-	給水管改修	立会	2019.12.9	352	原・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
本郷	284	2019	-	医学部5号館改修(その1) 同(その2)	立会	2019.12.5 2020.3.2,16	12 24	堀内	遺構・遺物なし(レンガ基礎確認)
本郷	285	2019	-	医学部2号館本館耐震改修	立会	2019.12.10	2	追川	遺構・遺物なし
本郷	286	2019	-	農学部1号館耐震改修工事に伴う仮設建物	試掘	2019.12.18,19,2020.2.25	361	大成	A-D区あり。A区調査必要なし、B区立会、C-D区試掘遺構なし(震災に伴う灰層にバックされたレンガ基礎確認)
本郷	287	2019	-	医学部3号館南西側高圧ケーブル敷設	立会	2020.1.22,29	40	大成	遺構・遺物なし
本郷	288	2019	HYK20	野球場北側壁塀改修	試掘	2020.1.9-11.9	387	堀内・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	289	2019	-	理学部三角広場改修	立会	2020.2.3,2.12-13,3.2-3,3.16,4.1,4.11,4.16,5.22,6.10,6.26,7.14,8.20	1341	小川・堀内	遺構・遺物なし
本郷	290	2020	-	総合研究博物館改修機械設備	立会	2020.5.13	3	大成	遺構・遺物なし
本郷	291	2010	-	農学部3-5号館間	立会	2010.6.10	16	原	遺構・遺物なし
本郷	292	2010	-	弥生門前掘削	立会	2010.6.11	30	原	遺構・遺物なし
本郷	293	2020	-	農学部1号館電気	立会	2020.5.11	39	堀内	遺構・遺物なし
本郷	294	2019	-	附属図書館改修Ⅳ期	立会	2020.3.26,7.20	62	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	295	2019	-	七徳堂東側樹木樹勢回復作業	立会	2019.3.26	5	大成	遺構・遺物なし
本郷	296	2019	-	浅野地区旧宿舍付近車止め設置	立会	2020.3.30	0.4	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	297	2020	HOKI20A HOKI20Y	基幹・環境整備(言問通り横断管路)Ⅱ期	事前	2020.4.7,5.7-7.31	369	大成・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	298	2020	HA120	農学部1号館機械設備	試掘	2020.6.8-6.16	148	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』14所収
本郷	299	2020	-	共同溝東側陥没	立会	2020.9.3-7	4	追川	遺構・遺物なし
本郷	300	2020	-	工学部5号館改修電気設備	立会	2020.09.14	4	小川	遺構・遺物なし
本郷	301	2020	-	赤門前銀杏根系調査	立会	2020.10.6	5	香取	遺構なし・近世、近代
本郷	302	2020	-	農学部1号館改修(設備)	立会	2020.10.20	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	303	2020	-	弥生キャンパス消火栓改修	立会	2020.12.19	5	小川	遺構・遺物なし
本郷	304	2020	-	工学部1号館地下1階部材実験室改修機械設備	立会	2021.12.21	2	大成	遺構・遺物なし
本郷	305	2020	-	中央食堂熱源改修その他	立会	2021.1.26,2.10,4.5	173	小川	遺構・遺物なし
本郷	306	2020	-	情報基盤センターHubサイト移設に伴う通信設備改修	立会	2021.2.12	4	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	307	2020	-	第2期誘導ブロック敷設に伴う雨水枡移設	立会	2021.2.18	2	小川	遺構・遺物なし ※福武ホール前
本郷	308	2020	-	外灯C-5_C-61電源改修	事前	2021.3.12	9	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』15所収
本郷	309	2021	-	農学部1号館(2期)配管	立会	2021.6.29	13	小川	遺構・遺物なし
本郷	310	2021	-	文学部アネックス南側開障改修	立会	2021.6.30	9	大成	遺構なし。硬化面1枚。肥前磁器片1点、JCプリント碗片1点、焼瓦
本郷	311	2021	-	医学部附属病院共同溝給水主管改修	立会	2021.9.24-29	19	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』15所収
本郷	312	2021	-	農学部1号館エレベータービーム新設	立会	2021.7.16,7.26	12	堀内	遺構・遺物なし
本郷	313	2021	-	文学部アネックス南側開障改修2	立会	2021.9.7	12	大成	遺構・遺物なし
本郷	314	2021	-	農学部東側外構ツバキ移植	立会	2021.9.15	4	香取	遺構・遺物なし
本郷	315	2021	-	医学部附属病院管理棟耐震改修	立会	2021.11.8	172	追川	遺構・遺物なし
本郷	316	2021	-	医学部附属病院臨床研究棟西改修電気設備工事	立会	2021.11.11-12	8	追川	遺構・遺物なし
本郷	317	2021	-	赤門脇トレ樹木調査	立会	2021.10.15	4	香取	遺構・遺物なし
本郷	318	2021	-	工学部5号館(Ⅱ期)改修電気設備	立会	2021.11.26	1	香取	遺構・遺物なし
本郷	319	2021	-	伊藤国際学術研究センター門(仮称)サイン板設置	立会	2021.12.27	2	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	320	2021	-	農学部3号館ヘリウム回収配管改修	立会	2022.1.27	22	小川	遺構・遺物なし
本郷	321	2021	-	医学部本館2号館付近標識修繕	立会	2022.1.28	0.1	山下	遺構・遺物なし
本郷	322	2021	HN121	農学部1号館スロープ等新設	事前	2022.2.8-15	51	山下	『東京大学構内遺跡調査研究年報』15所収
本郷	323	2021	-	薬学部本館漏水	立会	2022.1.22	0.8	堀内	遺構・遺物なし
本郷	324	2021	-	医学部附属病院臨床研究棟西改修鉄骨階段	立会	2022.3.8	11	追川	遺構・遺物なし
本郷	325	2021	-	医学部附属病院臨床研究棟西改修機械設備	立会	2022.3.16	3	追川	遺構・遺物なし
本郷	326	2021	-	農学部2号館西側バイク駐車場浸透枡設置	立会	2022.3.15	0.9	小川	遺構・遺物なし
本郷	327	2021	-	本郷通り開障改修(その2)	立会	2022.2.28,3.4	52	堀内	遺構・遺物なし

駒場Ⅰ地区調査一覧

構内番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒Ⅰ 1	1991	-	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 2	1993	FGE	教養学部情報教育棟	事前	1993.8.10~10.20	940	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒Ⅰ 3	1993	-	数理学部研究科棟	試掘	1993.5.8~15	350	堀内	縄文
駒Ⅰ 4	1994	-	数理学部研究科棟擁壁	立会	1995.1.20~27	-	武藤	近代
駒Ⅰ 5	1994	-	数理学部研究科棟関連東電マンホール増設・管路新設	立会	1995.1.24~4.12	-	武藤	縄文・平安
駒Ⅰ 6	1995	-	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 7	1995	-	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 8	1995	-	数理学部研究科棟ガス・水道管理設	立会	1995.5.17~18.6.27~28	-	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 9	1996	数理	数理学部研究科Ⅱ期棟	事前	1996.12.12~1997.2.6	1160	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
駒Ⅰ 10	1997	-	教養学部キャンパス・プラザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 11	1999	-	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26~8.3	130	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 12	2000	KL	駒場図書館	事前	2000.7.27~8.30	1778	大成・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
駒Ⅰ 13	2001	-	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24~25	60	堀内	遺物・遺構なし
駒Ⅰ 14	2001	-	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25~26	53	大成	遺物・遺構なし
駒Ⅰ 15	2005	KCP	コミュニケーションプラザ	事前	2005.4.22~7.21	4327	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒Ⅰ 16	2003	KGK	国際学術交流棟	事前	2003.5.16~7.9	620	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒Ⅰ 17	2005	-	教養学部5号館他改修	立会	2005.8.10,17,19	300	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 18	2006	-	教養学部8号館エレベーター敷設	立会	2006.10.20	-	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 19	2006	-	教養学部ロッカー棟	試掘	2006.11.13~16	21	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 20	2007	-	初年次活動センター新築	立会	2007.12.20	85	追川	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 21	2009	-	基幹整備(排水)	立会	2010.1.14,21,28	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒Ⅰ 22	2009	-	理想の教育棟	試掘	2010.2.1~5	220	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒Ⅰ 23	2011	-	巻薬練習場	立会	2012.1.23	12	成瀬	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 24	2012	-	屋外トイレ	立会	2012.7.23~25	42	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 25	2012	-	理想の教育棟Ⅱ期棟	試掘	2012.7.30~8.3	49	堀内	遺構なし・近代遺物あり
駒Ⅰ 26	2012	-	コミュニケーションプラザ横共同溝埋設	試掘	2012.9.24~27	34	小川	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 27	2012	-	倉庫	立会	2013.2.28	40	香取・堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 28	2014	-	教養学部並木通り根上り対策	立会	2014.9.4,8,10	64	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 29	2014	-	電話交換機設備更新	立会	2014.11.29	7	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 30	2014	-	教養学部並木通り舗装改修	立会	2015.2.3,12,23,3.10	77	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 31	2015	-	6号館改修に伴う埋設管敷設	立会	2015.7.23	4	小川・平石	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 32	2015	-	正門前排水改修	立会	2015.8.21,25	50	香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
駒Ⅰ 33	2015	-	並木通り舗装改修(Ⅱ期)	立会	2016.2.4,15,17,22,3.10,14	824	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 34	2016	-	野球場排水改修	立会	2017.2.8,14	121	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 35	2016	-	教養学部5号館引込幹線	立会	2017.3.6~8	28	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 36	2017	-	並木通り舗装改修(Ⅲ期)	立会	2018.1.30	481	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 37	2017	KKT18	駒場仮設体育館	事前	2018.2.5~16	376	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒Ⅰ 38	2017	-	駒場体育館	試掘	2018.3.5~3.26	155	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒Ⅰ 39	2018	-	大隈良典博士ノーベル賞受賞記念碑	立会	2018.4.16	0.4	成瀬	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 40	2018	-	駒場体育館新営に伴う電気配管掘削	立会	2018.5.3~5,15,21,6.6,7,22,25~27,7.26	183	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 41	2018	KKT18	駒場仮設体育館外構	立会	2018.6.6,6.8	38	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 42	2018	KTS18	駒場体育館新営に伴う機械設備切廻	事前	2018.6.28,7.2,3,18	25	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒Ⅰ 43	2018	KTK18	駒場体育館	事前	2018.7.2~8.27	430	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収
駒Ⅰ 44	2018	-	7号館西側排水管破損修理	立会	2018.10.18	22	小川	緊急対応。遺構・遺物なし
駒Ⅰ 45	2018	-	テニスコート夜間照明設置	立会	2018.11.30	36	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 46	2018	-	野外トイレ解体	立会	2018.12.20,21,25,2019.2.4,4.24	90	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 47	2018	-	駒場体育館	立会	2019.2.27,3.8,4.5	416	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 48	2018	-	第一グラウンド改修	立会	2019.2.6	1	香取	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 49	2019	-	東京電力ケーブル等撤去	立会	2019.12.6,12,13,18	47	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 50	2019	-	駒場体育館雨水浸透	立会	2020.2.27	20	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 51	2019	-	駒場体育館周辺	立会	2020.3.2,4,13	84	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 52	2019	-	駒場Iブロック塀対策	立会	2020.1.31,2.6,17,27	86	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』13所収
駒Ⅰ 53	2020	-	美術博物館学際交流展示室空調設備改修	立会	2020.6.2,7.13,9.3,9.14	17	小川	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 54	2020	-	トレーニング体育館下の土壌汚染調査	立会	2020.9.3,4	0.3	香取	遺構・遺物なし
駒Ⅰ 55	2021	-	5号館他教室コンセント増設その他	立会	2022.2.2	49	小川	遺構・遺物なし。煉瓦基礎あり。

駒場Ⅱ地区調査一覧

構内番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒Ⅱ 1	1996	-	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ 2	1996	-	先端科学技術研究センター校舎4号館	試掘	1996.5.15~17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ 3	1996	-	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24~25	20	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ 4	1998	-	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ 5	1998	-	国際・産学共同研究センター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
駒Ⅱ 6	1998	-	生産技術研究所事務図書棟暫定施設	試掘	1998.12.13~15	50	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅱ 7	2002	-	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
駒Ⅱ 8	2003	-	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	追川	遺構・遺物なし
駒Ⅱ 9	2008	-	保育施設	立会	2008.7.9~14	-	大成	遺構・遺物なし

東京大学構内遺跡の調査

白山構内調査一覧

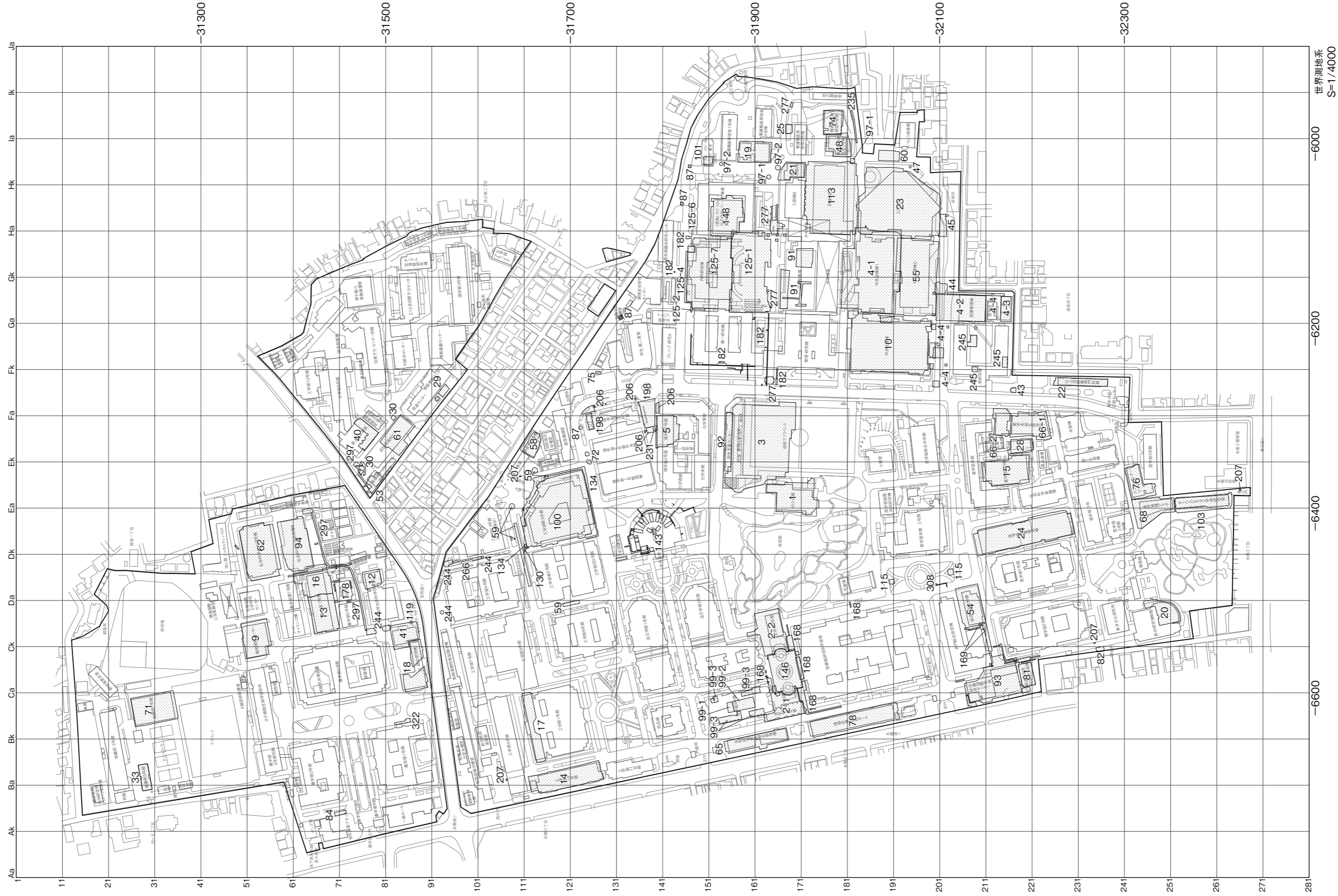
構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
白山	1	1991	-	理学部附属植物園研究温室I期(原町遺跡)	試掘	1991.7.24~25	5	武藤	縄文
白山	2	1992	KO	理学部附属植物園研究温室II期(原町遺跡)	事前	1992.5.25~6.6	200	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
白山	3	2000	KI	総合研究博物館小石川分館増築	事前	2000.11.27~12.4	70	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
白山	4	2002	KNK	農学生命科学研究科附属小石川樹木園・根圏観察室	事前	2002.9.24~10.7	91	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	5	2007	BGY07	理学系研究科附属植物園・医学部創設150周年記念(小石川養生所復元)建物	試掘	2007.9.3~4	43	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
白山	6	2010	KBG10	理学系研究科附属植物園本園・下水・電源ケーブル埋設機・埋設溝	事前	2010.9.6~15	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
白山	7	2010	-	理学系研究科附属植物園本園・旧小石川養生所井戸欄改修	立会	2011.1.17	-	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	8	2011	-	農学生命科学研究科小石川樹木園・万年堀改修	立会	2011.4.1	30	成瀬	遺構・遺物なし
白山	9	2016	B-KSH-H28	国指定名勝及び史跡小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)第1地点	事前	2016.9.24~2018.1.31	2715	成瀬・香取・小川・平石	文京区支援事業 縄文・近世・近代・現代
白山	10	2017	B-KSH-3T	国指定名勝及び史跡小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)第3地点	試掘	2018.1.22~2.2	111	成瀬・香取・小川	文京区支援事業 近世・近代・現代
白山	11	2019	B-KSH-3	国指定名勝及び史跡小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)第3地点	確認	2019.5.21~11.29	526	成瀬・小川	文京区支援事業 縄文・近世・近代・現代

白金台構内調査一覧

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
白金台	1	1992	-	医学研究所看護師宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
白金台	2	1994	-	医学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
白金台	3	1995	-	医学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
白金台	4	2000	-	医学研究所附属病院診療棟・総合研究棟新営	試掘	2000.7.5~7	53	追川	江戸
白金台	5	2000	SBS00	医学研究所附属病院診療棟・総合研究棟	事前	2000.10.27~2001.3.9	4280	堀内・大成	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書17 医学研究所附属病院A棟地点』所収
白金台	6	2021	-	白金台開闢改修	事前	2020.2.3,6.3,2021.2.1~2.10,2.24~6.21	583	堀内・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』15所収

その他の構内調査一覧

構内	行政区	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
他	文京区	1991	-	追分学寮	試掘	1991.8.23~24	16	成瀬	近世
他	豊島区	1991	-	豊島学寮	試掘	1991.8.26~30	29	武藤	遺構・遺物なし
他	三鷹市	1991	-	井の頭学寮	試掘	1991.9.30~10.15	20	成瀬	遺構・遺物なし
他	港区	1991	-	白金学寮	試掘	1991.11.25~26	10	武藤	近世
他	三鷹市	1992	三广1	三鷹国際交流会館(長嶋遺跡)I期	事前	1992.6.29~9.19	2100	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	三浦市	1992	MMBS	理学部附属臨海実験所新研究棟(新井城)	事前	1992.7.20~9.25	1700	武藤・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	三浦市	1993	-	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設	立会	1993.4.20~23	-	武藤	中世
他	三浦市	1993	-	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築	立会	1993.5.7~8	-	武藤	中世
他	三鷹市	1993	三广2	三鷹国際交流会館(長嶋遺跡)II期	事前	1993.5.28~11.8	3280	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	三鷹市	1994	三广3	三鷹国際交流会館(長嶋遺跡)III期	事前	1994.5.13~8.17	1950	堀内・鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	千葉市	1994	GMB	検見川運動場体育セミナーハウス(玄藩所遺跡)	事前	1994.7.19~8.21	496	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
他	柏市	1996	-	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28~29	125	武藤	遺構・遺物なし
他	文京区	2007	-	追分国際学生宿舎	事前	2007.12.3~2008.3.25	776	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
他	文京区	2016	メジロ15	目白台国際宿舎	事前	2016.6.17,21,2016.7.20~2017.4.4	9373	大成・小川・平石	『東京大学構内遺跡調査研究年報』11所収
他	文京区	2018	-	目白台国際宿舎・外構樹木	立会	2018.9.26	15	大成	遺構・遺物なし
他	文京区	2019	-	目白台国際宿舎・外構整備その2	立会	2019.4.3,4,25,5.16	-	大成	遺構・遺物なし



-31300

-31500

-31700

-31900

-32100

-32300

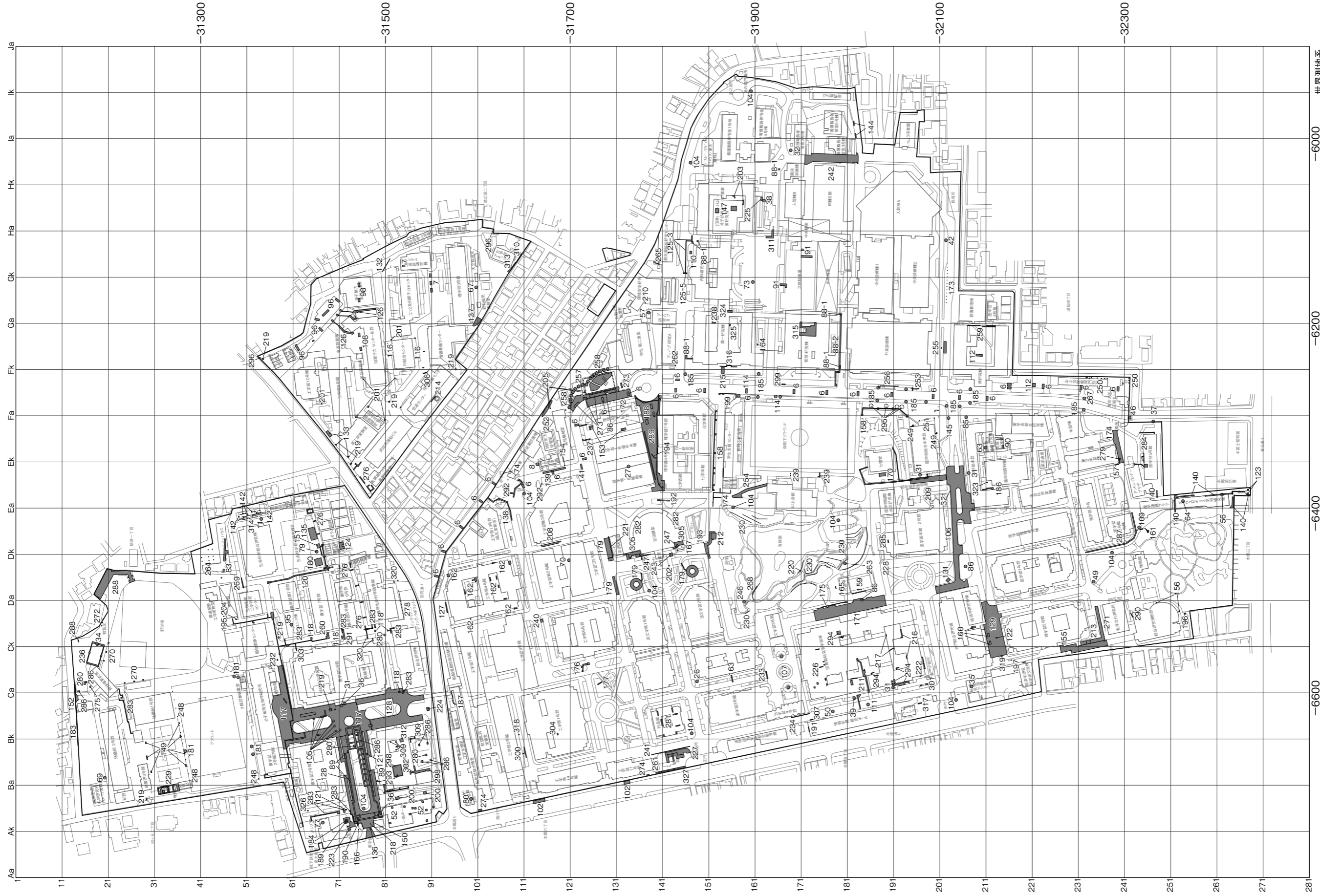
世界測地系
S=1/4000

-6200

-6400

-6600

本郷構内調査地点(1)事前調査



-31300

-31500

-31700

-31900

-32100

-32300

世界測地系
S=1/4000

-6000

-6200

-6400

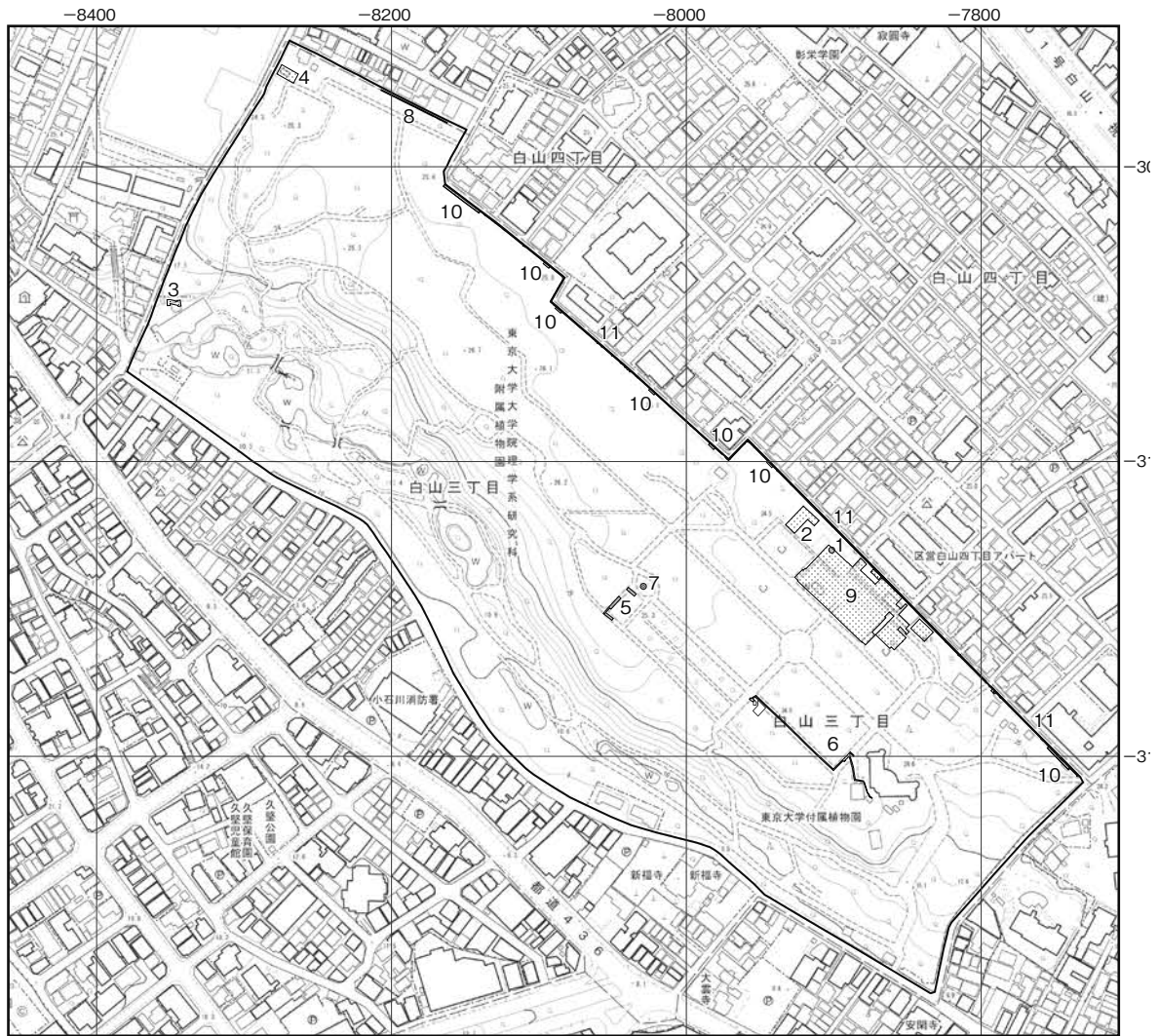
-6600

本郷構内調査地点(2) 試掘・立会調査



世界測地系
S=1/5000

駒場I地区調査地点



白山構内調査地点

世界測地系
S=1/5000



世界測地系
S=1/2500

白金台構内調査地点

第Ⅰ章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

2021年度は、本郷構内、駒場Ⅰ地区、駒場Ⅱ地区、白金台構内調査において、以下の通りの調査を室員7名で対応した。

本郷構内では事前調査1件、立会調査18件を実施した。駒場Ⅰ地区、駒場Ⅱ地区ではそれぞれ立会調査を1件ずつ実施した。また、白金台構内では事前調査1件を実施した。

本郷322農学部1号館スロープ等新設地点における事前調査では、近世の硬化面が検出された。2019年度より断続的に実施した、白金台6東京大学医科学研究所白金台北側囲障改修地点の調査では、柱穴列、厠遺構、土坑など計120基以上の遺構が検出された。以下に、2021年度に実施した構内の調査を列挙する。なお、調査地点名称が煩雑となるのを避けるため、名称末尾の「地点」の語を省略した。

本郷構内

<事前調査> 1件

2022年2月8日～2月15日 本郷322農学部1号館スロープ等新設（担当：成瀬・山下）

<立会調査> 18件

2021年6月29日 本郷309農学部1号館(2期)配管（担当：小川）

2021年6月30日 本郷310文学部アネックス南側囲障改修（担当：大成）

2021年7月16日、7月26日 本郷312農学部1号館エレベータービット新設（担当：堀内）

2021年9月7日 本郷313文学部アネックス南側囲障改修2（担当：大成）

2021年9月15日 本郷314農学部東側外構ツバキ移植（担当：香取）

2021年9月24日～9月29日 本郷311医学部附属病院共同溝給水主管改修（担当：追川）

2021年10月15日 本郷317赤門脇トイレ樹木調査（担当：香取）

2021年11月8日 本郷315医学部附属病院管理研究棟耐震改修（担当：追川）

2021年11月11～12月8日 本郷316医学部附属病院臨床研究棟西改修電気設備工事（担当：追川）

2021年11月26日 本郷318工学部5号館（Ⅱ期）改修電気設備（担当：香取）

2021年12月27日 本郷319伊藤国際学術研究センター門（仮称）サイン板設置（担当：成瀬）

2022年1月22日 本郷323薬学部本館漏水（担当：堀内）

2022年1月27日 本郷320農学部3号館ヘリウム回収配管改修（担当：小川）

2021年1月28日 本郷321医学部本館2号館付近標識修繕（担当：山下）

2022年2月28日、3月4日 本郷327本郷通り囲障改修（その2）（担当：堀内）

2022年3月8日 本郷324医学部附属病院臨床研究棟西改修鉄骨階段（担当：追川）

2022年3月15日 本郷326農学部第2号館西側バイク駐車場浸透柵設置（担当：小川）

2022年3月16日 本郷325医学部附属病院臨床研究棟西改修機械設備（担当：追川）

駒場Ⅰ地区

<立会調査> 1件

2022年2月2日 駒Ⅰ555号館他教室コンセント増設その他（担当：小川）

駒場Ⅱ地区

<立会調査> 1件

2021年8月5日 駒Ⅱ11 T棟実験用設地工事（担当：堀内）

白金台構内

<事前調査> 1件

2020年2月3日、6月3日、2021年2月1日～2月10日、2021年2月24日～6月21日（2019年度より継続）白金台6東京大学医科学研究所白金台北側囲障改修（担当：堀内・香取）

第1節 その他の地区の事前調査

1. その他 26 東京大学医科学研究所白金台北側囲障改修

所在地 港区白金台4丁目6番1号（港区No.135遺跡）

調査期間（給水管設備地点）2020年2月3日、（電気設備地点）6月3日、（北側囲障改修）試掘2021年2月1～8日、事前調査2月24日～6月21日

調査面積（給水管設備地点）35.5㎡、（電気設備地点）48.7㎡、（北側囲障改修地点）514.6㎡

調査担当 堀内秀樹、香取祐一

1. 調査の経緯と経過

東京大学施設部は、港区白金台4-6-1所在する医科学研究所北側道路沿いの囲障改修工事、および工事ともなう給水管設備、電気設備の移設工事を計画している。

計画地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内ではないが、改修に伴う工事面積の合計が800㎡に及ぶことや、当該区が『御府内場末往還其他沿革図書』や他の近世絵図で大村藩下屋敷・福江藩下屋敷にあたること、また同敷地内に位置し2000～2001年に当調査室で行った発掘調査（1図、附属病院A棟地点、2022年刊行）により多数の遺構・遺物が検出されたことから、改修工事地点に埋蔵文化財が遺存している可能性が考えられた。

そこで港区教育委員会・東京大学施設部・東京大学埋蔵文化財調査室は協議を行い、港区教育委員会より存否確認の試掘調査実施の協力依頼を受けた。当初の設計では北側囲障改修本体工事、給水管設備工事、電気設備工事の3案件について試掘を行う予定であったが、工事時期の変更から、給水管設備工事および電気設備工事が先行することとなり、立会調査をそれぞれ2020年2月3日、6月3日に行った。

続いて北側囲障改修本体部分の設計が決定し、当初

の予定であった北側全体の改修工事は、東側を中心とした範囲へと変更になり、面積は451㎡へと縮小された。

この変更に伴い、試掘位置、面積について再度協議を行い、2021年2月1～10日までトレンチ5箇所、合計36.1㎡を対象とし、工事の掘削深度までの試掘調査を行った（図4）。

試掘の結果、西側のトレンチ1で近世期に属すると思われる遺構プランが確認され、東側のトレンチ5でも、やはり近世期に属すると考えられる包含層が検出された。

この試掘調査の結果をふまえて協議を行った結果、遺構が検出されたトレンチ1を含む西側の128.2㎡の範囲を事前調査に、それ以外の381.7㎡の範囲に立会調査を行うことで三者協定を締結した。またこの協議の過程で、これまで附属病院A棟地点（港区No.135遺跡）であった遺跡範囲を、医科学研究所敷地全域を、港区No.135遺跡に改訂した。

北側囲障改修地点の調査は、2021年2月24日～6月21日まで行い、最終的な調査面積は509.8㎡である。調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、堀内秀樹、香取祐一が担当した。

2. 立会調査の概要

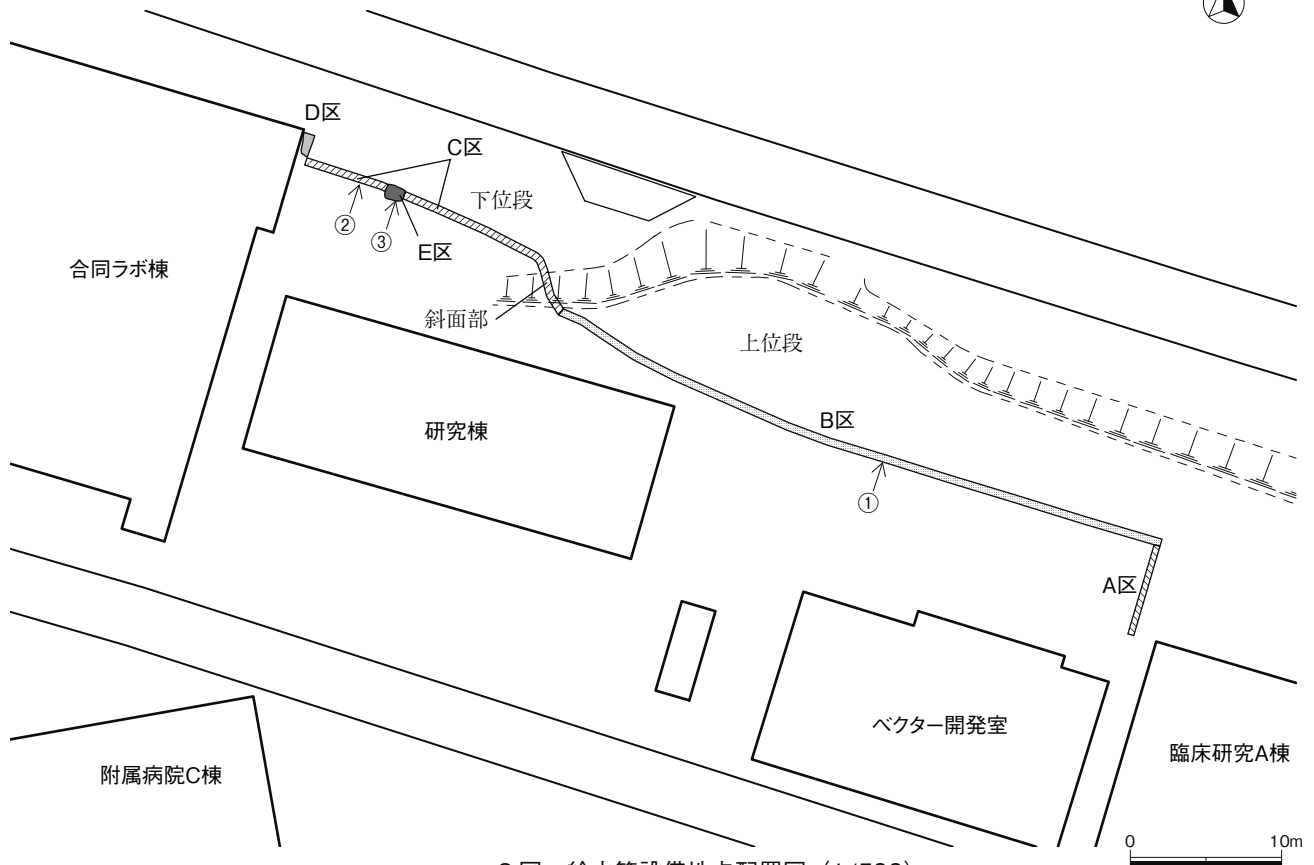
北側囲障改修にあたって、工事範囲内の既存の給水管、電気の盛り換えの必要が生じたため、立会調査を行った。

(1) 給水管設備地点

本地点は臨床研究A棟から、合同ラボ棟へと北西へと延びる調査範囲である（2図）。掘削幅・深度などにより調査区をA～E区に区分けした。A区・B区は今回の調査範囲の内で上位段に位置する。C区は合同ラボ棟へ至る管路部分で、斜面部から低位段に位置し、研究棟からの既設給水管との接合部E区を跨いでい



1図 調査地点（1/10000）



2 図 給水管設備地点配置図 (1/500)

る。D区は合同ラボ棟の既設給水管との接合部である。

A区は幅40cm、掘削深度は南側で約GL - 30cm、北側で約60cmで、ロームブロック・アスファルトガラを含む近代以降の盛土であった(18図)。

B区は幅50cm、掘削深度は約GL - 60cmである。ほとんどの部分が暗褐色土・ロームブロック・ガラを含む近代以降の盛土であったが、①に攪乱を受けていない焼土粒・炭化物を微量含む暗褐色土が最大厚10cmほど確認できた。近世期の盛土である可能性が考えられる(19、20図)。

C区斜面部は幅約50cm、掘削深度はGL - 30 ~ 60cmで、ロームブロック・暗褐色土・ガラを含む近代以降の盛土であった。下位段の管路は約50cm、掘削深度40 ~ 80cmで、表層付近では碎石が多く検出された。全体的にはガラも含まれるがロームブロックと黒褐色土の混土が主体である(21図)。南壁にGL - 50cmで水平に据えられた大谷石が検出された(②)。石の厚みは約20cmで東西約3m幅が検出された(22図)。

D区は南北約150cm、東西最大幅約75cm、掘削深度はGL - 40cmである。すべて碎石・ガラを含む現代の盛土内である。

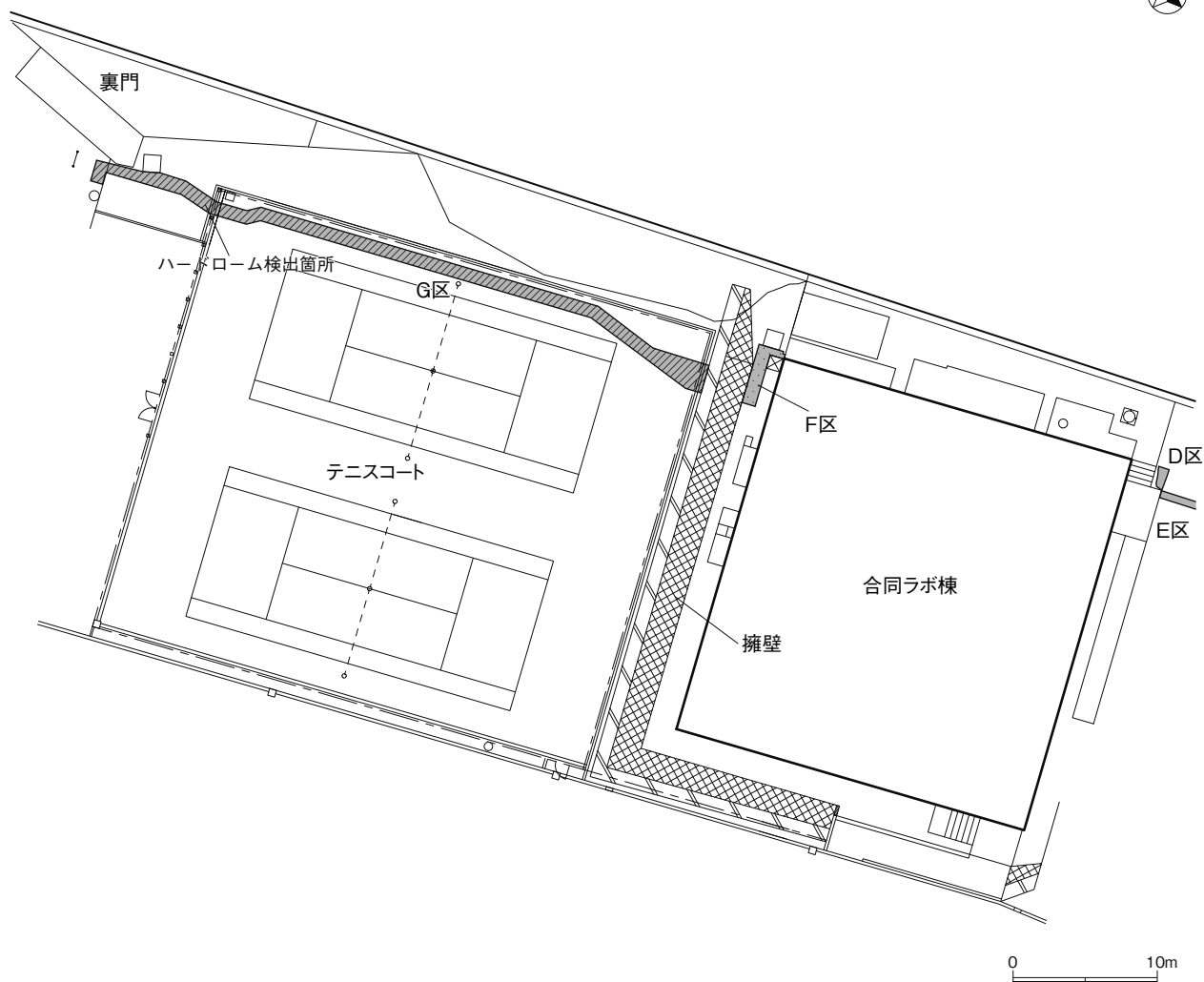
E区はA ~ D給水管路と研究棟から北へ延びる既設給水管との接合部である。掘削規模は東西120cm、南北100cm、掘削深度はGL - 120cmである。上部のほとんどが既設給水管により攪乱されており、ガラを含む現代の盛土であるが、北壁・南壁ともにGL - 約90cm以下で、焼土粒を微量含むプライマリーな黒褐色土が確認された(③)。埋没谷に特徴的な土質で近世以前の自然堆積土かと思われたが、後の北側囲障改修地点の試掘の際、近世期の盛土と判明した(23図)。

(2) 電気設備地点

掘削範囲はテニスコートを中心とした上位段と、擁壁東側の下位段に区分される。上位段部分をG区とし、下位段の合同ラボ棟際の範囲をF区とした。合同ラボ棟東側のD・E区は給水管設備地点の調査区である(3図)。

F区

掘削規模は南北4.2m、東西最大1.9m、最深部はG.L - 0.9mである。西側の擁壁、東側の合同ラボ棟、既存配管により攪乱を受けている。南側の覆土はロームブロック・黒褐色土を主体とした現代の盛土であった。北側は配管掘方内と思われ、小円礫を含む黒褐色土で現代の盛土と思われる(24図)。



3 図 電気設備地点配置図 (1/500)

G 区

掘削規模は、東西約 44m、掘削幅は 0.65～2m であるが、基本的に 0.9m 幅である。掘削深度は最深部は G.L - 0.65m である。テニスコート内の覆土は表層・碎石下部は小円礫を含む暗褐色土の現代の盛土であった。テニスコート西側では G.L - 0.4m 以下に一部ハードローム層が検出された (25～29 図)。

3. 事前調査の概要

(1) 北側囲障改修地点

今回の改修工事の本体にあたる。計画では 451 m² が掘削対象となった。「1. 調査の経緯と経過」で述べたように、試掘結果を踏まえて事前調査を行った。

試掘調査

トレンチは 5 箇所設定した (4 図)。掘削はトレンチ 3 を除き、重機を使用している。

工事範囲は西から東へと傾斜しており、新規に構築

される囲障は、地点毎に掘削形状が異なるため、原則としてトレンチ毎に該当する掘削深度までの調査を行った。このうち層位の帰属時期の確認のため、一部にサブトレンチを設定し深く掘削した。

トレンチ 1 では西側の高い部分で、G.L - 約 0.3m でローム層が検出されている。このローム面で北西隅、北側中央部で暗褐色土のプランが検出された (1号・2号)。両遺構間のガス管による攪乱壁で、断面の観察が可能であり、近世の遺構によく見られる覆土の様相を呈していたことから、覆土内の遺物を採取した。覆土はともに、暗褐色土でローム粗粒を少量、炭化物・焼土粒を微量含み、粘性は弱く、しまりは強く類似しており、同一遺構の可能性も考えられるが、断面では坑底レベルは異なっているため、断定はできない。1号の覆土は、北壁でも検出されており、最上面は G.L - 約 0.20m である。1号からは、17～19 世紀に属すると思われる陶磁器片が出土した (5 図)。

トレンチ2は、南から北へ下る傾斜地に設定した。既存の埋設管が多く検出され、T.P28.0mでローム層が検出されているが、ほとんどの部分が攪乱を受け、遺構は検出されていない(6図)。

トレンチ3の当該箇所の工事掘削深度は、概ねG.L - 0.45mであるが、フェンス基礎部分はG.L - 0.9mまでの掘削が予定されていたため、図のようにサブトレンチを設けた。

サブトレンチ内では3層上面に硬化面が認められ、3層中から18～19世紀に属する陶磁器片が検出されており、近世期の盛土の可能性が考えられる(7図)。

トレンチ4ではG.L - 0.45mまでの掘削深度と、基礎部分でG.L - 0.9mが予定されていた。

G.L - 0.45mの面は表土層中であり、遺構は確認できなかった。トレンチ3同様に、フェンス基礎部分にあたる中央部東西に、サブトレンチを設けた。サブトレンチ内では2層上部に硬化面が認められた。この2層の帰属時期を判断するために、東側にG.L - 1.7mの深掘りを行った。2層下にはプライマリーな堆積層である3・4層を確認した。3層は給水管設備地点のE区で検出された、黒褐色土層と同一と考えられる。土質から近世以前の埋没谷に堆積する層位と思われたが、3層の下位に堆積する4層から、18世紀に属すると思われる陶磁器が検出されたことから、3層も近世期に属すると考えられる。また4層は均一な暗褐色土で、しまりが強く自然堆積と考えられる(8図)。

トレンチ5ではG.L - 0.45mと、フェンス基礎部分のG.L - 0.9mまでの掘削が予定されていた。G.L - 0.45mで検出された面では、西側にローム粒ブロックを含む暗褐色土のプランP1が検出された(9図)。

トレンチ5にもフェンス基礎部分にあたる中央部東西に、サブトレンチを設け掘削を行った。サブトレンチ断面では表土下に、現代に属すると思われる1層、上記ローム粒ブロックを含む暗褐色土である2層が堆積している。このことからプラン様に見えたP1は、包含層の一部ないし大形の遺構の一部と考えられる。

この2層下にローム粒を主体とするロームブロックである3層、さらに下位に暗褐色土の4層が堆積していた。3層のローム粒はソフトロームに類似しているが、自然堆積層ではなく、客土と思われる。3層、4層からは遺物は出土していない。

事前調査

試掘の結果から、遺構の検出されたトレンチ1を含む西側をA区とし、それ以外の区は、囲障工事の工法

の違いによる範囲、深度の違いにより立会調査の区分した(10～12図)。

調査は東側の立会調査から行った。最東端C区の立会調査を行った際、南側壁で遺構断面が検出され、北側道路付近で平面的に遺構プランが検出された。そこで再度協議を行った結果、道路との境界にある万年堀支柱を撤去する際、遺構が破壊される可能性が考えられたため、西側の本調査区(A区)に加え、新たに本調査区(B区)を設定した(12図)。

以下各区について詳述する。

A区(13図)

A-1～3区の小区に分かれる。A-2区ではグリッドライン8～9から東へ傾斜しており、A-3区は部分的にロームが検出されている以外は攪乱であった。

検出された遺構は杭列18基、土坑12基、ピット75基、性格不明遺構6基である。

柱穴列

ピット自体は全体で91基と多数検出されている。その中で並び、間隔、深さなどを勘案した結果、杭列の性格を持つと思われる遺構は、現時点で4列、18基である。

柱穴列1(西からSA13、SA4、SA16、SA18、SA21、SA8、SA11、SA1、30～35図)

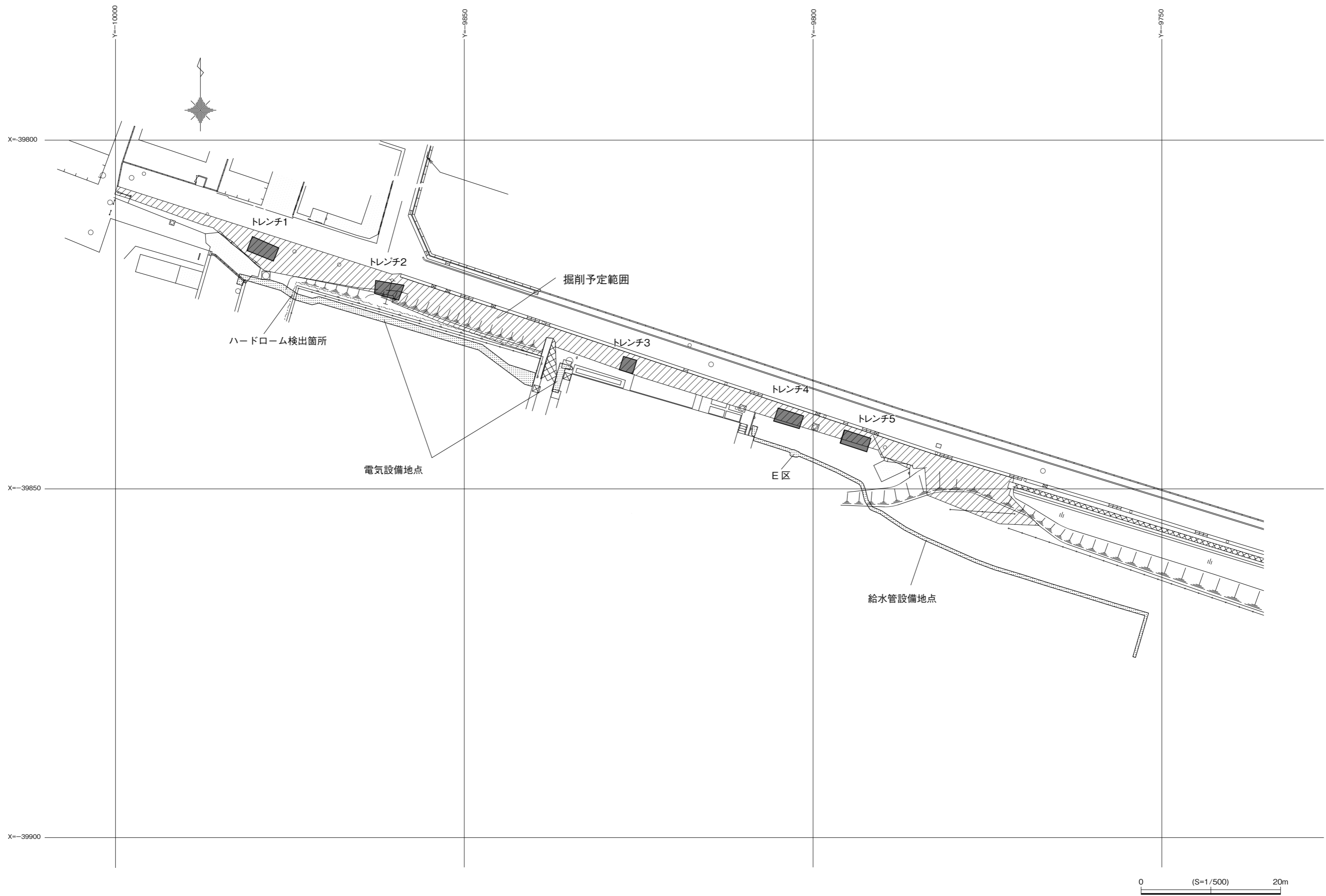
A-1区、南壁際から検出されている。中心と考えられるピットは周囲よりも深く、東西約0.3mの方形を呈している。ピット全体の南北幅は約1mで、堆積状況から中心部分に杭を据え埋め戻している。

中心部の間隔は1.3～2.1mと一様ではないが、1.8m前後の距離であることが多い。また東西方向に拡張したような広がりがあるのは、根柵材の設置部分と考えられる。遺物はSA11、SA13から出土しているが、少量のため年代は不明である。

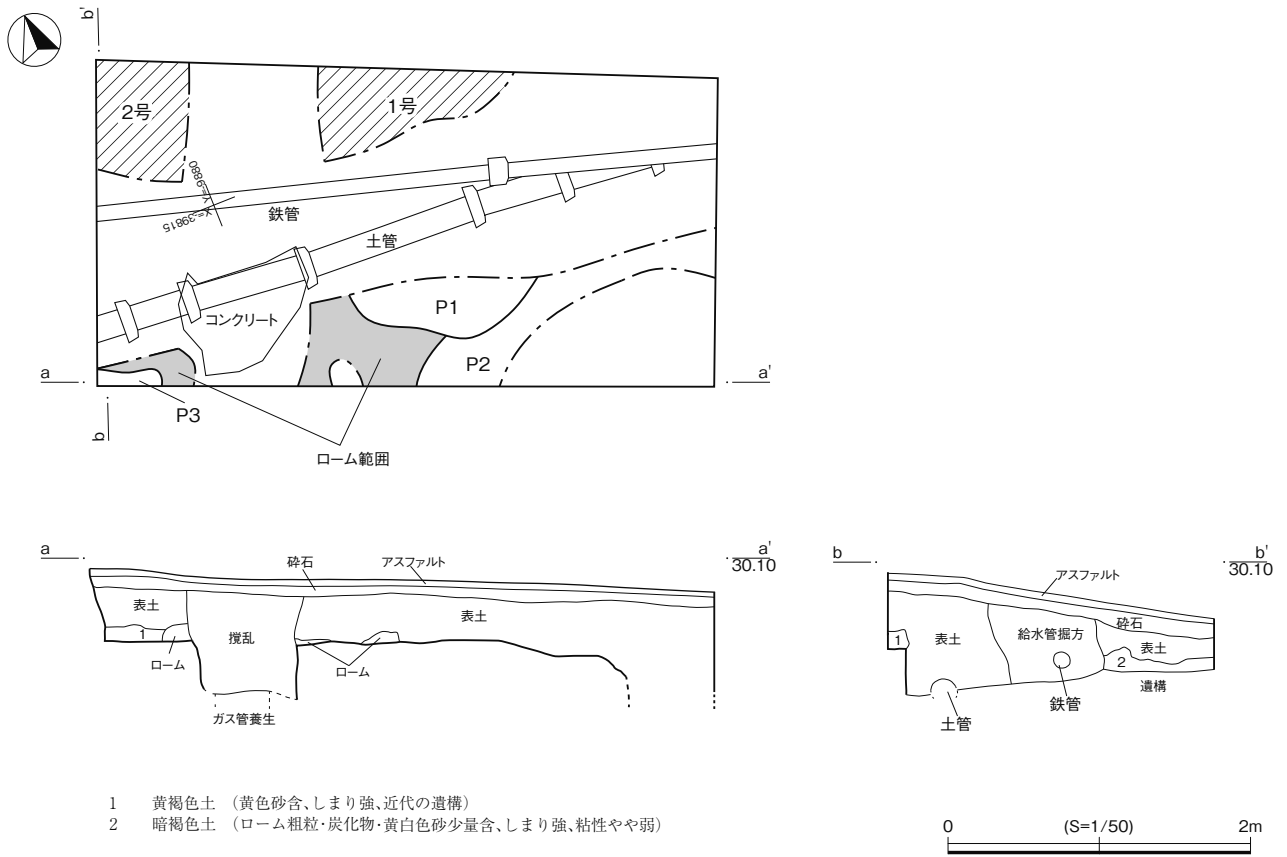
柱穴列2(西からSA34、SA64、SA58、SA77、SA78、SA109、SA108、SA124、SA117、36～42図)

A-2区、調査区北側に検出される。形状は方形～隅丸方形で一片の長さは約0.2～0.3mである。ピットの間隔は1.8m前後である。

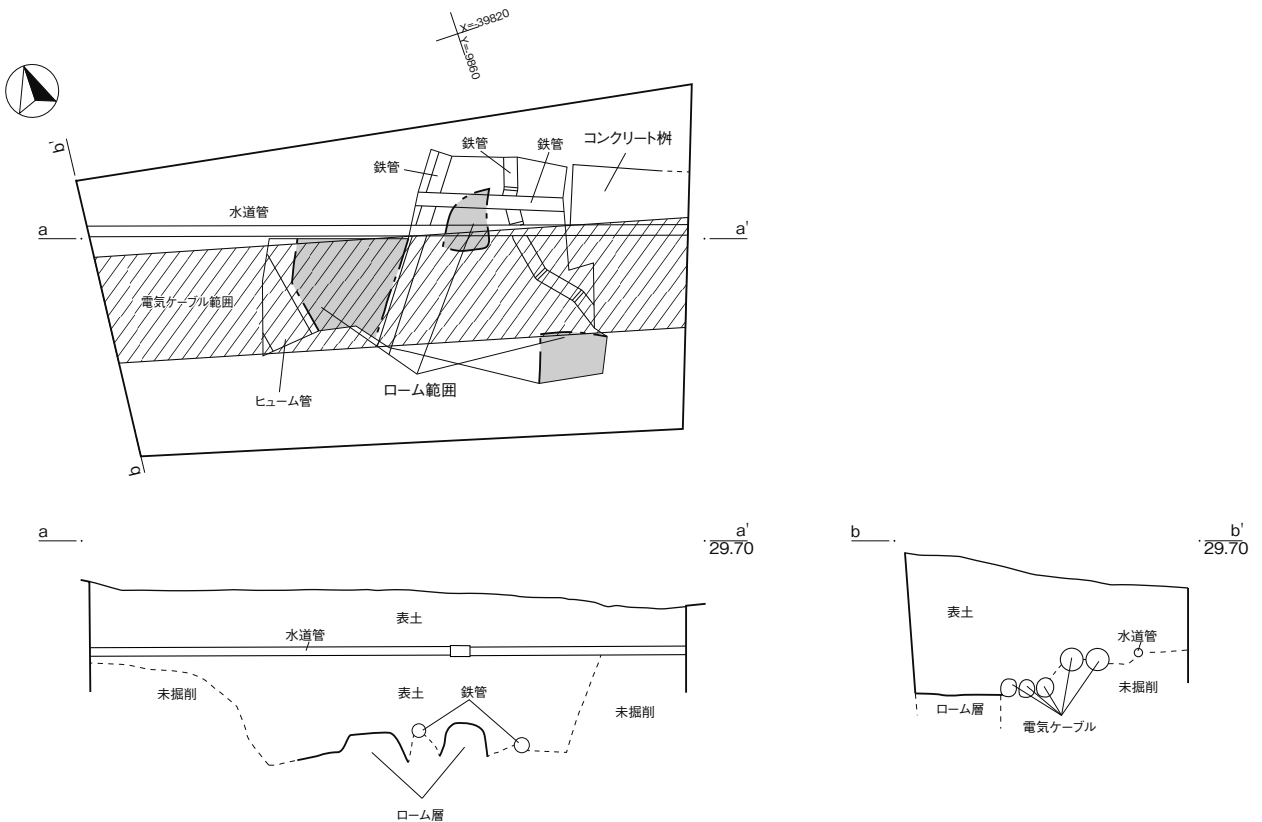
坑底のレベルは調査区の現況地形に近く、グリッドライン8～9以西は概ねフラットであるが、以東は調査区の現況地形に沿って傾斜しており、この柱穴列構築時には現在の地形であったと考えられる。SP123(41図)、SP122(42図)はこの柱穴列とやや軸を異にしており、間隔も2m、1.6mとやや違いはあるが、同一遺構の可能性も考えられる。



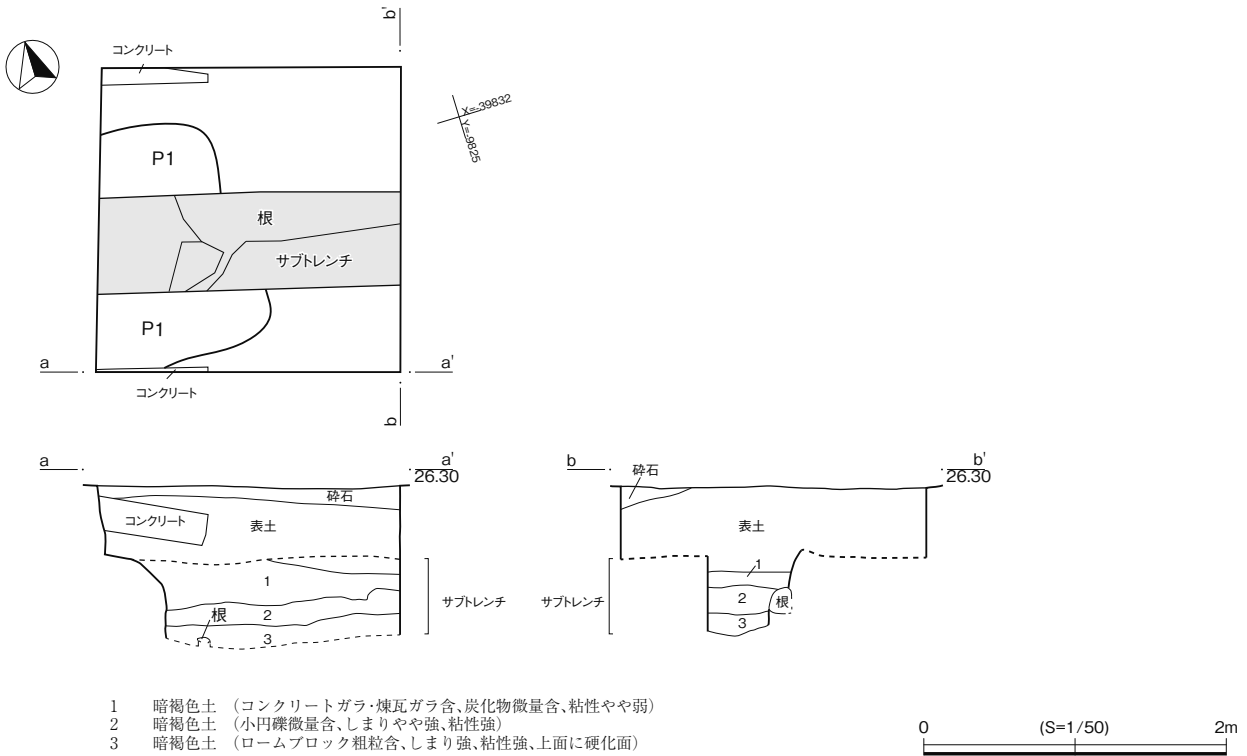
4 図 北側囲障改修地点試掘トレンチ設定



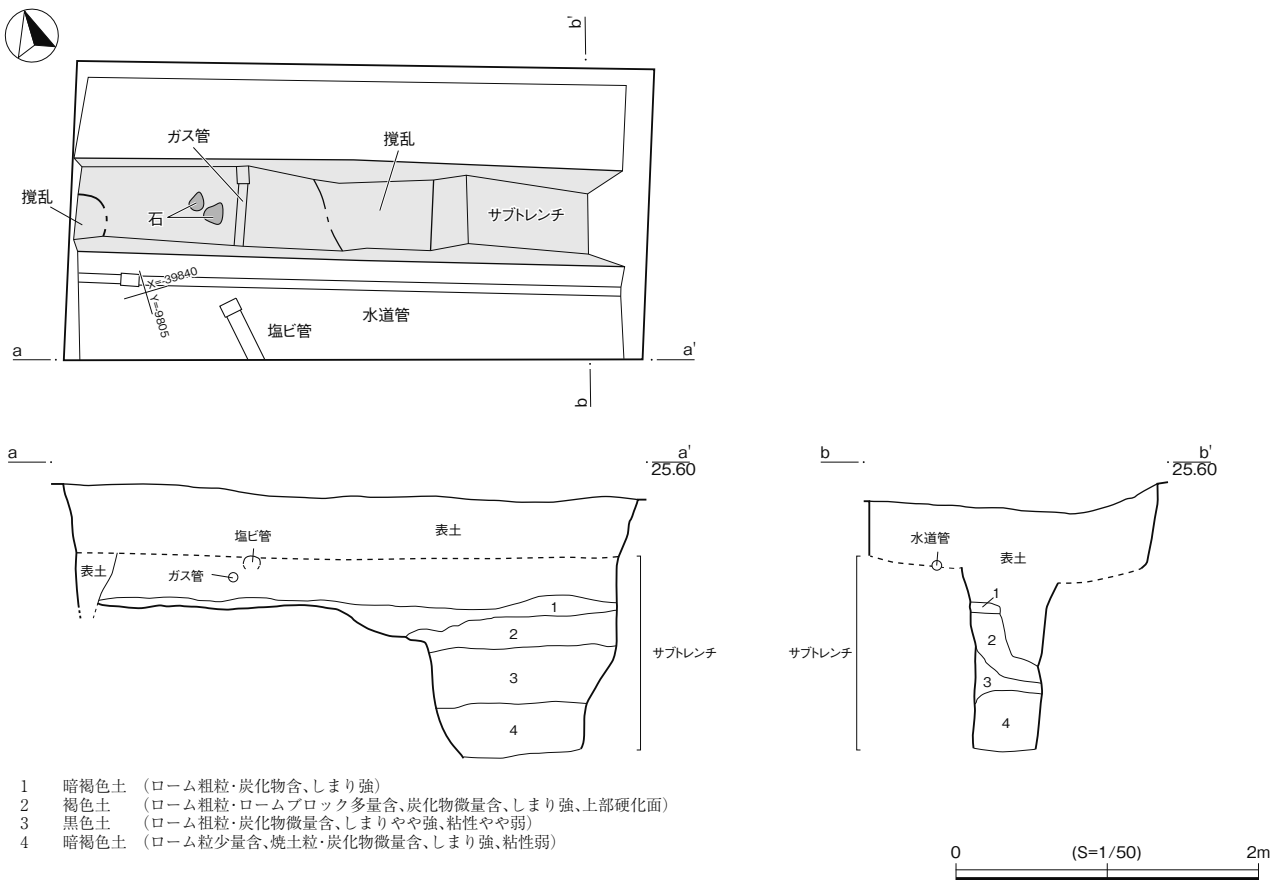
5図 北側囲障改修地点試掘トレンチ1平面図・セクション図



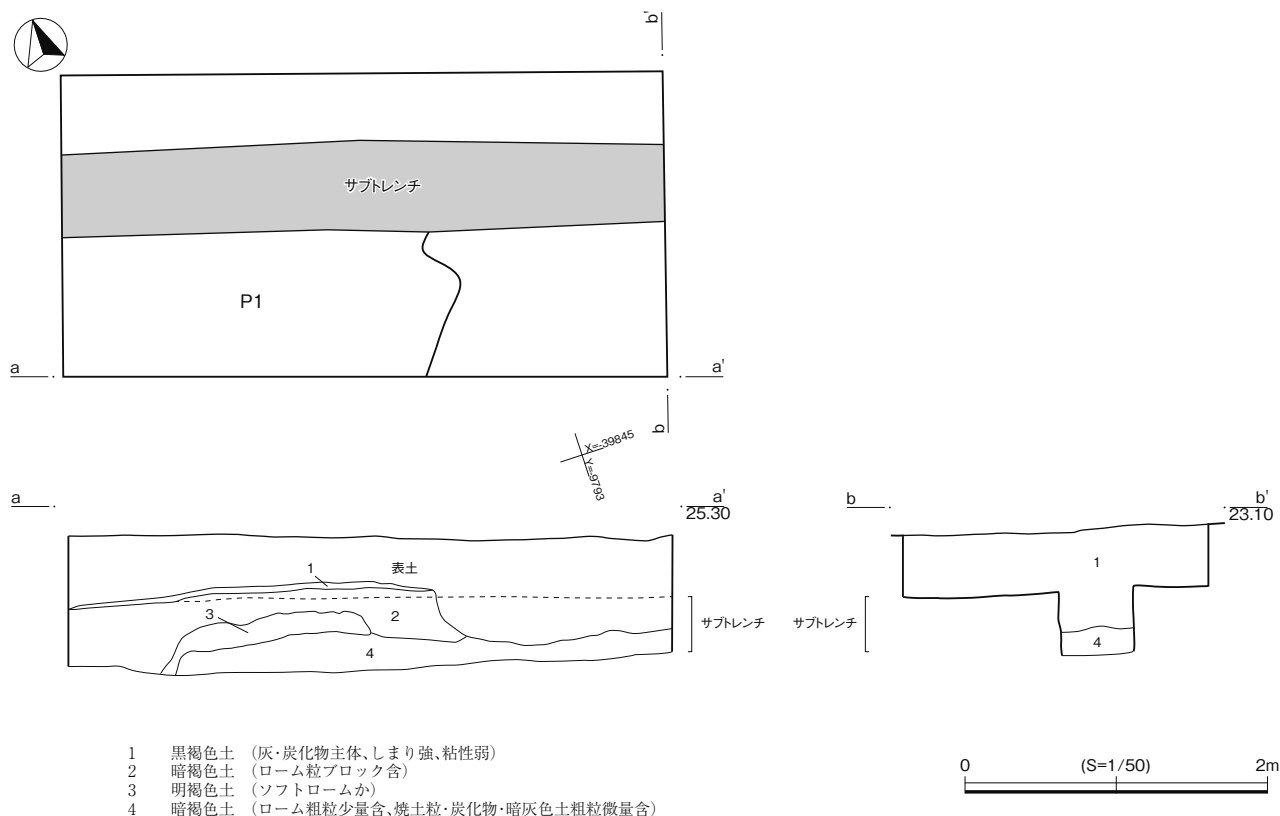
6図 北側囲障改修地点試掘トレンチ2平面図・セクション図



7図 北側困障改修地点試掘トレンチ3平面図・セクション図



8図 北側困障改修地点試掘トレンチ4平面図・セクション図



9図 北側囲障改修地点試掘トレンチ5平面図・セクション図

SA58、SA77、SA78、SA117 から陶磁器類が少量出土しており、19世紀初頭の瀬戸美濃二合半灰釉徳利片や青土瓶片など含まれていた。

柱穴列3 (SB37、43 図)

A-2区東側南壁際から検出されている。4基で構成される。東は調査区外に延びていると思われる。ピットの間隔は0.45～0.5mである。遺物は検出されおらず年代は不明である。

柱穴列4 (西からSA112、SA101、SA44、44～46 図)

A-2区東側南壁際に検出されている。3基で構成される。SA112西に平面規模が類似するピットがあるが、この柱穴列の底部レベルとは大きく異なるため、別遺構と考えられる。最東端の遺構であるSA44の東は攪乱を受けるため、さらに東に延びているかは不明である。ピットの間隔は0.7～0.9mと均一ではない。

土坑

検出された土坑の内、大形の遺構、性格の推定が可能な遺構について記載する。

SK70 (47 図)

A-2区で検出されている。遺構は現在の医科学研究所北側に接する道路に平行した長軸を持つ。長軸は約2.4m、短軸約1.3mで試掘の際トレンチ1で検出された1号である。

後述するSX20下部に検出されており、SX20より古い。壁面、坑底には工具痕が顕著に遺存している。出土した陶磁器の年代は18世紀中～後半である。

SK92 (48 図)

A-2区東側の西から東へと下る傾斜肩部に検出されている、不整形の土坑である。残存部の規模は約2mである。後述するSX38より新しい。出土した陶磁器類の年代は19世紀前半である。

SK72、SK75、SK115 (49～54 図)

A-2区東側の西から東へと下る緩斜面上で検出されている。遺構および遺構周辺の地山であるローム層は、通常に比べ暗い色調へ変色していた。

円形部分の規模は0.5～0.7mで残存する深度は0.2～0.3mである。この3遺構とも覆土は類似しており、空隙が多く粘性の高い黄色の付着物(ローム粒子?)が混入していた。また水分の影響か、遺構壁面、底面に酸化鉄による赤化が認められるといった共有点が見られる。これらの遺構に類似する土坑として、便所などが考えられるが、桶跡は検出されていない。しかしSK115底部には、柄杓などで掻き出したような痕がみられ、便所の可能性が考えられる。

性格不明遺構

今回の調査では性格不明遺構が6基検出されている

が、地業に関係すると思われるSX25、SX38について記載する。

SX20 (55～38図)

A-1区からA-2区にかけて、東西25mを超えると思われる削平痕である。南北幅はC6グリッド付近が最大で、約1.6mである。西側、北側ともに調査区外へ続いていると考えられる。A-1区では多くの範囲が、SX20より新しい遺構に攪乱され、調査区が狭隘なこともあり、地山であるローム面が北側に傾斜している様子が看取されたのみであったが、A-2区での検出状況やA-1区の南・北壁の堆積状況から、A-1区全体に拡がっていたと思われる。

傾斜は15度から20度前後で、南側にテラスを有し、大きく2段に分かれている。出土した遺物は18世紀前半の陶磁器が多いが、新しいものは19c初頭まで下る。また坑底からピットが多く検出されているが、SX20の上面で認識できなかった可能性もあり、切り合いは不明である。SX20に伴う可能性も考えられる。

SX38 (58、59図)

A-2区東側で検出されている。遺構の規模は周囲に攪乱が多いことから不明瞭であるが、南北は調査区幅である約4m、東西幅も約4mである。南北はともに調査区外へ拡がっていると考えられる。西から東へ下っており、傾斜はSK72の西から東では約30度で、SK75周囲は一度フラットになり、SK75東側のテラス上の掘込みまでが、酸化鉄を含んだ赤化した覆土の様相から、同一遺構と考えられる。周囲の遺構との切り合いはSK92より古いが、便所と思われるSK72・SK75・SK115より新しい。

段切り状遺構または、SK72・SK75周辺では階段状を呈していた可能性も考えられる。出土した陶磁器は、19世紀前半が主である。

B区 (14図)

前述のように、立会調査として設定していた範囲で遺構が認められたため、本調査区とした範囲である。調査面積は13㎡である。

溝が1条、土坑が2基、ピットが10基検出された。以下主な遺構について記述する。

SD84 (60、61図)

万年堀堀方に接し、ほぼ現在の万年堀直下に位置した溝である。北側は後述するコンクリート製の近代以降の堀基礎に攪乱され、形状の全容は不明瞭であるが、南壁の断面形は、L字に近い様相を呈している。西側では徐々に傾斜が弱くなり、調査区外へと続いている

と思われる。布掘りである可能性が考えられ、地境などの可能性が考えられる。出土した遺物の年代は19世紀初頭である。

柱穴列(西からSA102、SA93、SA89、SA87、SA86、SA83、62図)

間隔は1.5～2mと一定ではない。またSA87、SA89、SA93には建て替えと思われるピットが存在する。塀列などの可能性が考えられる。

SD84との切り合いは、柱穴列の方が新しい。その他のピットもSD84より新しいため、溝が一番古いと思われる。

SK103、SK104 (63図)

C区の立会調査中に検出された遺構である。SK103と104は当初の平面確認では別遺構と判断できなかったが、完堀後の北西壁の観察から、別遺構とした。B区内で検出された規模は、東西約1.8m、南北は調査区幅である0.9mの範囲であるが、北側、南側、西側へと拡がっていると考えられる。出土した遺物は、上記の検出経緯によりSK103とSK104は峻別できないが、18世紀後半が主体である。

立会調査

C区 (12、15、16、64～69図)

工事範囲の中で最東端に位置し、重力式擁壁の設置範囲である。前述のように立会調査中に遺構が検出されたため、北側の一部をB区と設定した。C区全体の掘削範囲の面積は81㎡で、掘削深度はT.P.24.0mが予定されていた。

C区の現況は、南側上部に一部平坦な部分があるが、全体的には南から北と東から西への傾斜地で、南東隅が最も標高が高い(45図)。傾斜は東端で最も強く最大45度以上で、西側では徐々にゆるくなり、門扉東側で収斂する。

表土下には古い配管や現代のゴミ穴などがみとめられ、約1.5m下まではしまりの緩い近現代の盛土であった。この盛土下では近世期に属すると思われるプライマリーな層の堆積が認められる(16図、1～4層)。この暗褐色土の下にはいわゆる漸移層が見られ、標準的な立川ローム層の層序が確認でき、自然地形でも南から北、および東から西への傾斜が確認できた(66図)。

このC区では、掘削中に平面的には判断できなかったが、調査区南壁の観察で遺構を確認した(16図、67図)。検出された位置は中央よりやや西の表土下1.5mで、遺構上面の標高はおおよそ27.0mである。遺構の規模は東西約1.8mで、深さは約0.7mである。

南壁での堆積状況は1層は青灰色粘土、黒褐色土ブロックを多く含んだ暗褐色土で上部に硬化が見られる。2・3・4層はロームブロックの多寡はあるが、類似している。3層は遺構の可能性も考えられるが、検出範囲が狭いため確定はできない。P1からは陶磁器、キセルなどが出土しており、18世紀中葉の遺構と考えられる(15、16図)。

また西側のI区と接する地点の床付けレベルで、遺構のプラン(P2)が検出されている(15、68図)。この遺構がさらに北側へ続いているものと考えられ、B区として本調査区へと変更することとなった一因である(SK103・SK104)。このP2のプランは南側に続いているが、プラン形状から複数の遺構が切り合っている可能性も考えられる。

B区北側の道路に接する部分は、万年堀下部にコンクリートの近代以降の堀の基礎があったため攪乱されていた。このコンクリートは、調査区すべての万年堀下部に存在し、近代以降の道路との境として機能していたと思われる。

D区(11図、70～77図)

A区の東側の道路に面した範囲で、南から北、西から東へ下る傾斜地である(70図)。重力式擁壁の設置が予定されている。掘削範囲の面積は99㎡で、掘削深度は傾斜に沿い最西端でT.P.27.8m、最東端でT.P.26.2mが予定されていた。

表土層は最西端で約0.8m、最東端は約3mである。表土層以下には層厚約10cmの碎石層、その下に約10cmの暗褐色土層、さらに下にロームブロックを主体とした約10cmの層により、版築状の整地層が見られた(75図、76図)。この整地層の下には東側は黒色土、西側ではロームブロックを含む黒～暗褐色土が約20～40cm堆積している。色調・含有物に違いはあるが同一の層位と思われる。東側の黒色土は所謂、富士黒土層に類似し、自然堆積層と思われたが、上部からの攪乱を受けていない層中に近代の土管が含まれていた(76図)。このことから黒色土は近代以降の盛土と思われる。黒色土下部は自然堆積層であるが、西側は立川ロームIV層で黒色土とは不連続となっており、近代以降に削平・盛土が行われたと考えられる。最東端付近は黒色土以下に漸移層が遺存している(77図)。壁面の観察からいくつかの落ち込みが確認されたが、上記黒色土上部から掘り込んでいることから、近代以降の攪乱と考えられる。掘削底面の確認でも万年堀支柱部分を含め、遺構は検出されていない。

E区(11図、12図、78～86図)

E区は現在の万年堀から道路幅を拡張する範囲である。掘削深度により1、2区に分かれ、E-1区は道路面から約10cm、フェンス基礎を設置するE-2区は約20cmの掘削が予定されていた。道路面は現在西から東へ傾斜しているが、万年堀内側のE区は25ライン付近の段差部分まで平坦化しているため、E区西端G.L.-0.45mであったが徐々に比高差が大きくなり、段差部分では約1.1mとなっている(82図)。

E-1区、E-2区ともに試掘トレンチ3、4、5の結果同様に、西側D区に隣接する抜根樹木部分を含め、掘削深度までは表土であった(79、82、85図)。また万年堀支柱28本の撤去の際の壁面観察でも、同様に表土であった(79、80図)。

E-2区には0.25×0.25m、高さ0.45mフェンス基礎が設置されるため、0.45×0.45m、掘削深が前述道路面から20cmの掘削面よりさらに0.25～0.3m深く掘削が行われた。こちらも試掘調査の結果に類似した状況で、東側I区に隣接する7箇所では、ローム埋土など包含層の堆積が見られたが(86図)、7箇所以外では表土であった。(84、85図)

F区(10、87図)

本調査A-1区内で、調査時には撤去できなかった樹木の抜根部分である。掘削レベルは最深で約0.35mで、A-1区で検出された遺構面には達していなかった。

G区(10、88～91図)

G区は門扉基礎部分撤去、新設および旧門南側コンクリート土間部分の解体箇所である。一部A区と重複する。

G区①で検出されたP1～P3の内、P1は確認面からの深さは48cmあり、覆土も暗褐色土で近世期に属する可能性が考えられる(90図)。周囲の遺構としては、A区本調査で検出されたC-6グリッドSP41が、遺構の規模深度とも類似している。P2、P3は灰が含まれ近現代に属する可能性が考えられる。コンクリート土間撤去部分では、遺構は検出されなかった(91図)。

H区(10図、92～96図)

H区はA区の北側道路の、既存L字溝の撤去・舗装の張り替え部分である。H区①は既存排水柵部分で、新たに構内からの配水管との接続し直すための掘削であった(92図)。H区②、③は既存の道路標識の撤去部分である(93、94図)。H区①～③とも既存施設に攪乱を受けており、遺構・遺物は検出されなかった。

L字溝の撤去部分は、下部にコンクリート土間が敷設されていたが、舗装に影響のある上部のみを若干研るのみで、掘削は行われなかった(96図)。

I区(15図、97～99図)

I区はB・C区とE区の間位置し、門扉および周辺土間部分の撤去、張り替え範囲である。I区-①、②が門扉部分であり旧門扉直下に位置する。それぞれG.L.-約0.95m、約1.2mが掘削された。I区-①では、大部分が旧門扉基礎に攪乱を受け、壁面の観察ではC区P2の下部が確認されている。I区-②もやはり旧門扉基礎に攪乱を受けていた。壁面の観察では土間コンクリート、碎石層、約0.25m下に約0.2～0.5mのローム盛土堆積し、さらに下部に暗褐色土が確認された。当該区の西約2mに位置する試掘トレンチ5でも同様な堆積が検出され、この区域周辺の基本的な堆積と考えられる(97図)。

土間の撤去範囲では、コンクリート下に約25cm厚で碎石やレンガが充填されていた。P7～9が平面プランとして検出されたが(98、99図)、さらに複数の遺構である可能性が考えられる。上面からの覆土の観察および出土遺物から、近世期に属する遺構と思われる。

3. 成果と課題

立会調査を行った給水管設備地点、電気設備地点では、近世以前に遡る遺構・遺物は検出されていないが、①付近で近世に属する可能性がある包含層が検出されている。

給水管設備地点の調査区は、全長で60m以上と長かったため、ベクター開発室北側、臨床研究A棟東側付近は標高27～29m前後と高く、研究棟西側付近では約25.3mと標高差をもつ。この段差は明治28年発行の東京実測図(100図)で描かれており、上位段部分は矩形の区画の範囲に相当するようである。この区画は『御府内場末往還其他沿革図書』(101図)では、五嶋左衛門尉下屋敷に該当するようである。

また給水管設備地点のC区②では、近現代と思われる構築物の一部が検出された。これは東京大学施設部が所有する医科学研究所の建物変遷図(102図)の「石炭室」部分に該当し、検出された大谷石は石炭室の一部である可能性も考えられる。この石炭室は、大正13(1924)年から昭和27(1952)年の建物変遷図で確認できる。

今回の一連の工事の本体部分にあたる北側圍障改修地点では、近世期に属する遺構が、調査面積に比し多

数検出された。調査地点が道路に近く、近世から現代にかけて、敷地境界を変更していないと考えられ、活発な営為が少ないという予想を覆すものであった。

A-1区で検出された柱穴列1は、比較的大規模な作りであり、地境の可能性が考えられる。この柱穴列1は5グリッドライン付近で途絶えており、東側へは続いていなかったと考えられるが、A区で検出された他の柱穴列の多くも、現在の道路に平行しており、地境に関連する遺構と思われ、構造や年代の差異による可能性が考えられる。

その他には地業の結果と思われるSX20、SX38が特徴的な遺構である。SX20はやはり道路に平行な軸をもち、敷地内から道路に向けて傾斜を形成していることから、段差を解消させる意図があったと思われるが、類似した例が見当たらず今後の検討課題である。一方、SX38はSX20に直交することから、SX20とは別の意図があったと思われる。A区は前述したように8～9ラインを境に東へ下っている。SX38によりこの傾斜に段をつけ、平場を形成する意図があったと思われるが、SX38の東側すべて攪乱であるため定かではない。SX38は19世紀前半の廃絶年代が考えられ、18世紀代の廃絶の便所と思われるSK72、SK75、SK115上部を削平していることから、この時期に大がかりな土地利用の改変が当該区にあったことが推定される。

B区では柱穴列を中心に検出され、A区同様に道路との境界に関する遺構が検出されている。周囲の立会調査を行ったC区、I区の検出状況と合わせて考えると、18世紀代には土抗など生活に関する遺構が、現在の道路際まで検出されるのに対し、19世紀には地境に関する遺構である柱穴列が検出されている事を考えると、19世紀に入り道路幅の変更が行われた可能性が考えられる。

48図に見られるようにローム層および漸移層は、東側の現在の道路付近で、1m以上高く遺存していた。この道路と自然地形の比高差の解消には、石垣など大きな遺構を必要とするが、B区にはその痕跡は見られなかった。このことから道路幅が現在よりも狭く、敷地が北側に広がっていた可能性も考えられる。検出された柱穴列は、主たる地境の装置ではなく内側の控えに関係する遺構の可能性も考えられるが、19世紀代には現在の境界に近かったと考えられる。

前述の『御府内場末往還其他沿革図書』には、延宝、元禄、宝永、正徳、弘化(当時の形)と5枚の絵図が描かれているが、延宝(1673～1681年)～正徳(1711～1716年)まではほとんど変化が見られない。弘化

(1844～1848年)での変化については文献史料から大村藩下屋敷の西側、東側で相對替えが行われた記録が残されており、復元図が作成されている(渋谷2004)。これによると、IVとVの境がA区SX38周辺に予想される(100図)。またB、C区で遺構が検出される範囲を比較すると、東側五嶋家下屋敷とI(内藤熊太郎)付近を境に、西側に検出されている。

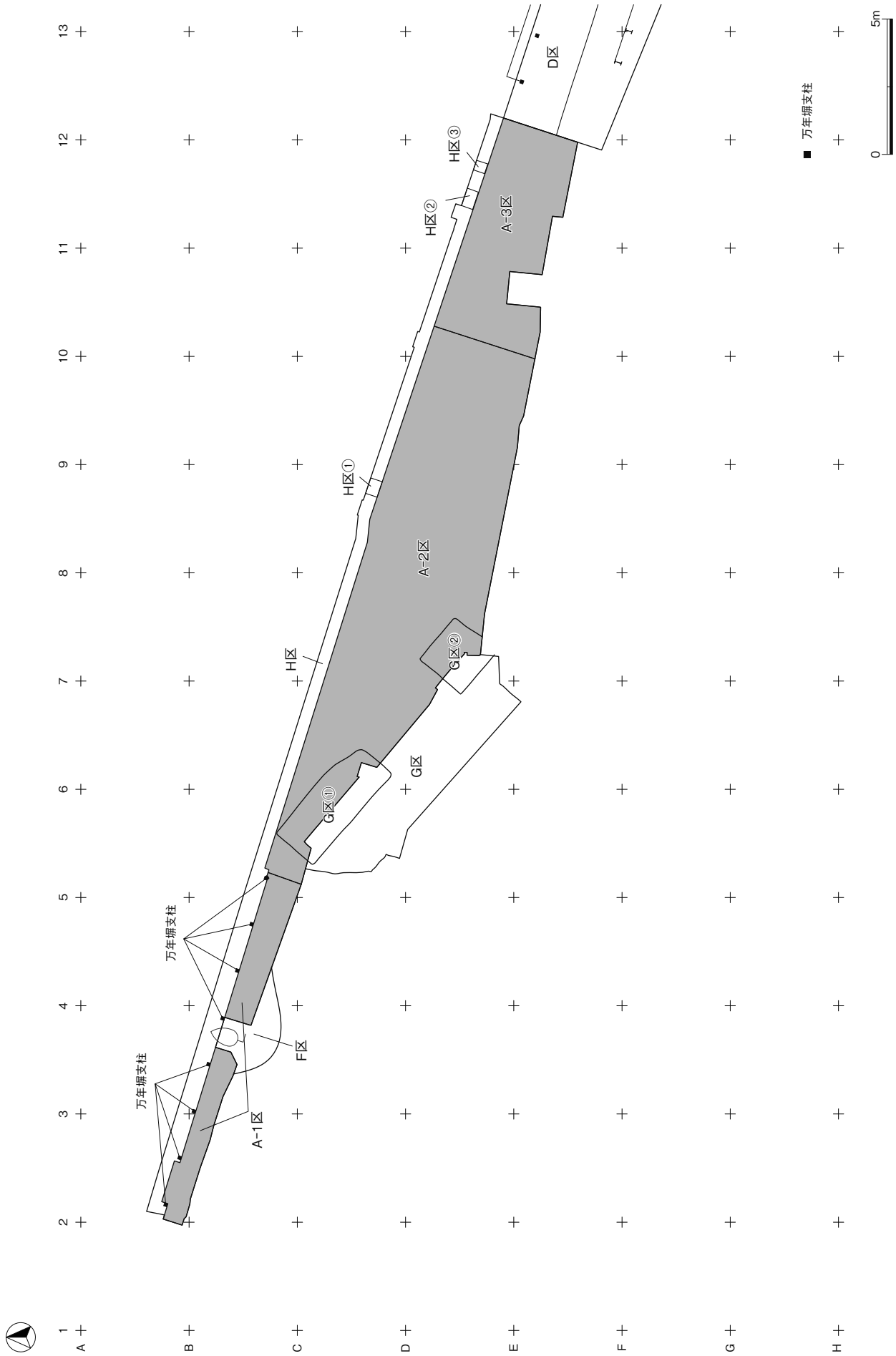
また『御府内場末往還其他沿革図書』では、終始大村藩下屋敷は北側に入口があったと推測されるが、弘化の図に見られるような配置の場合、A区付近に門が存在する必要があったと思われるが、関係性のある遺構は検出されていない。

これまでに医科学研究所内での事前調査は、医科学研究所附属病院A棟地点の1度のみで、判明していることはわずかである。今後、本地点の遺構・遺物の精査と附属病院A棟地点の成果を踏まえ、検討していきたい。

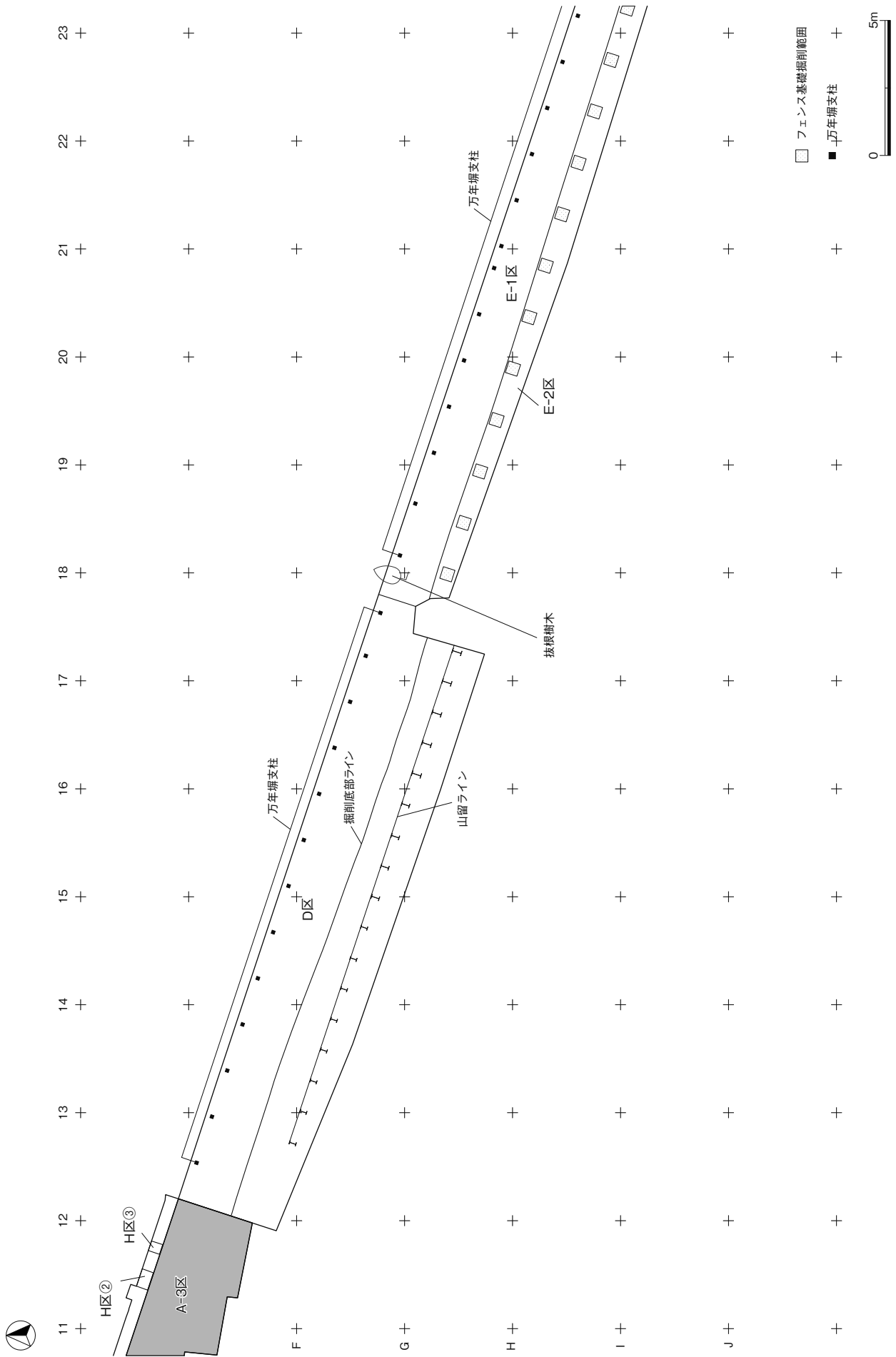
(香取祐一)

【参考文献】

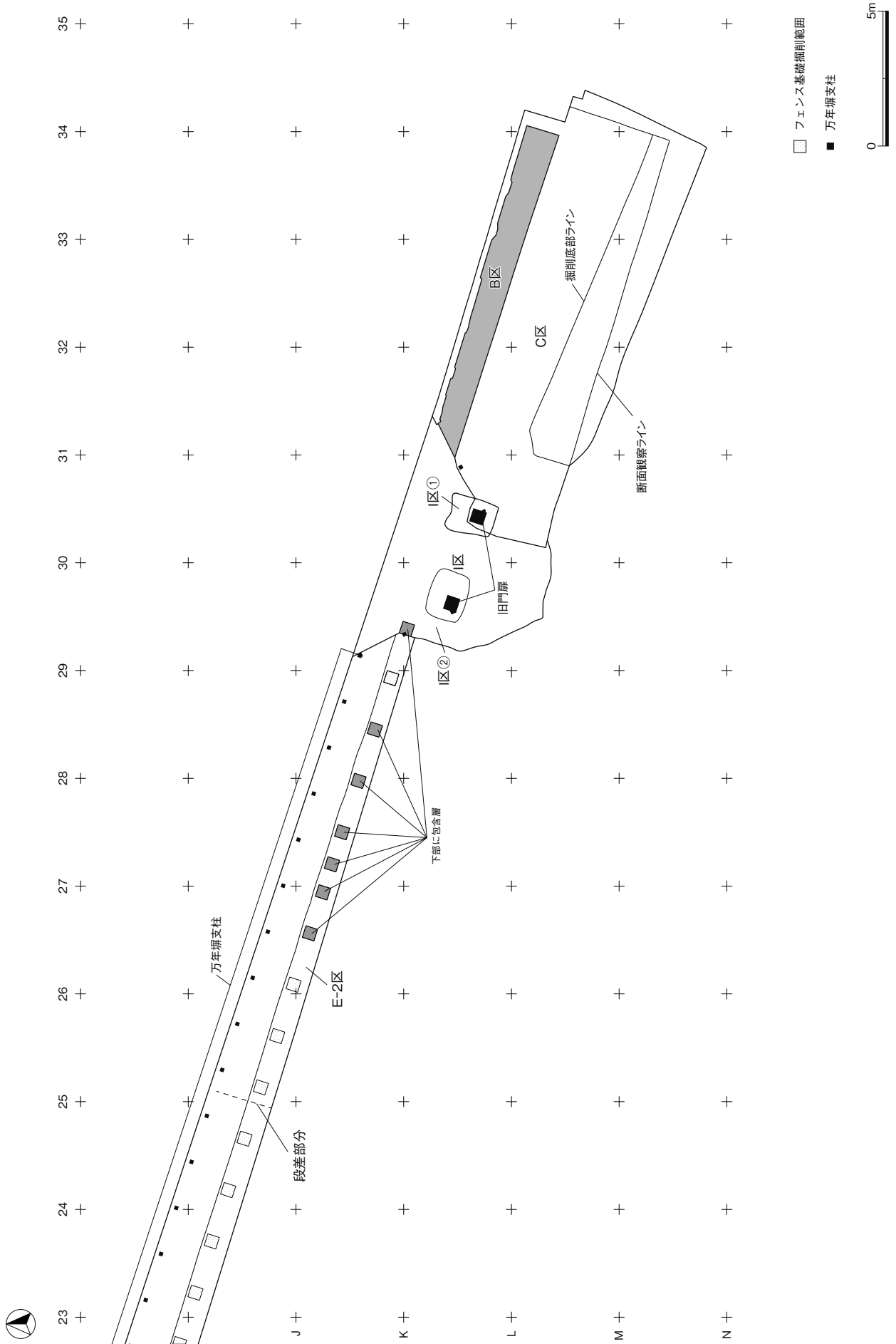
渋谷葉子 2004 「肥前国大村藩白金下屋敷について」『東京大学構内遺跡調査研究年報4』 東京大学埋蔵文化財調査室
東京大学埋蔵文化財調査室 2022 『医科学研究所附属病院A棟地点報告編』



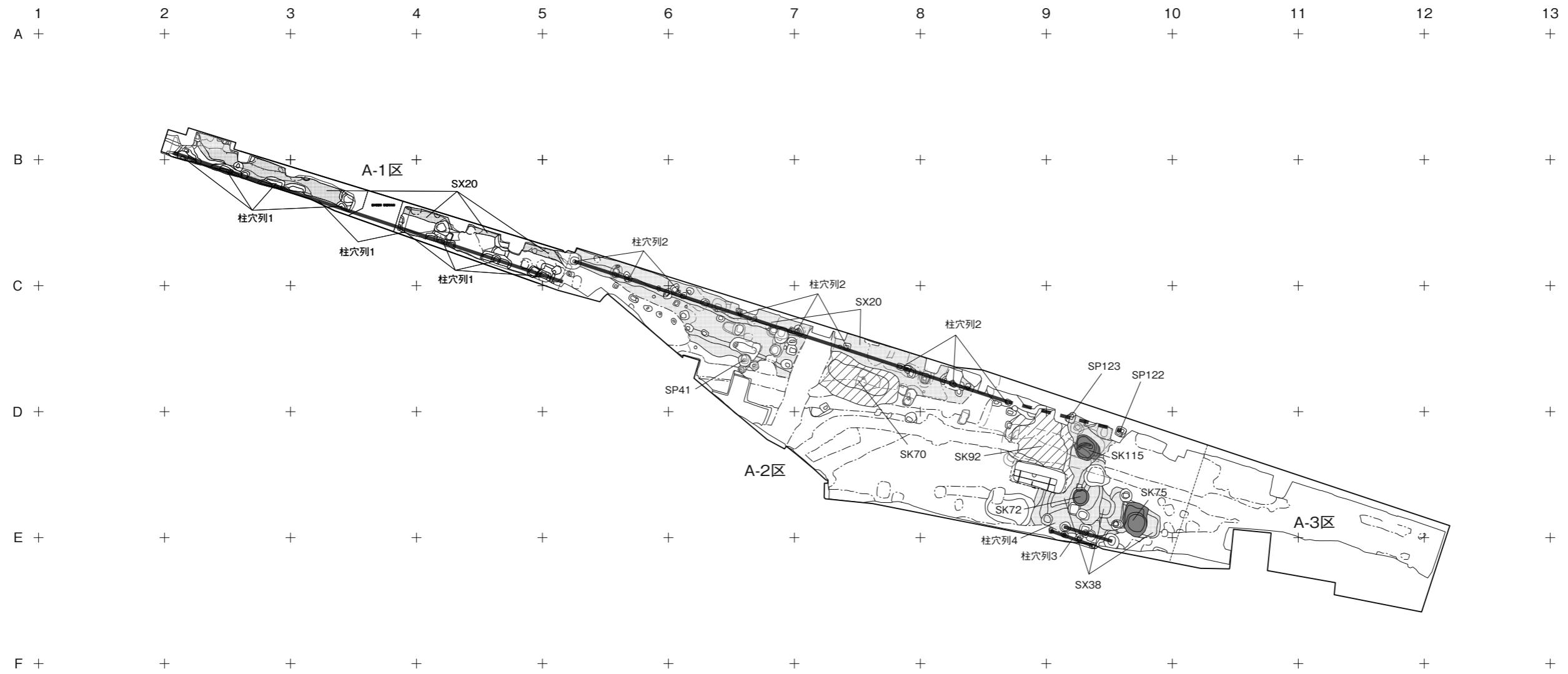
10 図 北側圍障改修地点調査区分図 (1)



11 図 北側囲障改修地点調査区分図 (2)



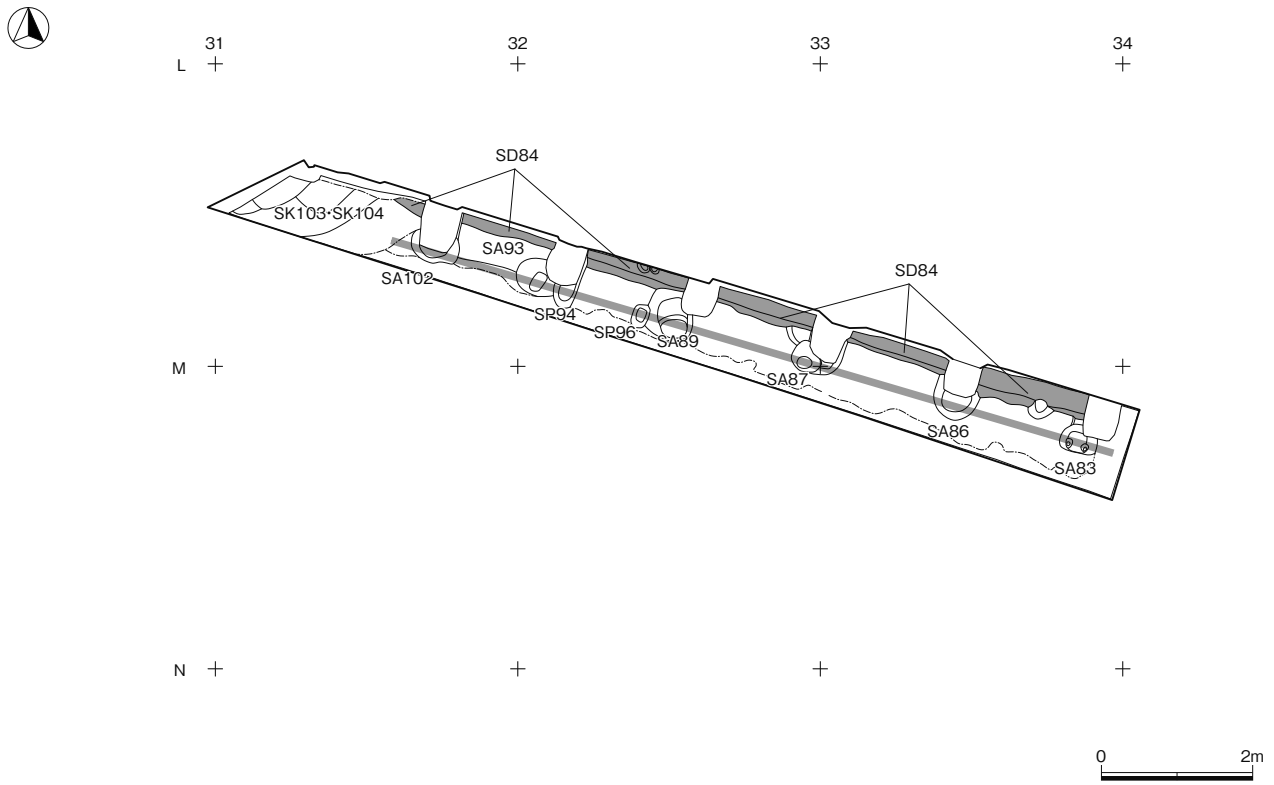
12 図 北側囲障改修地点調査区分図 (3)



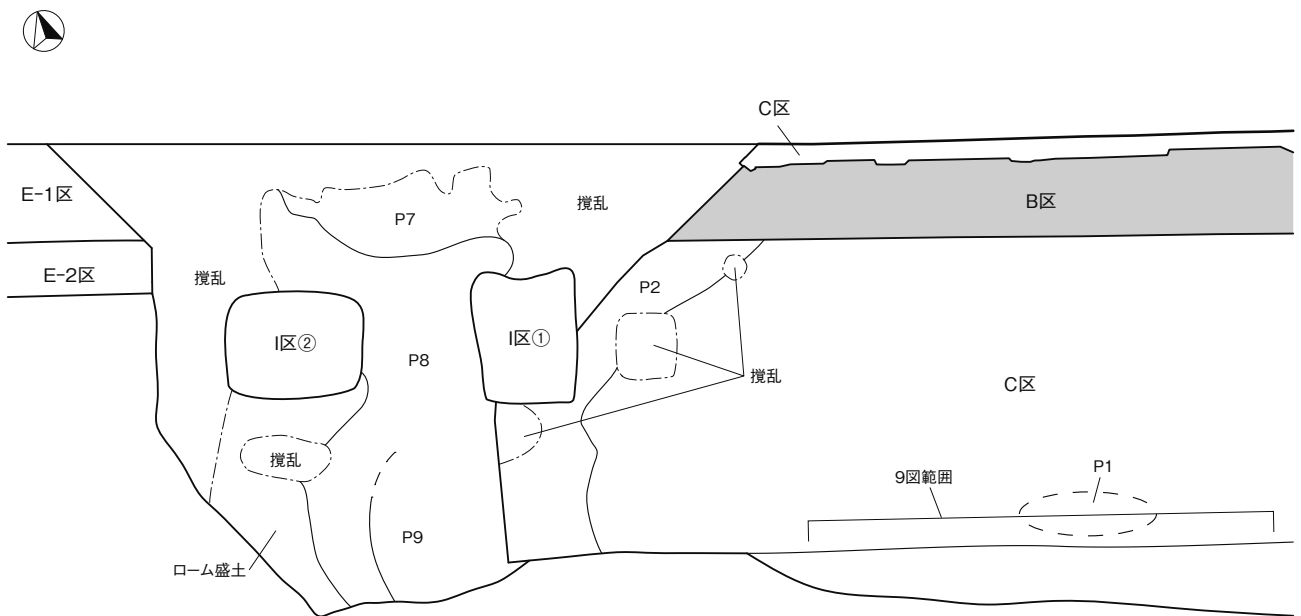
—— SX20上確認遺構



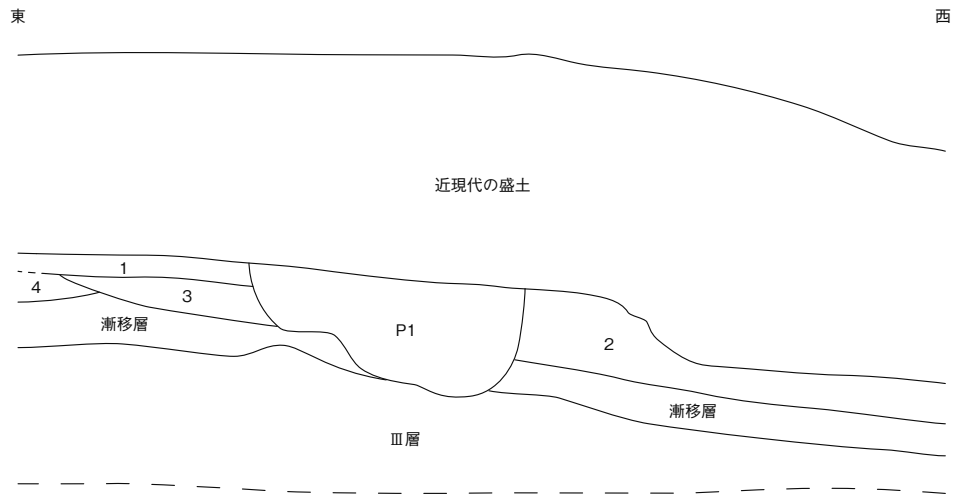
13 図 北側囲障改修地点 A 区遺構配置図



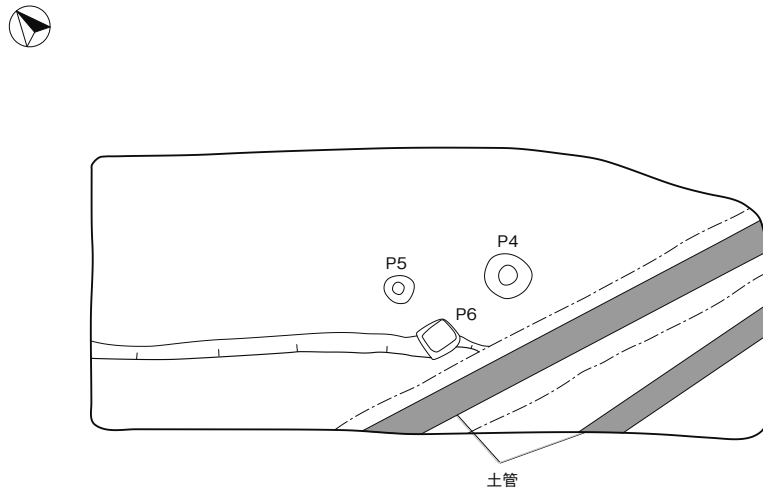
14 図 北側囲障改修地点 B 区遺構配置図



15 図 北側囲障改修地点 C 区、I 区確認状況模式図 (約 1/100)



16 図 北側囲障改修地点 C 区南壁土層堆積況模式図 (約 1/50)



17 図 G 区①検出状況模式図 (約 1/50)



18図 給水管設備地点A区全景（北から）



19図 給水管設備地点B区全景（東から）



20図 給水管設備地点B区①堆積状況（北から）



21図 給水管設備地点C区下位段部分全景（西から）



22図 給水管設備地点C区②大谷石
検出状況（北東から）



23図 給水管設備地点E区③堆積状況（南から）



24 図 電気設備地点 F 区掘削状況 (北から)



25 図 電気設備地点 G 区西側掘削状況 1 (西から)



26 図 電気設備地点 G 区西側掘削状況 2 (西から)



27 図 電気設備地点 G 区東側掘削状況 1 (東から)



28 図 電気設備地点 G 区東側掘削状況 2 (東から)



29 図 電気設備地点 G 区東側掘削状況 (西から)



30図 北側囲障改修地点SA13、SA4完堀（北から）



31図 北側囲障改修地点SA16完堀（南から）



32図 北側囲障改修地点SA18完堀（南から）



33図 北側囲障改修地点SA21、SA8完堀（北から）



34図 北側囲障改修地点SA8、SA11完堀（北から）



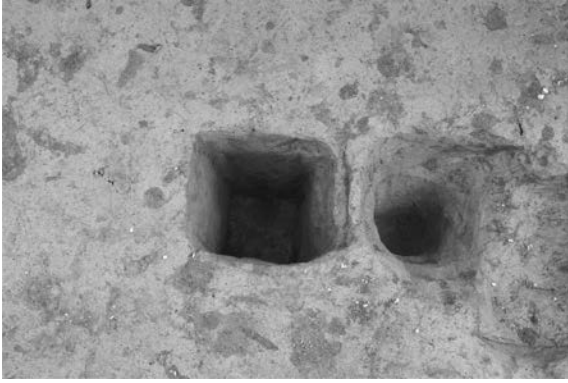
35図 北側囲障改修地点SA11、SA1完堀（北から）



36図 北側囲障改修地点SA34完堀（東から）



37図 北側囲障改修地点SA64、SA58、SA77、SA78完堀（南から）



38図 北側囲障改修地点SA108完堀（南から）



39図 北側囲障改修地点SA124完堀（西から）



40図 北側囲障改修地点SA117完堀（西から）



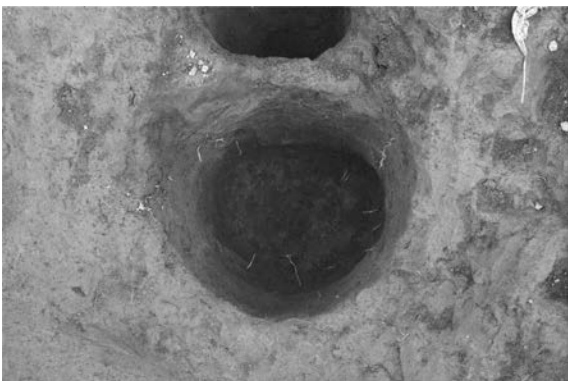
41図 北側囲障改修地点SP123完堀（東から）



42図 北側囲障改修地点SP122完堀（南から）



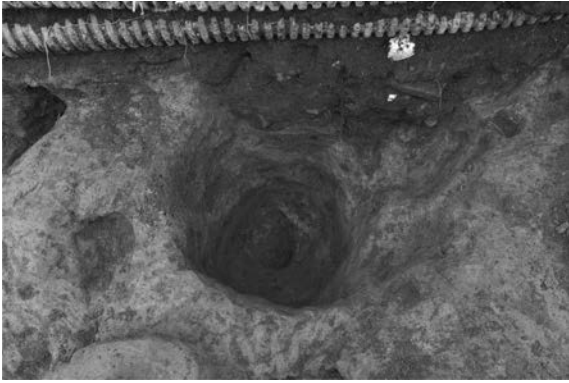
43図 北側囲障改修地点SB37完堀（北から）



44図 北側囲障改修地点SA112完堀（北から）



45図 北側囲障改修地点SA101完堀（北東から）



46図 北側囲障改修地点SA44（北から）



47図 北側囲障改修地点SK70完堀（南から）



48図 北側囲障改修地点SK92完堀（南から）



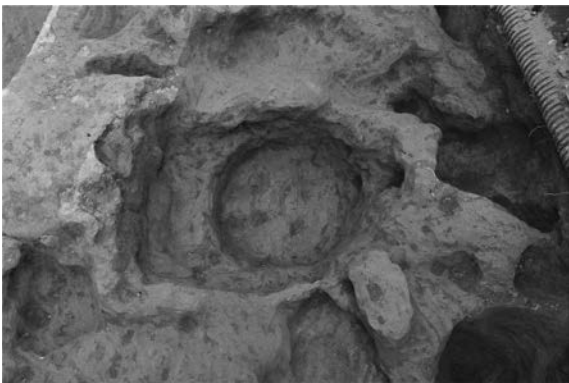
49図 北側囲障改修地点SK72底部土層堆積状況（東から）



50図 北側囲障改修地点SK72完堀（東から）



51図 北側囲障改修地点SK75土層堆積状況（西から）



52図 北側囲障改修地点SK75完堀（西から）



53図 北側囲障改修地点SK115完堀（西から）



54図 北側囲障改修地点SK115完堀（西から）



55図 北側囲障改修地点A-2区SX20完堀（東から）



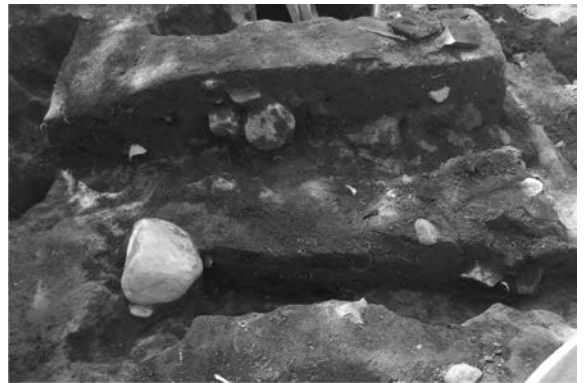
56図 北側囲障改修地点A-1区SX20完堀（南から）



57図 北側囲障改修地点SX20土層堆積状況（西から）



58図 北側囲障改修地点SX38完堀（東から）



59図 北側囲障改修地点SX38土層堆積状況（東から）



60図 北側囲障改修地点SD84東側完堀（東から）



61図 北側囲障改修地点SD84西側完堀（東から）



62図 北側囲障改修地点SA102、SA93、SA89、SA87、SA86、SA83完堀（東から）



63図 北側囲障改修地点SK103、SK104完堀（南から）



64図 北側囲障改修地点C区調査前状況（西から）



65図 北側囲障改修地点C区掘削状況（南西から）



66図 北側囲障改修地点C区東壁堆積状況（西から）



67図 北側囲障改修地点C区南壁P1堆積状況（北から）



68図 北側囲障改修地点C区P2プラン検出状況（北東から）



69図 北側囲障改修地点C区掘削底面確認状況（南東から）



70図 北側囲障改修地点D区調査前状況（南西から）



71図 北側囲障改修地点D区掘削状況（東から）



72図 北側囲障改修地点D区東側底面確認状況（西から）



73図 北側囲障改修地点D区西側底面確認状況（東から）



74図 北側囲障改修地点D区南壁土層堆積状況（西から）



75図 北側囲障改修地点D区南壁土層堆積状況（東から）



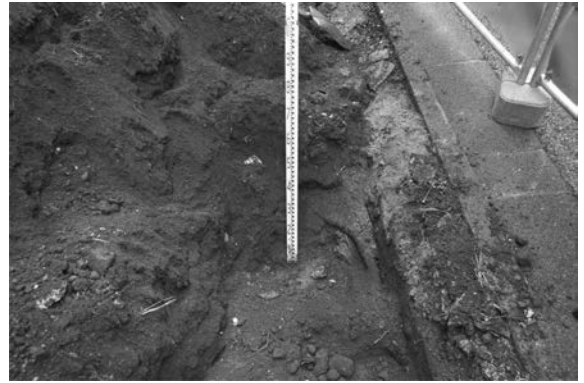
76図 北側囲障改修地点D区東側南壁土層堆積状況1（北から）



77図 北側囲障改修地点D区東側南壁土層堆積状況2（北から）



78図 北側囲障改修地点E区抜根状況（南東から）



79図 北側囲障改修地点E区万年堀支柱撤去状況1（東から）



80図 北側囲障改修地点E区万年堀支柱撤去状況2（南から）



81図 北側囲障改修地点E区西側掘削底面確認状況（東から）



82図 北側囲障改修地点E区南壁土層堆積状況（北東から）



83図 北側囲障改修地点E-2区フェンス基礎掘削状況（北西から）



84図 北側囲障改修地点E-2区フェンス基礎完掘（北から）



85図 北側囲障改修地点E区東側掘削底面確認状況（東から）



86図 北側囲障改修地点E-2区フェンス基礎掘完堀（北から）



87図 北側囲障改修地点F区掘削状況（南東から）



88図 北側囲障改修地点G区①掘削状況（西から）



89図 北側囲障改修地点G区①P1完堀（北から）



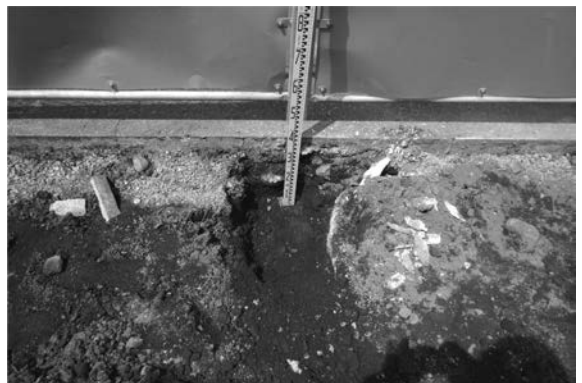
90図 北側囲障改修地点G区②掘削状況（西から）



91図 北側囲障改修地点G区掘削状況（北東から）



92図 北側囲障改修地点H区①掘削状況（南から）



93図 北側囲障改修地点H区②掘削状況（南から）



94図 北側囲障改修地点H区3掘削状況（南から）



95図 北側囲障改修地点H区東側掘削状況（南東から）



96図 北側囲障改修地点H区西側掘削状況（南東から）



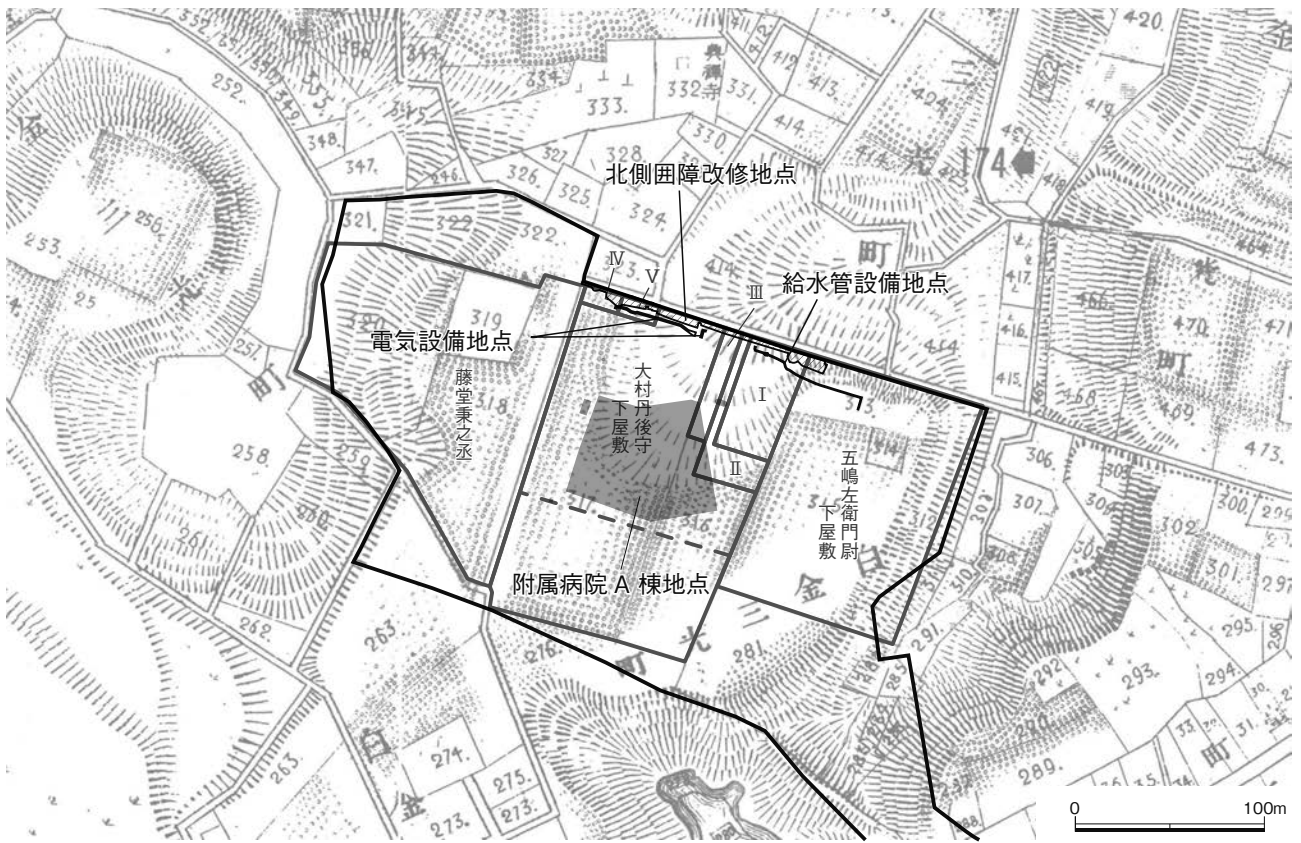
97図 北側囲障改修地点I区②掘削状況（南から）



98図 北側囲障改修地点I区北側掘削状況（西から）

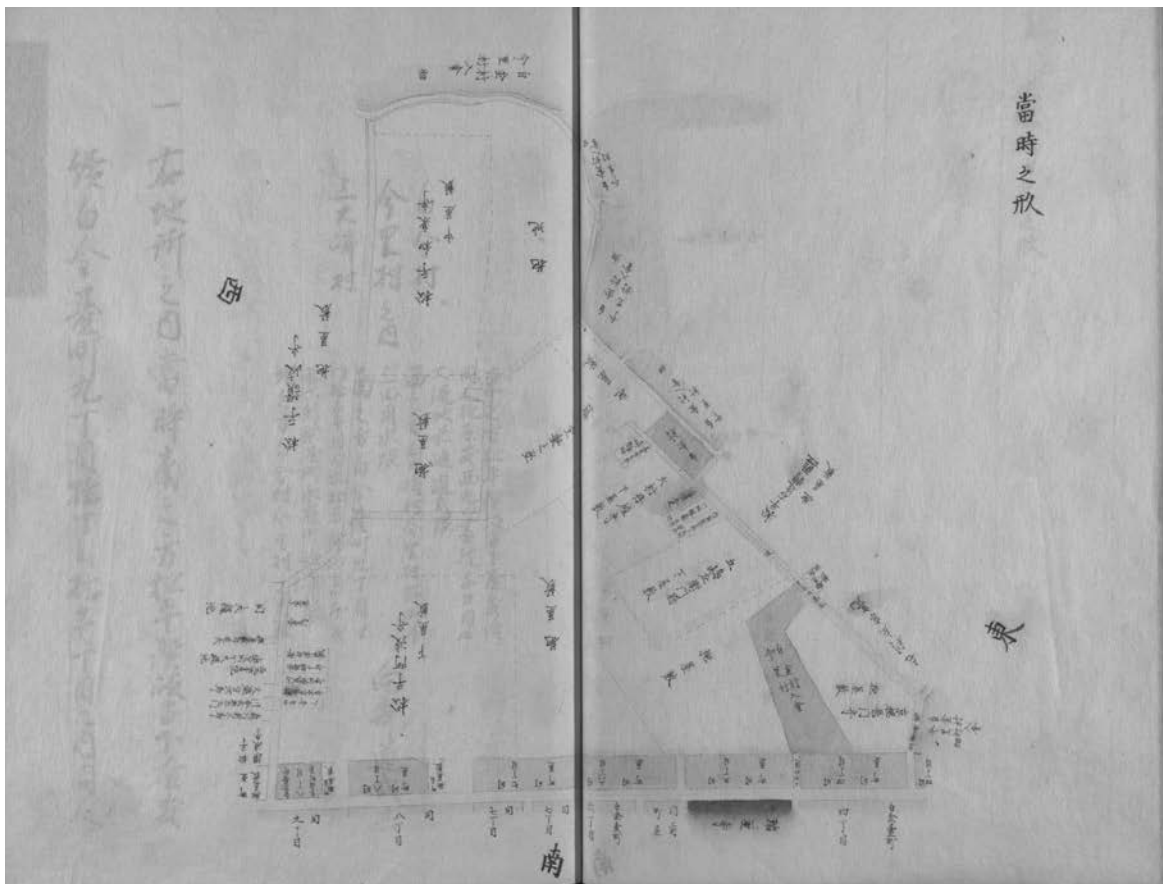


99図 北側囲障改修地点I区南側掘削状況（西から）

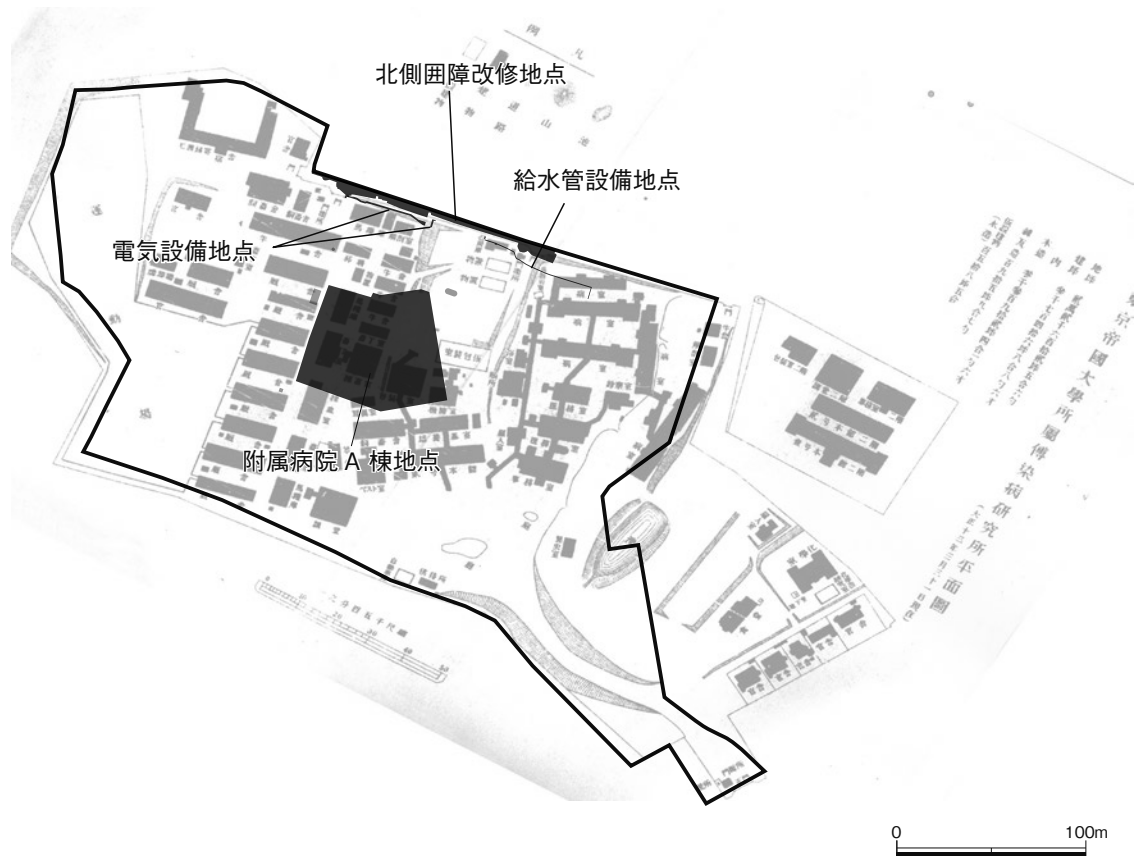


100 図 『東京実測全図』明治 28 (1895) 年と地割り復元図 (1/4000)

※渋谷 2004 を元に作成



101 図 『御府内場末往還其他沿革図書 (国会図書館蔵)』弘化 3 (1846) 年



102 図 医科研変遷図 大正 13 (1924) 年 (1/4000)

第Ⅱ章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理

1. 整理事業概要

本年度は、発掘調査報告書刊行へ向けて以下のような整理作業を行った。

- ・本郷 55 (HHC299) 医学部附属病院第2中央診療棟 遺構・遺物図版編集。
- ・本郷 60 (HWK6) 医学部附属病院基幹整備外構施設等 遺構図版編集。
- ・本郷 65 (LS03) 法学系総合研究棟 遺構図版編集。
- ・本郷 68 (INC) インキュベーション施設 遺物図版編集。
- ・本郷 75 (KOS05) 工学系総合研究棟立坑 遺物実測・デジタルトレース・写真合成。
- ・本郷 76 (HVP06) ベンチャープラザ 遺構断面図デジタルトレース。
- ・本郷 78 (HJF06) 情報学環・福武ホール 遺物写真撮影。
- ・本郷 81 (HEA07) 経済学研究科学術交流棟 遺物デジタルトレース・写真合成。
- ・本郷 87 (HTG08) 東京都下水道 遺物図版作成、報告書執筆・編集・刊行。
- ・本郷 93 (H7I09) 伊藤国際学術研究センター 遺物実測。
- ・本郷 94 (HNS09) 分生研・農学部総合研究棟 遺物接合・実測。
- ・本郷 97-1、97-2 (HKS09) 基幹整備(流域⑧排水) A区、B区 遺構図版編集、遺物実測・デジタルトレース・写真合成。
- ・本郷 101 (HMH10) ドナルド・マクドナルドハウス東大 遺物接合・実測。
- ・白山 9 (B-KSH-H28) 国指定名勝及び史跡小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡) 第1地点 報告書執筆・編集(文京区事業)。
- ・白金台 5 (SBS00) 医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟 報告書執筆・編集・刊行。

2. 外部委託

- ・本郷 101 (HMH10) ドナルド・マクドナルドハウス東大 石器実測。
- ・本郷 74 (HHN308) 医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期 石器実測。
- ・駒場 I 16 (KGK) 国際学術交流棟 石器実測。

第2節 調査・研究成果の公開・活用

1. 報告書・年報

- ・東京大学埋蔵文化財調査室 2022 『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 17 東京大学白金台構内の遺跡(港区 No.135 遺跡) 医科学研究所附属病院 A 棟地点報告編』
- ・東京大学埋蔵文化財調査室 2021 『東京大学構内遺跡調査研究年報 14 (2020 年度)』

2. 広報活動

ウェブサイトで活動内容を紹介するとともに、下記の3点の刊行物について PDF 版を公開した。

- ・東京大学埋蔵文化財調査室 2022 『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 17 東京大学白金台構内の遺跡(港区 No.135 遺跡) 医科学研究所附属病院 A 棟地点報告編』
- ・東京大学埋蔵文化財調査室 2021 『東京大学構内遺跡調査研究年報 14 (2020 年度)』
- ・「調査研究プロジェクト7 近代遺跡としての小石川植物園調査研究報告会」

3. 教育・普及

- ・「調査研究プロジェクト7 近代遺跡としての小石川植物園調査研究報告会」3月開催。文京区教育委員会共催。

4. 資料の提供・貸出

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料
東京国立博物館	展示	平成館考古展示室常設展	1.色絵大皿片（伊万里・古九谷様式）/HW 1点 2.色絵亀甲文皿片（伊万里・古九谷様式）/HW 2点 3.染付吹墨鷲図皿片（伊万里）/HHC 6点 4.色絵花卉文大皿片（伊万里・柿右衛門様式）/HGS 1点 5.染付八宝文大皿片（景德鎮窯）/HGS 7点 6.白釉鉄絵人物草花文壺片（磁州窯）/HGS、U 7点 7.色絵福字鉢片（呉須赤絵）/HGS 1点 8.織部脚付平向付片（美濃）/HGS 2点 9.織部筒向付片（美濃）/HGS 1点 10.染付脚付向付片（景德鎮窯）/HGS/包含層 1点 11.染付八角瓢形徳利片（景德鎮窯・祥瑞）/HGS 1点 12.染付水注蓋片（景德鎮窯）/HGS 1点 13.色絵皿片（景德鎮窯）/HGS 2点 14.黄地緑彩鉢片（大明嘉靖年製）/HW 10点 15.色絵壺片/HW/C2層、包含層 HGS 2点 16.色絵大皿片（呉須赤絵）/HGS 1点 17.黒釉兔毫斑碗片（建窯）/HN 1点 18.染付小杯（五良大甫呉祥瑞造）（景德鎮窯）/HGS 1点 19.魚屋茶碗片/HN 1点 20.青磁袴腰形香炉片（龍泉窯）/HN 2点 21.青磁獅子紐香炉蓋片（龍泉窯）/HN 1点 22.青磁算木文瓶片（龍泉窯）/HN 1点 23.イズニク陶器皿片/HW 14点 24.塩釉水注片（ドイツ）/HN 1点 25.デルフト陶器片/HGS、U 4点
国立 歴史民俗博物館	展示	総合展示「都市の時代」資料展示	1.灰和碗（呉器手）/HW 1点 2.灰釉鉄絵碗（京焼風）/HW 1点 3.青緑柏輪剥皿（内野山窯）/HW 1点 4.染付皿（草花文）/HW 1点 5.染付皿（菊文）/HW 1点 6.輪剥皿/HW 1点 7.三島手鉢/HW 1点 8.染付大皿（網干文）/HGS 1点 9.染付大皿（海浜文）/HGS 1点 10.染付瓶（草花文）/HGS 1点 11.染付組皿（草花文）/HGS 5点 12.かわらけ/HHC 2点 13.木製品（折敷）/HHC 7点 14.木製品（はし）/HHC 2点 15.金泥かわらけ/HIKN 2点
江戸東京博物館	借用/ 掲載	企画展「発掘された日本列島2021 地域展－江戸の金箔瓦－」 2021年6月5日～7月4日 展示、看板、ウェブサイト	東京大学構内遺跡出土 金箔瓦 11点
柊風舎	掲載	『大名の江戸暮らし事典』松尾美恵子 ・藤實久美子編 柊風舎 2021年3月31日発行予定	FE1地点出土徳利写真 1点

貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料
NHK静岡放送局	放映	サイエンスZERO 「富士山・噴火の歴史を読み解け」 静岡県内向け 静岡スペシャル 2021年8月29日 放映	宝永火山灰検出写真 1点 宝永火山灰堆積状況写真 1点
新宿区立新宿歴史博物館	掲載	特別展『四谷塩町からみる江戸のまち －近世考古学の世界－』 2021年9月25日～12月5日 パネル、図録、広報で使用	H7I09地点調査写真 1点 HEA07地点SU62写真 1点
城西大学 水田美術館	借用/ 掲載	企画展『江戸動物誌－生活のなかの動物 たち』 2021年10月25日～11月19日 展示、パネル・図録・ポスター掲載	東京大学構内遺跡出土動物遺体 61点 東京大学構内遺跡出土骨格製品 7点 HW地点出土土人形（猫） 1点
不白流白和会	掲載	下村菜穂子「備前焼の茶道具（四） －江戸時代の伊部手－」 『ゆきま』116号 不白流白和会 2021年12月発行	HHB地点出土 備前焼釣船花入写真 1点
高木 良子	調査/ 研究	遺人形に関する調査研究のため、墓遺構 出土土人形の見学および撮影	HWK6地点出土土人形
同成社	掲載	松浦里彩『肥前磁器の意匠研究－柿右 衛門様式の成立と展開－』同成社 2022年3月発行	東京大学構内遺跡出土 色絵磁器片 1点

*1 調査地点名 FE1：工学部1号館
HCRA12：クリニカルリサーチセンターA棟I期
HEA07：経済学研究科学術交流棟
HES99：総合研究棟（文・経・教・社研）
HG：医学部附属病院外来診療棟
HGS：御殿下記念館
HHB：法学部4号館（法）・文学部3号館（文）
HHC：医学部附属病院中央診療棟（病中）・設備管理棟（エネセン）・給水設備棟（給水）・共同溝（共同溝）
HHC299：医学部附属病院第2中央診療棟
H7I09：伊藤国際学術研究センター
HIKN：医学部教育研究棟
HJF06：情報学環・福武ホール
HN：医学部附属病院看護師宿舎
HW：医学部附属病院入院棟A
HS7：理学部7号館
K14：工学部14号館
OKS07：追分国際宿舎
SBS00：医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟
SK：教育学部総合研究棟
TS：工学部武田先端知ビル
U：山上会館

附 埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会は、全学委員会の見直しに伴い、以下の通り廃止され、埋蔵文化財調査室は、キャンパス計画室下部組織に改組された。

東京大学における全学委員会の見直しに伴う関係規則の整理等に関する規則（平成22年3月25日東大規則第133号）（抜粋）

（略）

（東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の廃止）

第17条 東京大学埋蔵文化財運営委員会規則（平成元年7月11日制定）

埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

（設置）

第1条 キャンパス計画室の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

（業務）

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- (1) 遺跡調査に対する総括的指導助言
- (2) 文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- (3) 遺物等の保管及び管理
- (4) 遺跡調査の方法に関する調査研究
- (5) 前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

（室長）

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

（室員）

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

（庶務）

第5条 調査室の庶務は、本部施設企画課において処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

附 則 この規則は、平成22年4月1日から施行する。

埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	佐藤 宏之	教務補佐員	小川 祐司
室員（キャンパス計画室准教授）	堀内 秀樹	教務補佐員	香取 祐一
室員（キャンパス計画室助教）	成瀬 晃司	事務補佐員	青山 正昭
室員（キャンパス計画室助教）	山下 優介	事務補佐員	今井 雅子
室員（キャンパス計画室助手）	大成 可乃	事務補佐員	大貫 浩子
室員（キャンパス計画室助手）	追川 吉生	事務補佐員	小林 照子
		事務補佐員	杉浦 あかね
		事務補佐員	渡邊 法彦

報告編

東京大学構内遺跡発掘調査報告

東京大学本郷構内の遺跡

基幹整備（流域⑧排水）地点
発掘調査報告

例 言

1. 本報告は、東京大学基幹整備（流域⑧排水）に伴う埋蔵文化財発掘報告である。
2. 本地点の略称は「HKS09」とする。但し出土遺物への注記は、調査区を反映してA区「HKS09-1」、B区「HKS09-2」と記載している。
3. 調査地点は東京都文京区本郷7丁目3番1号、東京大学本郷構内に所在している。
4. 調査面積は62.6㎡（A区29.7㎡、B区32.9㎡）であった。
5. 本地点は文京区No.47「本郷台遺跡群」内に位置している。
6. 本地点の試掘調査・事前調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、原 祐一（故人）が担当した。
7. 調査期間は、A1区が平成22（2010）年2月18日～3月3日、A2区が平成22（2010）年3月12日～18日、B1区が平成22（2010）年11月29日～12月4日、B2区が平成22（2010）年12月1日～4日である。
8. 本報告の編集は成瀬・山下が行った。
9. 執筆分担は以下の通りである。
第I章、第II章、第III章、第IV章 成瀬晃司
第I章第3節、第2章第2節、第III章第1節、第IV章 山下優介
10. 遺構写真は原が、遺物写真は青山正昭が撮影した。
11. 遺物の実測・採拓およびデジタルトレースは杉浦あかねが、遺構図のデジタルトレースは渡邊法彦が行った。
12. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）、同工学研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）内にて保管、運用している。
13. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して敬意を表する。（敬称略、五十音順）
加藤建設株式会社 東京大学施設部

発掘調査参加者

加藤建設株式会社

整理作業参加者

青山正昭 杉浦あかね 渡邊法彦（埋蔵文化財調査室） 笠見智慧 木之内忍（考古学研究室大学院生）

凡 例

1. 遺構番号は各区 1 から通し番号を付した。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。
SE：井戸 SK：土坑 SI：竪穴建物 SP：ピット SU 地下室
2. 遺構実測図の縮尺は、原則 1/50 である。
3. 遺物実測図は基本的に 1/3 であるが、それ以外は個別に示す。
4. 遺構断面図に記載された標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準とし、基標番号「郷(2)」本郷七丁目3 東大赤門前(T.P.: 23.4033 m) から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお「郷(2)」の値は、平成 21 年 7 月東京都土木技術センター（現：東京都土木技術支援・人材育成センター）刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。
5. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
 - ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
 - ・\—／は、口唇部の口鏽を表している。
 - ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
 - ・— —は、断面を表している。
7. 本文中に記載した陶磁器・土器類は、「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」（いわゆる東大分類）の最新バージョンである『医学部附属病院入院棟 A 地点』で示した分類（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）に準拠している。
8. 本地点の調査では、調査区の形状に適した任意点を設定して行ったが、その後に作成した東京大学本郷構内遺跡グリッド（東京大学埋蔵文化財調査室 2017）を用いて表記した。なお東京大学本郷構内遺跡グリッドの方眼北は、真北より 2 分 20 秒西偏している。

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

A1 景德鎮窯系
A2 漳州窯系
A3 德化窯系
A4 龍泉窯系
A5 宜興窯系
A6 朝鮮
A7 ベトナム
A8 ヨーロッパ
A9 福建・広東系
A10 西アジア

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

E - 備前系
F - 志戸呂系
G - 常滑系
H - 萩系
I - 万古系
J - 大堀・相馬系
K - 丹波系
L - 堺系
M - 益子・笠間系
N - 九谷系
O - 壺屋系
P - 淡路系
Q - 江戸在地区
R - 三田系
S - 飯能系
T - 薩摩系
Z - 不明

○器種

- | | | | | |
|-----------|----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 碗 | 2. 皿・平鉢 | 3. 大皿・大皿鉢 | 4. 爛徳利 | 5. 鉢 |
| 6. 坏 | 7. 猪口 | 8. 仏飯器 | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶 |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺 | 13. 蓋物 | 14. 筆立て | 15. 壺・甕 |
| 16. 急須 | 17. 爛鍋 | 18. 合子 | 19. 水滴 | 20. 蓮華 |
| 21. 植木鉢 | 22. 花生 | 23. 片口鉢 | 24. 灰落とし | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ | 27. 水注 | 28. 漚瓶 | 29. 搦鉢 | 30. 餌入れ |
| 31. 火鉢 | 32. 柄杓 | 33. 鍋 | 34. 土瓶 | 35. 戸車 |
| 36. ちろり | 37. 薬研 | 38. 手焙り | 39. おろし皿 | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利 | 42. 行平鍋 | 43. 十能 | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈 |
| 46. カンテラ | 47. ほうろく | 48. 七輪 | 49. 涼炉 | 50. 五徳 |
| 51. 塩壺 | 52. 燭台 | 53. 蒸し器 | 54. 懐炉 | |
| 63. あんか | 64. 煙硝搦鉢 | 65. 乳棒 | 66. 硯屏 | 67. 釜 |

東京大学本郷構内の遺跡
基幹整備（流域⑧排水）地点発掘調査報告

目 次

例 言
凡 例
目 次

第 I 章 調査の経緯と概要	
第 1 節 調査に至る経緯	64
第 2 節 調査の方法と経過	64
第 3 節 調査地点の地理・歴史的環境	64
第 II 章 A 区の調査	
第 1 節 A1 区	66
第 2 節 A2 区	66
第 III 章 B 区の調査	
第 1 節 B1 区	71
第 2 節 B2 区	72
第 IV 章 まとめ	78
参考文献	
報告書抄録	

第 I 章 調査の経緯と概要

第 1 節 調査に到る経緯

東京大学は、本郷キャンパス基幹整備の一環として、医学部附属病院地区内で地下推進工法による下水管工事を進めている。今回入院棟 A の南西角付近と看護職員等宿舍 1 号棟北西付近を結ぶラインの工事が計画された。下水本管工事は地下推進工法を取るが、本管挿入部及び管線屈曲部は開削工事になるため、立坑部の遺構・遺物遺存状況確認の必要が生じた。大学施設部と協議した結果、2010 年 2 月 4 日に A 区の立坑部を対象に立会調査を実施した。その結果、江戸時代と考えられる盛土層が確認され、該期の遺構・遺物が遺存している可能性があることから、立坑 4 箇所を対象に事前調査を行うことで合意した。

第 2 節 調査の方法と経過

下水本管は、低地部の池之端方面に接続するため、台地上に位置する大学構内では、ライナープレートによる山留めを行う深礎工法が取られた。事前調査は工事工程に合わせ、A1 区を平成 22 (2010) 年 2 月 18 日～3 月 3 日、A2 区を平成 22 (2010) 年 3 月 12 日～18 日、B1 区を平成 22 (2010) 年 11 月 29 日～12 月 4 日、B2 区を平成 22 (2010) 年 12 月 1 日～4 日に実施した。

第 3 節 調査地点の地理・歴史的環境

調査地点は、文京区 No.47「本郷台遺跡群」内に位置し、A1 区では近代盛土と遺物、江戸時代の遺構、A2 区では江戸時代の遺構と古墳時代前期の竪穴住居址・遺物、B1 区では江戸時代の遺構・遺物と古墳時代前期と中期の竪穴建物・遺物、B2 区では江戸時代の遺構・遺物が確認された (1 図)。

本地点を含む医学部附属病院地区北東部の地理・歴史的環境は、既刊報告書等に詳細を記しているのをそれを参照されたい (東京大学埋蔵文化財調査室：以下、調査室 2021)。本節では本地点に関連する要素を以下に列記する。

江戸時代の土地利用状況に比定させるために、調査室ではこれまでの報告書、展示会図録などで、江戸時代屋敷割図を参謀本部陸軍部測量局が作成した「五千分一東京図測量原図」(明治 16 年) を介して現況図との対比を行ってきた (東京大学総合研究博物館 2011 など)。その成果に基づくと本地点は富山藩邸内に比定される。

富山藩邸全体を描いた絵図は、現状で 19 世紀代の資料しか確認されていない。それに対比させると A1 区は表門脇の低地部詰人空間、A2 区・B2 区は御殿空間のうち表御殿殿舎の奥寄り、B1 区は長局建物周辺に該当する。A1 区の調査では約 350cm の近代盛土の堆積が確認され、江戸時代の遺構確認面標高は 9.7m だった。本地点東側の看護職員等宿舍 3 号棟地点では調査区南側で段切り遺構が確認され、段切り下段では概ね 10.5m で遺構が確認された。また西側の入院棟Ⅱ期地点 3 次調査南東角でも石積で擁護された段切りが確認され、両者との位置関係から本地点は段切り下段に位置することが確認された。

本地点周辺では、既往の発掘調査によって複数の地点で古墳時代の遺物や遺構が豊富に確認されており、古墳時代の集落が、本地点を含めた一帯に展開していたことがわかる (1 図)。

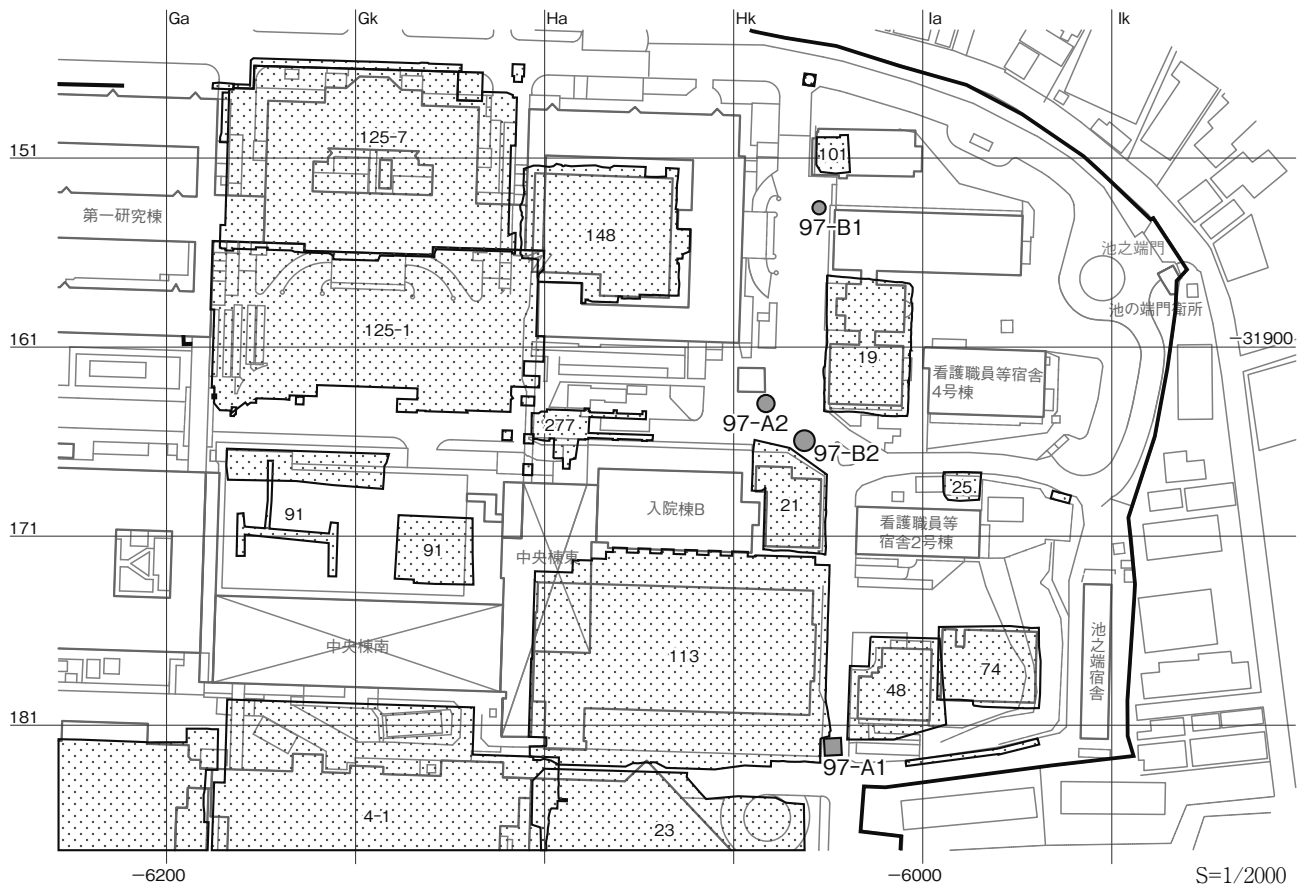
本地点 97-A2 や 97-B1 に隣接する 19 看護職員等宿舍 1 号棟地点と 21 臨床試験棟地点では、古墳時代前期の竪穴住居址が計 10 軒以上報告されており (調査室 2021)、当該期における居住域の中心と評価できる。

また、23 入院棟 A 地点 (同 2016) や 25 看護師宿舍ゴミ置き場地点 (同 1997) においても、複数軒の古墳時代の竪穴住居址が確認されている。加えて、48 看護職員等宿舍 3 号棟地点および、隣接する 74 看護師宿舍Ⅲ期では、古墳時代前期から中期にかけての竪穴住居址が 15 軒以上検出されている (同 1999、2012b)。

以上の地点以外にも、113 入院棟Ⅱ期 (同 2015、2017a) において古墳時代前期から後期の竪穴住居址が 15 軒程度確認されている。古墳時代後期の竪穴住居址は、41 医学部附属病院中央診療棟地点などでも数軒が認められるが (東京大学遺跡調査室 1990)、同一地点に複数軒が集中する古墳時代前期や中期の竪穴住居址に対して、やや散在的な分布を示す。

本地点周辺では、古墳時代の居住域のみならず墓域が確認されている。125-1 クリニカルリサーチセンター A 棟Ⅰ期や隣接する 148 国際科学イノベーション総括棟では、古墳時代前期から中期にかけての竪穴住居址に加えて、古墳の周溝と考えられる複数基の方形の溝跡が検出されている (調査室 2017b、2017c)。

本地点を含む医学部附属病院地区一帯は、本郷台地の南東側縁辺部にあたるが、東方の谷へと注ぐ小支谷に南北を挟まれた舌状台地上の限られた範囲に、古墳時代の



1 図 調査地点の位置と周辺調査地点

97 本地点 (A1 : A1 区、A2 : A2 区、B1 : B1 区、B2 : B2 区)

4-1 中央診療棟、19 看護職員等宿舎 1 号棟、21 臨床試験棟、23 入院棟 A、25 看護師宿舎ゴミ置き場、48 看護職員等宿舎 3 号棟、74 看護師宿舎Ⅲ期、91 立体駐車場、101 ドナルド・マクドナルド・ハウス東大、113 入院棟Ⅱ期、125 クリニカルリサーチセンター、148 国際科学イノベーション統括棟

居住域と墓域からなる集落が形成されていた。とくに、本地点およびその周辺は、古墳時代前期集落の中心的な地点と推定される。

第Ⅱ章 A 区の調査

第1節 A1区

(1) 概要

本調査区は入院棟Ⅱ期地点（本郷 113）3次調査南東角に隣接する位置にあり、約4m四方を測る深礎工法方形立坑部を対象とした（1図）。重機によって表土及び近現代と推定される盛土層を掘削したところ、現表下約1.4m（標高約12.7m）で調査区南西部から既存管理設時のライナープレートが確認された。さらに掘削を進めたところ標高約10.3mで既存管上端が確認され、さらに標高約9.7mで既存管理設坑東側に東西幅約30cmの範囲でローム層が確認された。その東には上部の盛土層が続いていたため、その部分を掘削したところ上位のローム層が陥没した巨大なロームブロックが検出され、地下室の天井崩落土であることが確認された（10図）。この間の約3.5mに及ぶ盛土層から1850～80年代の陶磁器類が出土したことより、大学創設期の開発による盛土造成と推定される（3図）。

(2) 江戸時代の遺構

SU1（2、4図）

本遺構は調査区北東角より検出された。約3.5mに及ぶ近代盛土層を除去したところ巨大ロームブロックの周囲から本遺構プランが確認された。北東側が調査区外へ伸びるため、詳細な平面形態は不詳であるが、調査区内では、南東角に入隅を有する方形を呈している。調査区内での規模は東西235cm以上、南北170cm以上を測る。床面西側はほぼ平坦であるが、東側は緩やかに傾斜している。確認面からの最大深度は160cmを測る。覆土は床面上に数～10cm暗褐色土が堆積しているが、その直上に天井陥没土と考えられる厚さ約60cmのロームブロックがあり、ブロック上は近代盛土層が続くことから、盛土造成による荷重を受けて陥没した可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

(3) 近代盛土層出土遺物（5図）

1、2は瀬戸・美濃産の染付端反碗である。1の口唇部には口錆が施され、外面、見込みにコバルトによる染付が施されている。2はJC-1-dで口唇部には口錆が施され、外面、見込みに地呉須による染付が施されている。3は瀬戸・美濃産の染付丸碗である。外面、見込みにコバルトによる染付が施されている。4は瀬戸・美濃産の寿文皿でJC-2-dである。見込みに木型打ち込みによる「壽」字が陰刻されている。5は瀬戸・美濃産の寿文坏でJC-6-eである。見込みに木型打ち込みによる「壽」字が陰刻されている。また高台内に長方形枠の刻印が認められるが詳細は不明。6は瀬戸・美濃産の染付小坏で、コバルトによって外面に花文、高台に櫛歯状文様、底部に銘が施されている。7は瀬戸・美濃産染付急須の蓋である。表面にコバルトによる染付が施されている。8はインク瓶である。胎土は淡灰黄褐色を呈し硬質である。

出土磁器類に印判技法の製品が伴わないことから、医学部附属病院給水設備棟地点（本郷 43）AL37-1と同段階、即ち1860～80年代前半の資料と位置づけられる。

第2節 A2区

(1) 概要

本調査区は、臨床試験棟地点（本郷 21）北側道路上に位置し、直径450cmを測る円形ライナープレートを用いた深礎工法立坑部を対象とした（1図）。調査は重機掘削によってライナープレート3枚分（約150cm）を掘り下げ平面確認をする工程で進められた。1回目の平面確認では全面が近代以降の盛土で覆われていたため、2回目の掘削を進めたところ、現表下約250cm（標高12.8m）、調査区東側でローム層及び硬化面が検出されたため、重機掘削を中断し手作業による調査に切り替えた。既設ライナープレート下の壁面を精査したところ、標高約13.6mで江戸時代の生活面（硬化面）が僅かに遺存していることが確認された。硬化面下約90cmには竪穴住居址（SI7）の貼床面と推定される硬化面及び炉跡と推定される焼土集中範囲が確認された。壁面の観察から貼床面上の埋積土（厚さ20～25cm）が竪穴住居址に伴う覆土と考えられる。狭小範囲での土留め並行掘削の制限から、江戸期の整地面も含め面的に押さえられなかったことは残念だった（6図）。

(2) 江戸時代の遺構（7、11図）

ローム及び竪穴住居址貼床検出面から7基のピットが検出された。SP2は北側にテラスを有す不整形を呈し、深さ40cmを測る。覆土はローム粗粒を含む黒褐色土の単層である。SP3は不整楕円形を呈し、深さ23cmを測る。覆土はローム粗粒を含む暗褐色土の単層である。SP4は8の字形を呈しているが、覆土の観察から2基の重複が

認められ、東側が新しい。東側は深さ 28cm を測り、ローム粒を少量含む黒色土を覆土に持つ。西側は深さ 20cm を測り、ローム粒を極多量に含む暗褐色土を覆土を持つ。SP5 は卵形を呈し、深さ 54cm を測る。覆土はローム粗粒を多量に含む暗褐色土の単層である。SP9 は円形を呈し、深さ 10cm を測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土の単層である。壁際で検出された SP1 は円形を呈すると推定され、確認面からの深さは 10cm を測る。覆土はローム粗粒を含む暗褐色土の単層である。本遺構は壁面観察より SI7 覆土上面より掘り込まれており、本来の深さは 50cm を測ることが確認できる（6 図）。よって本遺構同様確認面から 10～20cm 程度のピットは、堅穴住居址覆土上整地面から掘り込まれていた可能性が指摘できる。

(3) 古墳時代の遺構・遺物

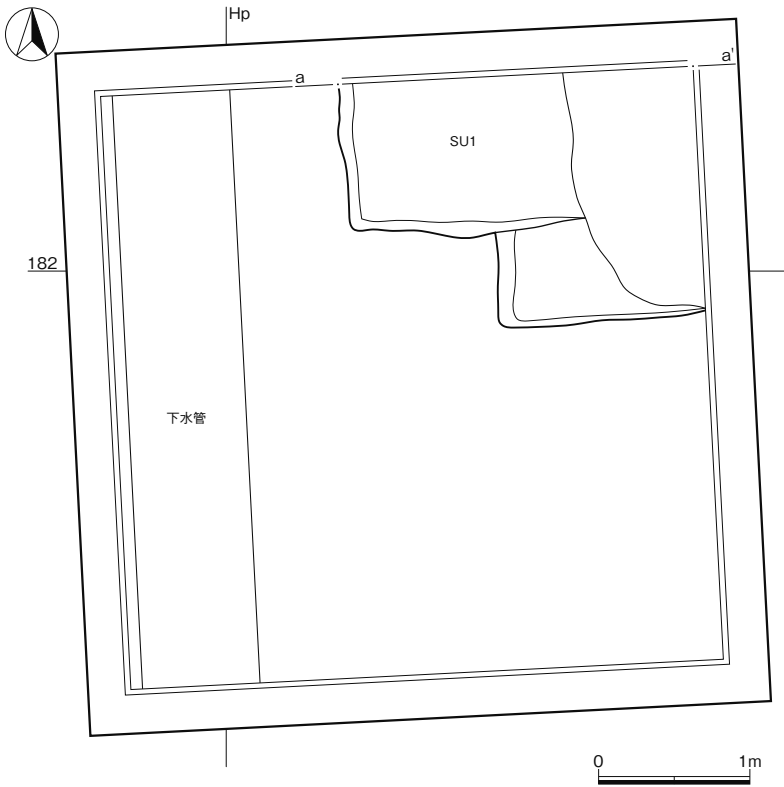
SI7（8、9、12、13 図）

調査範囲が狭小であったため、堅穴建物の壁が検出されず遺構の全形は明らかではないが、床面と考えられる硬化面と炉跡と推定される焼土集中範囲の存在から堅穴住居址と判断した。遺構の南北方向の軸線が焼土集中範囲の南北の軸線と平行すると仮定した場合、南北 3.8 m 以上、東西 4.3m 以上の堅穴住居址と考えられる。遺構の大部分は後世の攪乱によって失われていた。検出面から床面までの深さは、最も深いところで約 50cm である。

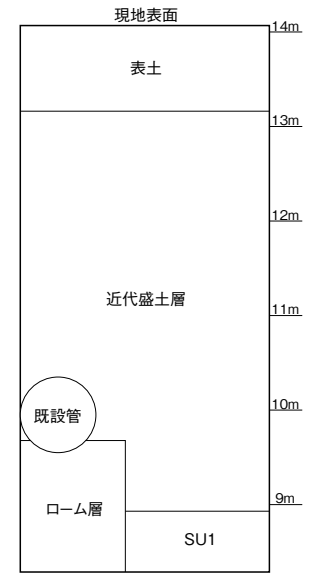
床面には最も厚い箇所約 20cm の貼床が存在し、調査区北東側の壁際では、長軸約 1.3m、短軸約 0.5m の全形が楕円形と推定される焼土集中範囲を検出した。焼土の堆積は全体的に 7cm 前後であり、強く熱を受けた痕跡が認められる。本住居址の炉跡と考えられる

SI7 からは 45 点の土器片が、おもに住居址の覆土から出土した。出土土器のうち、器形の全体を復元できる例はわずかであるが、それらの土器によれば、SI7 は古墳時代前期の遺構と考えられる。

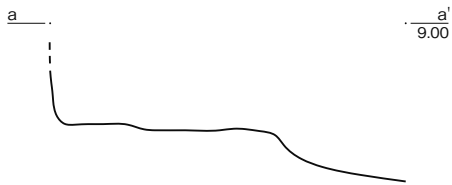
SI7 から出土した土器のうち、器種や器形のわかる破片 1 点を図示した。1 は、高坏もしくは小型器台の脚部である。復元した脚径は 12.6cm であり、外上方に大きく開く口縁部と径の小さな体部をもつ高坏と推定できる。あるいは碗形の口縁部をもつやや小形の高坏や、内湾気味の短い口縁部をもつ小型器台の可能性もある。



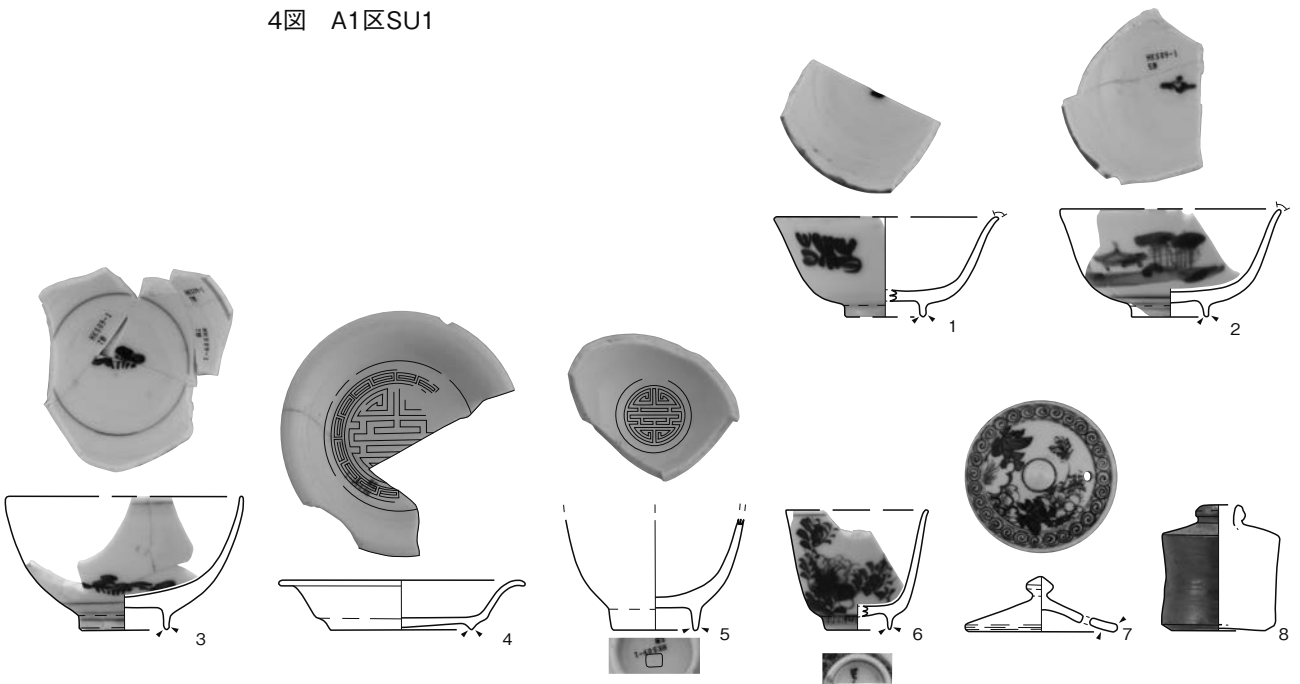
2図 A1区 全体図



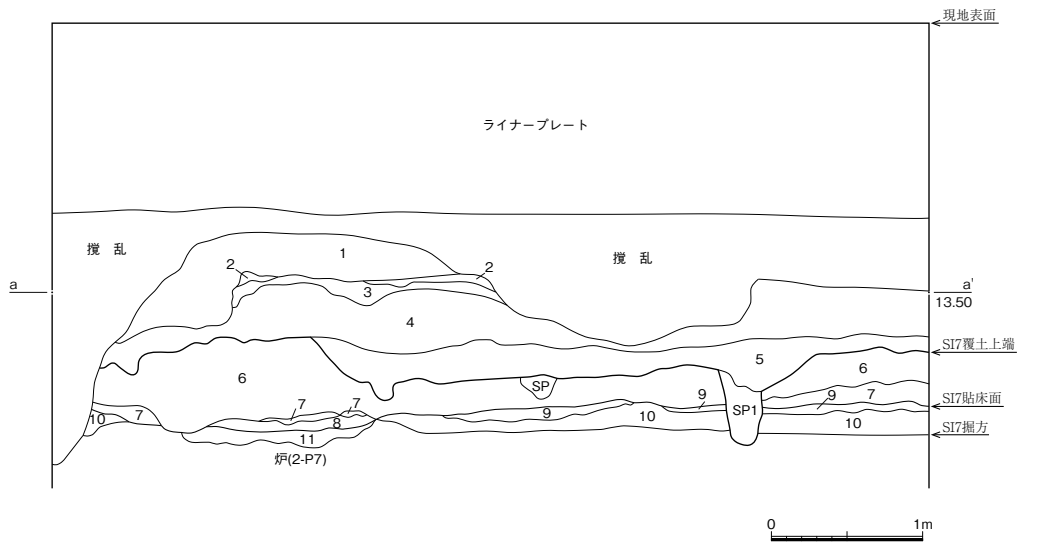
3図 A1区基本層序模式図



4図 A1区SU1

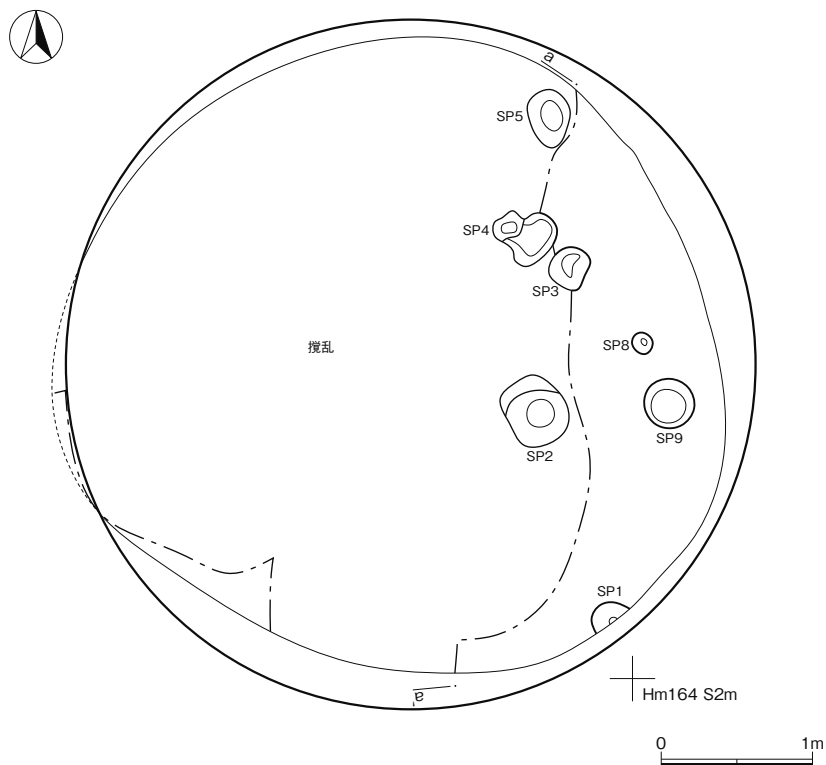


5図 A1区 遺構外出土遺物

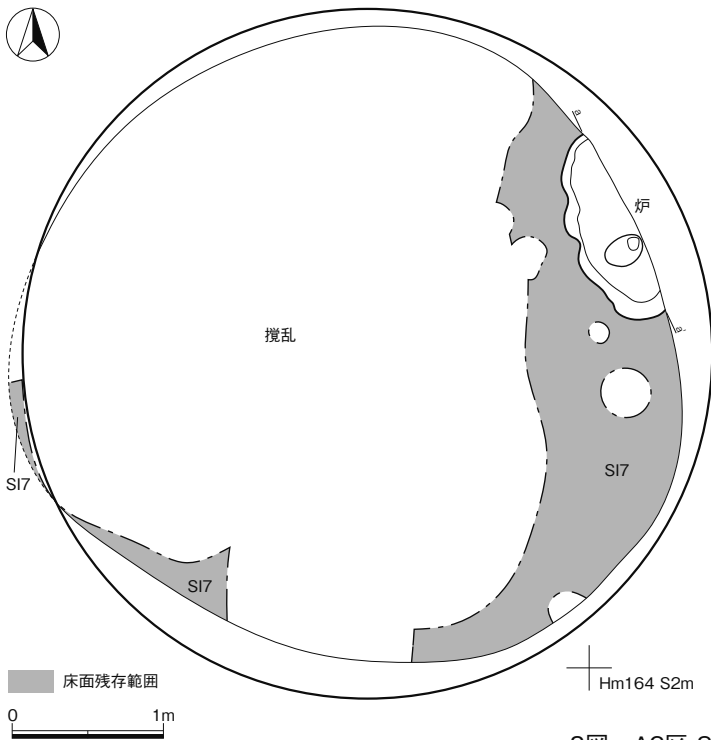


- | | | |
|----|-------|---------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | (ローム粒・ロームブロック少含) |
| 2 | 黒褐色土 | (ローム粒含、しまり強) |
| 3 | 褐色土 | (ロームブロック極多量含) |
| 4 | 黒褐色土 | (ローム粒・玉砂利少量含) |
| 5 | 暗褐色土 | (ローム粗粒少量、玉砂利微量含) |
| 6 | 茶褐色土 | (ローム粗粒少量、玉砂利微量含:SI7 覆土) |
| 7 | 黒褐色土 | (ローム粒・ロームブロック少含:SI7 覆土) |
| 8 | 暗赤褐色土 | (焼土粒極多量、ローム粒少量含、粘性なし:SI7 炉覆土) |
| 9 | 黒褐色土 | (ロームブロック含、しまり極強:SI7 貼床) |
| 10 | 黒褐色土 | (ロームブロック・ローム粗粒多量、しまりやや強:SI7 貼床) |
| 11 | 暗黄褐色土 | (しまりなし:SI7 炉下被熱土) |

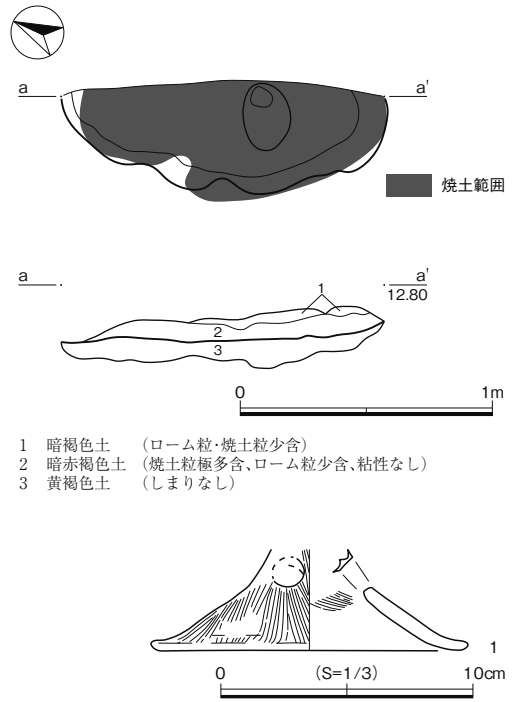
6図 A2区土層堆積状況概況図
(弧状セクション面展開図)



7図 A2区江戸時代遺構全体図



8図 A2区 SI7



- 1 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒少含)
- 2 暗赤褐色土 (焼土粒極多含、ローム粒少含、粘性なし)
- 3 黄褐色土 (しまりなし)

9図 A2区 SI7出土遺物

1表 古墳時代 A 区土器観察表

図版番号	器種	部位	法量(cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土遺構層位	備考・残存
9図 1	高坏形土器	脚部	(12.6) [4.0]	外面：約1~2mm幅の縦方向のハケメ 内面：透孔の周囲に斜方向のハケメ	直径1~2mm程度の礫を少量含む	良	外面：赤褐 内面：灰黄褐	A2区 SI7 8層	1/3程度



10図 A1区全景



11図 A2区近世全景



12図 A2区 SI7



13図 A2区 SI7 出土遺物

第Ⅲ章 B 区の調査

第 1 節 B1 区

(1) 概要

本調査区は看護職員等宿舎 1 号棟北西角付近道路上にあり、北側 10m にドナルド・マクドナルド・ハウス東大地点（本郷 101）、南側 15m に看護職員等宿舎 1 号棟地点（本郷 19）が位置する。調査範囲は直径 3.5m のライナープレートを用いた深礎工法立坑部を対象とした（1 図）。重機によって近現代盛土を掘削し、1m 強下がったところでライナープレートによる山留工程を繰り返し行ったところ、地表下約 2m より江戸以前と推定される暗褐色土が広範囲で確認された。そのため手作業に切り替えて調査を実施した。確認面を精査したところ、江戸時代の遺構 15 基（SD：1 基、SK：10 基、SP：2 基、SU：2 基）が検出された（14、29 図）。また江戸時代遺構壁面にて暗褐色土下部にしまりの強い層層が確認された。精査したところ古墳時代の堅穴建物 2 軒（SI4、19）が検出された（17、28 図）。

(2) 江戸時代の遺構・遺物

SU1（14、15 図）

本遺構は調査区南東壁際で検出された。調査区内では長軸 90cm、短軸 60cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さ 160cm を測る。ライナープレートを設置しながら重機で掘削したため土層堆積状況は観察できなかった。坑底は長軸 60cm、短軸 40cm を測り、その形状より隅丸長方形と推定される。

遺物はかわらけ片 1 点が出土した。

SU3（14、16 図）

本遺構は SU1 北側で検出された。東側は調査区外へ伸びるため詳細は不明であるが、調査区内で長軸 120cm、短軸 60cm を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。ライナープレートを設置しながら重機で掘削したため土層堆積状況は観察できなかった。確認面下 270cm まで掘り下げたが坑底は検出されなかった。

遺物は、18 世紀後葉から 19 世紀前葉に比定される陶磁器類、瓦片、貝類遺体などコンテナ 2 箱が出土した。

(3) 古墳時代の遺構・遺物

SI4（17～19、21、27、28 図）

狭い調査範囲であったため、堅穴建物の壁が検出され

ず遺構の全形は明らかではないが、床面とみられる硬化面の存在と遺構の規模に基づいて堅穴建物と判断した。遺構の中心が調査区の中心であったと仮定すると、一辺が 3.5 m 以上の堅穴建物と考えられる。遺構の中央部は近世の遺構によって、また南西部は SI19 によって失われていた。検出面から床面までの深さは、最も深い箇所約 30cm である。床面には最も厚い箇所約 18cm 程度の貼床が存在し、調査区中央部の南北約 0.6m、東西 2.0 m の範囲は、特に硬くしまっていた。

SI4 からは 139 点の土器片が堅穴建物の覆土や床面付近から出土した。器形の全体を復元できる例は多くないが、それらの土器によれば、SI4 は古墳時代前期前半の遺構と考えられる。

SI4 から出土した土器のうち、器種や器形のわかる破片 7 点を図示した。1 は、小形の二重口縁壺の口縁部である。器表面が全体的にやや摩滅しているが、頸部の内外面にはミガキが観察できる。口縁段部には整形時のものと考えられるハケメがわずかに残る。2 は平底の壺の底部である。外面には縦方向のミガキが施され、内面はナデによって仕上げられる。底面には木葉痕が認められる。

3 は口縁部が緩やかな「く」字状に屈曲する甕である。最大径が体部中央にあり、体部はやや球状気味になると推定される。器表面は全体的に摩滅が激しく、頸部内面の横方向のケズリや、体部内面の指頭圧痕が観察できる程度であった。4 は小破片であるが、甕の底部と考えられる。外面にはわずかに縦方向のハケメが認められる。5 は鉢または小形の甕の底部と推定される。6cm 弱に径を復元した底部には、直径約 3cm の穿孔が認められる。器壁内面には指頭圧痕のほか、穿孔部分に穿孔時の痕跡と考えられるケズリが残る。

6 と 7 は高坏の口縁部である。外上方へ直線的に開く 6 は、古墳時代初頭にみられるいわゆる元屋敷系高坏の口縁部である。内外面ともに縦方向のミガキによって仕上げられるが、外面はミガキの下に横や斜め方向のハケメが明瞭に観察できる。7 は、内湾する口縁部と平坦な底部をもつ、6 に比べやや小形の高坏である。器表面は摩滅しているため、特に内面の調整が不明瞭であるが、外面には縦方向のミガキが認められ、口縁部全体にミガキが施されていたと推測される。

SI19 (17、20、22、27、28 図)

本遺構は調査区南西壁際で検出された。長軸 1.1m 以上、短軸 0.8 m 以上の隅丸方形あるいは楕円形の遺構の一部であり、SI4 を掘り込んでいた。検出された範囲は限られるが、床面と考えられる硬化面と、硬化面の北側では周溝状の溝を確認した。硬化面は貼床状であり、約 5cm 程度の厚さであった。以上の構造に基づいて堅穴建物の一部である可能性が高いと判断した。検出面から硬化面までの深さは、最も深い箇所で約 50cm である。

SI19 からは、22 点の土器片が覆土から出土した。図示した高坏脚部のほかに器形の全体を復元できる例はないが、この土器によれば、SI9 は古墳時代中期後半の遺構と考えられる。

1 は、高坏の脚柱部から裾部へかけての屈曲部の破片である。この高坏の脚部は、中央部がやや膨らむ円錐形であり、裾部は水平気味にのびると考えられる。器表面が摩滅しているため、調整等は観察できなかった。

第 2 節 B2 区

(1) 概要

本調査区は A2 区南東 15m にあり、南側には臨床試験棟地点（本郷 21）が位置する。調査範囲は直径 5.5m のライナープレートによる深礎工法立坑部を対象とした（1 図）。調査区西側 1/2 弱は既設下水管開削部によって攪乱されていた。重機掘削で近現代盛土層を掘削したところ現地表面下約 3m でローム層を確認した。精査した結果、江戸時代の井戸 1 基（SE1）、地下室 1 基（SU3）が検出された（23 図）。SU3 は SE1 と下水管に挟まれ幅 10～50cm 程度の遺存度であった。下水管攪乱部分を掘り下げ、SE1 の調査を先行して進めた。SE1 の測量を終えて SU3 覆土部分を掘り下げた所、ロームを掘り込んで南側へ降りる階段状施設が確認された。階段部の平面記録を行った後、立坑内へミニバックホーを降ろし、さらに掘削を進めた。その結果、SE1 南側調査区壁面に幅 190cm を測る SU3 室部と考えられる拡がり確認された。またそのレベルまで下げたことによって、SE1 内の井戸側痕も明瞭に確認することができ、両者の記録を取り、調査を終了した。

(2) 江戸時代の遺構

SE1 (23～25、30 図)

調査区南端で検出された井戸で、掘方直径約 160cm を測る。確認面約 2m 下で直径約 1m を測る井戸側痕が確認された。

遺物は、陶磁器類小片、平瓦片など 17 世紀後葉～18

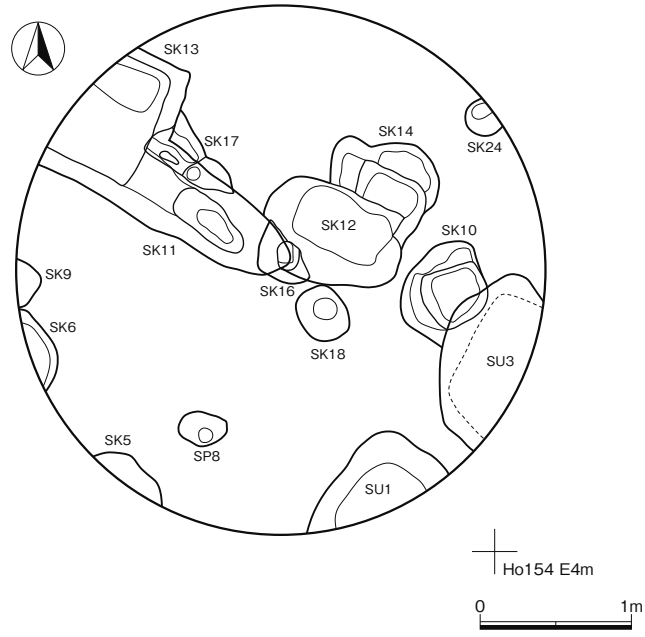
世紀前葉に比定される 10 数点が出土した。

1 は肥前産呉器手碗（TB-1-a）で、畳付は平坦に削り取られている特徴を有す。

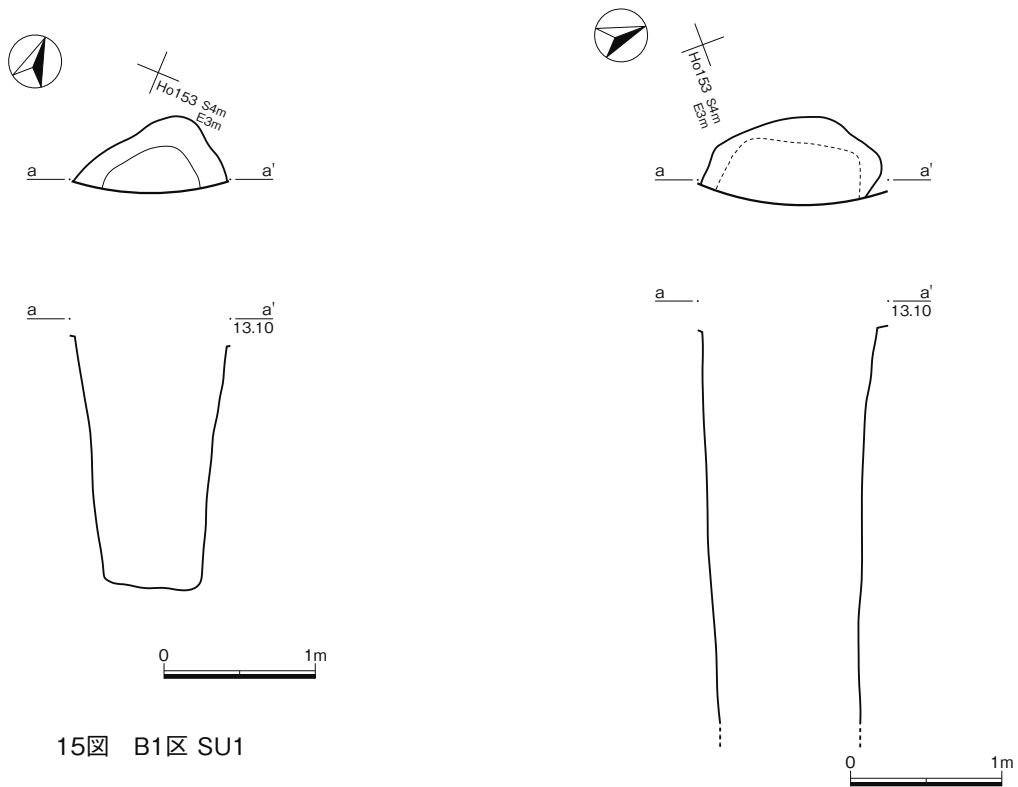
SU3 (23、26、31 図)

階段部と室部入口を確認したが、SE1 と下水管開削溝による攪乱を受け、遺存状況は非常に悪い。階段部はステップ 3 段が確認された。各ステップは奥行約 40cm、比高差 25～30cm を測る。室部は調査区壁面精査で確認された。確認範囲で幅 190cm、床面標高は 10.65m を測る。

遺物は出土していないが、SE1 より古いことから、廃絶年代は 17 世紀後葉と推定される。

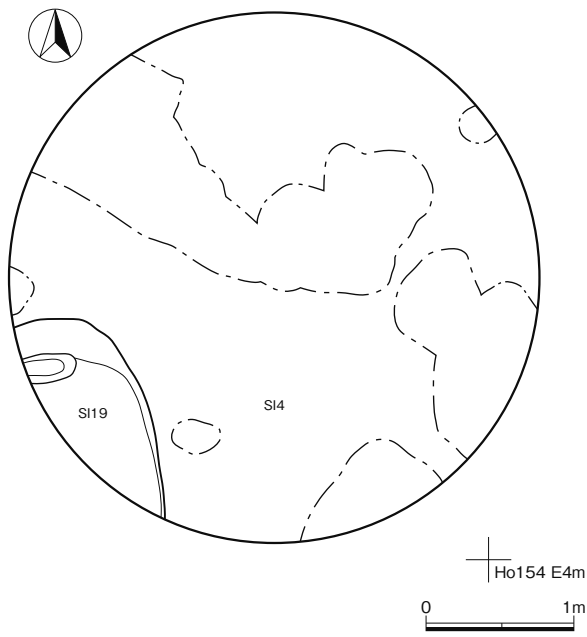


14図 B1区江戸時代遺構全体図

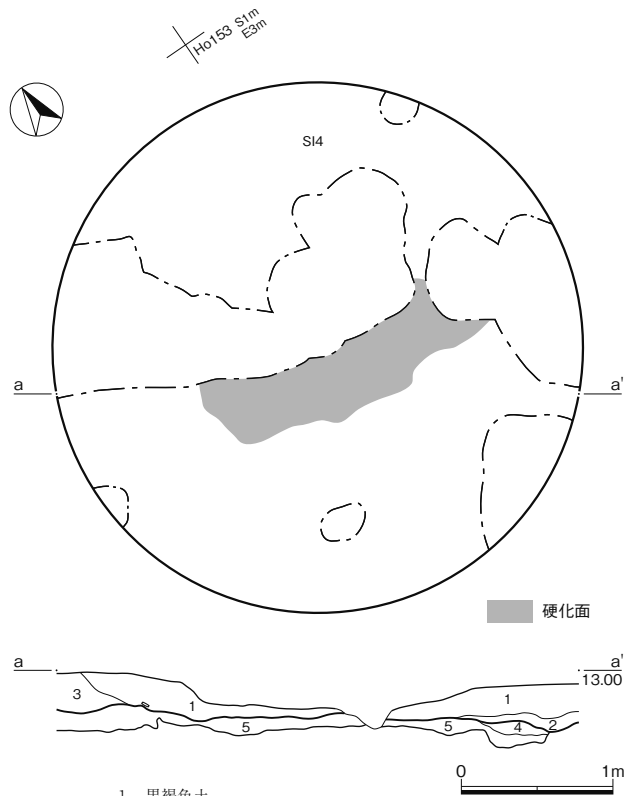


15図 B1区 SU1

16図 B1区 SU3

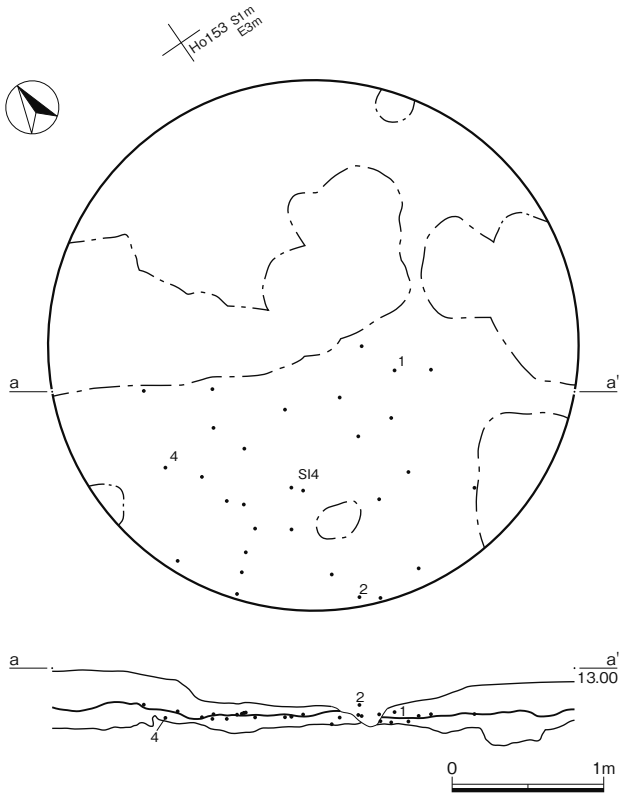


17図 B1区 古墳時代遺構全体図

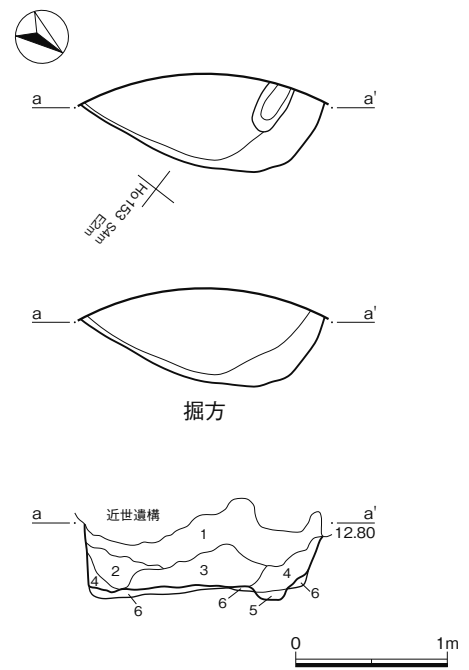


- 1 黒褐色土 (ローム粒含)
- 2 暗褐色土 (ローム粒含)
- 3 褐色土 (ローム粒・黒色土粒多含)
- 4 黒色土 (焼土含、ローム粒極少含)
- 5 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒含、しまりやや強)

18図 B1区 SI4

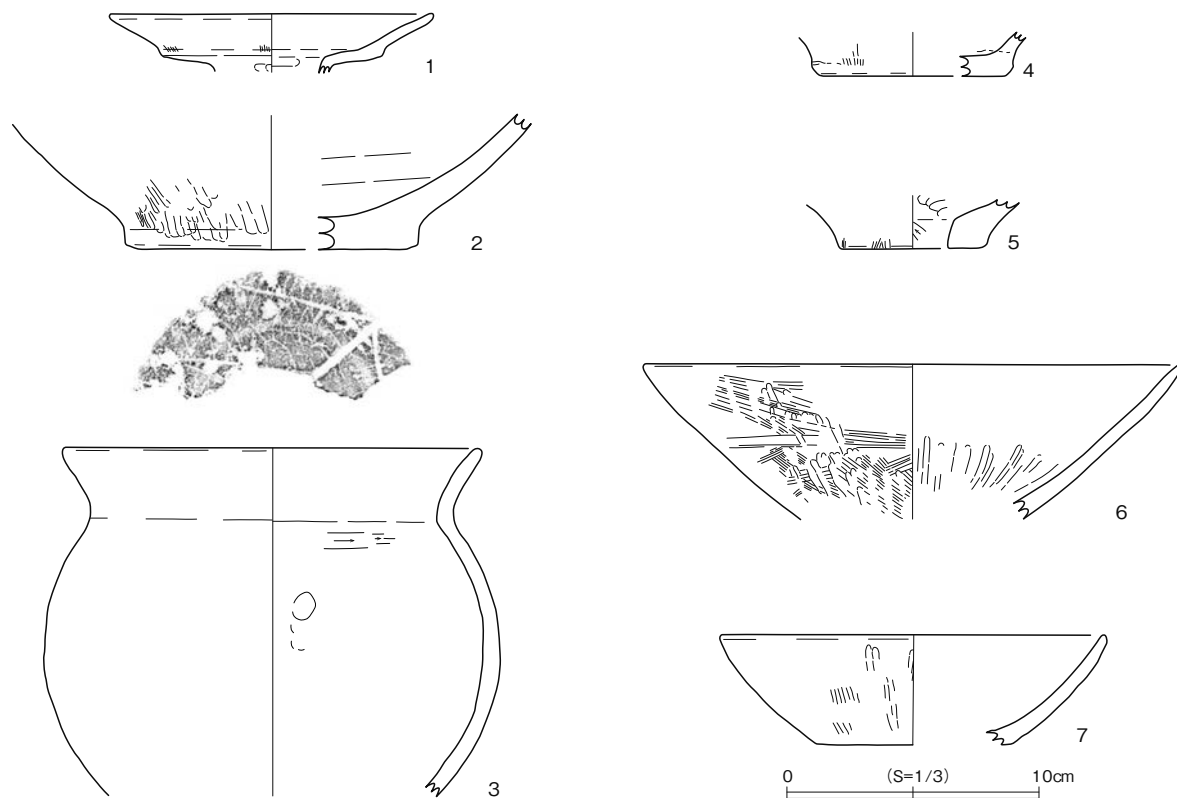


19図 B1区 SI4遺物分布図

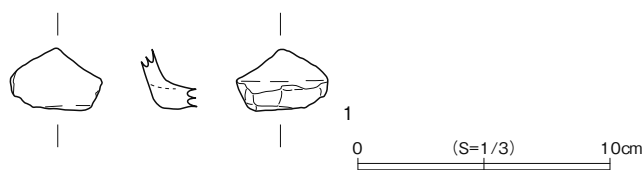


- 1 黒褐色土 (ロームブロック含、焼土粒極少含)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック含、焼土粒極少含)
- 3 黒褐色土 (ロームブロック含、ローム粒・焼土ブロック多含)
- 4 暗褐色土 (ロームブロック・ローム粒少含)
- 5 褐色土 (ロームブロック極多含)
- 6 褐色土 (ローム粒極多含、しまり強)

20図 B1区 SI19



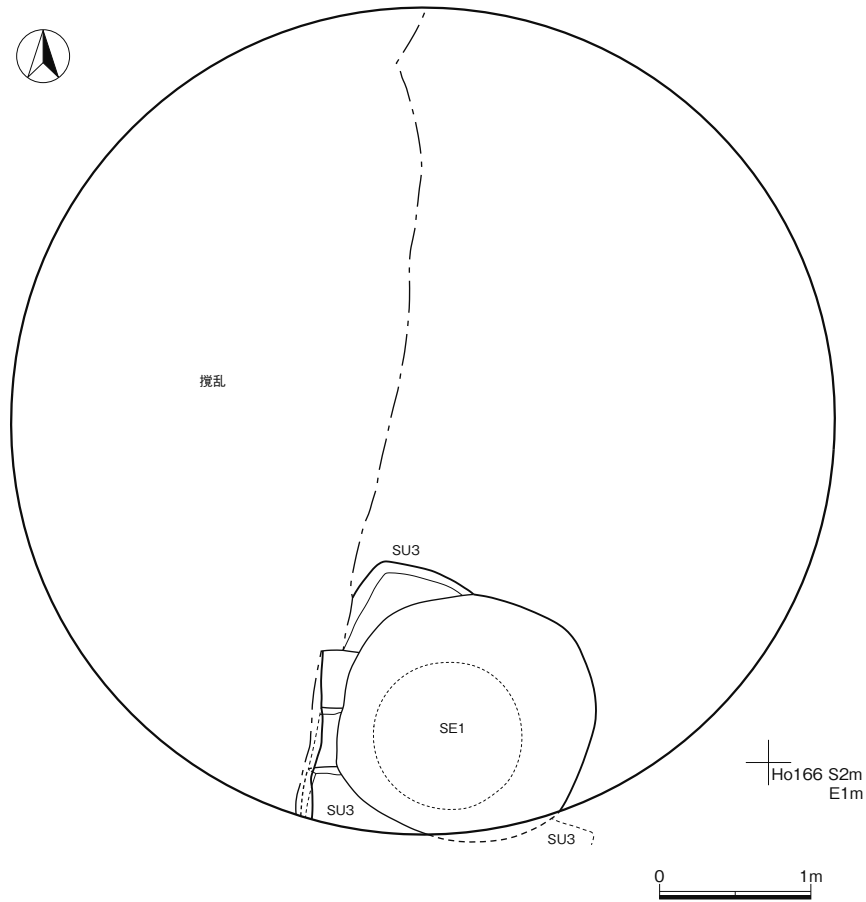
21図 SI4出土土器



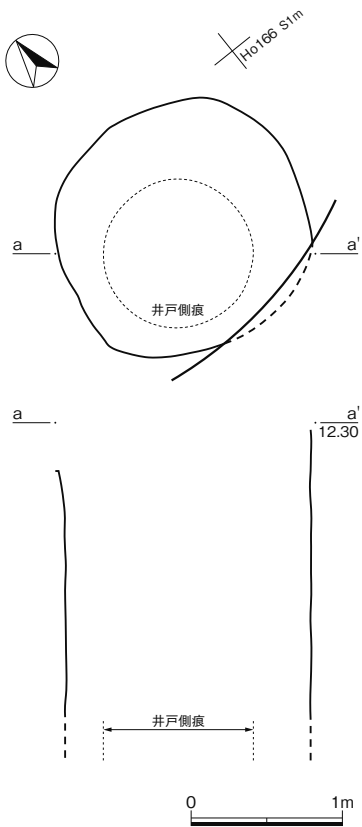
22図 SI19出土土器

2表 古墳時代土器観察表

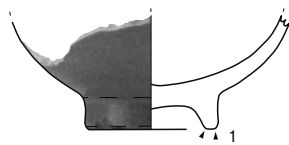
図版番号	器種	部位	法量(cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土遺構層位	備考・残存
17図1	壺形土器	口縁部	(12.9) — (2.3)	外面：段状をなす屈曲部に縦方向のハケメがわずかに認められ、頸部には幅2mm程度の横方向のミガキ 内面：頸部に横方向のミガキがわずかに認められる	直径約0.5mm以下の雲母片や直径約1mm以下のシャモットを少量含む	良	外面：にぶい黄橙 内面：橙	B1区 S4 P11	1/6程度
17図2	壺形土器	底部	(11.6) (5.0)	外面：下に縦方向の幅3mm程度のミガキ 内面：横方向のナデ	直径約2mm以下の礫や直径約3mm以下のシャモットを含む	やや悪	外面：にぶい赤褐 内面：明赤褐	B1区 S4 P1	1/3程度 底面に木葉痕
17図3	甕形土器	口縁部～胴部上半	(16.4) — (13.8)	外面：磨減や剥離によって不明瞭 内面：頸部に幅7mm程度の横方向のケズリが、体部最大径付近には指頭圧痕が認められる	直径約1～4mmの礫やシャモットを少量含む	やや悪	外面：暗褐 内面：褐	B1区 S4	1/5程度
17図4	甕形土器	底部	(8.0) (1.7)	外面：下に縦方向のハケメがわずかに認められる 内面：ナデ	直径約1mm以下の砂粒を含む	良	外面：にぶい褐～褐 内面：黒褐	B1区 S4 P18	1/8程度
17図5	鉢形土器	底部	(5.7) (2.5)	外面：下に縦方向のハケメがわずかに認められる 内面：指頭圧痕が連続的に認められ、穿孔部分にはケズリ	直径約1～2mmの礫やシャモットを含む	良好	外面：橙 内面：明赤褐	B1区 S4	1/3程度
17図6	高坏形土器	口縁部	(21.4) — (6.1)	外面：幅2mm程度の縦方向のミガキで仕上げられるが、ミガキの下にハケメが全体にわたって認められる 内面：幅2mm程度の縦方向のミガキ	直径約1mm以下の砂粒と直径約1～2mmのシャモットを含む	良	橙	B1区 S4	1/6程度
17図7	高坏形土器	口縁部	(15.2) — (4.3)	外面：幅2mm程度の縦方向もしくは斜方向のミガキ 内面：磨減によって不明瞭	直径約1mm以下の砂粒と直径約1～2mmのシャモットを含む	良	外面：橙 内面：明赤褐	B1区 S4	1/3程度
18図1	高坏形土器	脚部	— — (2.4)	外面：磨減によって不明瞭 内面：磨減によって不明瞭	直径2mm以下のシャモットや直径0.5mm以下の砂粒を含む	やや悪	にぶい橙	B1区 SI19	1/10未満



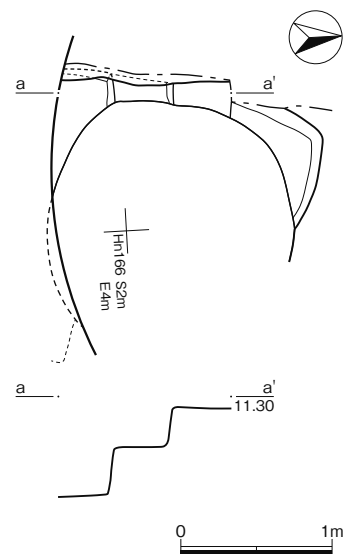
23図 B2区 全体図



24図 B2区 SE1



25図 B2区 SE1出土遺物



26図 B2区 SU3



B1区SI4_1



B1区SI4_2



B1区SI4_3



B1区SI4_4



B1区SI4_5



B1区SI4_6



B1区SI4_7



B1区SI19_1

27 図 B1区出土土器



28 図 B1区古墳時代全景



29 図 B1区近世全景



30 図 B2区SE1



31 図 B2区SU3

第IV章 まとめ

本地点4調査区はいずれも深礎工法に伴う立坑部という狭小な調査面積に加え、重機掘削併用、ライナープレート設置など工事上の制約から、近世盛土遺構面などの面的調査が困難を極めた結果、ほぼローム層上での調査となった。このような過酷な状況下でもA2区、B1区で古墳時代堅穴建物が確認されるなど一定の成果があった。以下に検出された遺構に従って、江戸時代及び古墳時代の調査成果を記す。

江戸時代

本地点4調査区はこれまでの絵図面研究等から富山藩邸内に位置することが確認できる。富山藩邸絵図は19世紀段階の資料しか現存していないが、江戸図などの情報から表門は大聖寺藩邸東側の道路に続く藩邸南東部に存在したことが確認できる。従って大枠では江戸時代を通し表門に近い藩邸南側に表御殿が位置し、それに伴う庭園はこれまでの調査成果と文献から御殿東側の高台に造園されていたと考えられる(成瀬 2021)。それを取り

巻くように御殿奥向、諸役所、詰人長屋などの諸施設が配置していたと推定される(小松 2015)。

32図は安政5年作成とされる「江戸御上屋敷図」(富山県立図書館所蔵)に調査地点を対比させた図である。既述したように藩邸北端に近いB1区は長局、中央のA2区、B2区は御殿殿舎奥寄り、藩邸南端のA1区は表門東脇石垣東側に位置している。この位置関係と周辺調査地点遺構検出状況から、本調査区の様相を列記する。

藩邸中央に位置するA2区は攪乱の影響が大きいものの壁面に残された断片的近世盛土状況から、硬質で水平堆積を呈す2層がある段階の生活面と判断される(6図)。2層上面レベルは標高約13.6mを測り、近接する看護職員等宿舍1号棟地点(以下HN1)、臨床試験棟地点(以下MRI)C面とほぼ同一レベルであることから、元禄16年火災下限の生活面に比定される。SI7覆土上面に相当する近世最下面標高も13m前後と同様の値を示し、両隣接地点D面に比定される。また第II章第2節で触れたように検出されたピットは近世最下面に帰属するこ



32図 別課医科教場を基準にした病院地区調査区と「江戸御上屋敷図」(安政5年)との対比
(成瀬 2021 より作成)

とが予想され、HN1 地点 D 面南部で検出されたピット・植栽痕集中区が本地区を含むエリアまで広がっていることが想定される。

藩邸南端部に位置する A1 区は、現表下約 4.4m でローム層が確認され、その直上には厚さ約 3.5m の近代盛土層が埋積していた。こうした近代盛土層の堆積は隣接する看護職員等宿舎 3 号棟地点（以下 HN2）、入院棟Ⅱ期地点（以下 HWB2）でも確認されている。HN2 では東西方向の段切りが確認され、段切り下面標高は 10.5m 前後を測る。HWB2 では南北方向へ伸びる段切りと法面に残された裏込め石が検出された。段切り下面標高は 10m 前後を測り、一連の段切り下段面であることが確認できる。またこの裏込め石は先述した絵図面との対比から表門東側に鉤形に築かれた石垣に対比することができ、HN2 の段切りが素掘りだったこともこの絵図情報を裏付けている。段切り下のエリアは「下長屋」と呼ばれていたことが小松によって指摘されているように、詰人空間として利用されていたことが判る（小松 2015）。この段差は盛土中の陶磁器年代観より、明治 9 年東京医学校移転に関連して埋め立てられたと推定される（東京大学キャンパス計画室 2018）。

古墳時代

古墳時代の遺構は、本地点の調査区のうち A2 区と B1 区で検出された。A2 区では前期の竪穴住居址が、B1 区では前期前半の竪穴建物と中期後半の竪穴建物の可能性の高い遺構がそれぞれ 1 軒ずつ検出された。両区とも狭い掘削範囲であるにもかかわらず、竪穴建物が確認されたことは、病院地区一帯に前期や中期の生活痕跡が色濃く認められるという既往の調査成果を補強する結果となった。また本地点の成果は、本郷台地の東縁部に広がる古墳時代集落の様相を具体的に示すための材料を提供したといえる。

A2 区は、古墳時代前期の遺構や遺物が確認された 19 看護職員等宿舎 1 号棟地点と 21 臨床試験棟地点（1 図）の間に位置する。両地点と同じく前期の竪穴住居址が検出されたことから、周辺に広がる前期の集落を構成する住居址の一つであることは疑いない。

B1 区は、本地点の調査区のなかでは最も北側に位置し、小支谷に面した台地の縁辺により近い。検出された前期前半と中期後半の遺構は、病院地区の古墳時代集落の範囲を検討するうえで示唆的である。前期前半の竪穴住居址は 19 看護職員等宿舎 1 号棟地点で検出されているが、本調査により、さらに北側へ居住域が広がっていたことが明らかになった。今後、既に前期の遺構の存在

が知られる、101 ドナルド・マクドナルド・ハウス東大地点や 148 国際科学イノベーション総括棟地点（調査室 2012a、2017b）の調査成果ふまえた検討を通じて、前期前半の集落の北限とその内部の様相の解明が求められる。

古墳時代中期後半の集落は、10 軒程度の竪穴住居址が検出された 74 看護師宿舎Ⅲ期地点（調査室 2012b）や、23 入院棟 A 地点（調査室 2016）の成果をみるかぎり、病院地区の南側にその中心があると考えられる。しかし、B1 区の成果をふまえれば、中期の居住域が北側にも存在した可能性は否定できないだろう。ただし、本地点ではいずれの遺構もその一部を検出したに過ぎないため、本郷台地の古墳時代集落の分布域に対する本地点の成果に依拠した議論は、検討の余地があることを断っておく。

医学部附属病院地区一帯には、古墳時代前期から中期へかけて、集落の変遷過程を論じることができる良好な資料が残されている。今後は各遺構の所属時期の細別を進め、変遷の内容を具体的に論じることが課題である。加えて、今回ふれられなかった周辺遺跡の成果も含めた検討に取り組み、本郷台地全域や、武蔵野台地東部地域における古墳時代前半期の集落のあり方を考察することが必要となるだろう。

【参考文献】

- 小松愛子 2015 「文献・絵図資料にみる富山藩邸江戸屋敷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9
- 東京大学キャンパス計画室 2018 『東京大学本郷キャンパス 140年の歴史をたどる』
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 「医学部附属病院看護婦宿舍 ゴミ置き場地点埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 「医学部附属病院看護婦宿舍 地点（Ⅱ期）発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011a 「〔本郷97〕基幹整備（流域⑧排水）A区地点（HKS09）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011b 「〔本郷97〕基幹整備（流域⑧排水）B区地点（HKS09）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012a 「〔本郷101〕医学部附属病院 Donald・マクDonald・ハウス（HMH10）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012b 「医学部附属病院看護師宿舍地点Ⅲ期」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2015 「医学部附属病院入院棟Ⅱ期 1次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2016 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟 A 地点 報告編《第1分冊》』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017a 「本郷113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期3次（HHWB12）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017b 「本郷148 国際科学イノベーション 総括棟新営」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017c 「医学部附属病院クリニカルリサーチセンター A 棟1期」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院 看護職員等宿舍1号棟地点 臨床試験棟地点 看護職員等宿舍3号棟地点（1）』
- 成瀬晃司 2021 「看護職員等宿舍1号棟地点からみた富山藩上屋敷」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院 看護職員等宿舍1号棟地点 臨床試験棟地点 看護職員等宿舍3号棟地点（1）』

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちようさけんきゆうねんぼう
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報
副書名	
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	成瀬晃司、山下優介
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 TEL: 03-5452-5103
発行年月日	令和4(2022)年12月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	所在地	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうないの 東京大学本郷構内の いせき 遺跡 きかんせいび 基幹整備 りゅういせき⑧はいすいちてん (流域⑧排水)地点	とうきょうと ぶんきょうく 東京都 文京区 ほんごう 本郷 7ちようめ 3ばん 1ごう 7丁目3番1号	13105	47	35° 42' 44"	139° 46' 00"	20100218~ 20120303 20100312~ 20100318 20101129~ 20101204	62.6㎡	本郷構内基幹整備(流域⑧排水)に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷構内の遺跡(本郷台遺跡群)基幹整備(流域⑧排水)地点	包蔵地、集落、大名屋敷	古墳前・中期 近世 近代	【A1区】 近世:地下室1 【A2区】 古墳前期:竪穴住居址1 近世:小穴7 【B1区】 古墳前期:竪穴建物1 古墳中期:竪穴建物1 近世:溝1、土坑11、地下室2、小穴1 【B2区】 近世:井戸1、地下室1	【A1区】 近代:陶磁器、瓦、金属、石製品 【A2区】 古墳前期:土器 【B1区】 近世:陶磁器、瓦 古墳前・中期:土器 【B2区】 近世:陶磁器、土器、瓦	

要 約	古墳時代前期の竪穴建物2軒、中期の竪穴建物1軒を検出。 近世では、富山藩上屋敷の地下室、井戸、土坑などを検出した。
-----	--

東京大学本郷構内の遺跡

外灯 C-5、C-61 電源改修地点

例 言

1. 本書は、東京大学外灯 C-5、C-61 電源改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査地点は、東京都文京区本郷7丁目3-1に所在する。
3. 調査地点は、東京都遺跡地図「文京区No.47 本郷台遺跡群」内に位置している。
4. 調査地点の面積は5.5㎡である。
5. 調査期間は2021年3月12日である。
6. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、追川吉生が担当した。
7. 本報告の編集は追川が行った。
8. 調査時の遺構写真は調査担当者が撮影した。
9. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場Ⅱ構内（東京都目黒区駒場4-6-1）、同工学系研究科柿岡教育研究施設内（茨城県石岡市柿岡414）において、管理・保管・運用している。

東京大学本郷構内の遺跡
外灯 C-5、C-61 電源改修地点発掘調査報告

目 次

例 言

第 I 章 調査の経緯と概要

第 1 節 調査の経緯と経過 86

第 2 節 調査の概要 86

第 3 節 遺跡の位置と周辺の調査 86

第 II 章 調査の結果 86

報告書抄録

第Ⅰ章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯と経過

東京大学本郷キャンパス内に設置されている外灯(C-5、C-61)の電源改修にともない、共同溝から電源ケーブルを引き込むための掘削工事が計画された。掘削範囲はL字状を呈しており、共同溝からケーブルを引き込む部分の掘削深度は1.4mだった。

掘削予定地周辺では、経済学部棟建設(1999年・本54)や総合図書館前にあったクスノキの移植(2012年・本115)の際に事前調査を実施しているほか、医学部モニュメント移設(本131)などを原因とした立会調査も数ヶ所で実施している(1図)。特に医学部モニュメント移設に伴う立会調査では調査区の西壁において、現地表面から0.9mの深さで江戸時代の礎石を確認している(この礎石は工事で破壊される恐れがなかったことからそのまま現地保存とした)。

こうした発掘調査の結果から、工事の掘削が遺構面に及ぶ可能性が高く、工事に先立って事前調査を実施することとなった。

調査に先立って実施した本学施設部・施工業者との協議によって、2区の掘削を現地表面から0.7m程度にとどめ、遺構面に到達しないよう計画が変更された。

第2節 調査の概要

調査は構内道路の縁石に沿った南北方向の調査区(1区・南北12.9m、東西0.5m)と、縁石から共同溝のマンホールへと続く東西方向の調査区(2区・南北0.5m、東西4.5m)からなる(2図)。1区は北側で外灯C-61へ電源ケーブルを引き込むために東西2mほど掘削範囲を拡張した部分を含んでいる。

第3節 遺跡の位置と周辺の調査

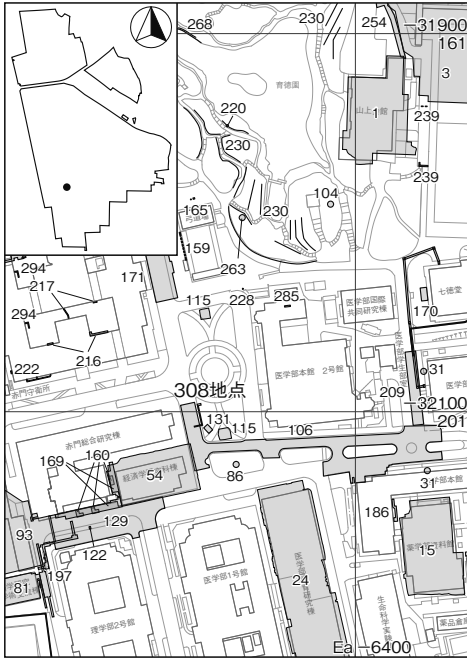
調査地点は赤門総合研究棟の東側に位置する道路と、それに隣接する緑地帯である。周辺には事前調査を実施した調査地点として、医学部教育研究棟地点(本24)、赤門総合研究棟地点(本54)、図書館前クスノキ移植地点(本115)が隣接する。このうち赤門総合研究棟地点は1825年(文政8)に建てられた溶姫(齊秦室)の御守殿の一角にあたり、間知石で構築された地下室や礎石建物跡などを検出している。図書館クスノキ移植地点のうち、本調査区に隣接する第2地点も御守殿の一角に含まれているが、現地表面直下から旧法医学教室のレンガ基礎が調査区全面から検出しているため、江戸時代の遺構の大部分は壊されていた。

本地点の1.5m南側では、医学部のモニュメントを設置する際に立会調査を実施している(本131)。この調査では現地表面から0.9mの深さで礎石を1点検出している。

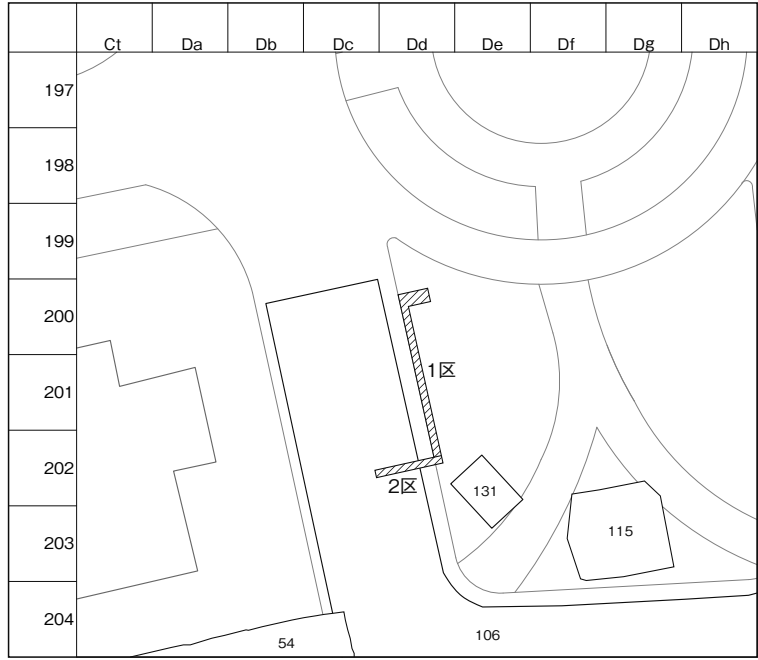
第Ⅱ章 調査の結果

1区はGL-0.6mまで掘削した。掘削した最下面はロームブロック主体の盛土層で、レンガ片を少量含む。遺構面まで到達せずに調査を終了した(3図・4図)。遺物はない。

2区はGL-0.7mまで掘削した。掘削した最下面はレンガを含む黒褐色土の盛土層である。遺構面まで到達せずに調査を終了した(5図・6図)。表土中から瓦2点、鏝1点が出土した。



1 図 調査地点位置図

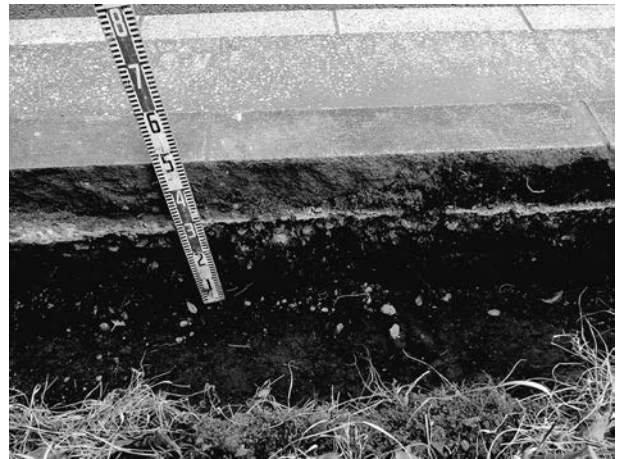


2 図 調査箇所位置図

※1Grid 5m×5m



3 図 1区掘削状況



4 図 1区堆積状況



5 図 2区掘削状況



6 図 2区堆積状況

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちようさけんきゆうねんほう
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報
副書名	
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	追川吉生
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 TEL: 03-5452-5103
発行年月日	令和4(2022)年12月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	所在地	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうないの 東京大学本郷構内の いせき ぶんきょう(No.47いせき) 遺跡(文京区No.47遺跡) がいとうC-5、C-16でんげん 外灯C-5、C-16電源 かいしゅうちてん 改修地点	とうきょうと ぶんきょうく 東京都 文京区 ほんごう 本郷 7ちょうめ 3ばん 1ごう 7丁目3番1号	13105	47	35° 42' 36"	139° 45' 48"	202103012	5.5㎡	外灯C-5、C-16 電源改修に 伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷 構内の遺跡 (文京区No.47遺跡) 外灯C-5、C-16電源 改修地点	包蔵地 屋敷	近世 近代	なし なし	近世 瓦、金属器 近代 レンガ	

要 約	<p>本調査地点は、加賀藩上屋敷の一角で、19世紀には溶姫の御主殿内にあたる。発掘調査の原因となった工事は、掘削が遺構面に到達せずに終了した。</p>
-----	---

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院共同溝給水主管地点

例 言

1. 本書は、東京大学医学部附属病院共同溝給水主管改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査地点は、東京都文京区本郷7丁目3-1に所在する。
3. 調査地点は、東京都遺跡地図「文京区No.47 本郷台遺跡群」内に位置している。
4. 調査地点の面積は18.3㎡である。
5. 調査期間は2021年9月24日～29日である。
6. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、追川吉生が担当した。
7. 本報告の編集は追川が行った。
8. 調査時の遺構写真は調査担当者が撮影した。
9. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場Ⅱ構内（東京都目黒区駒場4-6-1）、同工学系研究科柿岡教育研究施設内（茨城県石岡市柿岡414）において、管理・保管・運用している。

東京大学本郷構内の遺跡
医学部附属病院共同溝給水主管地点発掘調査報告

目 次

例 言

第 I 章 調査の経緯と概要

第 1 節 調査の経緯と経過 92

第 2 節 調査の概要 92

第 3 節 遺跡の位置と周辺の調査 92

第 II 章 調査の結果 92

報告書抄録

第 I 章 調査の経緯と概要

第 1 節 調査の経緯と経過

東京大学医学部附属病院では、構内に新設された共同溝に給水主管を接続するための工事を計画した。この共同溝の敷設工事に際しては、両端に設けられた立坑などを対象とした発掘調査を実施している（医学部附属病院基幹整備共同溝地点・本 277、以下共同溝地点）。掘削予定地はこの他にも、クリニカルリサーチセンター地点（本 125、以下 CRC 地点）、国際科学イノベーション総括棟地点（本 148）にも隣接している（1 図）。いずれの調査地点でも、富山藩邸に関する遺構・遺物が良好に遺存しているほか、旧石器時代から古墳時代にかけての遺構・遺物も認められる。

工事では現地表面から 0.9m 程度の掘削が計画されていた。上記各地点の調査状況を鑑みると、工事の掘削が遺物包含層に及ぶ可能性が高い。そこで埋蔵文化財調査室が事前調査を実施することとなった。

第 2 節 調査の概要

調査範囲は南北 8.2 m、幅 1.5 m の南北方向に延びる調査区と、東西 9.0 m、幅 2.0 m の東西方向に延びる調査区とによる L 字状を呈している。南北方向の調査区のうち、北側の 0.4m²が CRC 地点 5 区に重複している。また東西方向の調査区では、東側の 9.9m²が共同溝地点 5 区と重複している。

第 3 節 遺跡の位置と周辺の調査

本調査地点は附属病院臨床研究棟 A と同臨床研究棟東・分子ライフィノベーション棟の間に敷設された通路に位置している。臨床研究棟 A は CRC 地点（本 125）として発掘調査を実施しており、加賀藩邸と富山藩邸の屋敷境遺構を検出している。どちらも藩邸外郭部にあたり、勤番長屋に伴う地下室が列をなした状態で認められたほか、富山藩邸側では巨大な廃棄土坑群を検出した。廃棄土坑群の範囲は調査区外に延びており、その一部は南側に位置する立体駐車場地点（本 91）でも確認できるので、少なくとも南北 40 m にわたって広がっていることがうかがえる。また調査地点東側では南北方向の堀を検出しており、絵図との比較からこれは富山藩邸の御殿空間と詰人空間との間に構築された区画施設であることが推測される。

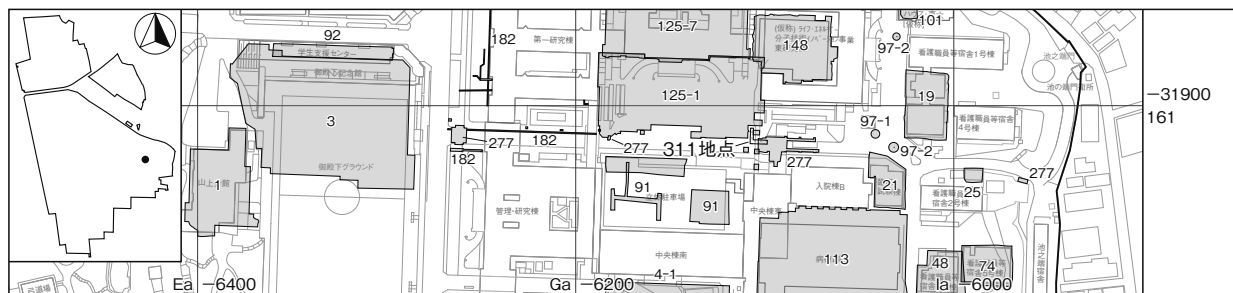
CRC 地点の東側に隣接する分子ライフィノベーション地点（本 148）は、CRC 地点で検出した堀との位置関係から、富山藩邸の御殿空間にあたると思われる。発掘調査では礎石建物や土蔵建物のほか、1 辺 12 m、深さ 8 m 以上の採土坑を検出している。

本地点の調査目的となった給水主管は、東西方向にのびる附属病院の共同溝と接続する。この共同溝は医学部附属病院基幹整備共同溝地点（本 277）として、2019 年から 2021 年にかけて発掘調査を実施している。調査は共同溝東西の両端に設けた立坑部分の調査が中心で、東側の立坑が加賀藩邸、西側の立坑が富山藩邸に含まれた。富山藩邸側では地下室や廃棄土坑を検出しており、そのあり方は CRC 地点に類似したものだだった。

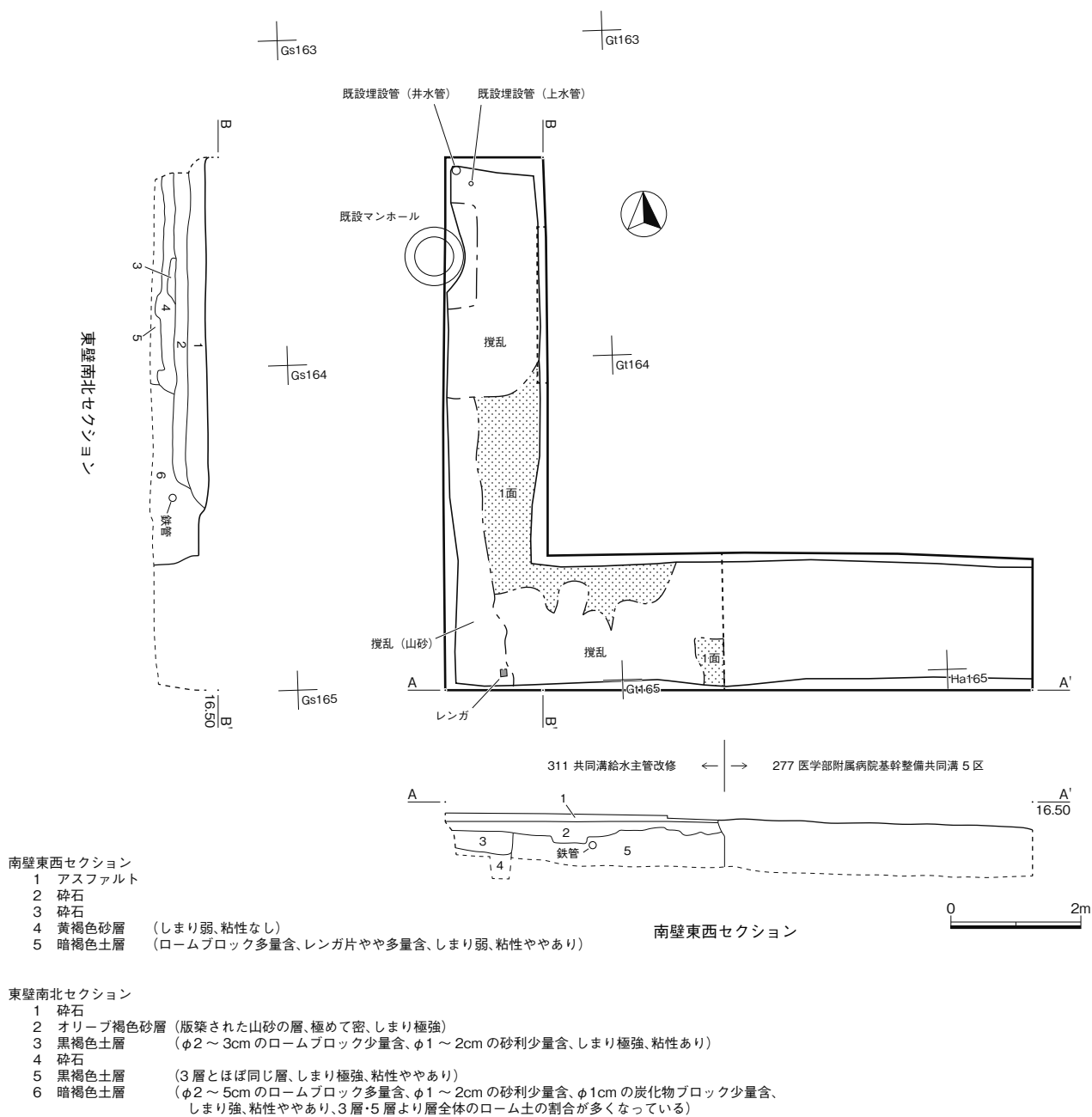
第 II 章 調査の結果

現地表面から 0.9m 掘削したところ、部分的に硬化面（1 面）を検出した（2 図）。表土層から出土した遺物（磁器 32 点、陶器 29 点、土器 7 点、レンガ 1 点ほか）が近代～現代に帰属するのに対して、1 面から出土した遺物（磁器 10 点、陶器 25 点、土器 4 点）はほぼ江戸時代のもので占められている。1 面の検出範囲は攪乱の影響もあって限定的であったため、遺構は認められなかった。しかし遺物の出土状況や、隣接調査地点の遺構検出深度からすると、1 面が江戸時代最終段階の生活面であると考えられる。

1 面を検出したところで工事の掘削深度に到達したため、調査を終了した。



1図 調査地点位置図



2図 調査区平面図・断面図



3図 完掘状況(西から)



4図 南壁土層堆積状況

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちようさけんきゅうねんぽう
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報
副書名	
巻次	15
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名 編集機関	追川吉生 東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 TEL: 03-5452-5103
発行年月日	令和4(2022)年12月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	所在地	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうないの 東京大学本郷構内の いせき ぶんきょうNo.47いせき 遺跡(文京区No.47遺跡) いかくぶふぞくびょういん 医学部附属病院 きょうどうこうきゆうすいしゆかんちてん 共同溝給水主管地点	とうきょうと ぶんきょうく 東京都 文京区 ほんごう 本郷 7ちょうめ 3ばん 1ごう 7丁目3番1号	13105	47	35° 42' 36"	139° 45' 48"	20210924 ~ 20210929	183㎡	医学部附属 病院共同溝給 水主管新設に 伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷 構内の遺跡 (文京区No.47遺跡) 医学部附属病院 共同溝給水主管地点	包蔵地 屋敷	近世		近世 陶磁器、土器、瓦	

要 約	本調査地点は、富山藩上屋敷の西側外郭部にあたり、周辺の調査地点では詰人空間に関わる遺構や遺物が良好に遺存している。調査では明確な遺構の検出はなかったが、硬化面を確認しており、出土遺物から江戸時代の生活面であることが推測される。
-----	---

東京大学本郷構内の遺跡

農学部1号館スロープ等新設地点

例 言

1. 本報告は、農学部1号館スロープ等新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査地点は、東京都文京区弥生1丁目-1番-1号に所在する。
3. 調査地点は、東京都遺跡地図「文京区No.47 本郷台遺跡群」内に位置している。
4. 調査面積は50.64㎡である。
5. 調査期間は2022年2月8～15日である。
6. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、成瀬晃司と山下優介が担当した。
7. 本報告の執筆・編集は山下が行った。
8. 調査時の遺構写真は調査担当者が撮影した。
9. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場Ⅱ構内（東京都目黒区駒場4-1）、同工学系研究科柿岡教育研究施設内（茨城県石岡市柿岡414）において、管理・保管・運用している。
10. 発掘調査および遺構図版作成にあたり、加藤建設株式会社よりご協力を賜った。

東京大学本郷構内の遺跡
農学部1号館スロープ等新設地点発掘調査報告

目 次

例 言

第I章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯 100

第2節 調査の方法と経緯 100

第3節 調査地点の位置と周辺の調査 100

第II章 調査の結果 101

参考文献 101

報告書抄録

第I章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯

令和3(2021)年度に、東京大学弥生キャンパス内に所在する農学部1号館の改修にともなう出入り口付近のスロープ新設工事が計画され、東京大学施設部より埋蔵文化財調査室(以下:調査室)へ本地点の埋蔵文化財の調査に関する照会があった。スロープの設置範囲全体の掘削深度は現地表面から約40cmであったが、スロープの基礎を埋設する2箇所の掘削深度は現地表面から約60cmであった。

掘削予定地の周辺では、教育学部総合研究棟新設やインテリジェント・モデリング・ラボラトリー新設の際に事前調査を実施しており、歩道を挟み掘削予定地と対面する教育学部総合研究棟地点では、地表面から約40cmの深さで近世以前の遺構検出面となる関東ローム層上面が検出された(調査室 2011)。このような調査成果から、

本地点においても地表面から約40cmの深さで近世以前の遺構面に達する可能性があったため、遺構・遺物遺存状況確認の必要が生じた。そこで工事に先立って事前調査を実施した。

第2節 調査の方法と経過

発掘調査は、農学部1号館ドライエリア外壁に沿った南北方向のL字形の調査区を設定して実施した。対象面積は50.64㎡であった。

発掘調査は、令和4(2022)年2月8日より開始した。2月15日には調査区全景の写真撮影と遺構等の測量を完了し、現地での調査を終了した。

第3節 調査地点の位置と周辺の調査

調査地点は、東京都文京区弥生1-1-1、東京大学弥生キャンパスの南西隅にあたる農学部1号館の東側に接す



図1 調査地点位置図(S=1/4000)

る位置にある(図1)。

本地点を含む東京大学本郷キャンパス内一帯は、文京区No.47「本郷台遺跡群」として登録されている。本郷台遺跡群がおかれる地理的環境については、既刊の発掘調査報告書(調査室2009など)を参照されたい。

本地点周辺の歴史的環境については、教育学部総合研究棟地点(18)およびインテリジェント・モデリング・ラボラトリー地点(41)の調査成果(調査室2011)で詳しく論じられている。そのうち、本地点の調査結果に関わる近世の成果について、以下で略述する。

18と41の両地点では、17世紀後半から18世紀前葉の廃棄年代をもつ、南北方向を主軸とした地下室や土坑、

井戸が列状に検出された。この状況を文献史料や絵図、過去の発掘調査成果と照らし合わせると、これらの遺構は水戸藩駒込邸の西側に描かれた南北方向に主軸をもつ長屋建物に付随した施設であったと推定されている。

また、17世紀前半にさかのぼる遺構が検出されなかったことから、長屋建物は17世紀後半以降に建てられた可能性が高く、その背景には明暦の大火以降に頻度が高くなった小石川邸から駒込邸への藩主らの避難や、修史編纂の場としての史館の設置などによる駒込邸の利用があったと考えられている(調査室前掲)。

以上のように本地点周辺は、水戸藩駒込邸の南西側にあたり、駒込邸の利用にともなう痕跡が認められている。

第Ⅱ章 調査の結果

スロープ新設工事によって破壊される地表面から約40cmの深さまで調査区全体を掘削した結果、調査区中央部東壁際のSX1とした範囲を除いて、大規模な近現代の攪乱を受けており、遺構は検出されなかった(図2)。工事による掘削が現地表面から約60cmに及ぶ、調査区中央の2箇所の「深掘り範囲」でも同様に、上述の東壁際の範囲を除いて遺構は認められなかった。

表土や攪乱とした堆積土からは、生産年代が19世紀前葉から中葉にあたる碗などの磁器片のほか、明治時代末から昭和初期までの磁器などが出土した。

SX1は南北約3.8m、東西約0.2mの細長い範囲にわたる、炭化物や土器の細片を含む黒褐色土の堆積であった。東壁断面図に認められるように、堆積はさらに深くまで続くが、工事で予定される掘削深度に達したため、調査を終了した。SX1からは、生産年代が18世紀中葉頃の

肥前産磁器皿や17世紀末から18世紀前半の肥前産陶器碗、瀬戸・美濃産陶器などの小片がわずかに出土した。

SX1は、検出された範囲が限定的で全体が明らかでないことから、遺構であるのか、あるいは周辺に広がる盛土の一部であるのか、その種別や性格は不明である。

本調査地点は、近世における利用の痕跡が認められたが、近現代の造成等の影響を大きく受けており遺存状態は良好ではなかった。

【参考文献】

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2009『東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区Ⅰ』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011『東京大学本郷構内の遺跡 教育学部総合研究棟地点 インテリジェント・モデリング ラボラトリー地点』

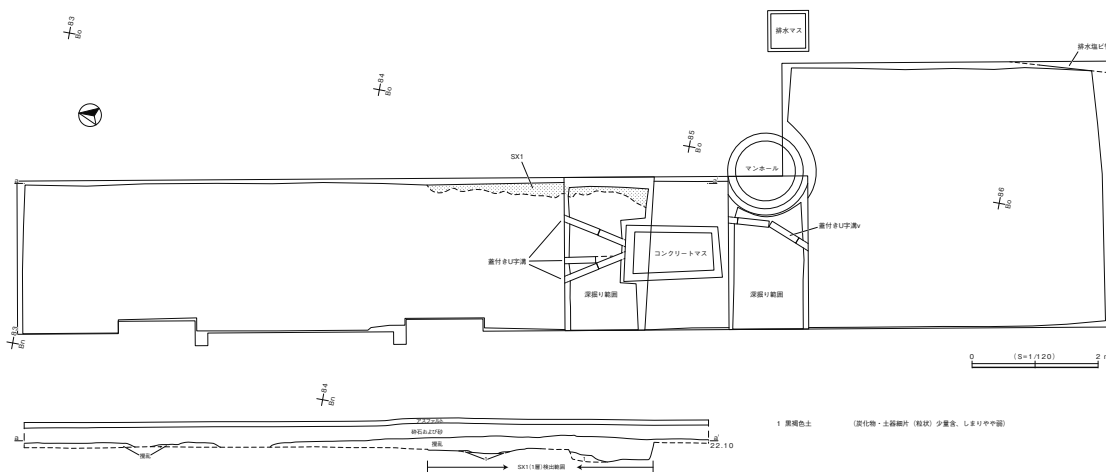


図2 調査区東壁断面図(S=1/120)



図3 調査区南側掘削状況(南から)

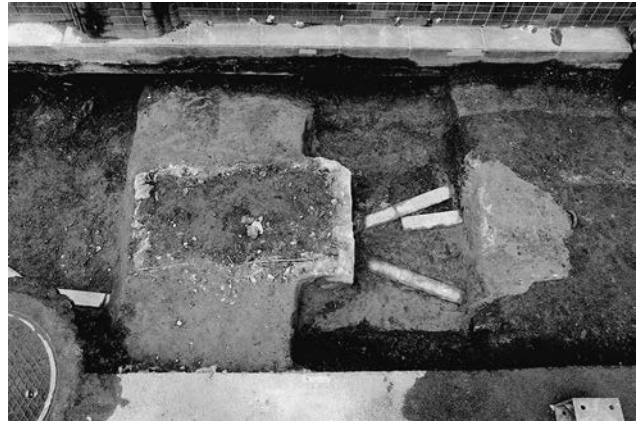


図4 北側深掘り部掘削状況(東から)



図5 調査区中央部掘削状況(東から)



図6 調査区北側掘削状況(東から)



図7 SX1検出状況(西から)



図8 SX1検出状況(南から)



図9 調査区完掘状況(西から)



図10 調査風景(南から)

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちようさけんきゆうねんぽう
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報
副書名	
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山下優介
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 TEL: 03-5452-5103
発行年月日	令和4(2022)年12月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	所在地	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうないの 東京大学本郷構内の いせき ほんごうだいいせきぐん 遺跡(本郷台遺跡群) のうかくぶ1ごうかん すろーぶとう 農学部1号館スロープ等 しんせつちてん 新設地点	とうきょうと ぶんきょうく 東京都 文京区 やよい1 ちょうめ ほか 弥生一丁目他	13105	47	35° 42' 57"	139° 45' 36"	20220208 ~ 20220215	50.64m ²	農学部1号館 スロープ等新 設に伴う事前 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷 構内の遺跡 (本郷台遺跡群) 農学部1号館 スロープ等新設地点	包蔵地 屋敷	近世	硬化面	近世:陶磁器、土器	

要 約	<p>東京大学弥生キャンパス内に所在する本調査地点は、水戸藩駒込邸の南西側にあたる位置にある。農学部1号館のスロープ新設工事を契機とした本調査では、近現代の攪乱によって遺存状態は良好ではなかったが、近世における利用の痕跡がわずかに認められた。</p>
-----	---

前田邸御成記の分析

元和・寛永

湯沢 丈*

1. 目的

考古資料の使用モデル（道具を使用した場、すなわち人物・時機・場所等）の提示のために、藩邸で行われた行事・儀礼の中で格式が最上級と考えられる御成を取り上げる。

1.1. 先行研究

これまで江戸時代の将軍家御成について各氏が論及してきた。佐藤豊三は、室町時代から江戸時代の御成における次第や室礼等の変遷をたどり、元和年間に徳川将軍の御成の規式が成立したと論じた（佐藤 1974-86）。藤川昌樹は詳細な御成記と御成御殿指図の両方が確認された寛永 7 年（1630）鳥津邸への御成を取り上げた（藤川 2001）。藤川は、指図と御成の次第を比較し、経路を検討した上で、入御の際に御成門を通過していない点や、指図と御成記では部屋の名称が一部異なる点も指摘した。一方、考古学の藤本強は、東京大学本郷構内の遺跡中央診療棟地点で検出された「池」出土の土器・木器を分析した（東京大学遺跡調査室 1990、藤本 1990）。

池からは「寛永六年」と墨書された木製品が出土していること、遺物の材質が偏っていること等から、寛永 6 年（1629）の将軍家光と大御所秀忠の御成で使用・廃棄された道具と推定されている。藤本は土器の法量・製作技法の分析から、製作集団を想定し、料理書を参考に土器と木製品の用途を考察したが、当時は詳細な御成記を利用していなかった。また萩尾昌枝は、発掘調査報告書で池出土の木製品を担当し、その後近世作法書を引用して考察した（萩尾 1992）。その中で箸の形態的傾向から、大部分は所謂ハレの席で用いられた可能性が高く、白木の折敷は法量から割合高い位の人あるいは格式の高い席に用いられた可能性を指摘した。

このように御成記には、次第や道具の使用された場について記されており、儀礼の全体像の復元や、使用モデルの提示に資すると考えられる。

1.2. 本稿の目的

上述の御成に関するいずれの研究でも、管見の限り継続的な研究・検討が行われていない。藤本の扱った資料

についても、御成記との比較が必要であろう。

従って本稿では、金沢藩前田邸への元和・寛永の御成記を取り上げ、文献史料から御成の次第や道具を復元した上で、池出土遺物の性格について再検討する。

2. 御成記の分析

金沢藩邸への式正御成は、以下の通りである。

- ・元和 3 年（1617）5 月 13 日 将軍秀忠（辰口邸）
- ・寛永 6 年（1629）4 月 26 日 将軍家光（本郷邸）
- 同年 同月 29 日 大御所秀忠（本郷邸）
- ・元禄 15 年（1702）4 月 26 日 将軍綱吉（本郷邸）

2.1. 対象史料

対象としたのは、それぞれ以下の史料である。なお Web サイトは全て、2022 年 7 月 16 日に最終確認。

2.1.1. 元和度

史料に番号を振った。内容が細かい『天寛日記』を①とし、前田家伝来の加越能文庫所収のものを②③、島津家文書所収のものを④⑤とした。⑥は加越能文庫所収だが冒頭に「原本卷子小笠原家所蔵」と記され、元和御成以外にも参内次第や行列等が掲載されている史料である。目録によると、明治 16 年設立の前田家編輯方が手写したものである（金沢市立図書館 1975）。

- ①『天寛日記』元和 3 年 5 月 13 日条（国立公文書館デジタルアーカイブ、請求番号：163-0179）
<https://www.digital.archives.go.jp/item/4394530.html>
- ②「太閤并将軍御成記」加越能文庫 特 16.13-25（金沢市立玉川図書館）
- ③「御成之記」加越能文庫 特 16.13-29（同上）
- ④「徳川将軍前田利常邸御成之次第」島津家文書 70-26-14（東京大学史料編纂所マイクロフィルム）
- ⑤「徳川将軍江戸藩邸御成一件」島津家文書 70-26（同上）
- ⑥「御成次第等写」加越能文庫 特 16.13-27（金沢市立玉川図書館）

2.1.2. 寛永度

加越能文庫所収の史料から、記述内容が豊富で整理され

*所属 東京大学大学院博士課程

ているものを基準史料とし、他の伝本には片仮名を振った。また参考として、幕府側の史料『徳川実紀』や、これに引用されているものも利用した。

- ・基準史料：「御成次第」加越能文庫 特 16.13-31（金沢市立玉川図書館）
- ・異本イ：「将軍様相国様御成之次第」加越能文庫 特 16.13-30（同上）
- ロ：「将軍様御成等覚」加越能文庫 特 16.13-32（同上）
- ハ：「将軍様御成之節献上物等覚書」加越能文庫 特 16.13-33（同上）
- ニ：「御成の次第」加越能文庫 特 16.13-34（同上）
- ホ：「御成留帳」加越能文庫 特 16.13-35（同上）
- ヘ：「太閤并将軍御成記」加越能文庫 特 16.13-25（同上）
- ・幕府側の史料
 - 『東武実録』巻 26、寛永 6 年 4 月 23・26・29 日条（国立公文書館デジタルアーカイブ、請求記号：特 033-0007）

<https://www.digital.archives.go.jp/item/3987585.html>

『大猷院殿御実紀』巻 13、寛永 6 年 4 月 23・26・29 日条（黒板勝美・国史大系編修会 1981『徳川実紀』2（新訂増補国史大系）：458-459、吉川弘文館）

『江城年録』4 巻（国立公文書館デジタルアーカイブ、請求番号：263-0079）

<https://www.digital.archives.go.jp/file/1238412.html>

2.1.3. 参考史料

論を進めるに当たり、以下の史料を参考として引用した。

『貞丈雑記』（島田勇雄校注 1985『貞丈雑記』2（東洋文庫 446）平凡社）

『江戸幕府日記』（国立公文書館デジタルアーカイブ、請求番号：257-0018）

<https://www.digital.archives.go.jp/item/1238410.html>

「文禄三年卯月八日加賀之中納言殿江御成之事」『群書類従』巻第 409（川俣馨一編輯 1930『新校群書類従』17、内外書籍、国立国会図書館デジタルコレクション公開）

2.2. 翻刻と異同の確認

翻刻は史料篇を参照されたい。元和度では史料①との異同を、寛永度では基準史料との異同を傍線で示した。

2.2.1. 元和度

まず元和度の史料を確認すると、史料①は幕府側の史

料であるが、②と③は前田家の史料、④と⑤は島津家の史料である。⑥は小笠原家伝来の史料を、明治 16 年設立の前田家編輯方が手写したものである。

史料②は複数の御成記から抜粋してまとめたものであるが、③は元和度のみについて比較的詳細に記されたものである。史料④は藤川も紹介している、島津家が自邸への御成に際して参考にしたと想定されている御成記であるが、他の史料と共に⑤の中に納められていた。各史料の記載内容は表 1 の通りである。史料②は抜き書きなので除外すると、内容が多い順から①⑥④③となる。前田家等から情報収集した幕府や島津家の方が、記載事項が多い。一方、史料①に記載されない事柄として、②③④には将軍から家臣への下賜の詳細と、御書院での三献目の後、利常が中座して小刀を抜き、（史料②によると拝領したばかりの一文字と平野藤四郎の）大小を指して、元の席に戻ったという記事である。また⑥には寿福院への下賜、また献立に器の記述が見られる点が、他史料と異なる。

表 1 元和度の史料構成

内容	史料			
	①	③	④	⑥
5 月 13 日条	甲			
将軍から利常への下賜（御書院）	甲	○	○	○
将軍から家臣への下賜（御書院）	甲	○	○	○
将軍から猿楽大夫への下賜	甲		○	
5 月 13 日御成の別記	乙			
御成の次第	A	-	-	-
将軍御成、御数寄屋での膳	A-1	○	○	○
御書院での熨斗献上、式三献	A-2	○	○	○
御広間での利常献上	A-3	○	○	○
同所での家中の献上	A-4	○	○	○
御書院での七五三膳	A-5	○	○	○
同所での引替膳	A-6	○	○	○
同所での利常重ねて献上、給仕役等列記	A-7		○	○
御広間で御能御覧	A-8		○	○
御次江御三之間かきり	B		○	○
さいしきのたい、星のたい	C		○	○
将軍供衆への饗応	D	-	-	-
御相伴	D-1		○	○
盃のたい（台）	D-2		○	○
御かちの衆	D-3		○	○
御中間衆	D-4		○	○
御能（当日と翌日）	E		○	○
拝領物を書き立てるべし（『御成書留』引用）	F			
拝領・献上、御目見した件（『家譜』引用）	G			
寿福院への下賜（筑前守拝領と家中拝領の間に記載）				○

注：史料①では史料篇に記したアルファベットと数字を、その他は記載の有無を記号で表した。

家臣の拝謁、献上、下賜 (A-4)

能を御覧 (A-5 冒頭)

- ・御書院での七五三膳、引替膳 (A-5・6)
- 重ねて献上 (A-7)
- ・広間で能を御覧、酒・菓子 (A-8)
- ・御能はてて露地より還御 (E)

2.3.2. 寛永度

○4月23日

江戸城で前田利常の嫡男、利高は、將軍家光の「光」を貰い、光高と名乗る (基準史料 B)。同日に利常も次のように変更。筑前守→肥前守、利光→利常。

○26日・29日

- ・入御 (C-1)
- ・御数寄屋で茶・膳。花・炭 (C-1)。
- ・中立 御腰掛で御休息 (29日、幕府側の史料に記載)
- ・高樓・二階座敷へ渡御。三筆を上覧。暫く御休息、御長袴を召し替える (29日、幕府側の史料に記載)。
- ・御黒書院で盃事・下賜 (C-2・4・7)
- ・「御書院」で七五三膳・饗宴・献上 (C-3)。
- ・御広間で献上・御能御覧 (C-5・6・8・9)。
- ・御休息ノ間へ渡御 (26日、幕府側の史料に記載)
- ・還御 (幕府側の史料に記載)。
- ・利常・光高は登城して御礼 (29日、幕府側の史料に記載)

○5月2日

- ・「翌日」御振舞・御能 (D-1～3)

場所について若干触れたい。基準史料 C-2 では、御数寄屋での茶事が終わり、御黒書院で盃事を行ったとある。次に昼の御膳、刀剣や目録は「此御書院」で献上し、利常・光高父子の御太刀は御能の前に御広間で献上したと記される。C-3 では、同じく「御書院」で七五三膳等が振る舞われたと記される。確かに、C-5・8 の献上品の一部には「御書院にて上ル」との記述がある。この「御書院」は御黒書院を指すのか、あるいは別の場所を指すのだろうか？文脈上、C-3「此御書院」は「御黒書院」あるいは「昼の御膳が供された場所」を指すと読める。異本へには「黒書院において御盃、書院において七五三御饗応」つまり両所は別と記されているが、後ほど検討したい。

2.4. 贈 答

贈答品の記述内容は史料によって異同が多く、「銀子」

と「白銀」、「紅糸」と「糸」また「腰物」・「脇指」・「太刀」等のような対応を容易に想定可能な例の他、贈答品の中でも重要度の高いであろう刀剣の銘まで異なっていた。そのため本稿では主に数量に着目する。

2.4.1. 元和度

表3の通りである。前田家家臣の人名は、一部が史料によって異なるが、表に従って見て行きたい。概ね前田家のものである史料②③の方が、人名を調べると正しいと考えられる。

下賜は、前田家当主である利常が9品で最多、家臣では今村 (今枝カ) が1品だが、他は2品ずつ、中でも銀と御単物の数量を見ると、横山と本多が比較的多く、奥村はその次に多い。従って、次のように階層性が見て取れる。

前田利常>横山山城・本多>奥村>松平・横山大膳・神谷・横山式部・富田>今村 (今枝カ)

献上では、利常が11品、家臣は皆2品ずつだが、横山山城守と本多安房守が御単物の数量が多く、他は同じである。従って、次のように表せる。

利常>横山山城・本多>奥村・松平・神谷・横山大膳・畠山・今村

主従の謁見における、場所 (部屋や距離)・仕方 (人数や所作)・順序等は、その両者や家臣間での親疎や格差を体现すると言える (深井 2021 等)。そのため、上記より、まず大名と家臣に大きな差が存在することは勿論、家臣について前田家側と幕府側の間に、認識の差があったことが想定できる。

すなわち、献上品について前田家側は横山山城と本多以外の家臣は同列に扱う一方、下賜品について幕府側では彼等の中に3段階の序列を設けた。当然、將軍に謁見できた家臣は、その他大勢よりも格上と言えるが、幕府側が更に細かい階層を設けた点は興味深い。

2.4.2. 寛永度

寛永度の贈答品は表3の通りである。

○下賜

將軍家と前田家・家臣の下賜は、御黒書院で行われ、將軍家光御成の26日には、「肥前守」利常が刀剣2本を含む7品、「筑前守」光高 (利常長男) も刀剣2本を含む4品、「千勝」利次 (二男) と「宮松」利治 (三男) は刀剣1本を含む3品である。次に前田家女子は「御袋様」寿福院 (利常母) が3品、「森右近様御前様」亀鶴姫 (利常長女)・「お万」満姫 (三女)・「おふう」富姫 (四女) が2品ずつである。家臣は皆、銀子と袴の2品ずつだが、

表3 贈答品の集計

場所	下賜・献上	譲渡元	譲渡先	品数	記載
元和度 5/13					
御書院	下賜	秀忠	利常	9	甲、史料③等
御書院	下賜	秀忠	寿福院	2	史料⑥
御書院	下賜	秀忠	家臣 8 名	各 2	甲、史料③等
御書院	下賜	秀忠	家臣 1 名	1	甲、史料③等
御広間	献上	利常	秀忠	11	甲・A-3・7
御広間	献上	家臣 9 名	秀忠	各 2	甲・A-4
寛永度 4/23					
江戸城	下賜	家光	利常	1	B
江戸城	下賜	家光	光高	1	B
江戸城	下賜	秀忠	利常	1	B
江戸城	下賜	秀忠	光高	1	B
江戸城	献上	利常	家光	2	B
江戸城	献上	利常	秀忠	2	B
江戸城	献上	光高	家光	3	B
江戸城	献上	光高	秀忠	3	B
江戸城	被進	利常	光高	2	B
江戸城	-	徳川忠長	利常	3	B
江戸城	-	徳川忠長	光高	1	B
4/26					
御黒書院	下賜	家光	利常	7	C-5
御黒書院	下賜	家光	光高	4	C-5
御黒書院	下賜	家光	利次	3	C-5
御黒書院	下賜	家光	利治	3	C-5
御黒書院	下賜	家光	寿福院	3	C-5
御黒書院	下賜	家光	亀鶴姫	2	C-5
御黒書院	下賜	家光	満姫	2	C-5
御黒書院	下賜	家光	富姫	2	C-5
御黒書院	下賜	家光	家臣 14 名	各 2	C-5
御広間	献上	利常	家光	8	C-5
御書院	献上	利常	家光	2	C-5
御広間	献上	光高	家光	4	C-5
御書院	献上	光高	家光	2	C-5
御広間	献上	利次	家光	3	C-5
御広間	献上	利治	家光	3	C-5
御広間カ	献上	寿福院	家光	5	異本二
御広間カ	献上	家臣 14 名	家光	各 2	C-5
4/29					
黒書院	下賜	秀忠	利常	5	C-7
黒書院	下賜	秀忠	光高	4	C-7
黒書院	下賜	秀忠	利次	3	C-7
黒書院	下賜	秀忠	利治	3	C-7
黒書院	下賜	秀忠	寿福院	2	C-7
黒書院	下賜	秀忠	亀鶴姫	2	C-7
黒書院	下賜	秀忠	満姫	1	C-7
黒書院	下賜	秀忠	富姫	1	C-7
黒書院	下賜	秀忠	家臣 14 名	各 2 または 3	C-7
御広間	献上	利常	秀忠	6	C-8
御書院	献上	利常	秀忠	1	C-8
御広間	献上	光高	秀忠	3	C-8
御書院	献上	光高	秀忠	2	C-8
御広間	献上	利次	秀忠	3	C-8
御広間	献上	利治	秀忠	3	C-8
御広間カ	献上	寿福院	秀忠	5	異本二

注：猿樂大夫・役者等への下され物は省略

その内訳から、3つの段階が設けられている。すなわち、本多・横山山城の2名、前田対馬から奥村因幡までの6名、神谷から脇田までの6名である。

大御所秀忠御成の29日の下賜では、利常が刀剣2本を含む5品（異本二には馬の記載あり）、光高が刀剣2本を含む4品、利次と利治は刀剣1本を含む3品である。寿福院と亀鶴姫が2品、満姫と富姫は1品ずつである。家臣は、26日と同じく2品ずつ（異本によっては3品ずつ）だが、内訳の数量から3つに分けられる。すなわち、本多・横山山城の2名、前田対馬から奥村因幡までの6名、神谷から脇田までの5名（異本によって6名）である。また家臣は目録での下賜であった（C-4・7冒頭「(御)目録ニテ御家老(衆)頂戴」）。

以上より、下賜において、以下の様な階層性が見て取れる（女子は除く）。利常>光高>利次・利治>本多・横山山城>前田対馬守から奥村>神谷から脇田

○献上

次に献上を見てみよう。26日には将軍家光へ、利常が刀剣3本や馬を含む10品、光高が刀剣3本を含む6品、利次と利治は刀剣1本を含む3品ずつを献上した。前田家女子では寿福院について異本二にのみ記され「大樽」等、やや異なる品を献上したようである。幕府側の史料『東武実録』には、その他の女子も小袖等を献上したと記されるが、異本二と内容が異なる。『東武実録』によると献上品は、寿福院が黄金と小袖、亀鶴姫・満姫・富姫は小袖を同数である。

各家臣は太刀と裕を献上したが、その数量は異なる。すなわち、本多・横山山城守の2名が最多、次に前田対馬守から奥村因幡守までの6名、そして神谷丹波守から脇田帯刀までの6名の順である。

29日には大御所秀忠へ、利常が刀剣3本や馬を含む7品、光高が刀剣3本を含む5品、利次と利治は刀剣1本を含む3品ずつである。前田家女子は26日と同様、寿福院の献上が異本二で確認できる。前田家女子と家臣の献上は記されていないが、省略されたのだろうか。

なお、利次・利治は3品、家臣は2品の献上で、品数で大差は無いが、内容を見れば、利次・利治は銘を有する刀剣を献上したのに対し、家臣は単に「御太刀」と記され、両者には質的な差が生じていると捉えられる。

このように、献上においても、下賜と同様の階層性が確認された。なお、将軍家側にも目を向けると、全体的に将軍の方が大御所よりも下賜・献上の品数・数量が多めである。

参考史料① 貞丈雜記 卷之七 膳部の部(島田校注一九八五、句読点等を一部変更)

一、土器品々の事、小さきを「こじゅう」、へそかわらけの事なり。小重より大なるを「三ど入」と云い、三ど入より大なるを「大じゅう」と云う。小じゅうに對したる名なり。さて又三ど入より大じゅう以下、三まわりずつ大きなり。大じゅうに三まわり大なるを「五ど入」と云い、五ど入より三まわり大なるを「七ど入」と云い、それより「九度入」「十一度入」「十三ど入」「十五ど入」まで、何れも三廻りずつ大きなり。「十五度入」より上に大なるはなし(後略)

(中略)

一、「あい物」と云うかわらけあり。『大草殿相伝書』に云う「あい物とは、三どより少しほそく、平かうよりはふとし」「ほそし」とは小さきなり。「ふとし」とは大きなるなり

(中略)

一、つかかさねとは、衝重と書きて、三方・四方・供饗の惣名なり。皆つかかさねなり。上の台と下の足をつかさねたる物なる故、つかかさねと云うなり。三方に穴をあけたるを「三方」と云い、四方に穴をあけたるを「四方」と云い、穴を一つもあけざるを「供饗」と云う。この三品は何れも同じ形なり。足付は衝重の部にあらず。

(中略)

一、足付を「足打」とも云う。折敷に足を打付けたる故なり。足付の折敷という事を略して、足付、足打などと云うなり

一、折敷と云うは、足なきを云うなり。足打の事を折敷という事もあり。足付の折敷なる故、折敷とも云うなり

(中略)

一、角の折敷とも、又角とばかり云うものは、四すみの角を切りたる折敷の事なり

一、小角と云うは、右の角の折敷を三寸四方にしたるものなり。「中角」は五寸四方にしたるなり。「大角」と云うは八寸四方なり。これを「八寸」とも云う

(中略)

一、箸の台と云うは、「みみかわらけ」の事なり。七五三などの膳、すべて式正の膳には必ずみみかわらけに箸をおくなり(頭書・図省略)

C-5 の最後に「右御広間ニテ御進物上り、御礼過て御能初ル」つまり御広間において將軍家光への献上を行い、御礼の献上が終わって、御能が始まると記されている。29日の献上も「御広間」と「御書院」が記されるが、26日同様、利常と光高の一部刀剣のみ御書院で献上され、その他は御広間で献上されたのだろう¹⁾。

○下賜・献上の場所と区別

前田家・家臣へ下賜された場所は、26日「御黒書院」(C-4)、29日「黒書院」(C-7)と記される。異本イには、太刀について「(御)書院ニテ」と書かれる。「御書院」と「御黒書院」については後ほど検討する。

なお29日について前田家家臣の項目の記載が異本イでは「年寄共拝領物、御広間次之白書院ニテ、お礼八大広間ニテ」となっている(C-7)。すなわち年寄の拝領は「御広間」の次の部屋である「白書院」で行い、御礼は「大広間」で行ったとある。

しかし基準史料 C-3 には「目録ノ面ハ此書院ニテ進上」とある。『東武実録』にも次のように記される。すなわち、秀忠と前田家が盃事を行った後、本多・横山は謁見し「御次ノ間御縁カハニ於テ是ヲ頂戴ス」つまり下賜品を次の間の縁側で頂戴したとある。

後述するが、盃事を行ったのは御黒書院と「御書院」であり、「千勝」利次も記載されるのは「御書院」での盃事である。従って、異本イ「年寄共拝領物、御広間次之白書院ニテ」は「御書院」次の間の誤りだろう。

一方、献上は26日に「御広間」と「(御)書院」と記される。後者は、利常と光高の一部刀剣のみである。

2.5. 用意・使用された道具

表4 元和度記載道具(贈答品を除く)

場所	名称	用途	材質	人物	記載
御数寄屋	ふち(縁)高	膳	木製品	將軍秀忠、日野輝資、藤堂高虎	A-1
御数寄屋	杉足打	膳	白木	秀忠	A-1
御数寄屋	杉平具	膳	白木	日野輝資、藤堂高虎カ	A-1
御数寄屋	へき	膳	白木	日野輝資、藤堂高虎	A-1
御数寄屋	重はち(縁)	膳	木製品または陶磁	日野輝資、藤堂高虎	A-1
御広間	なし(梨)地長持三拾枝、あそひ(葵)御もん(紋)有之	通の器	漆器	前田利常	A-3
御書院	三方	盃事	白木	-	A-2
御書院	御てうし(銚子)	盃事	金風力	板倉重宗	A-7
御書院	くわへ(加)	盃事	金風力	永井尚政	A-7
御次・御三之間	きそく(亀足)、作花	食膳の飾	紙等	不詳	B
不詳	さいしき(彩色カ)之たい(台)	盃事カ	白木	將軍等	C
不詳	三つ星之たい、二つ星之たい	盃事	白木・土器	將軍等	C
不詳	盃のたい(台)	盃事カ	白木・土器	「相伴衆」カ	D-2
御書院	かう立、亀之甲、五と(度)、わ(輪)、御箸之台、大ちう(重)、あい物、きそく(亀足)	盃事	紙・白木・土器	秀忠、利常	史⑥ 料
最前之書院	大ちう、わ、こがく(小角)、五と入、こちう(小重)、小角足打、御縁高	膳	紙・白木・土器	秀忠、利常、日野輝資、藤堂高虎	史⑥ 料
不詳	大ちう、わ、こがく足打、あかりこ、こちう、五と入り	膳	白木・土器	「御供之衆」(史料①では「相伴衆」)	史⑥ 料
不詳	大ちう、わ、地紙	膳	白木・土器	御歩之衆	史⑥ 料

料①(7))。すなわち「小角」は「角の折敷」を3寸四方にしたものであり、「中角」は5寸四方、「大角」は8寸四方のものである。「大角」は「八寸」ともいう。つまり小角は小型の折敷である。

御菓子は「縁高」に載せ、「御前金置上絵有、御相伴衆金銀絵有」とある。將軍の縁高には金を押し、その上に絵を描き、御相伴の縁高には金と銀で絵を描いたのみという意味か。

また御引替膳には器が一切記されない。不記載ということは、カワラケあるいは陶磁器や漆器を用いた可能性も考えられる。かつて藤本が引用した『料理切形秘伝抄』所収の「朝鮮信使上洛之時兵庫七五三献立」(記事の奥書は寛永18年(1641))によると、「御本膳」・「二」・「三」までは「大ちう金」や「大土器金」等カワラケが記載される。これに対し、「御替膳」や「引而」では、「かわらけ」・「土器入て」のカワラケの記述の他に、「染付平皿」・「大皿」や「金蒔絵椀」・「平皿」・「つぼ皿糸目」のように陶磁器や漆器も見られ、カワラケより多く記される。行事と年代が異なるが、この献立を参考にすれば、御成の御引替膳は陶磁器や漆器が主体であった可能性が高いと考えられる。今後の課題としたい。

○將軍の御供の器

献立の記された「御供之衆」・「御歩之衆」・「御中間衆」を総じて単に「御供」と呼ぶ²⁾。

前出のカワラケや小角等が認められるが、「わ銀」つまり銀を塗った敷輪と推定でき、上述の敷輪より格下だろう。また「あかりこ」は不詳である。

史料⑥に記された上述の器を集計すると表5のようになる。ちなみに集計は少ない人数との積である。

將軍・御相伴の引替膳や一部の御供について器が不記載だが、確認できるだけで、小重・大重・五度入を中心とした土器は5000弱、木器は箸を除くと8000弱、中でも敷輪が6000弱、小角足打は2000強が用意されたことになる。

○酒器

御書院における酒器の銚子と、加つまり提手は鍍金であった(小笠原1979:195)。

○飾・台

次に「御次江御三之間かさり(飾)之事」として「御折五合数十」とある(A-8)。「折」は折櫃や折箱等「薄い板で作った容器」であり「合」は単位であろう(『日

本国語大辞典』、島田校注1985:167)。そのため折櫃・折箱5つを10組用意するという意味だろうか。その中身が塩引・羊羹等であり、それぞれ亀足や造花で裝飾された。また亀足・造花の裝飾がある蒲鉾・金柑の容器として小桶50が用意されたとある。

「さいしき之たい」は彩色の台と書き、島台を指すだろうか(C)。「星之たい」は「折たな(棚)」に飾るとあるが、州浜の上に作り物を置かずに、盃を並べる「星の物」の意だろう(島田校注1985:196)。

Cの最後に「御目通之分ハ大方此分ニ而御座候」つまり(將軍の)お目に掛けるのは大体以上である旨が記されている。

記述順からすると、Cの彩色の台は將軍に供され、D-2の盃台はD-1の相伴衆に供されたものであり、D-3御徒の衆とD-4御中間衆の盃台は省略された、あるいは用意されなかったのだろうか。

2.5.2. 寛永度

贈答品を除いた道具を表6にまとめた。基準史料C-2・3では酒器が、E-1～12には室札が、Fには御数寄屋での料理が記される。

○酒器

C-2には「御黒書院」における盃事で「御盃」・「御銚子」・「三方」が記される。C-3の「御書院」における「昼ノ御膳」では「御膳」・「御吸物」・「御肴」が見られるものの詳細は記されない。道具としては「盃」と「御銚子」のみ確認できる。

○室札の数量

E1冒頭に「御成之時御飾之次第」と書されておりE1～12が「御飾」いわゆる室札と当時認識されていたことが分かる。その一部は実際に使用した可能性が高いものが含まれる。たとえばE-2「御数寄屋之内」における「ふくべつんと切二炭」以下は炭継ぎで、「水指」から「御茶」は点茶で使用したのだろう。またE-3「御鎖之間」における「朱ノ台黄天目」には「茶巾、茶筌」・「茶杓」が記され、使用できる状態にある。同様に、E-4「二階ノ下だうこ(銅壺)の間」の「三島茶碗」も「茶杓」・「茶巾」、異本イ・ニによれば「ちやせん(茶筌)」と記される。その他、各所の文房具や香道具、風呂や着物類等も使用できる状態で用意されたが、これらが実際に使用されたかは不明であり、非実用的な裝飾と分けることは不可能である点に留意したい。

E1～12の内、数量では、「御広間」(E-12)が51、「白木之御書院御成之間」(E-9)・「黒御書院御飾」(E-10)・

表8 寛永6年御成記上の部屋名称

加賀藩	幕府
二階の上	高樓（『実紀』）・二階座敷
御領の間	書院
白木の御書院御成之間・こ書院（二）	（無し）
黒御書院・大書院（二）	白書院
御広間	大広間
（不詳）	書院

注：幕府は、特記が無い限り『東武実録』による。

E-2「木村御茶入」について、すでに谷晃が触れているが（谷 2004：49）、『寛政重修諸家譜』巻 1131 の利常の項目に、次のように記されている（高柳他 1964：275）。

（元和）二年四月東照宮の御遺物貞宗の御刀、玉潤筆月の画幅を拝賜す、これよりさき木村屋肩衝の御茶入をたまふ、これかつて父利長が献ぜしところなり

つまり、「木村屋肩衝の御茶入」は元和 2 年（1616）4 月以前に利長が献上し、これ以降に利常が拝領した茶入である旨が記されている。この茶入であろう。

このような検討を経て、部屋毎の道具数を材質別に整理したのが表 7 である。材質では漆器が最多であり、次に金属器、紙製品と陶磁器全体という順である。建築構造物や家具、裏方の道具等、記されないものは多いだろうが、遺跡から出土しにくい漆器が記載された道具の大部を占めたことは考古資料を扱う上で注意したい。

○御数寄屋の料理

F には「御数寄屋御料理」と題して家光・秀忠等に供された料理が記されている。「今焼そめ（染）付皿」・「今やきもみち（焼紅葉）皿」・「青地小鉢」・「今焼本皿」・「四角赤絵のさら（皿）」は陶磁器の可能性が考えられ、特に「そめ付」・「青地」・「赤絵」の表現は磁器を表すだろうか。「八寸」は白木あるいは漆器の折敷であろう。「小いとめ（糸目）」は漆器あるいは陶器だろうか。他方、器について何も記されていないが、「御汁」や「御めし」は漆器椀、「御菓子」縁高であろうか。

2.6. 各場面の復元

各場面における、場所・人物・行為・道具・室礼を表 9 に整理したが、特に行為について記しながら検討したい。

2.6.1. 元和度

○露地口より渡御

露地口より御数寄屋へ渡御。

○御数寄屋で茶事

人物は、将軍秀忠と御相伴（日野輝資・藤堂高虎）、それから記載されていないが前田利常が同席した可能性が考えられる。行為と道具は次の通り。

- ・御本膳。秀忠は杉足打、御相伴は「杉平（木）具」とあり、足のない平折敷を指すか。
- ・御引物。秀忠は「向詰」つまり向付で、御相伴の刺身は折板あるいは折折敷に載せて重鉢に容れた。
- ・御菓子。縁高を用いた。
- ・茶：詳細不記載。

○御書院で盃事

人物は、上段に秀忠、下段に利常、それから前田家家臣 9 人である。史料には「御二人斗也」（A-2）つまり 2 名だけであった旨が記されている。従って、式三献と刀剣下賜までは、秀忠と利常（と御披露人等）のみで行い、その後に前田家家臣が出て来て、謁見したと想定される。

史料⑥によると、三献目に秀忠から刀剣を下賜され、「則一献被下被納也」すなわち一献を下さり納められたと記されており、寛永度に見られるような（後述）盃を頂戴した可能性がある。行為と道具は次の通り。

- ・熨斗献上。三方を用いる。
- ・式三献。土器、白木の膳か。
- ・三献目に利常へ刀剣を下賜。
利常は中座して小刀を抜き刀剣を差して戻って着座。同時に他の物も目録で下賜。
- ・次いで家臣が出て来て謁見、彼等へ下賜。

○御広間で御礼の献上

人物は秀忠、利常、前田家家臣 9 名である。行為と道具は次の通り。

- ・御広間へ移動
- ・利常の献上。献上品は梨子地の長持に収納。
- ・家臣の献上。
- ・御能が始まり御覧、三番が過ぎると御書院へ移動。

○御書院で七五三膳と献上

人物は秀忠と、御相伴として利常、藤堂、日野、水無瀬親具である。また御披露人（酒井忠世）、御銚子（板倉重宗）、加（永井尚政）、御通（青山幸成、菅沼吉官、酒井忠正、鳥居忠頼）が記される。なお御披露人から御通までについて「以上、何も」と記されているため（A-7）、他所での下賜・献上、盃事・膳でも同席していた可能性がある。行為と道具は次の通り。

- ・後入。
- ・家光・秀忠が花を入れる。
- ・利常が茶を献じる。
- ・飲茶。
- ・茶碗・茶入を台覧。御相伴の者達も一覧。
- ・家光・秀忠が炭を継ぐ。
- ・秀忠は勝手より退出。

飲茶について取り上げたい。『東武実録』と『江城年録』には、利常が茶を点て、次の順で飲んだと記される。

秀忠→頼房→利常→高虎→宗茂

また史料には花と炭の図が描かれている。基準史料 E-2 と異本イ (注 5) には花入と敷板、入れられた花の様子が描かれている。異本イ (注 6) には炭の図が掲載され、「古炭」は元から置かれていた炭だろう。「白炭」は、木炭の一種あるいは、これを真似て胡粉等で着色したもので、現代の枝炭が相当する。「割すミ」は縦に割った炭で、どちらも継いだ炭だろう。「古炭」の上下に、平行線が 2 本描かれるが、こちらも炭、あるいは灰形の表現だろうか。

○御鎖之間から三筆を持ち出す

御鎖之間を訪れた旨は直接記されていない。しかし 29 日に二階座敷で、三筆を上覧したと記される。御鎖之間「御書院」には右方に丸硯(「したんの蓋」は硯箱の蓋か)、左方に俊成・西行・定家の三筆である。したがって「御書院」は書院床であると判断でき、そこに置かれたものであれば、持ち運びも可能であろう。

また『東武実録』に「書院」「袋棚」と記された室礼は、御鎖之間内の書院床と袋棚を指しており、幕府側も同所を認識していたのは確かである。従って、秀忠は御鎖之間を訪れ、三筆を持って次の場所へ移動した可能性が高いだろう。

因みに翌年に行われた島津邸御成では、御数寄屋→鎖の間→御寝殿(御成書院)の順で移動している(藤川 2001)。

○二階座敷で三筆上覧

幕府側の史料で 29 日にのみ記される。場所について基準史料では「二階之上」幕府側史料では「高樓」「二階座敷」と記される。本稿では便宜上「二階座敷」と呼ぶ。人物は秀忠と頼房である。『東武実録』には「御感のあまり頼房卿めし見せさせ給ふ」つまり感動の余り、秀忠が頼房を呼び寄せて見せたと記されているため、秀忠の指示を受ける者も近辺に控えていただろう。行為と道具

は次の通り。

- ・秀忠が二階之上へ渡御。三筆を上覧。
- ・頼房を呼び寄せ、三筆を見せる。

○休息、長袴を召し替える

幕府側の史料で 29 日にのみ記される。場所は不詳である。二階座敷あるいは「二階ノ下」と記される銅壺ノ間だろうか。

○御黒書院で盃事・下賜

御黒書院は幕府側史料『東武実録』で「御成り書院」と記される。人物は御数寄屋と同様である。

行為について『東武実録』では 29 日に御黒書院へ渡御して、能が始まり、能の四番が過ぎ、盃事が始めると記される。これは 26 日の記述と異なるので後ほど触れたい。

盃事については、江戸城内の年始の盃事を参考にしたい(参考史料②)。この事例については既に深井雅海が取り上げている(深井 2019)。参考史料には次のようにある。將軍吉宗が酒を飲み、「御加」があって、その御盃を世子家重のところへ差し出し、これを家重が飲む。また「御加」があって、御返盃し、吉宗が飲んだ。御返盃については川島慶子が既に取り上げている(川島 1999ab)。

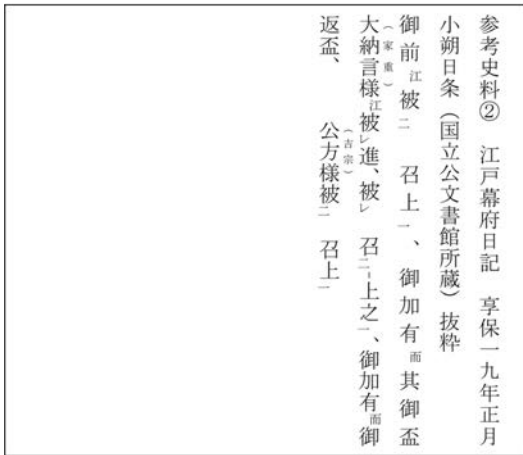
「御加」については銚子に提から酒を注ぐとする解釈もあるが(安藤 2007)、この事例に関しては文脈から盃に酒を注ぐと解釈する方が妥当だろう。このような盃の共有は、中世武家の作法書にも見られる(二木 1999: 126)。

では、御成記に戻って見よう。上述の江戸城内の盃事を参考にして、基準史料では省略している部分を補うと(角括弧内)、以下の順番で盃で酒を飲んだと考えられる。

家光→[加]→忠長→[加]→家光→[加]
 →利常→[加→家光→加]→光高→[加→家光→加]
 →利次→[加→家光→加]→藤堂高虎

異本イでは三男利治も、これに加わっている。なお最後の高虎が盃を納めるとあるが、単に盃を下げたのか、あるいは拝領したのか不詳である。また前田家の男子は盃を賜るときに、先述の品々を拝領した。

その後、前田家の女子、次に家臣が下賜される。秀忠御成の 29 日について『東武実録』では光高が飲んだ盃に御加があって、その盃で秀忠が飲んだ後、盃を替えて「新盃」で酒を飲み、御加があって利次が酒を飲んだとある。『徳川実紀』にも利次と利治は「別の盃」で酒を飲んだと記される。これより、嫡子までと二男・三男の



間で格差を設けられている。

なお『江城年録』には利次が飲んだ後に盃を替えたことと記されているが、献上・下賜品の量・質の差から考えると『東武実録』と『徳川実紀』の記述の方が妥当性は高いだろう。異本イには、光高までは御盃が三方で下さり、御加があったと記される。これらの記述から、嫡子光高までと二男以下では盃と、盃を載せる道具が格下のものに替わったことも予想される。

さて、前田家家臣について『東武実録』には本多と横山は拝謁、献上して「御次ノ間御縁側」で下賜され、それから他の家臣等も献上、拝謁し、下賜されたとある。前田家とその家臣では下賜される場所も異なっていたのである。なお前田家女子に関して献上した旨は記されるが、拝謁については不記載であり、謁見したかは不明である。

以上から、行為と道具は次の通り。

- ・御黒書院へ渡御。
- ・盃事。家光と忠長・利常・光高・利次・利治・高虎が盃を交わす。忠長から光高は同じ盃と三方だが、利次からは別の盃を用いた。
- ・前田家女子へ下賜。
- ・家臣が謁見して下賜。

家臣はまず本多と横山、次いでその他の順。

○「御書院」での七五三膳・饗宴・献上。

先に提起したように「御書院」は「御黒書院」と異なる可能性があり、以下検討したい。基準史料には「御書院」で「昼ノ御膳」つまり七五三膳が出され、盃事と献上も行ったと記される。献上品(C-5・8)には「(御)書院にて上ル」と記され「黒書院」ではない。

次に『東武実録』と比較したい。同史料の室礼に「御書院」に相当する場所が記されていない。同史料では「御成り書院」で「御膳《七五三》」と盃事、下賜を行った

とある。これは加賀藩側の盃事と下賜が「御黒書院」で、七五三膳は「御書院」で行ったという記述と異なる。このことから、加賀藩側では「御書院」は「御黒書院」と異なる場所と認識されているが、幕府側では同じ場所と認識されていたことが明らかである。

ここで室礼に目を向けると「白木の御書院御成之間」は次第には現れないが、室礼は道具の数・質共に高く、数量では黒御書院や御広間と並び、「次ノ間」以下を除いても E-9 には 23 の道具が記され、御数寄屋之内や二階之上と同等の数量である(表 7)。具体的には、床飾が無いものの、棚には複数の書、文房具や香道具、上段には刀掛が確認できる。「御成之間」という名称からも将軍等が来ることを想定していると考えられる。

当時の屋敷図が未確認のため不確定だが、次第中の「御書院」つまり七五三膳が出された場所は、室礼の記述における「白木の御書院御成之間」だったのではないだろうか。

人物は、家光・秀忠と、利常、高虎、それから光高である。行為と道具は次の通り。

- ・初献の御膳と御銚子が出てくる。

(異本イによると三献目は)以下の順で盃で酒を飲む。

[家光→加] →忠長→ [加→家光] →加
→利常→ [加→家光→加] →高虎

この間に吸物や肴が出てきて、利常が献上する。

光高は次第に記されないが、同所で献上したとあるため(C-5・8)、同席したと考えられる。献上品は、利常・光高共に刀剣 2 本のみである。

○御広間で献上・御能御覧。

人物は、家光・秀忠と、献上を行う前田家男子と、家臣達である。『徳川実紀』と『東武実録』には前田家男子と家臣の間に、「万(満)姫」・「富姫」・「老母(寿福院)」・「右近大夫忠広妻(鶴亀姫)」が小袖や金を献上したと記される。異本二には「御袋様(寿福院)」が金子・御小袖・大樽等 5 品を献上したと記される。いずれにしても、前田家女子の献上があったと考えられる。また家臣達が下賜と同様に次の間から拝謁したかどうか不記載である。行為は次の通り。

- ・広間に出御。
- ・前田利常・光高・利次・利治が献上。
- ・満姫・富姫・寿福院・鶴亀姫が献上。
- ・家臣 14 名が献上。
- ・献上が過ぎて御能始まり、上覧。

因みに、基準史料には献上が過ぎて御能が始まったとあるが(C-6・9)、『東武実録』29 日条には「御成り書院」

(加賀藩の史料では「御黒書院」)に出御して御能が始まり、四番が過ぎてから御膳を差し上げたと記されている。同書 26 日条に家光が「広間」へ出御してから御能を上覧するという記述と対照的である。

○御休息ノ間へ渡御

26 日の幕府側史料にのみ記載される。場所は不詳、人物についても家光以外は不詳である。

○還御

還御の場所や御相伴の者達の同行は不詳である。

2.7. 蔵帳・伝世品との比較

○蔵帳(表御納戸目録帳と比較)

「加賀前田家表御納戸御道具目録帳」(飯田 1978、以下『蔵帳』と略称)を利用した。本史料の成立は弘化 2 年(1845)ないし 3 年とされる。表 6「備考」に『蔵帳』の記述と該当しそうな道具を記した。御成記と類似した記述であっても、銘や細かい情報が載っておらず絞りきれないものもあった。例えば利休茶杓は『蔵帳』10 冊には「利休作」の茶杓が 11 件も確認できた。

○伝世品

また図録等を概観したところ No. 48 茶入「富士なすひ」や No. 61 養叟墨跡は現代まで伝わっている。この他、No. 91「土佐の記(イ 定家筆)」と No. 181「月ノ絵ノ御掛物(東掛物 洞庭秋月)」(玉潤筆)も『蔵帳』で確認できなかったが伝世しており、No. 48・61・91 は現在、前田育徳会所蔵である(石川県立美術館 2015: 38・40・57・91)。

2.8. 御成規式の検討

次に、御成の規式について検討したい。かつて佐藤豊三は元和 9 年(1623)の尾張徳川邸への御成が、徳川將軍の御成の規式になったと論じたが(佐藤 1980・1981)、その根拠として紀伊徳川邸への御成に関して「規式」が尾張邸のごとしと記されている点と、水戸徳川邸御成の記事には紀伊邸御成と同様と記されている点を挙げた(佐藤 1981: 539)。更に佐藤は、元和 3 年の前田邸御成は元和 9 年の尾張邸御成とほぼ同一の行事が行われており、尾張邸御成の原形は元和 3 年前田邸御成にあるとした(佐藤 1986: 324)。この点については、本稿で元和度の御成の詳細が明らかになったことで、より確かに裏付けられた。

また藤川昌樹が指摘しているように、寛永 7 年(1630)の島津邸御成では準備にあたり、前田家を始め他邸への

御成について情報収集していた(藤川 2001)。島津家文書には元和度の御成次第(史料④)や寛永度の贈答が、島津邸御成に関する文書と共に納められていた(史料⑤)。これらの史料が、いつ整理されたのか断定するのは厳しいが、島津邸御成記には、御能に関して「要脚」を舞台に積む件について「旧記」や「松平肥前守殿御成之時」と比較している点からも(鹿児島県歴史資料センター黎明館 1985: 151)、島津家が前田邸御成を参考にしていたのは確かだろう。大名が人脈を駆使して幕藩関係を良好に保とうとしていたことは他家でも指摘されている(山本 2004)。

従って、幕府側との交渉によって御成の次第が決まるにしても、準備段階で大名は各自の人脈を利用して情報を収集していたと考えるのが妥当であろう。そういった意味では、佐藤が根拠とした、紀伊・水戸の徳川家が同じ御三家である尾張邸御成の情報を参考にしたのは、これが「規式」として成立したということ以外に、近い関係の家であるという理由も考えられるのではないか。今後の課題としたい。

2.9. 御成以外の記述

取り上げた史料には、御成以外の記事も見られた。基準史料と異本イには、別の茶会記が確認された。基準資料(G-1 ~ 3)に記されているのは、小松城の霞島における茶会記だろう。床には「利休筆文 大ぬり山御掛軸、金森宗和より上ル」とある。つまり金森宗和より譲られた利休筆の文「大ぬり山」の軸を掛けたという意味だろう。

これは「大ぬる山の文」と呼ばれる消息であろう(現在島山記念館所蔵、島山記念館 2011: 21)。図録には前田家以前の所有者は記されておらず、この記述は消息の伝来と使用例を同時に示すものといえよう。なお伝来については更なる検討が必要なため、可能性の提示に止めたい。

3. 考古資料との比較

3.1. 先行研究

戦国時代の考古学的研究を牽引してきた小野正敏は、考古資料は全体像と道具としての用途・価値等が不明である場合が多く、史料批判を通じて特性を考慮しながら文献史料や絵画資料等と相互補完的に利用するのが有効であり、その中でもハレ・非日常に着目することの重要性を述べた(小野 1995・2008)。

先述の東京大学本郷構内の遺跡中央診療棟地点の池遺

構から出土した土器や木製品は、材質や器種が偏っている点や「寛永六年」と墨書された木製品を含む点等から、寛永6年御成に関わる遺物と考えられてきた（藤本1990、堀内2000等）。藤本強はカワラケの製作技法・精粗の組合せから製作集団を想定し、カワラケの法量と数量から使用時のセット関係を想定した（藤本同前：145）。それから江戸時代の料理書や作法書の記述・図と比較し、法量と当時のカワラケの名称との対応関係を推定し、小重と耳カワラケが認められない点から、膳と食器をそのまま廃棄していない可能性、式三献の器が混じっている可能性を指摘した上で、具体的にどの膳が投げ込まれたか特定することは困難であると述べた（同前：174）。他方、木製の折敷と箸については法量分類と数量を確認した上で、カワラケと同様に料理書の記述・図と比較し、出土した折敷と箸の法量が比較的小さいことから、池に投棄された遺物は下位の人々のものであった可能性が強いという見解を示した（同前：168）。

また堀内秀樹は元和度の史料と池出土資料を比較し、3つの可能性を挙げた。すなわち第1に将軍を含む七五三膳以外の饗応での膳、第2に将軍を含む三方を使用する饗応の中での小角、第3にやや身分の低い人達の饗応である。堀内は木製品・土器の器種の組合せや金付着カワラケの出土状況から、第3の可能性が高いとした（堀内2000：142）。

さて以上のような先行研究を踏まえて、本稿で取り上げた文献史料と池出土遺物を比較したい。その前に確認すべきは、一度の使用で廃棄されるものと、複数回使用するものがある点である。鈴木康之は、カワラケはその性質から質感や耐久性が磁器・漆器と対照的であり、一時的な使用が想定され、これが非日常的世界を象徴する存在であったと考察した（鈴木2002）。このようなカワラケの特別な場、例えば武家儀礼・地鎮等での使用は江戸時代でも想定されている（梶原2019）。

3.2. 池遺構出土遺物と御成記の比較

御成の場で使用されたカワラケや白木の道具は御成のために用意され、後に廃棄されたが、その他の陶磁器や漆器、また書画・金属器等は保管されたと想定できる。このことは前章(2.7)で見たように、『蔵帳』との比較から裏付けられる。このような観点から、池出土のカワラケと白木の木製品は一度の使用で廃棄されるものに当たり、陶磁器・漆器等とは対照的な扱われ方をしたことを確認しておきたい。

以下、具体的に考古資料と比較してみる。

3.2.1. 土器

○規格

10表 藤本の分類・推定

口径 (mm)	点数	藤本推定	筆者推定
110	156	大重	小重
115	151		小重・大重?
120	135	三度	大重
135	85	間	間
145	38	五度	五度
155	13		
170	7	六度	六度

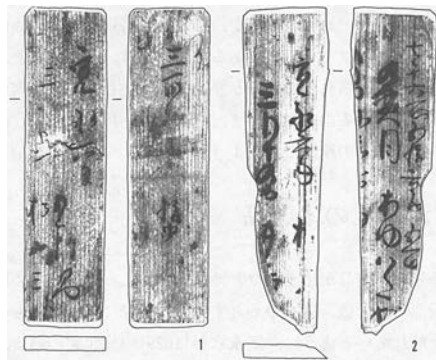
池出土のカワラケの総重量は約70kgで、法量を計測できたのは634点であった。この内、ロク口成形が25点、手づくねが585点であった³⁾。

先述の藤本は出土カワラケを口径約110mm (156点・2分類)・115mm (151点・4分類)・120mm (135点・2分類)・135mm (85点)・145mm (38点)・155mm (13点)・170mm (7点)に分類した(表10)。

藤本は『貞丈雑記』の記述や、江戸時代の料理書の献立と図、また昭和初期に調査した島田貞彦の論考を参考にして(島田1931)、次のように考察した(藤本1990：168-174)。まず、島田論考と文献史料を比較・検討した結果、カワラケの規格と法量は、小さい方から順に、小重(2寸5分)、大重(3寸5分)、三度(4寸)、間(4寸5分)、五度(5寸強)、六度(6寸弱)、七度(6寸5分)……とした。次に、料理書記載の献立・図によると、大重がほぼ半数を占め、次いで三度が3分の1から4分の1を占め、五度・小重・耳カワラケは少数であった。池出土カワラケの分類(法量)と割合から、次のように規格を推定した。すなわち、直径110・115mmは大重、120mmは三度、135mmは間、145mm・155mmは五度、170mmは六度である。

また島崎とみ子の整理によると、文献史料上のカワラケの寸法は、小さい順に次の通りある(島崎2000)。すなわち、耳土器、手塩土器・捨かわらけ、小重土器、大重土器、3斗土器、間之土器、5斗土器、7斗土器、9斗土器。法量は史料によって異なるが、手塩から5斗は概ね4～5分の差である。1寸を3cmとすると、規格毎に約12～15mmの隔りがある。なお史料によっては、大重と3斗の間隔が3分であり、必ずしも差は一定ではない。島崎が示した各規格の法量は、藤本の推定と多少異なるが、規格の順序(小重、大重、三度、間、五度、六度、七度……)と、その間隔が5分前後である点は共通する。法量は時期等の差異があると判断し、規格の順序とその間隔のみを参照したい。

さて本稿では元和度の献立・器を参考に論を進めたい。明らかになったのは、次の点である(史料⑥、表5)。まず、

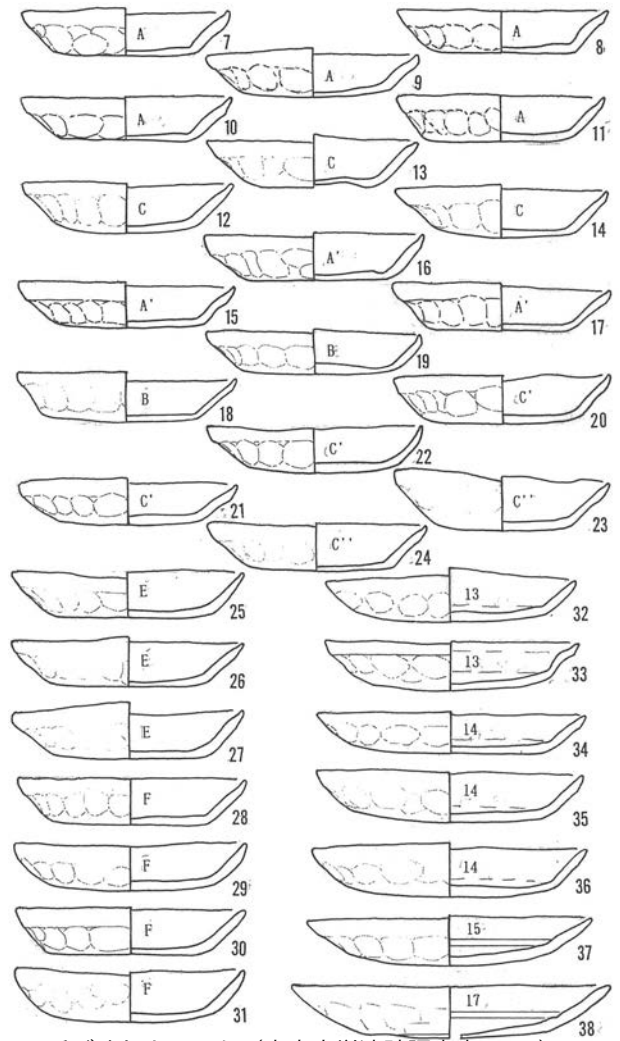
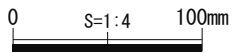


「七千六百五拾弍ノ内五百
(穿孔) 九貫目 あゆはた(欠)
寛永六年 井

「寛永六年
(穿孔) 三月十九日 井

此
(穿孔) 三百 拾弍
寛永六年 井□□左衛門

1. 墨書木簡 (東京大学遺跡調査室 1990)

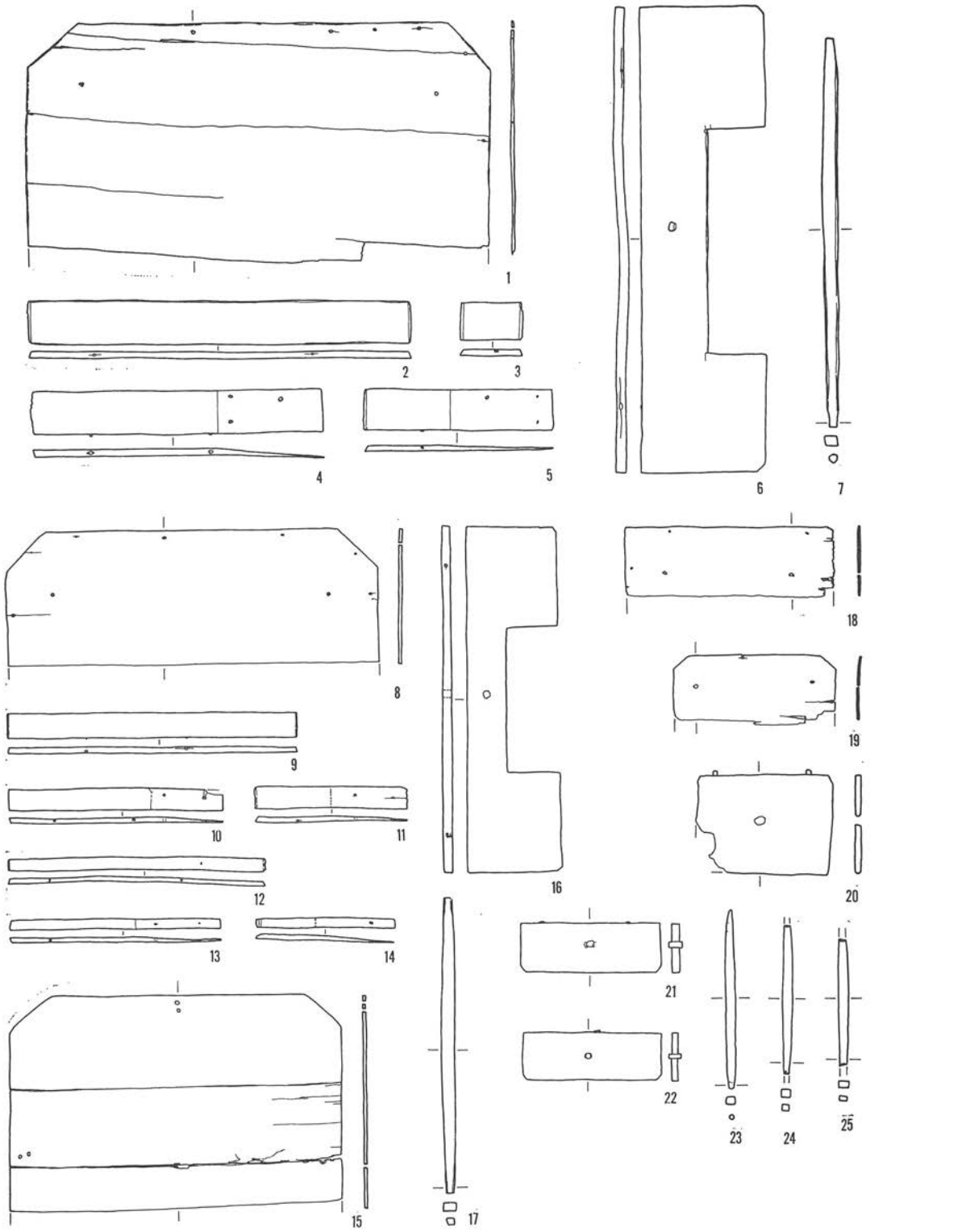


2. 手づくねカワラケ (東京大学遺跡調査室 1990)



3. 金付着カワラケ (左：内面、右：外面、目盛：1mm)

図1 池出土木製品・土器 (実測図 S=1/4)

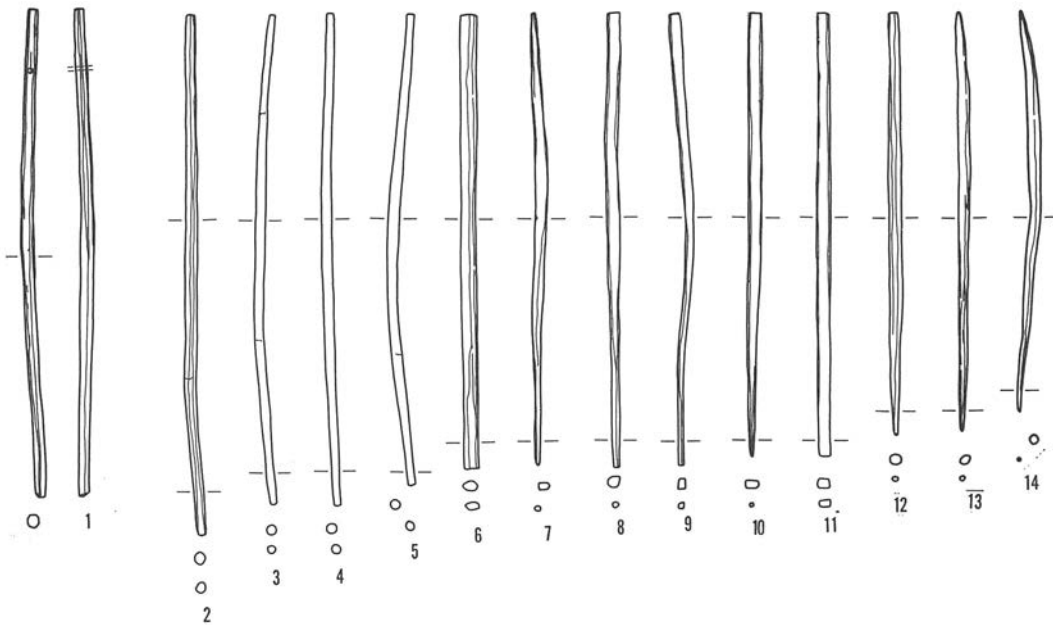


0 S=1:4 100mm

図2 池出土折敷 (実測図 S=1/4、東京大学遺跡調査室 1990)



1. 金付着木製品



2. 箸 (東京大学遺跡調査室 1990)

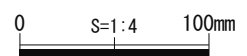
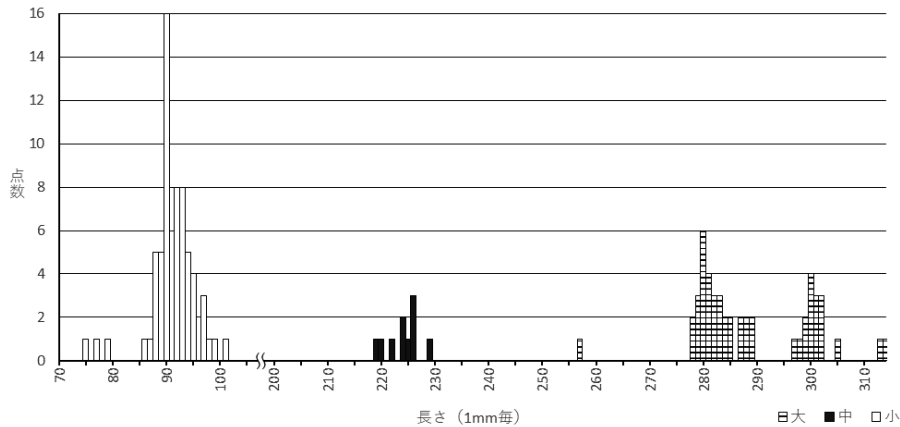
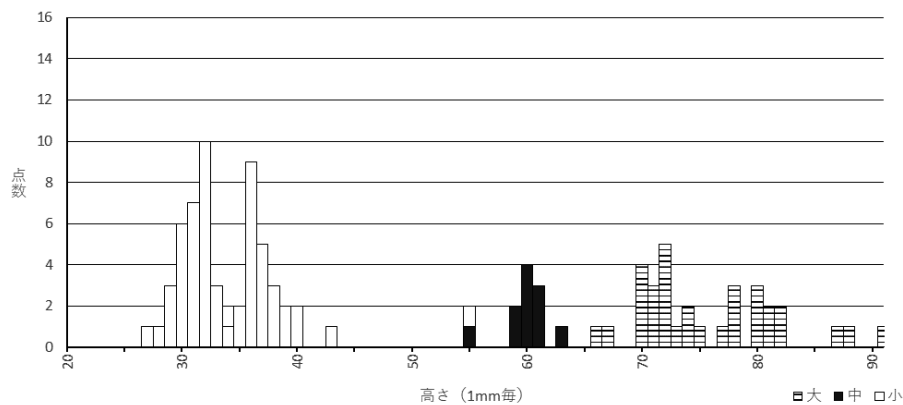


図3 池出土木製品 (実測図 S=1/4)



4-1 図 脚部の長さ分布 (大 50 点；中 10 点；小 70 点)



4-2 図 脚部の高さ分布 (大 32 点；中 11 点；小 55 点)

記載された土器は、小重・大重・間（史料上では「あい
の物」だが比較のため「間」と記す）・五度（「五と入」
を含む）・手塩・箸之台である。次に、将軍・御相伴の
式三献・七五三膳には、上記全ての規格が記され、御供
では小重・大重・五度のみである。数量について、人数
換算すると、多い方から次の通りである。すなわち、大
重（2430）、小重（2020）、五度（506）、間（22）、手塩（6）、
箸之台と御箸（6）で、合計 4990 である。その割合は、
大重が 49%、小重が 40%、五度が 10% を占め、その他
は 1% 未満である。

元和度の献立記載のカワラケが小重と大重が大部分を
占めることから、池出土カワラケで最も数量の集中する
110～115mm に両規格が存在すると想定できる。すな
わち、110mm は小重、120mm は大重で、115mm は両
者の混在だろうか。今後の課題としたい。また、それ以
上の法量は、135mm が間、145mm と 155mm が五度と
推定でき、170mm は献立に見られないが、五度と推定
した法量より 15mm 大きいため、六度と推定した。

なお、記載された献立の他に、盃としてもカワラケが
使用されただろうが、具体的な規格や数量が推定不詳の
ため、今後の課題とする。

○使用場面

史料⑥によると土器等に金が塗られていたと記されて
おり、これは他の小笠原家の記録でも同様である（猪
熊・古谷 1903、小笠原 1979）。執筆時の当主、小笠原
清信は島台や供饗に載せた土器・「台輪」（本稿「敷輪」）・
小角等には金箔を押し、供饗には金泥で文様を描いたと
いう（小笠原 1979：195）。また島台に乗せられた土器、
つまり将軍等の盃事で用いるカワラケにも金を押ししたと
いう。

元和度史料⑥を見ると、将軍・御相伴の七五三膳から
「御徒之衆」の膳まで「金」と記され、金が塗られていた。
「御中間衆」の献立には器が不記載である。このことか
ら、池出土土器の殆どは、御供の内でも、比較的下位の
者の盃や食器と推定できる。なお、池からは金ごく少
量付着したカワラケの口縁部破片が出土しているが、断
面形が直線的である（図 1-3）。これは直径 155mm ～
170mm に分類されるような比較的大きめのタイプに多
い特徴であり、池出土カワラケの主体のものとは異なる
と考えられる。

また献立に記されない随行者の盃や食器の可能性も考
えられる。一方、金が僅かに付着した土器片は、それ以

参考史料③ 「文禄三年卯月八日加賀之中納言殿江御成之事」『群書類従』巻第四〇九 抜粹	
御相伴衆	
左上だん	
聖護院殿	四方
右 菊亭右大臣殿	四方
右 江戸大納言殿	三(イ四)方
右 大和中納言殿	
左 勸修寺大納言殿	同
左 中山大納言殿	同
左 日野大納言殿	同
右 丹後中納言殿	同
左 藤右衛門督殿	同
右 岐阜中納言殿	同
左 備前宰相殿	同
右 加賀中納言殿	同
左 結城少将殿	足打
右 会津小将殿	同
左 吉田侍従)	同
右 八幡山侍従	同
左 那(郡丸)上侍従	同
右 若狭侍従	同
(五名中略)	
已上	

上、つまり元和度献立では御徒之衆以上の階層の盃や献立となる。この点は、先行研究でも指摘されているように、耳カワラケが含まれないことから裏付けられる。

なお寛永度は本郷邸での御成のため、辰口邸で行った元和度より多くの御供や、他の随行者が同行したと想定でき、提供された盃・献立の数量や階層が元和度と異なる可能性が考えられる。

3.2.2. 木製品

池からは、先述の墨書木簡の他、大量の木製品が出土した。特に数量の多かった白木の折敷と箸に注目したい。折敷は脚部が伴い、報告書では法量によって分類され、一辺1尺2寸から1尺前後の「大」が113膳(側板による)・111膳(脚板による)、一辺8寸前後の「中」が27膳(側板による)、一辺が3寸半と4寸半の「小」が35膳(脚板による)が確認された。筆者が実見し、遺存状態の比較的良好だった脚部を改めて計測したところ、やはり3つの法量的まとまりが見出された(図41・2)。対象資料は乾燥状態のため、使用時より収縮している可能性が高いが大きい、3つの規格が存在したことは確かだろう。

また報告書によると、箸は長さが14cm以上で菜箸を除くもので、1480本つまり740膳分が確認された。

その他の出土資料も実見したが、三方や大きめの膳と推定されるものは見出せなかった。

○折敷

さて、御成記で足打折敷と記されるのは、元和度の御数寄屋での將軍の膳と、寛永度の内露地における団扇を置く道具である。これらと出土した折敷の数量は釣り合わない。

因みに膳については、植田啓司の論考がある(植田1991・1997)。植田によると正式な膳の格は高い順に四方、三方、足打であり、足のないものは更に格が下がる。また正式な膳は格が高い程に「鏡」(上面)の一辺の長さとの高さが大きくなるという傾向がある。このような膳の格式と、膳による区別は江戸時代以前の御成記や作法書にも見て取れる(参考史料③、二木1999:130⁴⁾)。

小笠原によると、元和度に將軍に出された膳は「供饗」であるが、これは四方に「金銀彩色等の絵のあるもの」を指すという(小笠原1979:195)。また御成記で盃事で使用されたのは三方であった(元和度史料① A-2、寛永度基準史料 C-2)。一方、先述の『貞丈雑記』巻之七には「供饗」は眼像(げんしょう: 割り形)の無いものであると記される(参考史料① (3))。これは流派による違いだろうか。何れにしても將軍等に御数寄屋以外で供された膳が三方以上のものであったことは確かだろう。

將軍に出された膳が供饗(形態は四方か)、將軍と御相伴・前田家当主・嫡子の間の盃事で使用された膳が三方であれば、御供、また前田家次男以下の者達や家臣の盃事では足打折敷や平折敷が用いられた可能性が考えられる。

また先述(2.5.1)の『貞丈雑記』には次のように記さ

れる（参考史料①（7））。すなわち、小型の折敷で3寸四方を「小角」、5寸四方を「中角」、8寸四方を「大角」あるいは「八寸」と呼ぶ。

小角は元和度史料⑥における大名・御相伴の七五三膳に前者は「小角足打金絵有」、「御供之衆」の膳に「こかく足打金」と記され、両者は絵の有無で差別されていた。共に「金」と記される。金付着の折敷は全体の法量が不明だが、御供之衆以上の階層で用いられた可能性が考えられる。しかし殆どの折敷「小」は金が付着していないことから、御中間衆以下、あるいは献立が不記載の随行者に出された可能性も考えられる。そして池出土の折敷「中」は『貞丈雑記』の「大角」に対応する法量だが、出土点数が少なく、献立上に「大角」は見られないため、不詳とする。

以上より、池より出土した脚の付いた折敷の想定される使用場面は次の通り。すなわち、折敷「大」は御数寄屋での將軍の膳、内露地での団扇の台、あるいは前田家二男・三男や家臣等の盃事、または御供の盃事や膳である。折敷「小」は御供の内でも比較的下位の御中間衆あるいは献立が不記載の随行者の盃事や膳の可能性が考えられる。なお金が付着していた折敷は全体の法量が不明であるが、「御供之衆」のように御供の中でも上位の者以上が用いた可能性が考えられる。

○箸

次に箸と御成記で記されるのは、元和度の式三献（A-2）、七五三膳（A-5）であり、寛永度では火箸・香箸は記されても食膳の箸は不記載である。小笠原によると、儀礼膳では太箸を用いたという（小笠原 1979：197）。しかし、出土した「箸」は太箸には細く、通常の箸とそれ程相違ない。御成記や献立に箸台と記されたものは、耳カワラケに太箸を載せたものだろうが、箸台あるいは箸さえ記されない人物・膳も見られる。それは御供の膳（元和度史料⑥）と御数寄屋での料理（寛永度基準史料 F）である。これは階層や場面によって太箸と通常の箸とで区別されていた可能性が考えられる。

従って、池出土「箸」の想定される使用場面は、御数寄屋で將軍・御相伴に出された膳と、御供の膳である。

○小括

以上、土器と木製品について別々に使用場面を想定してきたが、カワラケと折敷・箸に共通する人物は、献立上では御供の中でも比較的下位な存在である御中間衆あるいは、献立不記載の随行者である。しかし使用から廃棄されるまでに、他所や別場面で用いられた道具が一緒

になる可能性もあるため、想定されるモデルの提示に止めたい。

3.3. 他遺構の出土遺物

池以外から出土した遺物と御成記の記述と類似するものが見られる。例えば、本郷構内遺跡の看護職員等師宿舍1号棟地点 SK299（富山藩邸跡）では中国産の建蓋、青磁の硯屏・香炉、朝鮮産の陶器碗等がまとまって出土した（堀内 2016、東京大学埋蔵文化財調査室 2021）。これらは御成を含めた藩邸内の行事・儀礼における使用を想定して保管されていたのだろう。藩邸では御成以外にも年中行事や大名家の人生儀礼等が行われ、この中で盃事・膳が実施・用意され、また家臣や出入の者へも食事が振る舞われることもあった（丸山 1999、江後 1999、湯沢 2018）。この件については今後の課題としたい。

4. 小 結

前田家と幕府側の複数の文献史料を比較することで、元和・寛永の御成の細部が明らかとなった。また元和度と寛永度は詳細に記された部分が異なっていたため、両度の記録を比較することで、文献史料から見た御成の各場面と全体像の復元を進めることができた。その成果は表9の通りである。

従来から江戸城内等で指摘されていた、対面における場所・人数・贈答等における差別化が、両度の御成でも確認できた。すなわち、まず大名家の中で、当主と嫡子、その他の子息、女子で分かれる。次に家臣は2から3段階に区別された。とはいえ彼等は、謁見できない大多数の人々より格上の存在であった。

御成記の分析の後、管見の限り全国で唯一、御成で使用されたと目されている出土資料、すなわち池出資料との対比を行った。そして池出土の土器・木製品を御成記と比較し、その使用場面について以下のように考えた。

まず殆どのカワラケは金が付着していなかったが、これは御供の中でも比較的下位の者（元和度「御中間衆」）、あるいは献立不記載の随行者の盃や献立の可能性を指摘した。

またカワラケの規格については、表10のように推定した。110mm～120mmは、藤本の推定と異なるが、これは元和度の献立から使用された道具を算出したためである。

次に木製品では、折敷「大」・「中」・「小」は、形態と法量から、足打折敷・大角・小角に相当する。だが、「大角」は献立に見出せず、折敷の殆どは金が付着していな

い点から、大きく3つの可能性が考えられた。すなわち、第1に折敷「大」は御数寄屋での膳等、第2に折敷「大」は前田家次男以下・家臣等の盃事、第3に折敷「大」と「小」は御供の中でも比較的下位な者あるいは献立不記載の随行者の盃事や膳である。その数量や組合せから、第3の可能性が高いだろうと推定した。また箸については、太箸とは捉えにくいとため、折敷の第1と第3における膳での使用が想定されたが、同様に第3の可能性が高いと考えた。

カワラケと折敷では、金が付着したのもも僅かに見られるが、これらは献立で「金」と記載されるような、より上位の者の盃事や膳での使用が想定された。

以上、池出土遺物の殆どの使用者は將軍・大御所の可能性は低いという結果となったが、この遺物群が寛永度の御成で使用され、廃棄された蓋然性は依然として高いと考える。

今後の課題

御成記を読み解き、遺物と比較することで、先行研究では特定できなかった遺物の使用場面を、相当絞ることができた。今後は元禄御成記の分析を行った上で、本稿で挙げた課題に取り組みたい。特に池以外の遺構出土遺物の使用モデルの想定、そして他家との比較である。

謝辞

本稿執筆に当たり、林大樹氏には翻刻から様々にご助言をいただいた。盃事の手順については深井雅海氏よりご教示いただいた。木製品の分析に関して都築由理子氏のご助言を頂戴し、計測には内田昌太郎氏のご協力を得た。

また次の方々よりご助言を頂戴した。感謝申し上げます。

岩淵令治氏 徳留大輔氏 沼田智哉氏 三笠景子氏

本稿の一部は味の素食の文化センター食の文化研究助成による。

【注】

- 1) 元和・寛永度共、本多と横山山城の扱いが他の家臣と異なっていたが、この点について『加能郷土辞彙』を基に触れていた(日置 1983)。下賜・献上を行えた家臣の中で、この2人のみが各「従五位下」安房守と山城守に叙任されていたために、格上の扱いとなったと考えられる。また元禄年間に定められる八家に含まれるのは、次の者である(日置同

前)。すなわち、本多安房政重(本多氏家祖)。長九郎左衛門連頼(長氏2代)。横山山城長知(横山氏2代)、大膳康玄(長知嫡子)、式部長治(長知三子)。前田対馬直正(長種系3代)。奥村河内栄政(奥村宗家3代)。奥村因幡易英(奥村支家家祖)。因みに、今枝民部直恒の家は、後に人持組筆頭となる。また、これに含まれない人物も見られることから、当該時期の藩内における有力な家臣が謁見していると考えられる。

- 2) 將軍と御相伴以外で献立が記されるのが「御供」である。史料⑥では皆「御」が付くことから將軍の直臣であろう。それ以外にも、献立が不記載の者達、具体的には、より下位の直臣や、御相伴・御供の家来、すなわち將軍にとって陪臣も随行した可能性が考えられる。
- 3) 報告では型成形とされていたが、観察の結果、手づくねと判断した。
- 4) 人物と膳の対応は、天文18年(1549)周防山口の大内氏における毛利元就(当時、従五位下右馬頭)への饗応で「あしうち(足打)」が用いられた例でも確認できる(北島大輔 2019: 154)。

【参考文献】史料は編纂者名等を冒頭に表記した。

- 安藤優一郎 2007『江戸武家社会の酒礼』『乾杯の文化史』ドメス出版
- 飯田瑞穂 1978『加賀前田家表御納戸御道具目録帳』(茶道古美術蔵帳集成下巻) 国書刊行会
- 石川県立美術館 2015『加賀前田家百万石の名宝』石川県立美術館
- 猪熊浅磨・古谷紅隣 1903『旧儀裝飾十六式図譜』京都美術協会
- 植田啓司 1991「膳の種類と歴史」『国立民族学博物館研究報告別冊』16
- 植田啓司 1997「日本の正式な膳について」『台所・食器・食卓』(全集日本の食文化9) 雄山閣、初出:石毛直道編 1985『論集東アジアの食事文化』平凡社
- 江後迪子 1999『隠居大名の江戸暮らし:年中行事と食生活』(歴史文化ライブラリー74) 吉川弘文館
- 小笠原清信 1979「武家料理の歴史:饗膳と本膳」『様式』(定本日本料理) 主婦の友社
- 小野正敏 1995「中世の考古資料」『史料論』(岩波講座日本通史別巻3) 岩波書店
- 小野正敏 2008「宴研究、その果たした役割と可能性」『宴の中世:場・かわらけ・権力』(考古学と中世史研究5) 高志書院
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館 1985『鹿児島県史料』(旧記雑録後編5) 鹿児島県
- 梶原勝 2019「カワラケ」『江戸の土器付・江戸遺跡発掘調査報

- 告書一覽』ニューサイエンス社
- 金沢市立図書館 1975『加越能文庫解説目録上巻』金沢市立図書館
- 川島慶子 1999a「寛永期における幕府の大名序列化の過程：元日の拝賀礼の検討を通して」『日本近世国家の諸相』東京堂出版
- 川島慶子 1999b「寛永期の大名の身分序列化について：正月二日の拝賀礼の検討を通して」『史艸』40
- 北島大輔 2019「大内氏の宴：その器と配膳方法」『大内氏の世界をさぐる：室町戦国日本の覇者』勉誠出版
- 佐藤豊三 1974-86「将軍家「御成」について(1)-(9)」『金鯢叢書：史学美術史論文』1・2・3・4・6・7・8・11・13
- 佐藤豊三 1980「将軍家「御成」について(6)：徳川将軍家の御成その1 徳川幕府創始期の御成」『金鯢叢書：史学美術史論文』7
- 佐藤豊三 1981「将軍家「御成」について(7)：徳川将軍家の御成その2 徳川幕府確立期の御成」『金鯢叢書：史学美術史論文』8
- 佐藤豊三 1986「将軍家「御成」について(9)：まとめ」『金鯢叢書：史学美術史論文』13
- 島崎とみ子 2000「江戸時代の料理と器具」『江戸文化の考古学』吉川弘文館
- 島崎とみ子・山下光雄 1989「東海道三十三次饗応の旅：天和二年(一六八二)朝鮮親善信使の記録から新連載」『月刊専門料理』24(6)
- 鈴木康之 2002「中世土器の象徴性：「かりそめ」の器としてのかわらけ」『日本考古学』14
- 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬 1964『新訂寛政重修諸家譜17』続群書類従完成会
- 谷晃 2004「中国産茶入研究序説」『野村美術館研究紀要』13
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点：医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点』(東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3) 東京大学医学部附属病院
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舍3号棟地点(1)』(東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書15) 東京大学埋蔵文化財調査室
- 萩尾昌枝 1992「江戸時代初期の宴会の食器類：東京大学医学部附属病院中央診療棟建設予定地点「池」出土の木製品」『江戸の食文化』吉川弘文館
- 畠山記念館 2011『與衆愛玩：畠山即翁の美の世界』畠山記念館
- 塙保己一編 1975「天正十八年毛利亭御成記」『武家部』(訂正3版続群書類従23下) 続群書類従完成会、初版：1925年
- 深井雅海 2019「江戸幕府「年頭御礼」の仕組みと格式：延宝・元文・天保期の比較を通して」『徳川林政史研究所研究紀要』53、深井 2021 所収
- 深井雅海 2021『江戸城御殿の構造と儀礼の研究：空間に示される権威と秩序』吉川弘文館
- 福岡地方史研究会古文書を読む会 1993-2000『福岡藩朝鮮通信使記録』1-13、福岡地方史研究会
- 藤川昌樹 2001「寛永7年島津邸御成における御殿の構成と式次第」『日本建築学会計画系論文集』539
- 藤本強 1990『埋もれた江戸：東大の地下の大名屋敷』平凡社
- 二木謙一 1999『中世武家の作法』(日本歴史叢書58) 吉川弘文館
- 日置謙 1983『加能郷土辞彙』(改訂増補・復刻3版) 北国新聞社、初版：1942年
- 堀内秀樹 2000「史料から見た御成と池遺構出土資料」『加賀殿再訪：東京大学本郷キャンパスの遺跡』(東京大学コレクション10) 東京大学総合研究博物館
- 堀内秀樹 2016「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル：加賀藩本郷邸の出土資料の分析から」『中近世陶磁器の考古学』2、雄山閣
- 丸山雍成 1999「近世における大名・庶民の食生活：その料理献立を中心として」『食生活と食物史』(全集日本の食文化2) 雄山閣、初出：1994『VESTA』20号
- 山本博文 2004『江戸城の宮廷政治：熊本藩細川忠興・忠利父子の往復書状』(講談社学術文庫1681) 講談社、初版：1993年読売新聞社
- 湯沢丈 2018「江戸藩邸出土の儀礼道具：揃いの磁器の使用モデルを中心に」『東京大学考古学研究室研究紀要』31

拾百。加賀染絹五百反。綿二千把。猩々緋三十間献じ。光高は正恒の太刀。包永の刀。当麻の脇差。鞍馬一疋。銀五百枚。小袖五十。綿千把。千勝利次は恒宗の太刀。銀二百枚。小袖五十。万姫。富姫は小袖三つ。老母は金廿枚。小袖十。右近大夫忠広妻は小袖三なり。安房守。山城守拾二十づ。対馬守。九郎左衛門。因幡守。宮内拾十づ。下総。丹波。民部。内膳。勘兵衛。帯刀拾五づ。さぐ。御茶奉り饗し進らせて猿樂あり。舞台に要脚五百貫をつみ。猿樂大夫に唐織纏頭す。かへらせ給ひて後。利常。光高当(原注…両カ)城にまうのぼり謝し奉る。(寛永系図、東武実録) (廿八日条省略)

○廿九日 大御所。加賀黄門利常卿の別野にならせ給ふ。水戸黄門頼房卿。藤堂和泉守高虎。立花飛驒守宗茂相伴たり。直に茶室へわたらせられ。利常御膳を献ず。茶事例のごとし。御花。御炭みづからあそばされ。畢て高樓に登らせたまひ。俊成。定家。西行三筆の古今集を御覧あり。御感のあまり頼房卿めし見せさせ給ふ。次に猿樂。加茂。敦盛。井筒。花月。船弁慶。谷行。祝言なり。花月は黄門みづからつかふまつる。またご所望にて観世左近項羽をつかふまつる。この間饗宴をひらき黄門御盃給る時。正恒の御刀。池田正宗の御脇指。銀二千枚。小袖五十。八丈縞二百反賜はる。其御盃をかへし奉り。再び筑前守光高にたまはる時。一文字の御太刀。二字国俊の御刀。銀五百枚。拾五十賜はる。又別の盃もて千勝利次。宮松利治に給はり。各御刀下さる。家司本多安房守。横山山城守拾十づ。献じ拝謁し。銀百枚。小袖十。拾十づ。給はり。其外十二人の家司は時服五づ。献じ奉り。をのゝ銀。時服給はる。かさねて広間へわたらせたまふ時に。利常卿より行平の太刀。吉家の刀。戸川志津の脇差。金二百枚。拾百。綿千把。光高より守家の太刀。長光の刀。景光の脇差。銀五百枚。小袖五十献ず。還御の後利常卿父子并に御相伴の輩。両城にのぼり謝し奉る。(東武実録)

『江城年録』四卷、寛永六年、卯月(国立公文書館)

一、廿三日、於御本丸(前田光高)越後仙千代殿、加賀大千代殿於御前御元服、被下

御一文字(前田)《光長、光高》各御腰物《中堂来、政宗(正宗カ)》銀子《五百枚、五百枚》(利常)拜領

(廿四日条略、廿六日条無し)

一、四月廿九日、松平肥前守宅(利常)へ、西丸様御成、御相伴水戸殿(頼房)、御先(外露地)

迄御座被成、相国様明六ツ半過候て御成、堂の前(三)御目見、数寄屋へ

入御之時、供奉、御中立、御花 相国様被遊候

一、御かけ物、密庵 一、御茶入、このむら(基木村、二このむら)

一、太田茶碗《わりかうたいのかうらい》

一、御花入《かねのもの、あし》

一、かま《無銘、あし》

御茶之次第

相国被召上、水戸殿御請取、肥前守にと御志き候へハ、水戸殿にまいり候へき御錠にて、水戸殿御頂戴それを肥前守のミ申候、藤堂和泉守、立花飛驒守ものミ申候、茶入(新)つねのことし、御覧の後、御炭 相国様被遊候、勝手へならせられ、二階へ出御被成候へと水戸殿【も】『迄』御めし候て、定家卿筆の歌書見せさせられ候、【物】『扱而』御成書院【く】『江』出御被遊、七五三之御膳上(※基)「御黒書院」で御盃、「御書院」で七五三

御盃の次第(※基準史料で盃事は二十六日の記事のみ)

初献、御盃水戸殿御頂戴、其御盃 御前(上)（基ル）、御盃肥前守頂戴、(基)

此間二御道具被下、其盃御前(上)、御盃筑前守被下、其盃 御前(上)納、さ

て御能御見物四番過候て、御膳上 初献、二献御手前 三献御盃肥前守頂

戴之時、御道具拜領、其盃御前(上)候時、肥前守御道具奉献上、其御盃筑

前守頂戴仕候時、御道具拜領仕候、其盃 御前(上)候時、筑前守御道具奉

献上、其御盃一番目の子息千勝頂戴仕候時、御道具拜領仕候、其盃持て立

納、又別の御盃出、御前(江)召上、御盃三番目の子息宮松頂戴仕候時、御道

具拜領仕候、御能過、還御

(以下、別記事省略)

公卯ノ后冠 渡御アリ、御相伴ノ面々外露地ノ堂ノ前ニ於テ謁シ、数寄屋ニ

入御供奉ス、数寄屋ノ飾リ去ル二十六日

將軍家渡御ノ時ニ同シ

公数寄屋ニ 入御、掛物 上覧 御着座ノ時御膳ヲ献ス、御膳過テ後 御中立

有リ、御腰掛ニ暫シ 御休息、又数寄屋ニ 入御

公御花 遊サレテ後、御茶 召シ上ケラレ、頼房卿ニ賜ル、利常ニト頼房是ヲ

窺フ、先ツ頼房賜ルヘキノ由 台命ニ依テ頼房卿頂戴シテ賜リ、是ヲ利常ニ

遣ハス、利常是ヲ賜テ和泉守高虎、飛驒守宗茂賜リ納メ、茶碗、茶入台覧、

御相伴ノ面々モ是ヲ一覽ス、後ノ御炭

公遊サレ事畢テ後、勝手エ 成ラセラレ、二階座敷ニ 渡御、俊成、定家、西

行三筆ノ古今集 上覧アリ、頼房卿ヲ召シテ是ヲ見セシメ給フ、暫ク 御

休息有テ、御長袴ヲ 召シカヘラレ、御成リ書院ニ 出御、爰ニ於テ猿楽初

ル

能組

加茂 今春大夫

敦盛 七大夫

井筒 観世大夫

花月 頼朝頼朝大夫

舟弁慶 七大夫

谷行 七大夫

御名鑑

項羽 観世大夫

祝言 今春大夫

猿楽四番過テ御膳《七五三》ヲ献ス、御相伴黄門頼房卿、和泉守高虎、飛

驒守宗茂、初献、二献、各盞、三献ノ時、御盃ヲ肥前守利常頂戴ス時、御

腰物《正恒》(基 二字国俊、他異本では正恒)、御脇指《池田正宗》(基 玄旨貞宗)、

白銀二千枚、御小袖五十、御袷五十、八丈嶋二百端ヲ利常ニ賜ル、其盃

公召シ上ケラレ、光利(高カ)頂戴ス時、御太刀《一文字》、御腰物《二字国

俊》、白銀五百枚、御袷五十、光利(高カ)ニ賜ル、其盃

公ニ上リ、御盃カハリ新盃ニテ 召シ上ケラレ、千勝ニ下サル時、御腰物ヲ千勝

ニ賜ル、本多安房守、横山山城守、拾十宛ヲ献シテ拝謁ス、白銀(基 弍)百

枚、御小袖十、御袷十(呉服五)宛ヲ本多、横山二人ニ賜ル、御次ノ間御縁

カハニ於テ是ヲ頂戴ス、其余利常力家臣等十二人、拾五宛ヲ献シテ拝謁ス、

各白銀、御袷ヲ賜ル差アリ、事畢テ広間ニ 出御時ニ太刀《行平》、脇指《戸

川志津》、黄金二百枚、拾百、綿千把、利常是ヲ献ス、太刀《守家》、刀《長

光》、脇指《景光》、白銀五(基 三)百枚、小袖(基 御服、ハニホ 小袖)五十、

光利是ヲ献ス、猿楽畢テ後

公還御、利常、光利父子今日ノ 御成リ忝ナキノ由、御礼トシテ 両御殿ニ登

城ス、御相伴ノ面々モ御礼トシテ登 営ス

『大猷院殿御実紀』卷一三、寛永六年四月廿六日・廿九日条(国史大系徳川
実紀)

○廿六日加賀中納言利常卿が上野の別野にならせ給ふ。利常卿に二字国俊の

御太刀。秋田正宗の御脇差。銀三千枚。時服三百。夜着二十。羅紗三十間。

長子筑前守光高に真長の御太刀。貞宗の御脇差。銀千枚。時服百。千勝利次

に守家の御刀。銀三百枚。時服五十。宮松利治に長光の御刀。銀三百枚。時

服五十。万姫。富姫に銀百枚、紅糸廿斤づ。黄門の母に銀三百枚。巻物三

十。紅糸五十斤。森右近大夫忠広妻に銀二百枚。巻物二十給ひ。家司本多安

房守。横山山城守に銀三百枚。時服二十づ。前田対馬守。長九郎左衛門。

奥村因幡守。横山大膳。小幡宮内に銀百枚。時服十づ。富田下総。神谷丹

波。今枝民部。津田勘兵衛。生駒内膳。脇田帯刀に銀五十枚。時服五づ。下

さる。黄門より友成の太刀。大原真守の刀。無銘正宗の脇差。黒毛鞍馬一疋。

十枚作の黄金卅枚(常の金十枚もて一枚に作る。之を十枚作といふ)。小袖百。

(基 御太刀一腰) 裕五、神谷丹波 (基 守) 是ヲ献ス
 (基 御太刀一腰) 裕五、今枝民部是ヲ献ス
 (基 御太刀一腰) 裕五、生駒内膳是ヲ献ス
 (基 御太刀一腰) 裕五、津田勘兵衛是ヲ献ス
 (基 御太刀一腰) 裕五、脇田帯刀是ヲ献ス
 事畢テ広間ニ出御 (基 右御広間ニテ御進物上リ)、猿楽 上覽アリ、能三番過
 テ 御休息ノ間エ 入御時ニ舞台ニ鳥目五百貫ヲ積ミ、大夫ニ小袖《唐織》、
 其外ノ役者ニ小袖ヲ与ル

数寄屋ノ道具

- 一、掛物 密庵
- 一、釜 腰褌
- 一、水指 伊賀焼
- 一、茶入 小野村肩衝 (基 木村御茶入)
- 一、茶碗 (基 かうらい) 割高台
- 一、茶酌 (基 杓) 利休
- 一、香合 堆朱布袋
- 一、花入《御花菊》 柑子口胡銅
- (基 御鎖之間) 書院
- 一、古今 三筆《俊成、定家、西行》
- 一、硯 丸石
- 一、筆架 アマノチヤク (基 かねの物、筆軸くるく)
- 一、釜 ムキ蜜柑
- 袋棚
- 一、水指 カネノ物
- 一、茶入 小茄子《太閤秀吉ヨリ賜ル》 (基 富士なすひかんたうの袋)
- 一、天目 黄

- 一、台 朱
- 一、茶酌 (基 杓) 織部作
- 一、蓋置 カネノ物
- 銅壺ノ間

一、釜 霰

- 一、水指 信楽 (基 伊賀焼ぬりふたの水指)
- 一、茶入 中次
- 一、茶碗 三嶋

大広間 (基 御広間)

- 一、三幅一對
- 一、花瓶《花ハ池坊立ル》

白書院 (基 黒御書院御飾)

- 一、掛物 洞庭秋月 (基 月ノ絵ノ御掛物)
- 一、香炉 青磁 (基 唐) 獅子
- 左小棚

- 一、茶入 小鶴首《盆ニ置、袋ナシ、上ノ棚ニ居》
- 一、骨吐 カネノ物一對《下ノ棚ニ居》

此外棚ノ飾物色々ノ道具是アリ

書院 (※黒御書院の書院床カ)

- 一、古今 家長筆
- 一、砂ノ物
- 一、硯 石
- 一、筆架 カネノ物

同二十九日

公松平肥前守利常カ別野ニ 渡御アリ、御相伴水戸黄門頼房卿、藤堂和泉守高
 虎、立花飛騨守宗茂、今日ノ御相伴タルヘキノ由、昨日 仰出サル、依テ、
 今朝黎明ニ利常カ別野ニ予参、外露地ニ於テ 御成リヲ相待ツ

寛永六年御成 幕府側史料

(細かい表現の違いは取り上げない)

『東武実録』寛永六年四月二十三・二十六・二十九日条(国立公文書館)

同二十三日 松平筑前守利常(平出) 台命(台題)依テ名ヲ肥前守ニ改ム時ニ

公ヨリ御脇指(台題)

將軍家ヨリ御脇指《東(来カ)国次》ヲ肥前守ニ賜ル、肥前守献スルニ

公ニ御脇指《貞宗》、白銀三百枚

將軍家エ御脇指《吉光》、白銀三百枚ヲ以テス

是日 利常カ男

將軍家ヨリ 御諱ノ字ヲ賜テ光利ト号ス《後光高ニ改ム》、少将ニ任シ從四位下

ニ叙シ《元無官》筑前守ト号ス《光利ハ 公ノ御外孫也》時ニ

公ヨリ御脇指《五月雨郷》

將軍家ヨリ御脇指《正宗》ヲ光利ニ賜ル、光利献スルニ

公エ太刀《吉次》、白銀五(基三)百枚

將軍家エ太刀《信国》、白銀千枚ヲ以テス

(二十五日条略)

同二十六日

將軍家松平肥前守利常カ別野《上野ニ在リ》ニ 渡御アリ、御太刀《二字国俊》、

御脇指《秋田正宗》、白銀三千枚、御袷二百、御小袖百、御夜ノ物二十、羅

紗三十間、利常ニ賜ル、御太刀《真長》、御脇指《貞宗》、白銀千(基五百)

枚、御袷百、筑前守光利ニ賜ル、

御腰物《守家》、白銀三百枚、御袷五十、千勝ニ賜ル

御腰物《長光》、白銀三百枚、御袷五十、宮松ニ賜ル

白銀百枚、紅糸二十(基卅)斤、於万ノ御方ニ賜ル

白銀百枚、紅糸二十(基卅)斤、於富ノ御方ニ賜ル

白銀三(基貳)百枚、卷物三(基貳)十卷、紅糸五(基貳)十斤、肥前守老

母ニ賜ル

白銀二百枚、卷物二十卷、前田右近大夫室ニ賜ル

白銀三百枚、御袷二十、本多安房守ニ賜ル

白銀三百枚、御袷二十、横山山城守ニ賜ル

白銀百枚、御袷十、前田对馬守ニ賜ル

白銀百枚、御袷十、長九郎左衛門ニ賜ル

白銀百枚、御袷十、奥村河内守ニ賜ル

白銀百枚、御袷十、奥村因幡守ニ賜ル

白銀百枚、御袷十、横山大膳ニ賜ル

白銀百枚、御袷十、小幡宮内ニ賜ル

白銀五十枚、御袷五、富田下総ニ賜ル

白銀五十枚、御袷五、神谷丹波ニ賜ル

白銀五十枚、御袷五、今枝民部ニ賜ル

白銀五十枚、御袷五、津田勘兵衛ニ賜ル

白銀五十枚、御袷五、生駒内膳ニ賜ル

白銀五十枚、御袷五、脇田帯刀ニ賜ル

太刀《友成》、刀《大原真守》、脇指《長銘正宗》、馬一疋《黒毛鞍置》、黄

金三十枚《十枚(基百兩)作り》、小袖百、袷百、加賀染五百(基十)端、

綿二千把、猩々皮三十間、肥前守利常是ヲ献ス

太刀《恒守》、白銀二百枚、小袖五十、千勝是ヲ献ス

太刀《末守》、白銀二百枚、小袖五十、宮松是ヲ献ス

小袖三、於万ノ御方是ヲ献ス

小袖三、於富ノ御方是ヲ献ス

黄金二十枚、小袖十、肥前守老母是ヲ献ス

小袖三、前田右近大夫室是ヲ献ス

(基 御太刀一腰) 袷二十、本多安房守是ヲ献ス

(基 御太刀一腰) 袷二十、横山山城守是ヲ献ス

(基 御太刀一腰) 袷十、長九郎左衛門是ヲ献ス

(基 御太刀一腰) 袷十、奥村河内守是ヲ献ス

(基 御太刀一腰) 袷十、奥村河内守是ヲ献ス

(基 御太刀一腰) 袷十、横山大膳是ヲ献ス

(基 御太刀一腰) 袷十、小幡宮内是ヲ献ス

權兵衛 鶉、高安 《大鼓 助三、小鼓 五郎左衛門》《太鼓 彦九郎、笛 長藏》

七大夫 自然居士、山科 《大鼓 源右衛門、小鼓 小左衛門》《笛 庄兵衛

七大夫 是界、山科 《大鼓 少九郎、小鼓 清次郎》《太鼓 宗右衛門、笛 市右衛門》

七大夫 態坂、御好、山科

祝言、弥二郎 《大鼓 少九郎、小鼓 清次郎》《太鼓 左吉、笛 市右衛門》

注16 本

同日御能

今春 加茂、彦次郎 《大鼓 源右衛門、小鼓 小左衛門》《太鼓 惣右衛門、笛 少兵衛》

七大夫 あつもり、高安 《大鼓 彦次郎、小鼓 清次郎》《笛 清左衛門

觀世 井筒、山科 《大鼓 源右衛門、小鼓 小左衛門》《笛 市右衛門

權兵衛 花月、權右衛門 《大鼓 九郎兵衛、小鼓 六藏》《笛 少兵衛

七大夫 舟弁慶、權右衛門 《大鼓 九郎兵衛、小鼓 小左衛門》《太鼓 勘助、笛 三

市郎

今春 祝言、彦二郎 《大鼓 助三、小鼓 五郎左衛門》《太鼓 彦九郎、笛 長藏》
《※基準史料にある項羽と養老は無し。祝言は二と同じ、ロと近似》

注17 本

權兵衛 竹生嶋、山科 《大鼓 九郎兵衛、小鼓 六藏》《太鼓 八左衛門、笛 宗十郎》

少五郎 田村、權右衛門 《大鼓 少二郎、小鼓 清二郎》《笛 市右衛門

七大夫 東北、小隼人 《大鼓 九郎兵衛、小鼓 小左衛門》《笛 少兵衛

七郎 道成寺、彦次郎 《大鼓 源右衛門、小鼓 小左衛門》《太鼓 左吉、笛 市右衛門》

少五郎 藤永、彦二郎 《大鼓 仁兵衛、小鼓 少左衛門》《太鼓 八左衛門、笛 清左衛門》

權兵衛 海士、山科 《大鼓 源右衛門、小鼓 小左衛門》《太鼓 新助、笛 宗十郎》

七郎 善知鳥、市三郎 《大鼓 助三、小鼓 五郎左衛門》《太鼓 少兵衛、笛 長藏》

七大夫 山姥、彦二郎 《大鼓 小九郎、小 清二郎》《笛 彦九郎

權兵衛 祝言、山科 《大鼓 六兵衛、小鼓 九兵衛》《笛 七左衛門

- 一、御しとね、むらさき金らん
- 一、御刀かけしたん、せいし

注13 一 (※二 御風呂屋と御上り屋の区別無し。御風呂屋の二点の記述無し)

御ふるやかさり

たな二

- 一、御くし箱なし地御もん金かねかい

但中ニ小道具有

同

- 一、ついしゆの(基香)ほん、ほり物ふやう

- 一、かうろ、にしきて(基染付)うはくち

- 一、かうはし、金しやくどう(基銅)そきつき、ゑしたん

たな二

- 一、(基唐)あをかいのまる盆、ふちちうしやく(基しんちう)

- 一、重箱九重くるぬり、ふたニ柳つはめまきへ

- 一、染付ノたきから入

御座たへミのうへに

- 一、御しとね 面こん地ノ金らん、もん桜の花大小こうこう(衍)はいへり白

地の金らん

同(基 御座置ニ帖脇ニ)

- 一、御こしの物かけ、したん(基から木)

とこ

- 一、御てぬくいかけ、なし地御もんまきへ、もめん染御てぬくい式つぬの

同

- 一、たかやさんのいかう、御ゆかた三つ、内しろき一

たなわき二

- 一、したんのいかう、すかし物有

御ふるふとん、地白もめんき糸めい有、うらとんす、御下おひ三筋、

あかき、むらさき

注14 一

御せんちたな二

- 一、御かうろ、せいし

- 一、かうはし銀、ゑしたん

- 一、御うわさうり、すしのひろうと、うらとんす

- 一、御いりゆおけ、なし地御もんまきへ(※基 御風呂屋に記載)

- 一、(基御)たらい、なし地御もんまきへ(基忒)

- 一、ておけ同、忒つ

- 一、御きやうすいおけ、同

- 一、すいのふ、なし地、一つ、くろぬり

一つ

- 一、かいけ、同 一つ(基忒)

- 一、水舟くろぬり御もんまきへ(基忒)

- 一、御しきいた、なし地まきへ

へ

注15 一

同日御能

翁

親世

高砂、山科 《大鼓》 少九郎、小鼓 清次郎 《大鼓》 左吉、笛 市右衛

門 《》

全割

兼平、春藤 《大鼓》 九郎兵衛、六蔵 《笛》 清左衛門

七太夫

湯谷、権右衛門 《大鼓》 源右衛門、小鼓 小左衛門 《笛》 少兵衛

一、書物 新続古（今九）金

（基 左ノ次ノたな）
たなニ

一、せいしやうなごんまくらぎょうし

（基 （なんとわき） 下たなに）

一、硯箱 なし地まきへ

杉原たんざく（短冊） ■■■ 「かみ」（紙） 九枚

（※基 次之間）

一、たいす、黒ぬり金（金子）のかなこ

一、かま、金あられ、（唐松）からまつ

一、ふろ、銀もん有

一、水こおほし、銀

一、水さし、金

一、ふた置、銀もん

一、くわん、金

一、ひしやく、もん銀

一、きしの茶わん（床地）ノ台

（基 左之棚ニ）

一、けんさんの茶わん

注12 一

ひろま

一、さんふく一つい、りゆう、かまてつかい、とら

一、りやうのまへ（折卓）しよく（折卓）すはた、松のしん鶴ノらうそくたて

一、かまてつかいのまへ（折卓）しよく（折卓）きやうじ、金らん松のしん、うちそう

のかうろ、かねのはこ五つかさり

一、とらのまへ（基）しよく（折卓）すはた竹のしん

たな（基）むかへハ左ノ方棚ノ中棚ニ

中ノたなニ

一、まわりかうろ、墨共（共）

左ノたなニ

一、きくすいのまきへ、（沈）ぢん箱

右ノたなニ

一、ついしゆのちきろう（食籠）

同ほん（盆）

たなの下ニ

一、しよくすなの物しんこけむしの木

書院左ノはしらに

一、しもくかけて（榎木）二つくき

右のはしらに

一、ほつすかけて（私子）

一、くわんしやうつくて

中ニ

一、けんびやうの前（私子）さいの水入、かねのものまへ（私子）かわら硯

一、けんびやうの左（私子）筆す（私子）き、かうらい

一、筆す（私子）きの左（私子）あまりやう（天竜）ひつか、かねの物、まるす（丸墨）ミ

一、筆さんこしゆの【つく】「ぢく」、す（墨留）ミとめかねの物ノたち花

一、ひつかの左（私子）ぢくの物、盆ついしゆ

一、けんひやうの右（私子）けさん

一、けさんの右（私子）ついしゆ（私子）いんろう、同盆

一、いんろうの右（私子）せん（仙臺）さんびん、くちけんひやうのかたへ、花せきちく

上たなニ

一、御座た（私子）ミ

一、御しとね、もよきの金らん

一、御刀かけ、まきへ

下段

一、御座た（私子）ミ

一、新（古今和歌集）こころん 四さつ式箱

但（八雲御抄）ひやうしもへきの金らん

二、やくものほんしよ 六さつ一箱

御しとね 一つ

但（撰綴子）金らんとんす（二）

一、御こしの物かけ 一つ、但（撰）なし地御もん、金かないまきへ

一、御手ぬくいかけ 同

一、御ちやうすつき 同

た（孔雀）ちいまきへ

一、くじやくかねのこうろ、一つ

一、硯箱 同、なし地まきへ

一、いかう（衣桁） 二つ、なし地まきへ

一、古き屏風 一羽、但すみよし法眼の筆

一、古（台子）【■】「屏」風かたく

一、たいす 一かさり、なし地御もん、金かないまきへ

一、染付【まん】「三」ぞくのかうろ、一つ

注11 二

大書院のかさり（基 黒御書院御飾）

一、かけ物、月のへ（絵）ぎよつかん（五）

二かいたな二

「一、しよのかうろ、せいじ

中（の）たな二

一、ついしゆの香箱

同

「一、しんちうのこうはし

書院（二）

一、すな（二）の物、はちからかね

十三せき

「一、けんびやう

二、かわら硯

一、水入せいじ、人かたたい（形カ）こ（大鼓）

一、くるま（車）こ（興）しのひつち但（昔）からかね（金）

一、筆じくざうけ

一、筆すゝきからかね

「一、新（基 次ノ床、なんとワキたな）きん、上下ていか、まきほん

「一、いんすの立花、但黒くるく（袋たな）の盆（二）のる、立花五つ枝花不（焚）有、色く（焚）たき

一物入

一、桶（番戸）かうろ、せいし

一、（基 かけまき）中棚（二）

一、ついしゆのかう箱

一、かうはし、銀かねの物（白灰カ）しろはいおし

一、（基 上ノ棚カ）

「一、ついしゆの盆

一、せきしやうはち、かねの物

上（たな）したに

上のたな二

一、ついしゆの食籠くるく（二）の盆（二）のる

（基 左ノ次ノたな二）

一、あをかいの茶わん台、茶わんけんざん

袋（たな）二（基 右下次ノ下棚）

一、書物、四書大全

（基 下ノ棚）

一、巻物【二つ】

袋（たな）二（基 書院床）

一、御茶入、ふちなすひ、但かんとうの袋
 てんもくのだい、茶しやく、おりへ
 茶せん、茶きん

中たな三

一、ひさく

下二

一、かねの物、つは水さし、ともふた、もゝ枝折のふた置、かねの物
 一、しさい(自在)

一、かま、むきミつかん、但のかつきつる、くわんしんちう(環真論)

一、かね多ふこの水さし

一、さいろうニすミくミて、しんちうのひはし、かつてのたなニついしゆの香
 箱

くさりの次、かさり

とこに

一、やうそのかけ物《但からき、りきうのしよく、かねの物、かめの香ろう》

書院

一、すなの物

端ノたなうへのたんに

一、ついしゆの硯箱

一、同間の左ノ方ニ文したな

一、地くれない盆ニ香箱りうきう物、四方まわりの盆、あしの香ろう、かうは
 し盆ニのる

一、しゆしに 《ニさつ、じつてい》

一、同間のとこに、きじ水したな

一、旅硯箱《りうきう物、しんほち大このひつか》

左二

一、からのおしへ小屏風

注 10 二

こ書院かさり

一、かものかうろ 一つ

一、かうだい、但ほり物 同

一、硯箱 同

但なし地ニ銀とさんこじゆ□□菊立花有

一、てかゝみ 二つ、一つハたんさく、一つハきれ(初)

一、染付かうろ 一つ

一、ひしの盆 同

但 (堆脱カ) しゆのほり物

一、ついしゆのかうろ、一つ

一、しゆのほり物、菊の盆、同

一、染付くちへ(口紅)のかうろ、同

一、ついしゆのかうろ 同

一、かうはし 老羽

一、こきん 一さつ一箱(冊)

但ひやうし梅(表紙)にうくひすのにしき、なし地(裏)まきへ箱ニ入(梅絵)

一、ごせん 三さつ一箱(後撰和歌集)

一、しうい 二さつ一箱(拾遺和歌集)

但ひやうし(紺)こん地梅(紺)に鳥のにしき

一、ごしうい 一さつ一箱(後拾遺和歌集)

但ひやうし(形)こんち鶴人(形)かた

一、■くわ(詞花和歌集) 一さつ一箱

但ひやうし(社母)こんち(社母)きんらん梅(社母)はたんから草

一、せんざい(千載和歌集) 一さつ一箱

但ひやうしあさ(表)【き】(表)【ぎ】のし(紙)やした金(紙)かミ

一、きん(金葉和歌集)【やう】(表)よう 一さつ一箱

但ひやうしあさ(冊)きの金(冊)らん

今枝民部
生駒内膳

一、銀子 三十枚
御捨 三

脇田帯刀

注8 二
相国様より御拝領

銀、百枚

小袖、五つ

安房守

同 山城

裕、五つ

小袖、三つ

对馬

同 九郎左衛門

同 河内

銀、五拾枚

同 大膳

同 因幡

同 宮内

小袖、三つ

裕、式つ

信濃

同 下総

同 勘兵衛

銀、三拾枚

同 民部

同 内膳

同 帯(刀脱)

注8 六
相国様より

銀子 式百枚

御家老衆拝領之次第

一、御小袖五 宛
御捨 五

横山々城守
本多安房守

一、銀子 五十枚
御小袖三 宛
御捨 三

前田对馬守
長九郎左衛門
奥村河内
横山大膳
小幡宮内
奥村因幡

神谷丹波守

銀子 三十枚

一、御小袖二 宛
御捨 二

富田下総守 (※基準史料では不記載)

津田勘兵衛

今枝民部

生駒内膳
脇田帯刀

注9 二 (※語順の異同は取り上げない)

くさりのまかさり

一、くるく／＼のひつか、たし人しかねの物

一、まるすゝり、したんのふた

一、きし、しゆの三ひつ、しゆんせい、さいきやう、ていか

一、どう、同 どうたき

一、のかんのははうき

「 彘ひす、ひしやワん、権丞

庄

一、清経 金七郎《大 庄九郎、小 □左衛門》笛 宗十郎

「子ぬすへ 弥右衛門

權

一、千手 彦二郎《大 九郎兵衛、小 六蔵》笛 左太郎

「うつほさる 仁右衛門

庄

一、舟弁慶 権右衛門《大 仁兵衛、小 少左衛門》《太 彦九郎、笛 宗十郎》

郎

中入

權

一、自然居士 彦二郎《大 庄九郎、小 六蔵》笛 長二郎

「さつまのかミ 権丞

今

一、三輪 彦二郎《大 庄九郎、小 六蔵》《太 八右衛門、笛 長蔵》

じとうほうかく 権丞

一、鶉飼 権七郎《大 仁兵衛、小 少左衛門》《太 宗右衛門、笛 長蔵》

ぶあく 弥右衛門

庄

一、祝言《大 仁兵衛、小 久兵衛》《太 八右衛門、笛 宗十郎》

ノ

右両御所様被_レ為_レ成刻如_レ此候也

注7
ロ

一、五月二日御成_ニ依_テ御国持衆

注7
二

將軍様御拝領

拾、貳拾 安房守

銀子、三百枚 山城守

同 同 九郎左衛門

御拾、拾 河内

百枚 宮内

同 同 大膳 同 因幡

同 同 同 同 同 同

(基丹波)

拾、拾 信濃

銀五拾枚 同 下総 同 勘兵衛

同 民部 同 内膳 同 帶刀

注7
ホ

將軍様

一、銀子 三百枚 宛 御家老衆拝領之次第

御拾 廿 横山々城守

本多安房守

一、銀子 百枚 宛 前田对馬守

御拾 十 長九郎左衛門

奥村河内

横山大膳

小幡宮内

奥村因幡

一、銀子 五十枚 宛 神谷丹波守

御拾 五ツ 富田下総守

津田勘兵衛

相国様

(圖) 古火
白炭

已寛永六年

卯月八日 御会クワイ

相国様 御茶被_レ為_二進申_一候

一、御かけ物 さいおう

一、御たな下_二 「耳つき御茶入

「羽掃 大鳥

一、御釜 くり口

一、御炭

○ふくへづんと切、くろさひ三角くわん、御次之間より出し御釜御あけ候後、
灰入出、ふくへのけてあとにをかせられ候、香箱くり出し後、竹柱之前_二有御
炭入被_レ成候、棚より羽はふき下_三羽箒之有所、火はしの下也

○御会席クワイセキ

御膳、杉之足(打)

ひしの白大皿_二塩匏、塩鳥、酒ひて、はりしやうか、けつり花かつほ、きんかんは
共_三

御汁_二塩鶴、竹子、しいたけ(椎茸)、ふくさ(楸紗味噌)

重箱、黒ぬり二重_二上_三かうの物色々、下_二焼鳥、かまほ(蒲鉾)、塩山升_二

坪皿

とりかい、御すい物(吸)

御酒、こへん

御肴

梨子 白鉢



御茶菓子

よりみそ
くわい、にて

枝柿

一、御茶入、都かへり、金之筒、一尺五寸、たけ御花入卯之花前へ少かゝる、

水指之きハミ、白キシやくやく(芍薬)

一、御水指、伊賀焼、共ふた(蓋)、九自

一、御茶碗、藤堂上ル、ワリかうたい(割高台)

同御茶入と置合

一、御水こほし めんつう

一、御竹輪 少ほそし

一、御うす茶なし(無)

後之御すミ取もとのふくへそことり、長ひはし(火箸)、次之間へ出し後、灰入
出、香箱、羽箒、有所、如_レ前

御相伴

くつ木ト齋(朽木元綱、牧齋)

橘飛驒守殿

已五月十日

御袋様御見物之時、御能組

一、翁 千歳、五郎兵衛、弥口才子

三番三、権丞

今

一、高砂 権七右衛門_二大 九郎兵衛、小 六蔵_二太 惣右衛門、

今 笛 長蔵_二

一、

一、

中百八十人、右三日ノ御能トモニ樂屋奉行津田勘兵衛重次、浅加左□□今三〇
 役者 ワキ、山科、春藤、権右衛門、左太郎、弥次、高安、市三郎、金十郎、
 〆八人

大鼓、庄二郎、九郎兵衛、源右衛門、助三、庄九郎、徳田、三助、仁
 兵衛、〆八人
 小鼓、清二郎、六藏、小左衛門、五左衛門、清九郎、久兵衛、〆六人
 太鼓、左吉、彦九郎、宗右衛門、新助、長右衛門、八右衛門、〆六人
 笛、市右衛門、清左衛門、少大夫、長藏、少兵衛、三四郎、長兵衛、
 宗十郎、〆八人

注4 〆 五月二日猿樂への下され物

大夫三人 〆 御小袖三、内唐織老宛 《竹田権兵衛、喜多七大夫、保昌大夫》

御小袖 式百人 於「舞台」被下之

御小袖 百五拾式 於「樂【屋】」〔舎〕「被下」之

〆三百六十 代物五百貫文

注5 イ

(左図) れたま、但床ふちの左の方より「すちかひて

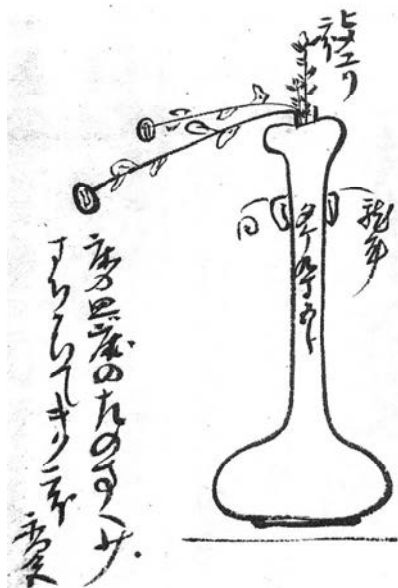
石竹花、竜耳 タテ九寸五分

香地(柑子カ) 口金物、同



(左図) ヒメユリ二本、竜耳、タテ九寸五分

床の廻(床の左の方へ少すちかひてキク二本、香色)



注6 イ

(※この記事は基準史料にはみられない)

卯月廿六日

將軍様御炭

(図) 割す(炭)

白炭

卯月廿九日



松平筑前守殿へ

参申候

当意即妙と何も
仰候

同廿三日晩、御下屋敷へ筑前殿御礼ニ御座候時、内藤外記殿、高木筑後殿兩人

も御座候、御居間之肥前守殿より 筑前守殿へ被_レ進候道具

一、御腰物《袋きんらん》一腰〔天本〕〔口 丈木〕

一、御脇指、同 一腰〔平野藤四郎〕〔口 吉光〕

一、木之目御茶入 壺

已上

注2 イ

將軍様へ御広間_{ニテ}進上、肥前殿より

一、御太刀、一振、友成《箱なし地御紋、袋にしき地、但銘織付ル》〔箱〕

一、御馬、一疋〔黒〕《しんく大ふさ御くらなし地、金御紋両ツ切付あをつくま〔櫛〕

手綱、紫あふみ、なし地沓十文字きぬとんす〔櫛〕

口

御馬 《星毛、御鞍置》

二

一、御馬 一疋、黒毛、御鞍置

ホ

御馬 壺疋〔黒毛、鞍置〕

注3 イ

猿樂共被_レ下物

一、代物、五百貫

〔ふたいニて〕〔舞台〕

一、御小袖、太夫分三ツ宛、但内一〔世〕から織

一、式百五 《観世、今春》

〔ふたいニて〕〔舞台〕

一、百五拾 《今剛、七太夫、ほうしやう》〔世〕

〆三百五十五

一、御小袖二宛、 惣役者中

注4 イ

五月二日

一、ぶたい〔舞台〕ニて 《大夫分ハ御小袖三宛、此内一ハ〔世〕からおり物》

一、御小袖二百八 《今春、七太夫、ほうしやう》〔世〕

一、がくや〔楽屋〕ニて 《元二郎、権兵衛、庄五郎》

百五十二

〆三百六拾 役者衆二ツ宛

〆 五百貫

一、代物

〆 五百貫

注4 ロ 1 四月二十六日条の御能の箇所

猿樂_ニ被_レ下物中、小姓大小将持出_ル大夫代物五百貫、小袖三ツ宛、惣役者百八

十人御小袖式つ宛

注4 ロ 2 五月二日条の御能の箇所

右四月廿九日_ニ猿樂_ニ被_レ下物無_レ之、今日一所_ニ被_レ下、代物五百貫、御小袖三

宛、今春、七太夫、保生、金剛、権兵衛、庄五郎 御小袖、式つ宛、惣役物

寛永六年御成 異同篇

異本 史料の番号と表紙等（加越能文庫の貼紙は省略）

イ「將軍様相国様御成之次第」（加越能文庫 特一六・一三一三〇）

（表紙裏貼紙）

「関屋市右衛門

水野七右衛門 組

板津作左衛門、上」

ロ「將軍様御成等覚」（加越能文庫 特一六・一三一三二）

（表紙貼紙）「十四」「七千三百六十三号」「す」「神尾孫九郎書」之

ハ「將軍様御成之節献上物等覚書」（加越能文庫 特一六・一三一三三）

（表紙貼紙）「七ノ卜六、」

（表紙）「 第九十九番

將軍様御成之節

献上物覚書 一卷

寛永度御成敷」

（端裏貼紙）「旧記之部九十九番 ≡二十七六ノ六、書□□□□」

「將軍様御成之節、御献上物等之覚書、但寛永度御成敷」

ニ「御成の次第」（加越能文庫 特一六・一三一三四）

（表紙貼紙）「八千百廿七号」……五」「肆」

（表紙）「御成ノ次第

2288

ホ「御成留帳」（加越能文庫 特一六・一三一三五）

（表紙）

「（貼紙）「……」 十一ノ中

御成富（留力）帳

（貼紙）「肆」

高沢牛之助」

ヘ「太閤并將軍御成記」（加越能文庫 一六・一三一三五）

（表紙）

「（貼紙）「肆」

（貼紙）

「太閤并將軍家御成記 完」

（以下中身、中略）

文禄三年四月八日（加越能文庫印、校了印、貼紙省略）

原本

前田貞醇

所蔵（後略）

異同 基準史料と異なる箇所傍線を引いた。

注1 イ

一、御脇指、袋金襴《銘織付》一腰（貞宗）

以上

巳四月廿三日

將軍様より引合候

中ニ加様ニ被レ遊候者也

光

紙末之下ニ

土井大炊へ上使

酒井讚岐へ其外

大勢御見廻、当座ニ

至て利光を御替

利常ニ御改被レ成候

墨、見(硯カ) 屏脇ニ 仙洞様御筆百人一首箱入、箱蒔絵扇(蓋)ふたの内山水有り、黒ぬり(蓋)

一、御書院之床青地、瓜之香炉、盆ニ乗り

一、御床 利休筆文 大ぬり(るカ) 山御掛物、金森宗和より上ル

けさの雪に御尋なきことさりとてハ大ぬる山にて候、併かの入御出ならハ道理ニ候、以上

牧兵(牧村利貞)太様

利休判

一、御茶之時、御墨跡ニふく(幅)なから巻、御花入金之物、薄板ニ乗、御花 黄

梅椿

一、御茶具

御釜、輪口

御水指、金之物

御茶碗、染付内はけ松竹梅

御茶入 蛭、中川

御茶杓、利休、竹輪

G12

御献立

ぬた(鰻)鱈ニ鯛、かふらほね、くいさめ、九年母ニ 御汁、鶴ニ土筆、うとめ(独活芽)、せり、しいたけ(椎茸)

御二

「鴨にとり(煮鳥)

「玉子

このわた

引て

御かう(香)の物

かまほ(蒲葎)こ

かに(蟹)

御汁、もつく

丸つけ瓜

杉重

大根

すし 鮎、うなき御皿ニ

あへもの、たいらき、ほうれん草、杉重

鶴(濃漿)こくせう(山菜) 《くつねり、わさび》

御吸物 《しろうを、よめがはき》

御酒(酒)三へん

御茶菓子《草餅、まめの子、いわしかけ、水くり》(縁)ふち立

G13

一、御寺作御書院ニ御入口土之間ニ鶴の火とほし

一、佛壇ニ親鸞上人名号十字

一、奥之御床ニ大黒之絵、雪舟筆

うとん(羅鈍) けいらん(龜卵)

御吸物 鮎(唐墨)からすみ

御さかな

御酒

御うすちや(薄茶)

一、御四ツ亭御床獅々の御香炉、金物

つゝみもち 御ふく高(縁カ)、やうし(揚子)

ふにて 同断

御吸物 はまくり

御酒

御薄ちや(茶)

一、御亭御風呂呂釜、五郎左衛門作(大西浄清)、年号月日五郎左衛門名置又

以上

青地(イ)の小鉢

あゆノすし(鮎)

御吸物

卯ノ花(煎)いりかう(甲鳥賊)いか

小鮎(煮)にてこ(濃味増力)ミそ(煮)へ味醬漬、小鮎

御肴

たいらき(興津鯛)

おきつたひ(煮)

水くり(金柑)

きんかん(唐墨)

からすみ(唐墨)

御菓子

よしみす(蜜柑)へより水

みつかん(蜜柑)

山のいも(芋)

御やうし(揚子)イくろもし、つねのことく

卯月廿九日(イ御数寄屋御料理之覚)

相国様

今焼本皿

なます(鱈)《たい、いか、くらげ、はしかみ、きんかん、けつり大こん》

御汁《青鷺、なすひ》

御食(イめし)

小いとめ(糸目)

こくしやう(濃茶)、たうふ(豆腐)

御二

御汁《つみ入、ほど》

(イ八寸)

やきとり(焼鳥)へ炙鳥、(水筒)イくつなもりこほし(水筒)へ盛籠《しほ、さんせう、たこ》

(イ同(八寸))

しほさんせう(塩山椒)イ塩山升

(イ同(八寸))

たこ

(イ同(八寸))

かう(香物)のもの

引物

四角赤絵(皿)のさら

いりやきほど

御吸物

卯ノ花(煎)いりかう(甲鳥賊)いか

御肴

たいらき

おきつたひ

なし(梨)(※イ「梨子」あり、へ「なし」無し)

御菓子

よしみす(芋)へイみす、へ水

山のいも

水くり

以上

(注6)

G11

於小松芦島三月三日御茶湯、御飾、御道具

一、御床、大灯国師、大文字、御墨跡

一、御棚ニ行成卿 軸物盆ニ乗り

脇御棚、鶴羽はうき(帯)、御香合(樽)そんせいぬり(塗)

一、上段御書院床ニ御硯、筆架、筆

同広間書院床^二

(下図) しもく^(撞木)ニツノ折釘^二はサミ^(扶)

一、左ノ柱^二しもく^(撞木)かけて折釘^二式

一、右之柱^三ほつす^(私子)かけて

一、喚鐘釣て

中^二

一、硯屏^(イ硯)

前^二

一、さいの水入、金之物

まへ^二

一、瓦硯

けんひやう^(硯屏)左^二(イ硯之左^三)

一、筆すゝき^(濯)、かうらいちやわん^(高麗茶碗)

〔筆すゝきのわき^(脇)〕

一、天竜の筆架^(イ下)、金物

からの

一、丸墨

一、筆さんこしゆのちく^(軸)

一、墨留、金【子】〔之〕物桶

筆下左^二

一、軸之物 堆朱之盆^二

ケサンノ右^(卦算)

一、堆朱之印籠

同堆朱ノ盆^二乗

印籠ノ右

一、せんさびん^(仙蓋瓶)《但口けんひやう^(硯屏)のかたへ^(方)、花石竹》

上段

一、御座畳

44

一、御しとねもへきの金らん^(蒲)

一、御刀懸まき^(時絵)へ

下段

一、御座畳

一、しとね紫金欄^(紫檀)

一、御刀懸したん木地

へ

一、右之花ハ何も池坊

一、右之鉾ハ何も福阿弥

此外台子廿七ヶ所^二在^レ之

[F]

(イ寛永六年) 卯月廿六日

(イ將軍様▲) 御数寄屋御料理 (イ之覺) (へ御茶堂福阿弥、生花師池坊龍越候)

今焼そめ付皿^(染)

一、酒ひて《たい、あわび、よりかつを、きんかん》

御汁《鶴、なすひ、こほう》

御めし

《小いとめ^(糸目)》

こくしやう、雲雀^(濃漿)

御二 御汁、小な^(鮎)へ

八寸

やき鳥^(焼) けりもりこほし^(鳥)

八寸

かまほこ^(蒲餅)

同

かうの物^(香)

御引物

やき鮎^(焼)

今やきもみち皿^(紅葉)

左ノ次ノたな^(棚)

一、けんさん^(建)の天目、唐の青貝盆^(イ台)ニのる
右下次ノ下棚^(棚)

一、四書 (イ両方ニ)《六冊、七冊》

下ノ棚^(棚)

一、巻本

歌合式巻

左之棚^(棚)

一、けんさん^(建)ノ茶碗

大御所様之時ハけんさん^(建)ノ茶碗斗、石菖^(菖)はちのけてほねはき^(骨)イはき^(は)のつほ^(骨)

式置候、から物也^(唐)

一、黒きくるく^(籠)の盆に

堆^(イ椎)朱^(朱) そめ付^(染)イの香炉

香匙

火はし^(箸)

あけまき上ノ棚^(揚)イニ

一、青地唐獅子^(イの)香炉

中棚^(棚)

一、堆朱ノ丸キ香箱

一、しんちうかうはし^(真)

なんとわきノたな^(納戸)

一、くるく^(籠)ノ盆にほり物ノ印籠^(影)

下^(イ之)たなに^(棚)

一、硯箱

(イまさき^(蔭)、同)杉原

一、上段

一、しとねにしき^(蔭)

一、御座畳金らんへり^(欄)

一、御腰物懸高蔭絵^(梨)イなし地^(地)

E-11

次之間

一、台子

くろぬり^(黒塗)イくつすり^(イ)四方ノはしら^(柱)いんす^(印子)イの

金貝

一、釜、金子

一、くわん、金子

一、水指、金子

一、風呂色々紋在り、銀子^(風好)

一、水こほし、銀子

一、ひしやくたて、銀子^(柄杓)《ひしやく常の》

一、ふたおき、銀子、桃^(イ梅)之枝折

E-12

イ▲御広間^(注12)

一、イ上段 床、三幅一對《竜、イかま 鉄拐、虎》

中尊釘三ツ^(三)かゝる、脇ハ左右共^(三)中ヲはつして釘二ツ^(三)かゝる

一、竜の前に 卓子^(卓)

一、うすはた、松の真、鶴^(蠟燭)らうそく立

一、イかま てつかひ^(鉄拐)の前^(折)に卓に、香ヒ、火はし^(箸)

一、花瓶 松^(イ)真

一、亀の香炉

一、金の香はこ^(箱)

一、虎の前^(前) 卓子に

うすはた竹の真

むかへハ左ノ方棚ノ中棚^(棚)

一、まかり香炉

一、沈箱 菊水ノ蔭絵

一、堆朱ノ食籠、同盆

棚ノ下^(棚)

一、卓^(三)砂ノ物、真^(蔭)こけむし^(木)イかけむし^(イ)の木

一、上段^二

ノ香炉

御蓐紺地の金欄、藤の紋在、御刀掛御紋(イ)の蒔絵

(次ノ南ノゑんノたな^三)

一、御手水たらい御紋かなかひ、(イ同)御手水次同断(イ蒔絵同前)

一、御手巾懸から木、御手巾、式

次ノ間ノ棚^二

一、御硯箱

地

《蒔絵、山水古木さん^三樹にて橘銀なし

同杉原巻帖

同間(イニ)

一、上之段棚^二

孔雀之香炉

同下棚^二料紙、硯箱蒔絵

一、南之縁かわ^三衣桁、蒔絵常ノいかう^三替ル

一、次之間折廻シ(イ貝付之)棚ノ脇^三衣桁まき^三常(イ)の^三替ル

一、南東之角^三屏風かた^三先年御拝領之屏風、住吉法服(イ眼四字)イ

季ノ絵

次ノ間東ノかた見付^三

一、古筆之屏風かた^三此屏風のむかひに右之御拝領之住吉法服(イ眼

之かた^三立、一双方也

(次ノ一間東ノ方^三ゑんかわ^三)

一、台子爰(イ是^三かさり^三イる)

一、上之棚、香炉染付、かうはし(イ※御雪隠に記載)

一、足打^三や^三はらかみ(イ※御雪隠に記載)

一、御せんちん^三

一、緒ふとのさうりひろうと右にあり(イ置)

一、ゑんかわ^三うわさうり巻足

E-10

(イ〇)黒御書院御飾(イ黒書院)(注11)

一、御床、月ノ絵ノ御掛物、前之下^三式重棚四ツ柱^三紫の大ふさ^三在り

冠夕ナ也

(イ廿六日ニハ

一、床二月の絵かけ物

廿九日ニハ)

一、同床^三定家之十五首之大幅之御(イ也)掛物

書院床(イニ)

一、重岩 一、(イ新)引続古今

一、瓦硯

一、杉原式帖

一、短尺(イ冊)ノ地五(イ九)枚 短尺カ

一、硯屏

一、筆下金ノ物 象

一、唐墨 筆軸象牙(イ※筆軸と唐墨は別項目)

一、文鎮

一、水入 青地人形

次ノ床^二

一、うすはた立花 池坊作(イうすはたニ花入、作池坊)

なんとワキ^三たな(イなんとワキのたな^三)

一、くるく^三唐の丸盆にいんすの花枝折、横にす^三て(イ入置也)金之打枝カ

左ノ下ノ棚^三板^三置^三あり

一、鶴くひ^三ノ茶入、袋^三不^三入

左ノ次ノたな^三

一、清少納言枕草子

上ノ棚(イニ)

一、くる(イり)く^三ノ堆(イ堆)朱、六角ノ食籠

同堆(イ堆)朱之くるく^三丸キ盆にのる

- 一、御入湯涌、梨地（イ蒔絵）
- 一、水入桶、同紋（イなし地蒔絵、茶之丸）

E-7

（イ同）御上り屋（注13）

- 一、堆（イ椎）朱ノ香（イ青）盆（イニ、ほり（彫）（イ物）ふよふ（芙蓉））
- 一、にしき染付うは口のかうろ（香炉）
- 一、かうはし金（イと赤）銅（イと）そきつき、柄したん（紫檀）
- 一、焼から（イたき物）入そめつけ（染付）
- 一、唐（イ之）青貝ノ丸盆、ふちしんちう（緑真鍮）
- 一、九重の香箱くろぬり、ふたに柳につはめ蒔絵（黒塗）
- 一、御手巾懸いつかけなし地御紋ノ蒔絵、但式ツかゝる、布そめ手巾木綿かねきぬ（金巾）
- 一、御ゆかた三ツ（イ之内、白キ菘、上に菘、下に式（イ染物ニ、但たがやさん（鉄刀木））の御衣桁ニ腰板（イ脇）すかし
- 一、御下帯三筋之内、赤キ（イ紅）菘、むらさき式、中にかゝる（紫）
- 一、御風呂ふとん、したんのいかうの上、おもて木綿より金のからくさ（衣桁）（緑）（唐草）（イうらとんす）（梨）（裏散子）
- 一、御櫛箱なし地御紋かなかひ内小道具共ニ在（金貝）
- 一、御座畳二帖脇ニ御腰物懸在りから木（唐）
- 一、御しとね面ハ紺地金襴、紋ハ桜（イ梅）の花大小こうはい（イこうかう（衍カ）はい）のへりし【く】【よ】（イ白）地の金らん（紅梅）

E-8

御せんちん（注14）

- 一、かうろ 青地（香炉）
- 一、かうはし銀、柄したん（紫檀）
- 一、御うわさうり筋ノひろふとらとんす（上草履）（ヒロロード裏散子カ）
- 一、御たらひ蒔絵、式（盤）
- 一、御行水桶まきへ、式（蒔絵）

- 一、御手桶蒔絵、式

- 一、（イ御）すいのう蒔絵（イ御紋）、式（水義カ）

- 一、かいけ、式（掻簡）

- 一、水舟黒ぬり御紋蒔絵、式（塗）

- 一、御敷板なし地御紋蒔絵（梨）

E-9

（イ▲）白木之御書院御成之間（注10）

御飾之次第

- （から）

- 一、卓子ノ上（イニ）

- 一、棚ニ

- 一、杉原老帖上ニ硯箱さんこしゆ銀梨地（珊瑚樹）

- 一、堆朱ひしの盆、香はし、から（香）（唐）

- 一、香炉染付

- （次たなに）

- 一、堆朱之菊之盆ニ堆（イ椎）朱ノ香箱、香ろ口へに（梨）（紅カ）

- 井ノ次ノたな右之方

- 一、後撰集

- 同棚ノ中ニ

- 一、後詞花集

- かさねて

- 同棚左ニ

- 一、後拾遺

- 右ノ棚下段（イニ）

- 一、八雲抄

- 井ノ棚（イニ）

- 一、唐青貝ノ盆

鴨之香炉

手かゝみ

【炉】二二冊

拾遺集かさねて

金葉千載

（金葉和歌集）（千載和歌集）

《堆（イ椎）朱ノ香合（イ箱）、そめつけ

た、すかしあり、かねの物)

一、左のたゞみに(ニひとりニ)

一、杉原

一、木地の硯箱(イ唐木)《イ但》口わきまきへ、さんこしゆにて、梅の折枝(イ紋ニ)有《(ニ)から木、き地のすゝりはこ、さんこじゆ、しらかいにて、かうばいはくはい》

但、からき

一、右之方の棚に(ニたうこ右のたなに)

一、金林寺のすんきり筋かんとうの袋入、此すんきり大塔宮の作之由(ニきんりんじのすんきり、たゝしすちかんとうのふくろ)

一、三島(ニの)茶碗

一、茶杓利休

一、茶巾(ニちやせん入)

(イ一、ちやせん、しこにて)

一、たうこの内棚に

下伊賀焼ぬりふたの水指、かねのさるのふたおき

(ニ下二)

一、水さし、いかやき、たゝしぬりふた、かねのふたほき、つはき

左の棚に鶴の羽ほうき、左羽

一、いろり五徳入 《ふち黒柿、杉のきわふたして》

(イ座敷いろりふち黒かき、但杉之切ふたして、

ニ一、いろり、ことく、はかり入、すきのきりふた、ふちくろぬり)

E-5

(イ▲)二階之上(ニ二かいのかさり)

一、書院床(ニしよいんニ)

一、土佐の記(イ定家筆)(ニとさのき、ていかのきろく、三き)

一、古筆式冊内《定家ノ記【銀】【録】一冊、蒔絵梨地箱入テ》

一、上段

御しとね金欄

右ノ方したんの御刀(ニこし物)かけ、腰板(ニニ)すかし御紋

一、床三ツしたな古キ物、蒔絵、上にごすの四方かうろ

(ニふるきまさき水したな、上三四はうこすのかうろ)

一、床脇ちかへ(ニい)棚に

一、野雁の羽ほうき

一、東野州ノ三代集、蒔絵の箱入テ

(ニ三代集、とうのやしう、たゝしまき多の上二入)

一、左ノ上ノ棚

唐のほり物、もつかうなりの盆に、丸きうは口の古(イキ)染付のかうろ、

かううはし、金と銅のそきつき、但柄したん也

(ニ一、からほり物、もつかうなりのぼん、まるきうはくちのかうろ、そめつけ

一、かうはし、金しやくとうのそきつき、たゝしぬしたん)

但少すちかへてはしにあり

一、左の方の棚に

新古今、古筆(ニこひつ、しんこきん)、【養】【巻】本

(ニたゝし)からくわのはこに入、内梨地(イ筆者不明候)

一、左の下(イ之)棚

清少納言枕草子、蒔絵梨地箱入テ(イ筆不明)

(ニしたのたなニ)

一、せいしやうなこんのまくらさうし、たゝしなし地まさき多ノはこニ入れ

一、棚ノ下押入有(イ之)処板タ、ミ也

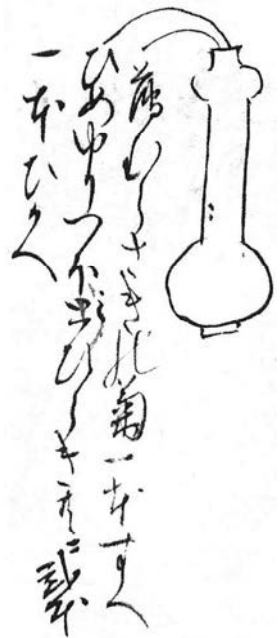
(イ則)其処之右ノ方唐の青貝文台内、(イ同)筆台在り

一、同間天井風鈴(イ絲)

一、同間南おもてあかり(イ之ぬり)障子ハ上段の分ハひいとろ也

E-6

(イ△)御風呂屋(注13)



- 一、水指 伊賀焼、友ふた^(蓋)
 - 一、木(イ之)村(イの) (ニこのむら) 御茶入、しゆかうとんすの袋^(珠光殿子)
 - 一、御茶碗、かうらいわりかうたい (イ但) 宗前也
 - 一、御茶杓、利休、異名善導 (ニぜんどう、但りきう)
 - 一、茶笥 ほうらい
 - (三一、水こほし いかやき)^(伊賀焼)
 - 一、御茶上様御達ニ入、日茶上林 (※イ茶杓・茶の記述無し、ニ茶の記述無し)
 - 両上様ながら被遊候^(平出)
 - 一、御立炭 (ニ御たちのとき) うへ様御すミ^(炭)
- E-3**
- (イ▲) 御鎖之間 (注9) (※イ筆下から紫檀の蓋まで「右之方ニ」に含まれる)
 - 一、御書院 《筆架(イ下)かねの物、筆軸く(イぐるく)》
 - 右方(イ之方ニ) 丸硯、したんのふた^(茶櫃)
 - 左ノ方(イニ) 俊成、西行、定家、三筆^(藤原)
- 右方折釘野雁羽箒、書院床の上とら出へそ内とうたきかゝる^(野雁)
- (イ) 同所ニとら虎(衍力) 出面ニて付とうたき、同右之方、折釘ニのがんの羽箒
 - 一、桐ノ袋棚ノ上(イニ)、御茶入富士なすひ、かんたうの袋^(前子)
 - 一、朱ノ台(イニ) 黄天目 《茶巾、茶せん(イほうらい)》
- 《茶杓織部置候、但しらミて》^(自力)

- 一、中棚^(金) ひしやく^(柄杓)
 - 一、同下ニかねのつはの水指、口廻りニ紋有、友ふた^(蓋)、取手雀
 - 一、水こほし、金の物多ふ^(銅鐘)
 - 一、ふたおき、金の物、柵(イ桂)の折枝
 - 一、自在釜(イ友)むきミツお^(木) (イか)ん、かつきつる、くわんしんちう^(鐵真鑪)
 - 一、御勝手の棚(イさいろ)う炭くミテ、堆朱の香箱(イニちよくさく)入テひはし^(英鑪) しんちう
- (イ○鎖次之間)
- 一、上段
 - 一、床^(宗題) 養叟之御掛物
 - (イ同) 床わきに
 - 一、利休ノ唐木ノしよく^(卓カ)
 - (イ四月) 廿六日(イニハ)
 - 亀ノ香炉
 - 廿九日ニハ
 - 青(イ清)地(イ之)獅子香炉^(紅)
 - 一、地くれないの盃、もつかうの香炉^(木瓜カ)
 - 一、琉球物四方盆^(イ四方盆ニりうきうもの) 染付ノ三ツ足の香炉、香はし^(箸)
 - 一、上ノ棚(イニ)、歌書二冊 《二冊実貞、一冊古筆》
 - 一、書院右ノ方ニ砂の物 《金のはち、池法作(イ作池坊)》^(地坊也)
 - 一、同間床 左ノ方の角ニ唐絵おしるの小屏風かたゝ^(唐)在り
 - 一、同間左ノ方ニ木地ノ三ツ糸(イ水し)の棚から木、上にかみおび硯箱りうきう^(紙帶)
 - 物、同上かミの上硯箱の右之わきニ間一寸ほど置、しんほち大^(新発意)この筆下、金の物
- E-4**
- (イ○) 二階ノ下だうこの間^(銅蓋)
 - 一、御床ニ三ツしたな蒔絵 (ニまきゑの水したな)
 - 一、上にかねの四方かうろ、友ふたすかし有^(蓋)之 (ニ上ニ四はうかうろ、ともふ

權 (口兵衛)

一、海士 (へい)、山科 (やまの) 大 庄 (おほの) 九郎 (くわ) 兵衛、小 小左衛門 (せうざゑもん) 太 宗右衛門 (そうゑもん) 宗十郎 (そうじゅうらう)

相、さき弟子、ぬけから、孫右衛門

(口今春、へ 權兵衛)

一、善知鳥、(へ 脇) 竹田 市三郎 (いちざうらう) 大 助三、小 五郎左衛門 (ごらうざゑもん) 笛 長藏

相、孫左衛門 (※イ 善知鳥以下、欠)

(口 權兵衛)

一、山姥、春藤 (はるふぢ) 大 庄九郎、小 清二郎 (きよじゅうらう) 太 彦九郎、笛 左太郎 (さたろう)

相、佐左衛門

一、呉服、金重 (いしげ) 郎 (らう) 大 仁兵衛、小 久兵衛 (ひさびやう) (イ 太 八右衛門) 笛

庄 (イ 宗) 十郎 (※イ 呉服、欠)

(口 祝言、庄五郎)

E-1

御成之時御飾之次第 (イ 御成之時之様鉢覚書)

一、御外露地の口から門外腰かけ、杉けた、(下懸) 多んのうち (イ 三、しゆるほう (採欄))

(き脱) かけ (イ しゆるほうき掛)

一、御内露地くより内右 (一) かさかい常ノ、(一) 多んさ一枚 (丹座)

内くよりの内より左 (イ) 之 はしら (柱) 二 わらひほうきかゝる (蔦)

一、ちりあなにうつみ香炉きやら (御座)

(イ) 御中立之時

一、御手水 (一) 杉かた口 (片) 湯、一同 水

一、檜木ノ足打 (一) ときまき (時給) へ (一) のうちわ置、其上 (一) 御手拭、但さらし (一) 御数寄屋けんくわに (女開)

一、(イ) 御数寄屋けんくわに (女開)

御くつつねのことく (一) おき (香)

廿六日 (一) ハ赤キ虎皮

廿九日 (一) ハ黒キ虎皮

一、すみ (一) の柱にしゆほうき、常のことくかゝる (イ 二 かけ)

一、長柄ノ御からかさ (唐傘) 式本

一、桐のけた (下駄) 式足

一、両面ノ竹子さうり (草履) 式足

一、柄切のからかさ 十本

一、竹子ひとへさうり (草履) 十足

右留之用意 (イ かけニ収て有之也)

E-2

(イ) 御数寄屋之内

一、御床 (一) 蜜庵之御墨跡 (ニ ミつあん、ほくせき)

一、中柱式重棚ノ下 (一) へくわんかへ (一) へいのかた (イ 三、大鳥羽箒)

一、ふくべつんと切炭

(イ 同) ひしのそめ付香合 (イ 炬) (イ ふた) (イ 高うりんでう (イ 役) 勅作入

リテ、火箸 (注5)

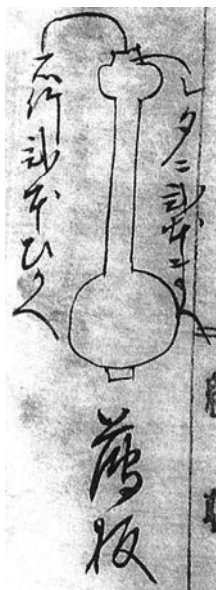
(二) 一、かま、やまみち (一)

御中立 (一)

一、御墨跡巻て、御床 (一) (ニ) うすいた (一) 三 (一) かうし口の御花入 (一) (三) 但かねの物 (一)

廿六日

將軍様御花 (左図) シタ (イ れたま) 式本まへ、石竹式本ひかへ、薄板



廿九日

相国様御花 (左図) 薄むらさきの菊一本すへ、ひめゆりつぼ (一) と (一) ひらき (一)

共 (一) 式本、一本ひかへ

權 (ロハニ兵衛)

一、花月、權右衛門 《大 九郎兵衛、小 六藏》 笛 庄兵衛

相、權丞、今參、熊藏、弥太郎

七 (ロハ 大夫、ニ 太夫)

一、舟弁慶、權右衛門 《大 九郎兵衛、小 【六藏】〔小左衛門〕(ハ六

藏)》《太 【清右衛門】〔左吉〕(ハ新助)、笛 市

右衛門 (ハ三十郎)》

相、弥太郎

親 (ロニ世)

一、項羽、高安 《大 庄二(三九)郎、小 六藏》《大 (イニ太)

清右(イ左)衛門、笛 長藏》(※ハ 項羽無し)

(イ一、谷行、山科《大 植田、小 清二郎》《太 清左衛門、笛 長藏》、ロ 谷行、七大夫、ハ

谷行、ワキ山科《大 うへた、小 清二郎》《太 左吉、笛 一右衛門》、

ニ 七大夫、谷行、同(ワキ)《大 植田、小 清二郎》《太 新助、笛 三郎》、ハ 谷行)

鬼清水(イ仁右衛門)

一、養(イ頼)老、春藤 《大 助三、小 五郎左衛門》《太 彦九郎、笛

七藏》(※ロハニ 養老無し)

(ロ 祝言、今春、ハ今春、祝儀、ワキ彦二郎、《大 助三、小 五郎左衛門》 笛 七藏、

ニ 金春、祝言、同(ワキ)彦二郎《大 助三、小 五郎左衛門》《太 彦九郎、笛 長藏》

D11

両御前様御成過、目出度翌日、土井大炊助殿、酒井雅楽殿、此外御年寄衆、

御出頭衆、国持衆之御振舞、御能有り(イ 両御所様御成過、目出度御祝儀翌日)土井

大炊様、酒井雅楽様、後出頭衆、此外之衆、御国持衆、何も見物被成、口衆ハ千々万(ニ御

出ニテ御次之事御振廻有之、

ハ一、両御所様御成首尾能相濟候ニ付、五月二日土井大炊頭殿、酒井讚岐守、其外諸大名方も

御所望ニ付、段々御出、御饗(心)

D12

五月二日猿楽衆(被下物(注4))

一、小袖 根台(二而)大夫分(三ツ宛)

一、式百人 今春、七太夫

一、かくや(兼屋)ニテ 宝生、金剛

一、百五拾式 權兵衛、庄五郎

ハ 三百六拾

一、銭、五百貫 御小袖、役者式ツ充

D13

同御能之次第(注17)

一、翁《千歳、弥次(イニ)兵衛、三番三、熊藏、弥太郎子》

權 (ロ兵衛)

一、竹生島、ワキ春藤《大 三助、小 六藏》《太 新助、笛 宗十郎》

(イきやけん)じしやく、熊藏

庄 (ロ 五郎)

一、田村、權左(イ右)衛門《大 庄二郎、小 清二郎》 笛 長兵衛

相、五郎兵衛、さぎ弟子、よねいち(イ伝右衛門)

七 (ロハ 大夫)

一、東北、(ロハワキ) 菜 小隼人《大 源右衛門、小 庄(イ小)左衛門》 笛

清左衛門

相、弥太郎

今 (ロ 春)

一、道成寺、春藤《大 九郎兵衛、小 小左衛門》《太 左吉、笛 市右衛門》

相、權丞、つ(イ弥)さい太郎

庄 (ロ 五郎)

一、藤永、高安《大 仁兵衛、小 少左衛門》《太 七左衛門、笛 新(イ清

左衛門》

相、弥太郎、三人かたわ

(ハ) 御小袖

一、御袷

一、綿

百

千把

筑前守様より(イ上ル)

御広間にて

一、御太刀《箱梨地御紋、袋銘折(付脱カ)て》

一振(ホへ腰) 守家

御書院三冊

一、御刀(ハニ腰物)《箱等なし、御もん金らん》(イ箱袋同)

一腰、長光

同

一、御脇指(ホへ刺)、同

一腰、景光(口重光、ホ志津)

一、銀子(ハ白銀)

三百枚

一、御服(ハニホ御小袖、ハ呉服)

五拾

千勝様ヨリ(イ上ル)

一、御太刀、袋(イ紫地)金らん(備)

ひる封(同)(イ御広まニて)

一振(ホへ腰、元重)

一、銀子(イ銀、ハ白銀)

式(イ三、ハ三)百枚

一、呉服(口御服、ハニホ御小袖)

卅

宮松様ヨリ(イ上)

一、御太刀、袋同(イもへき地金らん)

一振(ホへ腰、師光(ハ称次、ニホ秀光)

一、銀子(ハ白銀)

式百枚

一、呉服(ハニホ御小袖)

卅(ハ三)

(ニ相国様へ 御袋様より御進上

(ニ相国様へ 御袋様より御進上

一、金子

一、御小袖

一、大樽

一、白鳥

一、金ノ折

拾

式つ

式つ

老つ

拾枚

C19

右御礼過テ御能初(イ始)ル(注16)

御能之次第

此時為ニ上意「猿楽共、御くはり物出不レ申、見物一人もなし(イ猿楽共ニ被下物なし、見物一人も御入不レ被成候)

(イ今)

一、翁《千歳 八左(イ右衛門、弥右衛門子、三番三 弥右衛門》

引(ロハホ今春、ニ金春)

一、駕茂(イニかも、ロハホへ加茂) 春藤(ハニワキ、彦二郎)

《大 源右衛門、小 少(ハニホ少)左衛門》《太

惣左(イニホ惣右、ハ宗右衛門、笛 庄(ハホ少)

兵衛》

相、弥右衛門、(イきやうけん) せんし物、弥左衛門、弥二(イ太)郎

七(ロハ大夫、ニ太夫)

一、篤茂(イ篤盛、ロ敦盛、ハあつもり、ニ葛蔵、ハ実盛)、高安

《大 庄二郎、小 清二郎》(ニ太 左吉) 笛 清

左衛門

相、五郎兵衛、大はんにや、仁右衛門、権丞

観(ロハ二世)

一、井筒、山科 《大 源右衛門、小 小左衛門》笛 【目】(市)

相、弥右(イニ)衛門、いく(イぐ)い、仁右衛門、権之丞

一、御拾 卅

一、御脇指 (ホ刺) ≪袋紫地、金らん≫

(イ同所にて) 一腰、了戒

✂

御袋 (口寿福院) 様 (イへ被下物) (※ハ御袋様から家中の拝領無し)

一、銀子 式百数 (口牧、ニ枚)

一、ひち【ん】【り】めん (口ちりめん) 五拾巻

右近様御前様 (イ右近殿御前様へ被下物、口盛右近大夫殿御前様へ)

一、銀子 百枚

一、紅糸 (ニくれない) 卅 (ニ式拾斤)

✂

御万 (ニ廻) 様、

一、銀子 百枚

✂

おふう様へ

一、銀 (イロニ子) 百枚

✂

(イ年寄共拝領物、御広間次之白書院にて、お礼ハ大広まにて、口御家来中エ被下物)

年寄衆御拝領物 (注8)

一、銀子式百枚 本田 (イロ多) 安房守

呉服五 (イツ) (※口では「銀子百枚、御拾五」のみ)

(イ御あわせ五ツ)

一、同 横山々城守

一、銀子 (イ銀) 五拾枚 前田対馬守

(イ呉服、三ツ)

御あハせ五 (イ三ツ)

一、銀子五拾枚 長九郎左衛門

御拾五 (イ同)

一、同 奥村河内 (イ守)

一、同 横山大膳 (イ正)

一、同 小幡宮内 (イ少)

一、同 奥村因幡 (イ守)

一、銀子三拾枚 神谷丹波 (イ守)

(イ呉服、三ツ)

御あハせ三 (イツ)

(イ一、同 富田下総守) (口同断、富田下総)

一、同 津田勘兵衛

一、同 今枝民部 (イ少)

一、同 生駒内膳

一、同 脇田帯刀

一、同 (イ已上)

C18

御進上物 肥前守様 (イ)

一、御太刀 ≪箱梨地御紋、袋御紋錦銘折付て≫ (イ袋にしき御紋、銘織付)

一、御馬 (イ大ふき紫、くらなし地金葉三ツ宛切付から鏡、鍔なし地、杏十文字、手綱紫)

一、御脇指 (イ大ふき紫、くらなし地金葉三ツ宛切付から鏡、鍔なし地、杏十文字、手綱紫)

一、御馬 (イ大ふき紫、くらなし地金葉三ツ宛切付から鏡、鍔なし地、杏十文字、手綱紫)

一、御馬 (イ大ふき紫、くらなし地金葉三ツ宛切付から鏡、鍔なし地、杏十文字、手綱紫)

一、御馬 (イ大ふき紫、くらなし地金葉三ツ宛切付から鏡、鍔なし地、杏十文字、手綱紫)

一、御刀 (ニ腰物) ≪箱梨地御紋、袋金らん銘折付て≫

(イ御書院にて上ル) 一腰 (イ御書院にて上ル)

(頭書) 『下』

一、黄金 (ハ金子) 式百枚

(頭書) 『上』

一、御脇指 (イ刺) ≪箱同、袋御紋銘共、おり付て≫

(イ戸川肥後守) 一腰、志津

(イ七大夫

一、定家、山科〔大〕庄二郎、小清二郎〔太〕惣右衛門、笛庄兵衛〔太〕

七 (イ大夫、ロ大夫)

一、善〔ハ〕界、山科〔大〕彦二〔ハ〕新九郎、小清二郎〔太〕惣右

衛門、笛少兵衛〔ハ〕右衛門〔太〕

(イ七大夫、ロ七大夫、ハ同、御こい能)

一、熊坂、春藤〔ハ〕同〔山科〕大植田、小六蔵〔ハ〕同〔太〕新助、笛

長蔵〔ハ〕同

(三金春、是寿、同春藤〔大〕植田、小六蔵〔大〕新助、笛長蔵〔太〕

(※ニ善界・熊坂無し)

(イ観三郎、ロニ観世、ハ観世大夫)

一、弓八幡、弥次〔ハ〕祝言、山科弟子、弥二郎、ニ弓八幡、同弥二郎〔ハ〕

大庄〔ハ〕彦二郎、小清二郎〔太〕左吉、

笛市〔ハ〕右衛門〔太〕

右猿樂被下物〔注3〕

一、代物 五百貫

一、御小袖 大夫分三ツツ、

一、舞台〔太〕観世 金剛

今春 宝生

一、式百五ツ、内 からおり六ツ

かくや〔楽屋〕

一、百五拾 三百五拾五

一、御小袖、式ツ、ハ 惣役者中へ

一、銭 五百貫

C17

黒書院〔太〕御盃之上〔太〕御拝領物之事

御道具御進物事并目録〔太〕御家老頂戴之事

卯月廿九日

相国様より 肥前守様御拝領物 (イ被下物)

一、御太刀 (イ書院にて、一振) 袋もよき地金らん (イ袋しゆす地、金らん、紋ス

イセン花ひほ紫、丸打) 一腰 (ニ振)、二字国俊 (ロつくし正恒、ハ

ホ正恒、ニ正常)

(三一、御馬) 一疋、御鞍置)

一、銀子 貳千枚

一、呉服 百、内裕五拾 (ハニホ御拾五十、御小袖五十)

一、八丈嶋 (ロ八丈絹、ニ八条嶋、色々貳百端

一、御脇指 (ニ腰物、ホ脇刺) (イ袋金らんこん地、からくさひほ紫、ひら打)

一腰 貞宗 (ハ真宗)

相国様より 筑前守様御拝領物

一、御太刀 (イ御書院にて) 袋こん地金らん (一腰 (ニ振) 一文)

一、銀子 五百枚

一、御袷 (ハ袷) 五拾

一、御腰物 (袋もよき地、金らん) (イいろかたのもの) 一腰 (ハニホ二字国俊、ロ二字銘国俊 (俊力)

千勝様御拝領 (イ被下物) 貳百枚 (ホ枚)

一、銀子 三拾

一、御脇指 (ホ刺) (イ袋あさき地ノ金らん、御書院にて) 一腰、来国光 (ハ国光)

宮松様御拝領 (イ被下物) 貳百枚

一、銀子 (イ銀) 貳百枚

一、御脇指 (イ銀) 貳百枚

一、銀子 (イ銀) 貳百枚

一、御脇指 (イ銀) 貳百枚

一、銀子 (イ銀) 貳百枚

一、御脇指 (イ銀) 貳百枚

一、銀子 (イ銀) 貳百枚

一、御脇指 (イ銀) 貳百枚

進上物

- 一、御太刀、一腰
- 一、御袷、式十
- 一、御太刀、一腰
- 一、御袷、式十
- 一、御太刀、同
- 御袷、十
- 一、御太刀、同
- 御袷、同
- 一、御太刀、同
- 同、同
- 一、同、同
- 同、同
- 一、同、同
- 同、同
- 一、同、同
- 同、同
- 一、同、同
- 同、同
- 一、同、同
- 同、同
- 一、同、同
- 同、同

本田(多)(イロハ多) 安房守(口政重)

横山山城守(口長知)

前田対馬守(ハ左兵衛) (口)(傍書)「左兵衛事」

長九郎左衛門(口連頼)

奥村河内守(口采政)

横山大膳(イ上)(口康玄)

小幡宮内(イ少)(口長次)

奥村因幡守(口易英)

神谷丹波守(口守孝)(傍書)「信濃事」

富田下総(イ守)

津田勘兵衛(口重次)

今枝民部(イ少)(口直恒)

生駒内膳

一、同、同

同、同

脇(ハ腰) 田帯刀(口重後)(俊力)

右御広間ヲ御進物上、御礼過て御能初ル

C16

御能次第(注15)

親 (イ世三郎)

一、翁

親 (ロハ二世)

一、高砂、ワキ山科

《千歳、梅若、三番三、権丞》

《大(イ太) 庄三(ハニ、ニ次) 郎、小清二郎》《太(ニ大) 左吉、笛市(ハニ) 右衛門》

(イ相) 権丞

狂言、あそぶ(麻生)、仁右衛門

引 (イ今) 【 】 (春) 七郎、ハ今春、ニ金春

一、兼平、春藤

《大 九郎兵衛、小 六蔵》清左(イ右) 衛門

あくほし(イあほほ)、弥右衛門

七 (イロニ) 太夫、ハ大夫

一、ゆ熊野や(イハ)湯谷、ニ熊野、権右衛門

《大 源右衛門、小 小左衛門》(イハニ) 笛庄(ハニ) 兵衛

なき尼、仁右衛門

權 (イ今) 春権右衛門、口 権大夫、ハニ 権兵衛

一、鶉(飼脱力)、彦二郎(ハニ) 高安 《大 助三、小 五郎右(ハニ) 左衛門》《太 彦九郎、笛 長蔵》

相、五郎兵衛

七 (イニ) 太夫、ロハ大夫

一、自然居士、ワキ山科 《大 源右衛門、小 小左衛門》笛 市(ハニ) 右衛門(ハニ) 左兵衛、ニ庄兵衛

一、銀(ロハ子)五(ロハホ十)枚 神谷丹波守(一) 丹波守孝

一、御裕五(ロ十、ハホ五ツ) 富田下総守(一) 下総直吉

一、同 津田勘兵衛(一) 重次

一、同 今枝民部(一) 直恒

一、同 生駒内膳(一) 直義

一、同(ハ)御裕五ツ、銀子三十枚、ホ銀子三十枚、御裕三

脇(ハ)腰 田帯刀(一) 重俊

(※へでは前田対馬から脇田帯刀まで同じ) 白銀百枚、御裕十

C15

御広間ニテ上ル

御進物 肥前守様ヨリ

一、御太刀、箱梨地(ニ)御箱蒔絵御紋 一腰(ニ)振、友成(イ)箱なし地御紋、

袋にしき地、但銘織付ル、ハまき糸のいへ(ニ)入

一、御馬 一疋《黒毛、御くらおきて》(注2)

一、御刀《箱梨地、かなかひまき》《書院ニテ上ル》

一腰 真寺

(三) 一、御腰物、御箱蒔絵御紋 一腰、貞宗 ※誤写カ)

一、御脇指《箱梨地、【具】〔具〕つくしかなかひまき》《同》

一腰、長銘正宗(ハ)正宗、るりめい同箱ニ入、

ホ 正宗長銘

一、金子、百両作り(ニ)ホ拾枚作り 卅枚(ハ)拾枚、作三十枚《御広間と目【銀】

〔録〕ニテ上ル》

一、御裕 百、御広間ニテ

一、呉服(ハ)ニ御小袖 百(ニ)式百、同

一、加賀染絹(ホ)加賀染 五十端、同(ロ)ハニホ百

一、綿 式千(ニ)千)把、同

一、猩々皮 卅間、同

(イ)右いづれも御目録)

將軍様 筑前殿ヨリ

一、御太刀(イ)箱梨地御紋、袋きんらん、ニ御箱蒔絵御紋

一、御刀(イ)ハニ御腰物) (イ)同箱、袋同) 一腰、包永

(ニ)銀子 御広間 五百枚)

一、御服(イ)呉服、ハニホ御小袖 五十、同

一、綿 千把、同

一、御脇指(ホ)刺) (イ)同箱、袋同) 一腰、当麻

將軍様(千勝殿より

一、御太刀《袋紫金らん》(イ)袋紫地、金らん紋有)

一、銀子 式百枚

一、御服(イ)呉服、ハニホ御小袖 五十

一、御太刀《袋もよき金らん》(イ)袋もへき地紋金らん) 一腰(ニ)振、末守

一、銀子 式百枚

一、御服(イ)呉服、ハニホ御小袖 五十

宮松殿より

一、御太刀《袋もよき金らん》(イ)袋もへき地紋金らん) 一腰(ニ)振、末守

一、銀子 式百枚

一、御服(イ)呉服、ハニホ御小袖 五十

(三) 將軍様江 御袋様【御拜】〔より〕御進上

一、金子 式拾枚

一、御小袖 拾

一、大樽 式つ

一、白鳥 式つ

一、金ノ折 壹つ

(

- 一、御盃之上^{ニテ} 御拝領物事
- 御道具御進上物事
- 御目録^{ニテ} 御家老衆頂戴之事
- 將軍様^{ヨリ} 肥前守様御拝領
- 御太刀
 - 一腰^{ニ振}、二字国俊^{イ袋地こいあさき} 紋、雲竜之金^{（亀甲）}
- 御腰物^{（ハホ脇指）} ^{（イ袋もえき地、きつかう金入）}
 - 一腰、秋田正宗^{（ハ長めいの正宗、ホ長銘）}
- 銀子^{（ハ白銀）} 三千枚
- 御裕 貳百
- 呉服^{（ハニホ御小袖）} 百^{（ハ領）}
- 御寝衣^{（口御ね衣、ニからおり御夜物、ホ御夜物、ヘ夜着）}
 - 貳拾^{（ハ之内、十からをり）}
- 羅紗^{（ハニホ猩々皮）} 參拾^{（ハニホハ間）}
- 筑前守様御拝領
- 御太刀
 - 一腰、真長<sup>（イ貞長、ハめい不知、ホ真守、
ヘ貞宗）</sup> ^{（イ袋こん地、金らん、紋いろ^{（鱗形）}かた^{（宗？）}）}
- 御脇指^{（ホハ刺）} 一腰、【真】真宗^{（ニ真宗、ホハ貞長）} ^{（イ袋もへき地、金ふしの丸）}
- 銀子^{（ハ白銀）} 五百數^{（イロハホハ枚）}
- 御裕 百
- 千勝様^{（利次）} 江御拝領
 - 一腰、守家^{（イ袋あさき地）}
- 銀子^{（ハ白銀）} 三^{（口貳）} 百枚
- 御裕 五拾
- 宮松様御拝領^{（利治）}
 - 一腰、長光^{（イ袋有）}
- 銀子^{（ハ白銀）} 三百枚

- 一、御裕 五拾
- 御袋様^{（口寿福院、ヘ御袋方）} ^{（※ハホ御袋様からおふう様無し）}
- 銀子^{（ハ白銀）} 貳^{（ニ三）} 百枚
- ひちりめん^{（口ニ卷物）} 貳拾卷
- 紅糸^{（イいと、ニくれない）} 貳^{（ニ五）} 拾斤
- 森右近様^{（忠次）}
- 御前様^{（ハ亀鶴姫）}
 - 銀子^{（ハ白銀）} 貳百枚
 - 紅糸^{（イいと、ニ卷物）} 貳拾斤^{（ニ卷）}
- お万様^{（ニ御姫様、ヘ満姫）} 百枚
- 銀子^{（ハ白銀）} 百枚
- 紅糸^{（イいと、ニくれない）} 卅^{（口廿、ニ貳拾）} 斤
- おふう様^{（ハ富姫）} 百枚
- 銀子^{（ハ白銀）} 卅^{（口廿、ニ貳拾）} 斤
- 將軍様^{ヨリ} 年寄衆御拝領物^{（注7）} <sup>（※ヘでは「銀子」が「白銀」
になっているが本稿では省略）</sup>
- 銀子^{（口貳）} 百枚 本田阿^{（イロハホハ多安）} 房守^{（ハ政重）}
- 御裕貳拾 横山山城守^{（ハ長知）}
- 銀子^{（口貳）} 百枚 横山山城守^{（ハ長知）}
- 御あハせ廿 前田対馬守^{（ハ左兵衛、ヘ対馬直正）}
- 銀子百枚 前田対馬守^{（ハ左兵衛、ヘ対馬直正）}
- 御あハせ拾 長九郎左衛門^{（ハ連頼）}
- 同 奥村河内守^{（ハ河内、ヘ河内栄政）}
- 同 横山大膳^{（ハ康玄）}
- 同 小幡宮内^{（ハ長次）}
- 同 奥村因幡守^{（ハ因幡、ヘ因幡易英）}

(口 三色火袋間ニおく筑前守様御礼被仰上御挨拶中川^左平衛門殿、右御礼奏者奥村河内采政

C-1

一、將軍様御下屋敷^立卯月廿六日(へ 家光將軍渡御、中納言利光邸(是月廿三日尊名改、利常称^肥前守)

御成之次第、天气快^シ御教寄屋^江御成、入御

(供^奉ブ、ハ)

駿河大納言様

橘飛驒守殿

御勝手ヨリ

藤堂和泉殿

(口 御相伴、駿河大納言様、立花飛驒守殿宗茂、藤堂和泉守殿高虎、朽木卜齋、南光坊、伝長老、^(元備)、^(天海)、^(以心守吉)、^(曲直瀬立辨)延壽院)

御茶被^レ為^レ上

御花御被^レ遊^ル(へ 御花、炭被^レ遊)

卯月廿九日 快晴

一、相国様

御成(へ 大相国秀忠公御勝手より教寄屋^江入御)

入御 供奉^ニハ

(水戸中納言様)

橘飛驒守殿

(イ 眼病^ニ付也) 御勝手ヨリ

藤堂和泉守殿

(口 御相伴、水戸中納言様、立花飛驒守殿、藤堂和泉守殿、朽木卜齋、南光坊、伝長老、延壽院)

御【成】〔茶〕被^レ為^レ上

御花、御炭被^レ遊也(へ 炭被^レ遊候、於^レ御書院^饗応等廿六日同断)

C-2

御教寄屋過^テ御黒書院^ニ御盃ノ次第、御書出^シノ写

一、献之御膳

一、御盃出、御銚子、御盃上ル、其御盃大納言様其御盃御前^上ル、其御盃肥前守頂戴、此間^{御道具被^レ下}、其御盃筑前守頂戴、此間^{御道具(挿入)被^レ下}、其御盃筑前守頂戴、此間^{御道具}進上被^レ下、其御盃御前^上ル、此間^{御道具進上}、其御盃千勝様頂戴、御道具被^レ下、此内^{御盃出御前^上ル}、其盃^{頂戴}、御道具被^レ下、其御盃御前^上ル、其御盃藤堂和泉被^レ下納^ル、(イ 筑前守殿迄^ハ)御盃、三方、御加^在リ(イ 御盃出、御銚子、御盃上ル、其御盃大納言様^へ、其御盃御前^上ル、其御盃肥前守殿頂戴、此間^{御道具被^レ下}、其御盃御前^上ル、此間^{御道具進上}、其御盃千勝殿頂戴、御道具被^レ下、其御盃御前^上ル、宮松殿頂戴、御道具被^レ下、其御盃御前^上ル、其御盃藤堂和泉守頂戴納^之、筑前守殿迄^ハ御盃三方^ニ被^レ下、御加有^之)

C-3

一、昼ノ御悦^悦(膳カ)(イ 御膳)

初献御膳、御銚子、大納言様、其次肥前守殿、其銚子御前^上ル、此間^{御吸物出^ル}、御加^{被^レ成}、御盃肥前守殿頂戴、其内^{御肴出^ル}、則被^レ下^ノヲ其盃藤堂和泉納^ル(イ 初献御膳御銚子出、次ノ御銚子も出候、二献同断、三献目御前^上ル、御銚子大納言様、其次肥前殿、其御銚子御前^上ル、此間^{吸物出^ル}、御^ハ被^レ成、御盃肥前守殿頂戴、其内御肴出、則被^レ下、其盃藤堂和泉守納也)

一、両度之御成之義式同前、御腰物御脇指并目錄ノ面ハ此御書院^ニ御進上^ニ、御親子共^ニ御太刀ハ御能之前^ニ御広間^ニ上^ル也

一、御書院^ニ七五三、御供衆五々三御相伴、晚^ニハ御料理振舞也

(へ 於^レ黒書院^{御盃}、於^レ書院^{七五三御饗}、御供中五々三、晚^ハ常之御膳、此時拝謁之仰下

C-4

御黒書院^ニテ

寛永六年御成

基準史料〔御成次第〕(加越能文庫 特二六・二三―三二)

(表紙)

一、寛永六年御成次第

肆

寛永六年御成次第 単

(扉題)

〔寛永六年御成次第 完〕

A (加越能文庫印)

寛永 卯月廿六日於江戶御下屋敷

兩上様中納言様御成次第、御道具、御飾

之目錄

此 御成記、石河正謙取持

大森三郎兵衛伝「来之一」

仍就後藤演乘献之

于時貞享丁卯初秋下旬

B

寛永六年巳卯月廿三日

肥前守殿 筑前守殿就御受領

將軍様 肥前殿拝領物

一、御脇指

一腰、米 (イロ米) 国次

一、御脇指

一腰、則国

將軍様 筑前殿

一、御腰物

一腰、正宗 (イツクシ正宗)

相国サマヨリ

一、御腰物

一腰、サミタレ江 (口さみたれがう義弘)

右為御礼御進上物

將軍様 肥前殿

一、御太刀

一腰、但黒太刀

一、御馬代

銀子參百枚

相国サマヘ

一、御馬代

同

一、御太刀

一腰、但黒太刀

將軍様 筑前殿

一、御太刀

一腰、信国

一、御馬代

銀千枚

一、御脇指

一腰、吉光

相国様ヘ

一、御太刀

一腰、青江吉次

一、御馬代

銀五百枚

一、御脇指

一腰、貞宗 (注1)

肥前殿 筑前守様 被進道具

一、御腰物

一腰《平野藤四郎》(口吉光)

一、木目

御茶入

卯月廿三日

駿河大納言殿 肥前守殿

肥前守様 同受領之時々

一、御太刀

一腰、備前保弘

一、御馬代

金子式拾枚

一、御袷

參拾

駿河様 筑前守様

一、長谷部国重

磨上物一腰

なます ^(鱈)	汁集
ふとに ^(太煮)	
やき物 ^(焼)	めし
二	
焼物鯛	
煮物さ ^(栄標) い	汁〈塩雁、ふ、椎茸〉
三	
青酢 ^(さし)	汁〈塩煮〉
かう ^(香) の物	
吸物蛤	
取肴色々	
(御能省略)	
御成之日 御台様	御子様達 ^江
御台様	筑前守進上之目録 (※以下の記述は他史料に無い)
一、御裕	拾
一、御単物	式拾
一、錦	五百把
一、銀子	三百枚
已上	
若君様	
一、御太刀	一腰 ^{国宗}
一、御腰物	一腰 ^{長光}
一、御脇指	一腰 ^{米田次}
一、御馬	一疋 ^{御鞍置}
一、御裕	三拾
一、絹	百疋

一、銀子	三百枚
已上	
御国様	
一、御太刀	一腰 ^{長光}
一、御腰物	一腰 ^{則重}
一、御脇指	一腰 ^{安吉}
一、御馬	一疋 ^{御鞍置}
一、御裕	二拾
一、銀子	式百枚
已上	
女御様	
一、御裕	拾
一、銀子	百枚
已上	
(以下、別記事省略)	

塩引 《かまほこ、亀足有》

汁集

あへませ同

香物同 こかく足打金 こおけ

あかりこ めし

二膳

干鱈小ちう金わ銀

海月同

貝盛かい金わ銀

あかりこ 汁《白鳥、椎茸、ふ入》魅

こんきり同

すし同

三膳

はもりこかく足打金 (羽盛)

辛螺金のわ銀

汁鱸

舟もり同

引物三種

五どいり金わ銀 吸物《ひれ物、はまくり》

盃之台之事

五せんさいしきの台

木地の台

おさへの物いろく

以上

一、三百人前、御歩之衆膳部

本

干鱈大ちう金わ銀

汁集

あへませ同

かうの物

めし

二

金銀 地紙《香の物、やき鳥、塩引、えひ、いか、さより》下膳

汁《塩雁、ふ、しいたけ》

三

青酢さし

汁すゝき(鱸)

金銀 (小桶) こおけ

吸物蛤

取肴色々

一、式百人前、御中間衆

本

一、梨
一、柏

一、胡桃（胡尾有）

御引替御膳之事

御本膳

なます（鱈）

御汁集

香之物

煮物（海松食）みるくい

御食

御二之膳

焼物（鱈）ます

貝焼

御汁竹子（鶴、椎茸入）

すし宇治丸

御三之膳

さし（刺身）ミ

御汁鱸

たいらき（焼鳥）

御吸物

鯉之味噌煎

はまくり（蛤）

御おさ（押）への物

おきつ（興津）たい

水くり

御菓子

さめかい（醒井餅）もちゐ

みつかん（蜜柑）

ひわ（枇杷）

（重ねて筑前守進上、広間へ移動、御能御覧省略）

御次之御三之間嚴之事

御打五合 数拾（金銀絵有）

一、塩引 かさり（飾） きそく（魚足）

やうかん（羊羹） 同 作り花

一、干鱈 かさり きそく

はす 同 作り花

一、生（小桶）いか 花

こおけ五十（貝取カ） 金銀絵有

一、かい（貝取カ）つくし 花

きりこ五十 金銀絵有

一、かまほ（蒲餅）こ きそく

きんかん（金柑）やき 葉作花

さいしきの台之事

一、鶴亀松竹之台 一膳

一、ふつきしんのうの台 一膳

一、山高滝（鯉、三つつれ） 一膳

一、長郎の台 一膳

一、源氏の台 一膳

一、竜虎梅竹 一膳

一、人丸之台 一膳

已上七膳

一、三つほし（星） 一膳

一、二つほし 一膳

右之折ほしの台、何れも折棚にかさり置候也、御目通之分は大形此分なり

一、五百人前、御供之衆五々三之膳部之事

本膳

大らう金わ銀 こかく足打金

あかりこ

大ちう金絵在、輪有
から墨(唐)

海老同
真羽煎あいの物金輪絵有

ふか同

三献

干鱈同
金ノわ有まそく

あいの物金輪絵有

辛螺

ひしほ煎

同
卷鰯

此三献二而御酒三献参り三献目に従二
守被レ為二拝領、則一献被レ下被納也
(筑前守拝領中略)

公方様潤州一文字、御腰物平野藤四郎筑前

公方様ヨリ筑前守母儀へ被下物

一、黄金 三拾枚

一、綿 三百把

以上

(家中拝領、広間での筑前守・家中の進物中略)

右御礼相済、御能始ル三番過、最前之書院江被レ為レ 成七五三之御膳出

公方様 御相伴

藤堂和泉

日野唯心

水無瀬

筑前守

御本膳

大ちう金わ金絵アリ

同

こがく金絵有、まきへあり

塩引

あへませ同(和交)

かう同(香)の物

御二ノ膳

卷するめこちうわ金絵有

貝盛金わ金絵有

同
から墨

御三膳

羽盛鳴は金小角足打金絵有

栄螺三盛金わ金絵有

舟盛海老

御菓子拾一種御縁高

一、焼麩、亀足とんほう

一、結昆布、作花

一、枝柿

一、密柑

蛸

御湯漬五と入金わ金絵有《御箸、御手塩》

同
ふくめ

御汁集あいの物金わ金絵有

同
くらし

御汁鯉

同
すし

御汁白鳥あいの物金わ金絵有

御汁鱸

御汁鱸

一、饅頭

一、大豆糖

一、油物

一、羊羹

「式十番より
二十九番迄」

(以下、袋の表面)

三十一上

(貼紙)「三十一上」

一、公方様御成之時御拝領物書立 尙通

一、元和三年 公方様松平筑前守殿^江御成之膳部記 尙冊

一、寛永六年松平筑前守殿^江御成之進物記 尙冊

一、此方御成之時御進物^并式礼条書 尙通

一、御成御作事御注文 尙通

一、御成之道具条書 尙通

(以下、裏面)

一、御成^二付江戸^并御国元^三御調書物 式通

一、御成^二付於^三京都^一御調分書物 尙通

一、御成^二付伊勢兵部少輔貞昌状 尙通

一、御成記 六卷

右拾行紙袋^二入

史料⑥「御成次第等写」加越能文庫 特一六・一三一―二七抜粋

(別記事省略)

於^三江戸^一 秀忠公松平筑前守所^江御成之次第

元和三年五月十三日

路地口ヨリ数寄屋^江御成、数寄屋御膳部

御本膳

酒^(浸)ひて《鯛、蛇》 御汁《青鷲、牛蒡、大根》

こくせう《雲雀》

御食

御二、盛こほし

焼鳥

かまぼこ

かうの物

御引物

さしみ^(刺身)鱧

御菓子、御ふちたか

からし^(辛子)酢

枇杷

餅

里芋

御楊枝

御相伴

日野唯心

藤堂和泉

公方様御前御三迄、杉足打

但三^(八)向詰^(盛)

御相伴式人杉平木具也

御相伴さしみへき、引物小鉢也

御茶過、書院^江被^レ為^ル成^ル御三方^二熨斗御前^江出候、頓^而 御祝之御膳出^ル 公

方様上段^二被^レ成^二御座^一

筑前守被^二罷出^一御相伴別^二無^レ之

初献

焼鳥、亀之甲

五^(五)と金^(金)わ絵有

御雑煮《御箸之台、御手塩》

五種^(同)亀之甲

二献

二献

二
地紙《やき鳥、しほ引、えひ、いか、さより》 汁《塩雁、干椎茸》

三
さしみ
は酢 汁すゝき

こをけ

吸物、蛤
取肴色く

一、二百人前

御中間衆

本

なます

ふとに

やき物

めし

汁集

二

やきの物、たい

汁《塩かん、ふ、しいたけ》

に物、ささい

三

さしみ

はす

汁しほに

香の物

吸物、はまくり
取肴色く

一、十三日御能之事

わき かも

二番 八しま

三番 夕かほ

四番 せうき

五番 三輪

六番 あしかり

七番 祝言

右四座之太夫衆へ薄（薄）小袖、類をしらす被下候、舞台（台）つませ被為候、代物

之儀は不レ及レ申儀候也、御能八ツ時分過、即本之路地口より 還御候也

御機嫌之儀、中々紙面難書儀共御座候、御次之日何も諸大名衆被仰入、御祝

之御能御座候

十四日

一わき 白ひけ

二番 えひら

三番 ゆや

四番 花月

五番 藤戸

六番 玉かつら

七番 山うは

以上

史料⑤ 「徳川將軍江戸藩邸御成一件」袋（島津家文書 七〇―二六）

（袋紐札）

- 一、塩引かさり きそく
 - やうかん同 作花
 - 一、干鱈かさり きそく
 - はず同 作花
 - 一、生いか 花
 - こおけ五十、金銀絵有
 - 一、かいつて 花
 - きりこ五十、金銀絵有
 - 一、かまほこ きそく
 - きんかん焼 葉花
 - 一、さいしき台之事
 - 一、鶴亀松竹の台 一膳
 - 一、ふつき親王の台 一膳
 - 一、山高滝《こい、三つわれ》 一膳
 - 一、長良の台 一膳
 - 一、けんしの台 一膳
 - 一、竜虎梅竹 一膳
 - 一、人丸之台 一膳
 - 以上、七膳
 - 一、三ツほし 一膳
 - 一、二ツほし 一膳
- 右之御折ほしの台、何も折たな_ニかさり置也、御目通之分は大形此分_ニ而御座候
- 一、三百五十人前 御供之衆
- 五々三之膳部之事
- 本膳

-
- 塩引 かまほこ 汁集
 - あへませ
 - 香の物 こをけ 食
 - 二膳
 - 干鱈 くらげ
 - こんきり すし 汁《白鳥、しいたけ、ふ入》
 - 三膳
 - 羽盛 汁鱸
 - にし
 - 舟盛
 - 引物三種
 - 吸物《ひれの物、はまくり》
 - 一、盛之台之事
 - 五せんさいしきの台、木地のたい
 - おさへの物いろく
 - 以上
 - 一、式百人前
 - 御かちの衆、膳府之事
 - 本
 - 干鱈 汁集
 - あへませ
 - かうの物 めし

御三之膳

羽盛

御汁白鳥

さし、い、三盛

舟盛

御汁鱸

御菓子十一種

一、焼ふ

一、大豆あめ

一、かや

一、なし

一、まんちう

一、枝柿

一、ミかん

一、くるみ

一、結昆布

一、油物

一、やうかん

一、御引替御膳之事

御本膳

なます

御汁集

□□(魚) (かうカ)の物

煮物、みるくい

御食

御二之膳

焼物ます

貝焼

御汁《鶴、竹の子、しいたけ入》

すし宇治丸

御三之膳

すしき

さしミ

たいらき

御汁鱸

こい

やきとり

御吸物

鯉のミそ煮

はまくり

御おさへ物

おきつ鯛

水くり

御菓子

さめかいもちい

みかん

枇杷

重御進物之事

一、御腰物

一腰貞宗

一、御脇指

一腰《荒(新方)身藤四郎》

以上

何れも披露人

酒井雅楽頭

御銚子加

板倉周防守

永井信濃守

青山大蔵

菅沼主馬

酒井下総守

鳥井讚岐守

右いつれも御膳過、御広間被_レ為_レ成、御能被_レ成_二御覽_一候

一、御次御三之間かさりの事

一、御打五合、数十

- 一、銀子百枚 横山大膳頭
- 御単物十
- 一、銀子百枚 神谷信濃守
- 御単物十
- 一、銀子百枚 横山式部少
- 御単物十
- 一、銀子百枚 富田下総守
- 御単物十
- 一、銀子百枚 今村内記
- 以上

御広間被_レ為_レ 成候時、從_二 筑前殿 御進物之事

- 一、御太刀 一腰、守家
- 一、御馬 一疋、御鞍置
- 一、呉服 百
- 一、御袷 百
- 一、白糸 百斤
- 一、紅 百斤
- 一、卷物 百卷
- 一、黄金 三百枚
- 以上

右之御道具入申候なし地長持三拾えた葵ノ御紋有

御家中之衆御礼之次第

- 一、御太刀 一腰、横山山城守
- 御単物廿
- 一、御太刀 一腰、本多安房
- 御単物廿

- 一、御太刀 一腰、奥村川内守
- 御単物十
- 一、御太刀 一腰、松平伯耆守
- 御単物十
- 一、御太刀 一腰、神谷信濃守
- 御単物十
- 一、御太刀 一腰、横山大膳頭
- 御単物十
- 一、御太刀 一腰、横山式部少
- 御単物十
- 一、御太刀 一腰、今村内記
- 御単物十
- 以上

右之御礼過、御能始_リ候_而、三番過、最前之御書院被_レ為_レ 成、七五三之御膳

出申候

公方様 筑前殿 和泉殿

日野唯心 水無瀬

御本膳

塩引、たこ

かまほこ

あゑませ 御湯漬 《御箸、御手塩》

かうの物、ふくめ こをけ

御二之膳

卷するめ、くらげ 御汁集

貝盛

から墨、すし 御汁鯉

さしミ、鯉

からし

御菓子、御ふち高

枇杷

餅

御柳子種

里いも

御相伴式人《日野唯心、藤堂和泉守殿》

公方様御前、御三迄杉足打

但、三八向詰盛

式人杉平木具也、御相伴さしミへき、引物重間はち也

御茶過、御書院被_レ為_レ成、即御三方之のし 御前へ出候、廳間御祝言之御膳

出候、公方様御上段、筑前殿下段、御二人斗也

初献

焼鳥

御箸台

御雑煮

五種

御手塩

二献

から墨

えひ

真羽煎

ふか

三献

干鱈

にし、ひしほ煎

卷するめ

以上

此三献三御酒三献参、三献目二公方様より筑前殿へ御腰物一文字、御脇指平野藤四郎、御拝領被_レ成、即中座御いたゞき、跡へ御くつろき被_レ成、ちひさ刀を被_レ置候、有_レ之大小御さし、又本之御座敷へ御出候、一献参、即御納候也

一、從二公方様御拝領之目錄

御太刀 一腰、守家

御腰物 一腰、一文字

御脇指 一、平野藤四郎

御小袖 百

御単物 百

御袷 百

御帷子 百

八丈嶋 三百端

銀子 三千枚

以上

一、御家中衆へ被_レ下候物之事

一、銀子三百枚 横山山城守

御単物廿

一、銀子三百枚 本多阿波(安房カ)守

御単物廿

一、銀子貳百枚 奥村川内(河内カ)守

御単物十

一、銀子貳百枚 松平伯耆守

御単物十

御単物 十

同断 松平伯耆

同断 神谷信濃

同断 横山大膳

同断 横山式部

同断 富田下総

同断 今枝民部

以上 九人御礼

右御礼過、御能初^リ三番過、最前之御書院^{ニテ}七五三之御膳出申候

公方様 利常公 藤堂和泉守殿

日野唯心 水無瀬

御献立

一 塩引、蛸 かまほこ

御本ノ膳 一 あへませ 御湯漬 《御箸、御手塩》

一 香之物、ふくめ 小桶

御二ノ膳 一 巻鰯 海月 御汁集

一 からすみ 貝盛 御汁鯉

御三ノ膳 一 羽盛 御汁白鳥

一 舟盛 栄螺、三盛 御汁鱸

御菓子 一、焼麩 一、大豆飴 一、楓

一、梨子 一、饅頭 一、枝柿

十一種 一、蜜柑 一、胡桃 一、結昆布

一、油物 一、羊羹

御引替御膳 鱈 御汁集

御本 煮物みるくい 香之物 御食

焼物鱒 鶴

御二 鮪字治丸 貝盛 御汁 竹ノ子 椎茸

已上

(※以下の献立等無し)

史料④ 「徳川将軍前田利常邸御成之次第」(島津家文書 七〇―二六―一五)

(端裏書 「^{シメ}□□(松平カ)筑前守殿 御成」

元和三年巳五月十三日卯辰間、公方様松平肥前守殿、御成之次第

自^ニ路地口御数寄屋 御成、御膳府

御本膳 酒浸《鯛、鰯》 御汁《青鷺、牛蒡、大こん》

こくせう^{茶番} 御食

御二、盛こほし

焼鳥 御汁、小菜

かまほこ

かうの物

御引物

一 からすみ

二 献一 海老 真羽煎

一 ふか

一 干鱈

三 一 辛螺、ひしを煎

一 卷鰯 已上

此三献_ニ御酒三献上_リ、三献目に 公方様ヨリ 利光公へ御腰物_{一文字}、御脇

指平野藤四郎、御拝領被_レ成、則中座被_ニ 御頂戴、跡へ御くつろげ被_レ成、
ちいさ刀被_レ為_レ置、今大小を御指、又本御座へ御出、一献参則納_レ、公方様よ
り御拝領之御目錄

御太刀 一腰、守家

御腰物 一腰、一文字

御脇指 一腰、平野藤四郎

御小袖 百

御単物 百

御袷 百

御帷子 百

八丈嶋 三百端

銀子 三千枚

以上

御家中衆被_レ下物

銀三百枚 横山々城

御単物式十

同断 本多安房

一銀二百枚 奥村河内

「御単物十

「銀百枚 松平伯耆

「御単物十

同断 横山大膳

同断 神谷信濃

同断 横山式部

同断 富田下総

銀百枚 今村民部

以上

御広間へ被_レ為_レ成時 利光公ヨリ御献上物

御太刀 一腰、守家

御馬 一疋、御鞍置

呉服 百

御袷 百

白糸 百斤

綿 千把

卷物 百卷

黄金 三百枚《十枚作三十也、鷹ノ打板程トシテ》

以上

右御道具入申梨子地長持三拾枝、葵御紋在

○御家中衆御礼之次第

御太刀 一腰 横山々城

御単物 二十 本多安房

同断

御太刀 一腰 奥村河内

二 海月 御あつめ汁

貝盛 鮓 御汁、鯉

からすみ

三 羽盛 栄螺 三盛

舟盛

焼麩、胡桃、梨子、羊羹

御菓子十一種 蜜橘、楓、油物、枝柿

大豆飴、結昆布、饅頭

(引替の膳)

鱈 御汁、あつめ

本膳 香物

煮物ニロク 御食

焼物、鱒

二 貝盛 御汁《鶴、竹ノ子、椎茸》

鮓、宇治丸

(※以下、御汁鱈、焼鳥、吸物、菓子等の記述無し)

史料③ (元和三年)「御成之記」(加越能文庫 特一六・一三一―二九)

(表紙書題)「元和三年五月十三日御成之記」(表紙貼紙)「沢野团右衛門」

御成之事

元和三年五月十三日 秀忠將軍様、加州利光公の御屋敷(御成之節覚書

露地口より御教寄屋へ被_レ為_レ成、卯辰ノ間_{ニテ}御膳部御献立

御本膳 一 酒ひて《鯛、鮑》 御汁《青鷲、牛蒡、大根》

一 一 香之物 御食

御二盛飜 一 焼鳥、かまぼこ

御引物 一 枇杷 御汁、小菜

一 一 香之物 御汁、小菜

御菓子縁高 一 餅 枝柿

一 一 里芋 御相伴二人 日野唯心 藤堂和泉

公方様御膳三迄杉足打、但三八向詰_{ニ盛ル}

御相伴、杉平木具、指身ハへき也

御茶過、御書院_{江被}為_レ成、則御三方_ニのし御前へ出、頓_而御祝之御膳出候、

公方様御上段 筑前様下段_ニ 御二人計也

一 焼鳥 御箸台

初献 一 御雑煮 御手塩

一 五種

G

一、松平筑前守利光

台徳院様御成^(秀忠)品々^(忠)拝領被^(忠)仰付^(忠)候、利光も品々献上物仕、家老之者共九人

凡^(忠)拝領物被^(忠)仰付^(忠)、献上物も仕御目見被^(忠)仰付^(忠)候(家譜)

史料②「太閤并將軍御成記」(加越能文庫 特一六・一三一―二五) 史料①との

異同を抜粹

(数寄屋での膳)

御本膳 酒ひて《鯛、鰻》 御汁《青鷲、牛蒡、大根》

こくせう 雲雀 御食

二 盛飜《焼鳥、かまぼこ》 御汁《小菜》

御香物

向詰 指味《鯉魚、からし酢》

御菓子 枇杷、枝柿、餅、里芋

(数寄屋での膳と書院での膳の記述)

公方様御前ハ三迄杉足打、三ハ向詰盛、御相伴ハ杉平木具、指味ハ折也、御

茶過、書院出御、則御三方引渡、御祝御膳出、上段着御、下段筑前守

利光着座

初献^(燒鳥、五種)

二献《からすみ、ふる》

三献《干鱈、巻するめ》

御雑煮《御箸台、御手塩》

海老 真羽煎

辛螺 ひしほ煎

(書院での下賜)

第三献に御腰物^(文字、平野藤四郎) 御脇刺^(文字、平野藤四郎) 賜候、中座被^(成)成^(成)御頂戴、少御くつろぎ、

少刀為^(置)置、右之大小御指御礼、御本座被^(成)成^(成)御座候

拝領之品々、左之通

御太刀^(守家作) 一腰 御刀^(文字) 一腰

御脇刺^(平野藤四郎) 一腰 御小袖 百

御単物 百 御裕 百

御帷子 百 八丈嶋織 三百端

白銀 三千枚

家中九人拝領物

白銀三百枚、単物十 本多安房守政重

同断 横山山城守長知

白銀貳百枚、単物十 奥村河内守

同断 松平伯耆

同断 横山大膳

同断 神谷信濃

同断 横山式部

同断 富田下総

白銀百枚 今枝民部

(※献上も、この九人が記される)

(利常の献上)

(前略)

巻物 百端 黄金三百枚《十枚作、三十台、鷹ノ打板程にて》

(書院での七五三膳)

塩引 蛸 かまぼこ 御箸

御本膳 香物、ふくめ、あへませ 御湯漬

巻鯛 小桶 御手塩

香物、こ桶
あへませ
食

二ノ膳
ほした^(干鮓)ら、海月 貝盛 汁《白鳥、しいたけ、ふ入》

こんきり、すし

三之膳

羽盛、にし 汁鱸 永(舟丸)盛《引物三種、吸物、ひれのもの》

^(鮓) 鱸

D-2

一、盃のたい之事、五せんさいしきのたい、木地の台

おさ^(押)への物ハ色々

D-3

御^(徒)かちの衆式百人前

せん^(勝符)ふの事

本

一、干鱈、あへませ

香物

二

やきとり

セリ之しほ引、こい、いか、さより

三

さしみ、はす

こ桶《吸もの、^(鮓) 鱸、取さ^(香)かな、いろく》

D-4

御中間衆式百人前 せんぶの事

本

鱈、ふとに^(太煮)

焼もの

汁集

めし

二

やきもの、たい

にもの、さ^(栄螺)い

三

さしみ、はす、かしの物 汁しほに

吸物はまくり 取さかな、いろく

E

一、十三日御能之事

ハき^(鮓)

加茂

二番

三番

四番

五番

六番

七番

祝言

右四座之大夫^(積)御小袖、袷、帷子、鳥目舞台^(積)御つませ被^(積)下候、御能七ツ時

分^(積)過、則本之路地口より 還御也、御次之日何^(積)も諸大名衆被^(積)仰入、御祝

之御能御座候

わき

二番

三番

四番

五番

七番

汁《しほ^(塩)かん、ふ^(巻)、椎たけ》

やしま^(鹿島・八島)

夕かほ^(顔)

セうき^(鱸)

あしかり^(芦刈)

ミわ^(三輪)

しらひげ^(白鬚)

ふ^(麻)ひら

ゆや^(鹿野)

花月

藤戸

山うは^(蛇)

F

從^(積)二公方様一拜領之御道具共重^(積)書立可^(積)仕候、其心得可^(積)被^(積)成候(松平筑前守御成書留)

御三之膳
は盛(羽)、さ(栄螺)ゝゝ、三盛
舟盛
御汁白鳥
御汁鱸

御くわし拾一種
一、や(焼麩)きふ
一、大豆あめ(飴)
一、まんちう(饅頭)
一、枝柿(蜜柿)
一、みかん(胡桃)
一、くるミ
一、結(昆布)こふ
一、油物
一、やうかん(羊羹)
以上

A16
一、御引替御膳之事

御本膳
御汁集、羹物、みる(海松食)くひ、御食

御二之膳
焼物ます 貝焼、御汁《鶴、竹の子、しゐたけ》
すし(半治)うし丸《さしミ、たいらき》 御汁鱈
焼鳥(い)

御吸物《鯉のみそ(味噌煎)いり、はまくり、御るさ(押力)への物、おき(興津鯛)つたい、水くり》
御くわし、さめ(醒井餅)かいもち、ミかん、びわ

A17
重御進物之事

一、御腰物 一腰(貞宗)
一、御脇指 一腰(新身藤四郎)

以上、何も御披露人酒井雅楽殿(忠世)
御て(鈍子)うし 板倉周防守、くわ(加)へ 永井信濃守(尚政)
御か(通)よう 青山大蔵、菅沼主殿、酒井下総守(忠正)、鳥居讚岐守(忠頼)

A18
右何も御膳過、又御広間へ被為レ成、御能御覽被レ成

B

一、御次江御三之間か(飾)さり之事

御折五合數十

一、し(塩)ほ引 かさり(亀足)
やうかん(羊羹) 同 作花
一、ほ(干鰯)したら かさり きそく
は(蓮花)す 同 作(花)ハな
一、な(生貝力)まかい 花
こ(①)桶五十金銀余有レ之

一、かまほ(金柑焼)こ きそく
きんかん(金柑)ヤき 作華

C

一、さい(彩色)しき之たい(台)之事

一、鶴亀松竹のたい 一膳

一、ふ(富貴)つき新主之台 同

一、山鳥籠《こいミつれ》 同

一、七(龍竜)やうりやうのたい 同

一、けん(源氏)しのたい 同

一、り(竜虎)やうこ梅竹 同

一、人(人麩)丸之たい 同

七種

一、三つ星之たい 一膳

一、二つ星之たい 同

右之御折星之たい、折(棚)たな(飾)かさり置也

御目通之分ハ大方此分(三)御座候

D11

一、三百五十人前、相伴衆五々三膳符之事

本膳

塩引、かまほこ

汁あつめ

A-1

元和三年巳五月十三日卯辰之間

(頭書) 「五月十三日ニ入ヘシ」

公方様、松平筑前守殿(前田利常)御成之次第

路地口より御数寄屋(江)御成御膳符

御本膳

酒(浸)ひて《鯛、蛸》 御汁《青鷲、牛蒡、大根》

こくせう(濃漿)雲雀

御二盛こほし

焼鳥

御汁(小菜)

香物

蒲鉾

御引もの

前(菓子)御くわし

後(刺身)さしミ

御柳枝

御相伴式人、日野唯心(編笠)、藤堂和泉守(高虎)、公方様御前御三迄杉足打、

式人杉平具、御相伴さしミへき、引物重(鉢)はちなり

A-2

御茶過、御書院被(レ)為(レ)成、則三方(厨斗)のし御前(出)申候、頓(而)御祝之御膳出申候、

公方様上段、筑前守殿下段、御式人斗也

初献

御雑煮《御箸台、御手塩》 五種

焼鳥

二献 真羽煮

からすミ(唐墨)

三献

干鱈

A-3

御広間(江)被(レ)為(レ)成候時、筑前守殿より御進物之事

にし(鱒)、ひしほ煮

まき(巻)するめ

以上

一、御太刀 一腰(守家)

一、呉服 百

一、白糸 百斤

一、巻物 百卷

一、綿 千把

一、御馬 一疋

一、御袴 百

一、紅糸 百斤

一、黄金 三百疋

右御道具入申候なし(梁)地長持三拾枝、あを(葵)ひ御(紋)もん有(レ)之

A-4

一、御家中之衆御礼之次第

一、《御太刀 一腰、御単物 二十》

一、《御太刀 一腰、御単物 二十》

一、《御太刀 一腰、御単物 拾》

一、同 《同、同》

一、《同、同》

一、《同、同》

一、《同、同》

一、《同、同》

以上

横山山城守(長知)

本多安房守(政重)

奥村河内守(宋政)

松平伯耆守(康定)

神屋信濃守(守孝)

横山大膳正(康玄)

畠山下総守(今枝重直)

今村内記

A-5

右之御礼過、御能初り候(而)、三番過最前之御書院被(レ)為(レ)成、七五三之御

膳出候也

公方様 筑前守殿 和泉守殿

日野唯心 水無瀬(親具)

御本膳

塩引、たこ(蒲鉾)、かまほ(和交)、あへませ

御二之膳

まき(巻)するめ、海月

貝盛

からすミ、蛸

御汁集

御汁鯉

史 料 篇

翻刻要綱

- ・ 適宜、返り点、句読点等を付した。
- ・ 一部史料では、記述のまとまり毎にアルファベット・算用数字を付した。
- ・ 修正は次のように表した。 【修正前】(修正後)
- ・ 未解読の文字は□とし、墨塗の場合は■とした。
- ・ 割注等は以下の様に区別した。 《割注・列記等》 〈小字〉 『朱書』
- ・ 助詞のニ・而は基本的に小書きとし、その他は史料に則した。
- ・ 欠字は一字空け、平出は二字空け、台頭は改行して一字上げとした。
- ・ 所謂旧字や異体字は基本的に常用漢字で表した。台・臺や余・餘等は字義が異なり、史料上で書き分けられるため本来区別すべきだが、本文と整合させるため、常用の字に統一した。
- ・ 異同の表記は、異本を示した上で、小字で次のように区別した。なお小書き等は反映しない。 …… (イ挿入語句) …… (イ入れ替わり語句) ……
- ・ 異同の表記が複雑な場合は注とし、異同篇に掲載した。
- ・ 異同の内、基本的に以下のものは取り上げない。
 - ・ よく混同される字…指・差、枚・牧等
 - ・ 異体字…島・嶋、松・恠、鶴・鶺等
 - ・ 繰り返し、同前の表記…山山・山々、同・同断等
 - ・ 数の表記…三・参、十・拾等
 - ・ 漢字・仮名…あへせ・拾、二て・にて、之・ノ・の等
 - ・ 一部の敬称…様・殿等
 - ・ 細目の表記…宮松様より・宮松様より御進上等
 - ・ 列記された進物や人名等の順序

目次

- 元和三年御成 史料①(1) ②(5) ③(6) ④(8) ⑤(13) ⑥(14)
- 寛永六年御成 基準史料(19) 異同篇(37) 幕府側史料『東武実録』(48)
- 『大猷院殿御実紀』(50) 『江城年録』(51)

元和三年御成

史料①『天寛日記』元和三年五月十三日条(国立公文書館)

甲四七〇四九コマ

五月十三日

一、公松平筑前守利【家】〔常〕か家 渡御あり、御太刀〔守家〕、御刀〔一文字〕、御脇指〔平野藤四郎〕、御暑衣百、御袷百、御単物百、御小袖百、八丈嶋三百端、白銀三千枚、利常に賜る、太刀〔守家〕、刀〔貞宗〕、脇指〔新身藤四郎〕、馬老匹〔鞍をほき〕、小袖百、袷百、白糸百斤、紅糸百斤、綿千把、巻物百卷〔縹子〕、緞子、黄金三百枚、利常是を献す、猿樂七番上覧あり、三番過て、小袖〔唐織〕、猿樂大夫〔与フ〕、其余の役者等に小袖を与へ、舞台〔鳥目五百貫是を積ミ与る、利家〔常カ〕か家臣九人 御前に出て拜謁す時に太刀、袷を献す、各金銀、御単物を賜る差あり〕『東武実録、続年録記、紀年録』

(中略)

一、今日加賀筑前守殿江御成之御用意候、昨日ハ御年寄衆各筑前守殿江御寄合ニ拙老式も呼ニ来候間、罷出候ハハ、事々敷御作法可被成御推量候、御進上物も、金子千枚、巻物、糸、綿、御太刀、御馬、御腰之物も、何も名物候、其前御小袖、御袷、長持以下敷を画シ候、御用意と拜見申候、期ハ敷寄〔被レ為〕成、其より御書院江被レ為出御、一献上り、其より広間江出御御能有之様子候〔国史日記十日之状〕

一、尊札致〔拜見〕、明日松平筑前守殿江被成 御城〔成カ〕、御能御座候ニ付、猿樂共に筑前殿より帷子、鳥目など被遣候内、御簾おり可申哉と被成御尋候、鳥目をハ亭主之内衆つまれ候共、御簾ハ如常可有御座候儀かと存候、御簾おり候被遣候との記録ハ見及不候〔国師日記、十二日之状、酒井雅楽頭様〕

○元和三年五月十三日御献立ニ入ルヘシ、次ニあり

乙五〇〇五八コマ

近世江戸遺跡における猫の土人形について

小林 照子

はじめに

猫は古くから人の傍らに寄り添ってきた動物である。

江戸後期、猫は浮世絵、草双紙、歌舞伎などの題材にさかんに取り上げられ、猫の土人形も多く作られた。では猫の土人形はいつごろから作られ始めたのだろうか。江戸後期という漠然とした年代観は共有されているが、その根拠は曖昧である。

ここでは、近世江戸遺跡から出土した猫の土人形の分類を行い、年代的な変遷について検討を行う⁽¹⁾。また、文献、絵画資料を加え、猫の土人形の変遷の背景について考察していきたい。

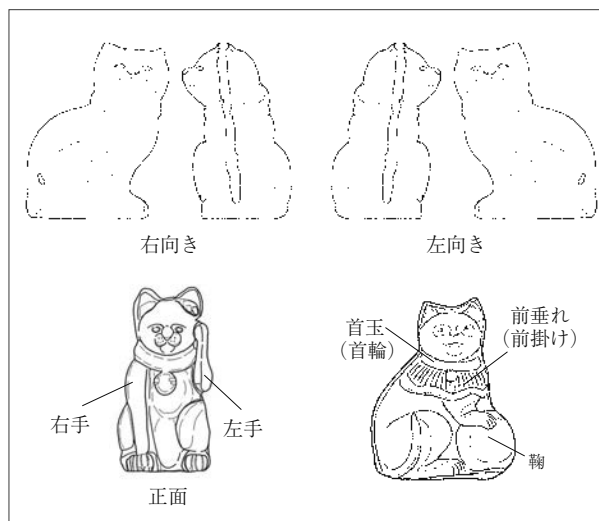
1. 先行研究

江戸遺跡における人形・玩具については、安芸の一連の研究からはじまる。安芸は成形技法から人形を分類し、年代の変遷を示した。また江戸遺跡出土の資料と他地域出土資料の胎土の違いを指摘し、産地特定の可能性にも言及している(安芸 1990)。その後安芸、小林は東京大学構内遺跡出土の人形・玩具の分類を進め、人形・玩具類の年代的推移について考察を行っている(安芸、堀内 2012)。生産地と製作者については、京都三年坂資料の胎土分析(千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997)、刻印・篋書きを持つ資料から製作地、製作者を検討した中野の研究があげられる(中野 1997、2011)。中野は「亀」印が京焼の陶工で人形原型師でもある欽古堂亀祐由来の刻印である可能性を指摘し、刻印の登場と人形のブランド化の関係を指摘した。また小林は17世紀後半の遺構から出土した西行像のX線CT調査から製作者の系譜を検討し、観察のみでは困難な成形技法の判断にCT調査が有用であることを示した(小林 2016)。

江戸遺跡以外では、大阪の平井、川村、京都の木立、能芝、加藤、和歌山の川村らによって研究が進められている(平井 2001、川村 2008、2010、2019、木立 2001、2008、能芝 2008、加藤 2016)。2022年加藤は京都の近世遺跡から出土する土人形の個々の器種の編年作業を行った。その結果、土人形の特定の器種で型式、型式組列の設定が可能で、土人形の変化の要因が文化的、経済的な要因に起因することを指摘している(加藤 2022)。

2. 猫の土人形の分類

今回の分類で用いた部位の名称について1図に示す。分類では猫の向きにふれるが、両前足を正面に向けた時、猫の顔が人形からみて右へ向いている場合は右向き、左へ向いているときは左向きとする。また招き猫は、片方の前足をあげているが、文献資料の記述に合わせ、右手、左手と呼称する。また最大長が10cm以上を大型、5～10cmを中型、5cm以下を小型とする。



1図 部位の名称

分類は、主に朱引内にあたる渋谷区、新宿区、墨田区、台東区、中央区、千代田区、文京区、豊島区、港区出土の、発掘報告書に掲載されている資料で、分類条件が判断できる個体を対象とした(2図)⁽²⁾。

A類 (3図、6図、7～10図1～52)

座猫を本類とした。前後2枚の型合わせ成形で、内部は中空である。内部に粘土塊を持ち、振ると音がするガラガラの機能を持つものもある。胎土は橙褐色もしくは明赤褐色。無釉。本類はさらに5つのタイプに細分される。

A-1 (3図、7図1～6)：高さ10～14cmと大型で、高さと最大幅の差が小さく、ずんぐりしている。器壁は厚く、底部は開口と閉口がある。猫の向きは右向き、左向き、正面向きがあり、尾は表現されないか、あまり長くない。頸部に首輪の凹凸があり、やや上を向いている。

A-2 (3図、7～8図7～20)：高さ7～11cmと中型。胸が突き出ており、前足へと続くカーブがくの字を描く。右向きで、やや上を向いている。頸部には首輪の凹凸があり、尾は長く前面に弧を描く。大きさはややばらつきがあるが、意匠に統一性がみられる。

A-3 (3図、8～9図21～42)：A-2と同様の形状だが、高さが6～7cmとA-2より若干小さく、頸部に首輪の凹凸はない。右向きでやや上を向いている。大きさ、形状ともばらつきが少なく規格の統一性が高い。出土数は最も多い。

A-4 (3図、10図43～51)：高さ5cm前後と小型。右向き、左向きがあり、やや上を向いている。頸部には首輪と鈴をつけており、尾は前面に短く表すか、腰部の突起として表現している。

A-5 (3図、10図53)：高さ3cm前後の小型。頸部には首輪、前掛けをつけており、尾は腰部の先端の突起として表現している。

B類 (3図、10図53～62)

座猫で、前足で毬、小判などを抱えているものを本類とした。前後2枚の型合わせ成形で、内部は中空である。内部に粘土塊を持ち、振ると音がするガラガラの機能を持つものもある。胎土は橙色または橙褐色。胡粉や黄、緑の彩色が残る資料がある。高さは4cm前後の小型のものとは8cm前後の中型のものがある。頸部には首輪、前掛けをつけており、尾は長く前面に弧を描くもの、腰部の先端に突起のように表現するものがある。

C類 (3図、11図63～75)

座猫で、片手を挙げる、いわゆる招き猫を本類とした。前後2枚の型合わせ成形で、内部は中空である。向きは右向き、左向き、正面向きがあり、上げている手は右、左両方があり、手のみ別作りで貼り付けるものもある。首輪、前掛けをつけており、尾は短いものと長いものがある。刻印をもつ資料があり、腰部に「○」の中に「メ」という字が陽刻された「丸メ」、「本」+「○」の中に「メ」という字が陽刻された「本丸メ」の刻印が確認されている。63～70は土製で、前後2枚の型合わせ成形、内部は中空である。胎土は橙色または橙褐色。71～75は磁製である。向きは正面向きである。土製、磁製とも、上げている手は右手、左手のどちらも確認されている。

D類 (3図、12図76～79)

座猫で施釉のものを本類とした。前後2枚の型合わせ成形で内部は中空。胎土は橙褐色で砂質である。首輪、尾、

体部に文様を描き、透明釉をかけている。文様は緑、茶、白で梅花を描くものが多く、同様の文様は、鳩笛、ミニチュアの瓶などにもみられる(4図)。

E類 (3図、12図80～82)

立猫を本類とした。手捻り成形で中実。首輪はなく、上を向き、腰を高くあげ、長く太い尾を背にくねらせている。胎土は橙褐色で無釉である。現在確認されているのは左向きの3点である。

F類 (3図、12図83～87)

伏猫を本類とした。左向き、右向きがある。

F-1 (3図、12図83～85) 前後の型合わせ成形で、内部は中空。幅7～10cmの中型と幅12cm以上の大型のものがある。胎土は橙褐色で無釉である。

F-2 (3図、12図86～87) 前後の型合わせ成形。幅3cm以下と小型で中実、胎土は灰色で無釉である。

5図は人形の縦横比を表したグラフである。A類は4つのグループに大別される。B類はA-3類と同寸の中型、A4、A5類と同寸の小型のもの2種類に分かれる。D類はA-3類とほぼ同寸で中型である。C類、E類、F類は特定値の集中はみられない。

3. 年代的な推移

3-1 主な遺構の概要

一括資料が出土した遺構、遺存状態が良好な遺構を概観したい。

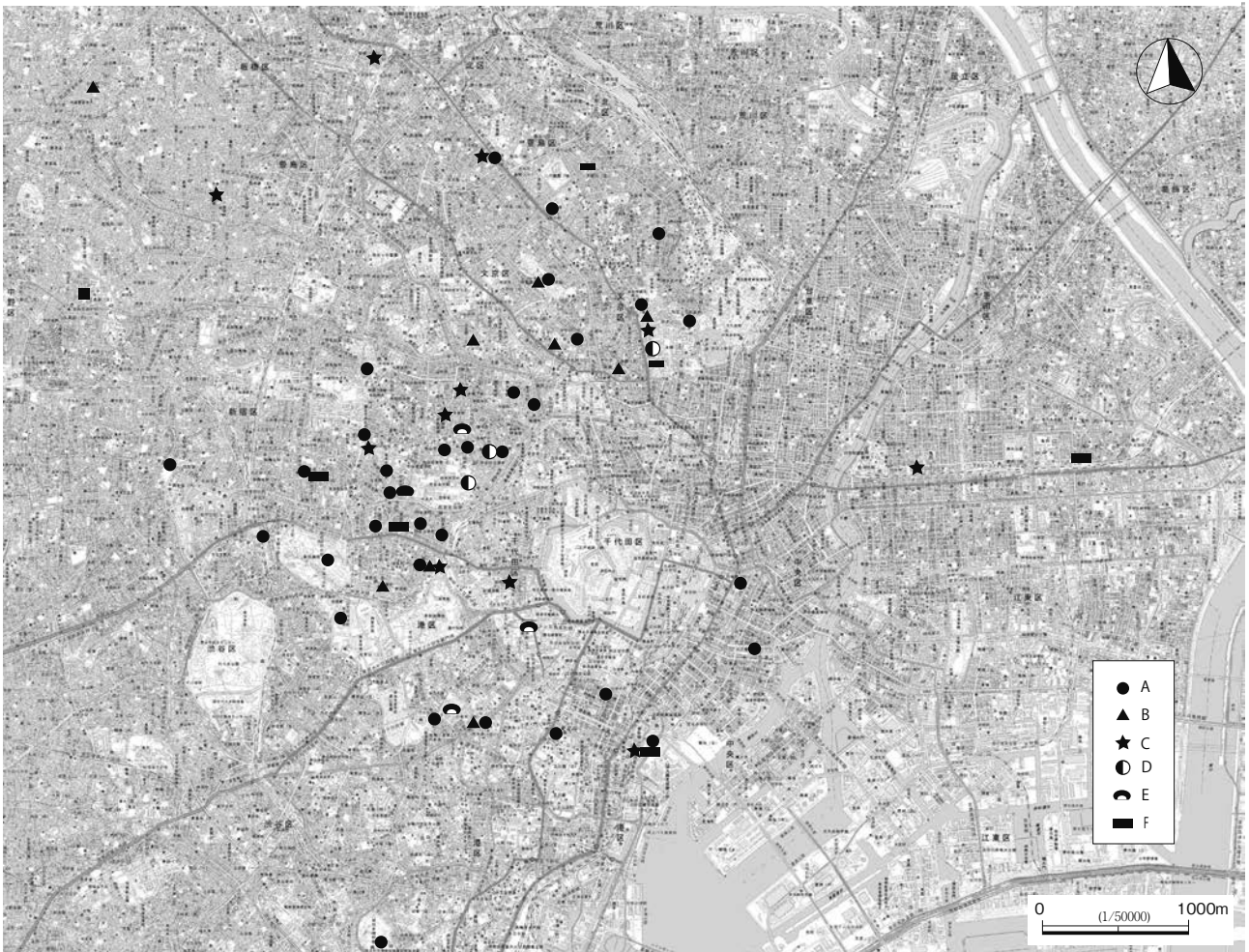
・新宿六丁目遺跡

所在：新宿区新宿六丁目(3066号：A-1類、2676号：F-1類)

調査区西北側は、天正19(1591)年から幕末まで鉄砲玉薬同心(幕府警護の鉄砲隊)に屋敷及び耕作地として拝領された「給地手作場」、東側は延宝3(1675)年から明治10(1878)年まで出雲広瀬藩松平家の下屋敷である。

3066号

天井部に方形の入り口部を有し、方形の室部をもつ地下室である。享保10(1725)年から宝暦元(1751)年の火災までの期間であるⅢ期に比定される遺構である。磁器1426点、陶器1253点、土器700点と大量の遺物が出土し、量的・組成的にまとまりを持つⅢ期の基準遺構とされている。猫の土人形はA-1類(7図6)が出土している。6は太い首輪を巻き、正面を向いて顔を左上に



2図 分類資料出土地点 (2万5千分の1地形図(国土地理院)に加筆)

A類					
A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	
B類	C類	D類	E類	F類	
				F-1	F-2

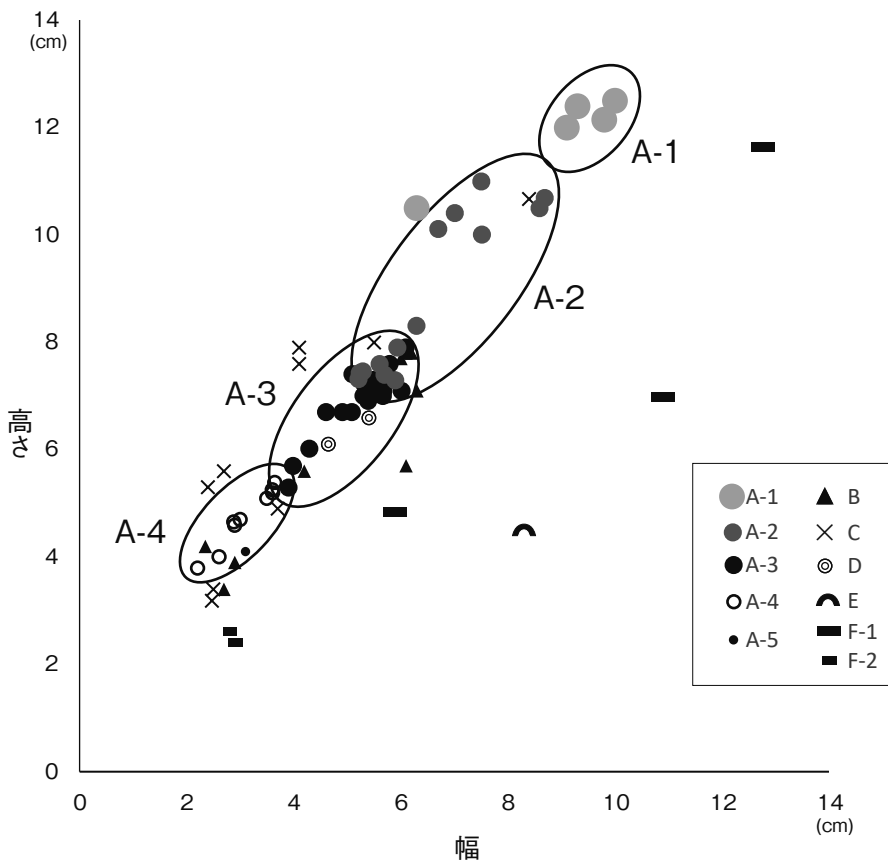
3図 猫の土人形の分類



4 図 梅文様のある玩具

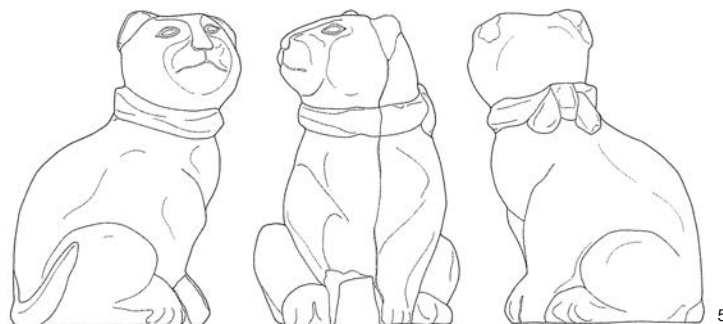
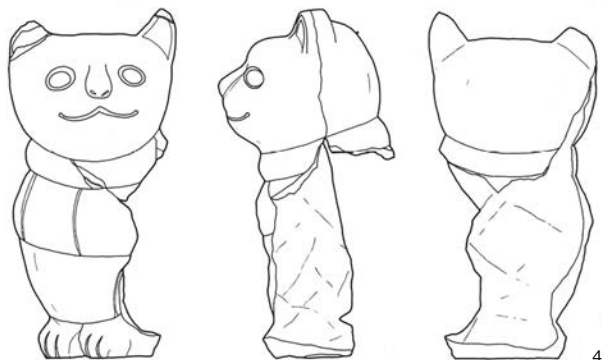
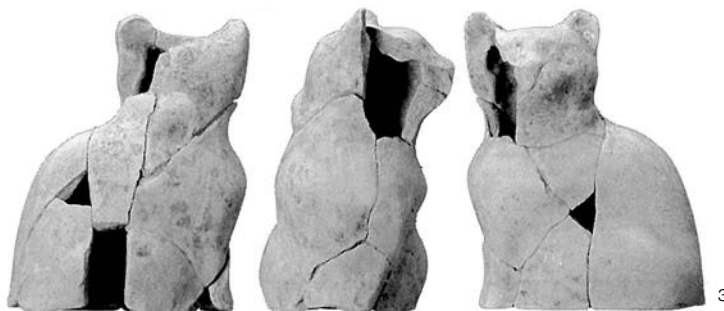
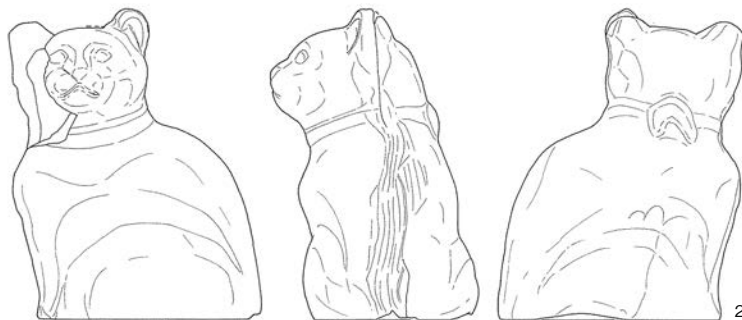
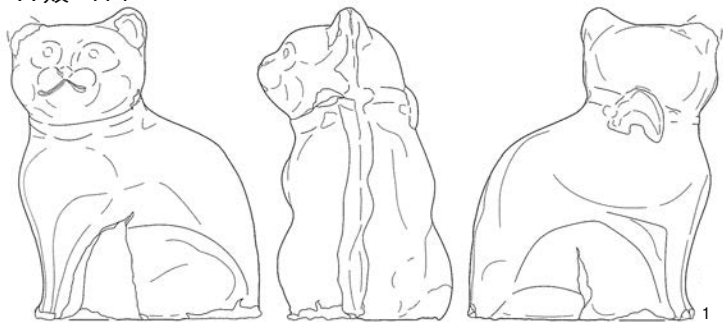


6 図 A 類大きさ比較
(左から A-2 類、A-3 類、A-4 類)

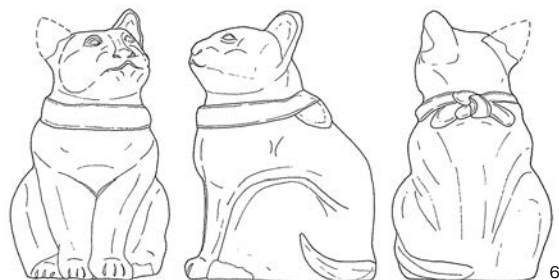
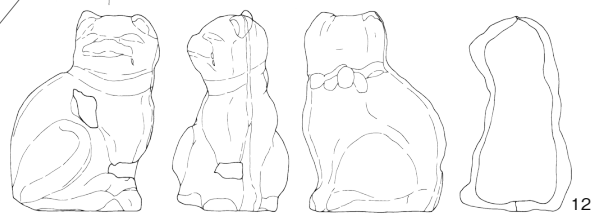
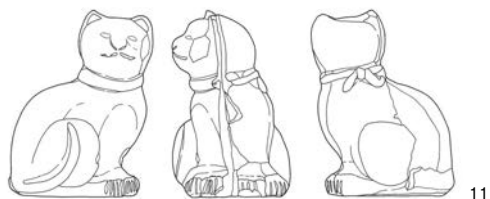
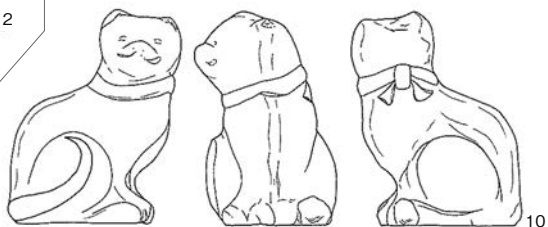
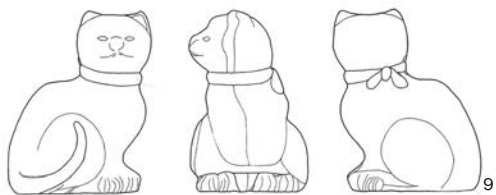
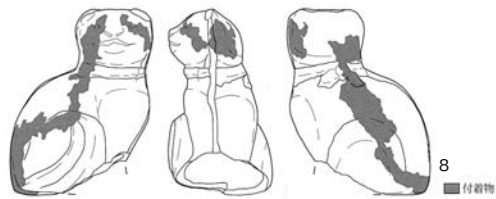
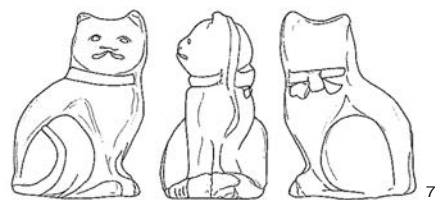


5 図 類型別法量分布

A類 A-1



A-2

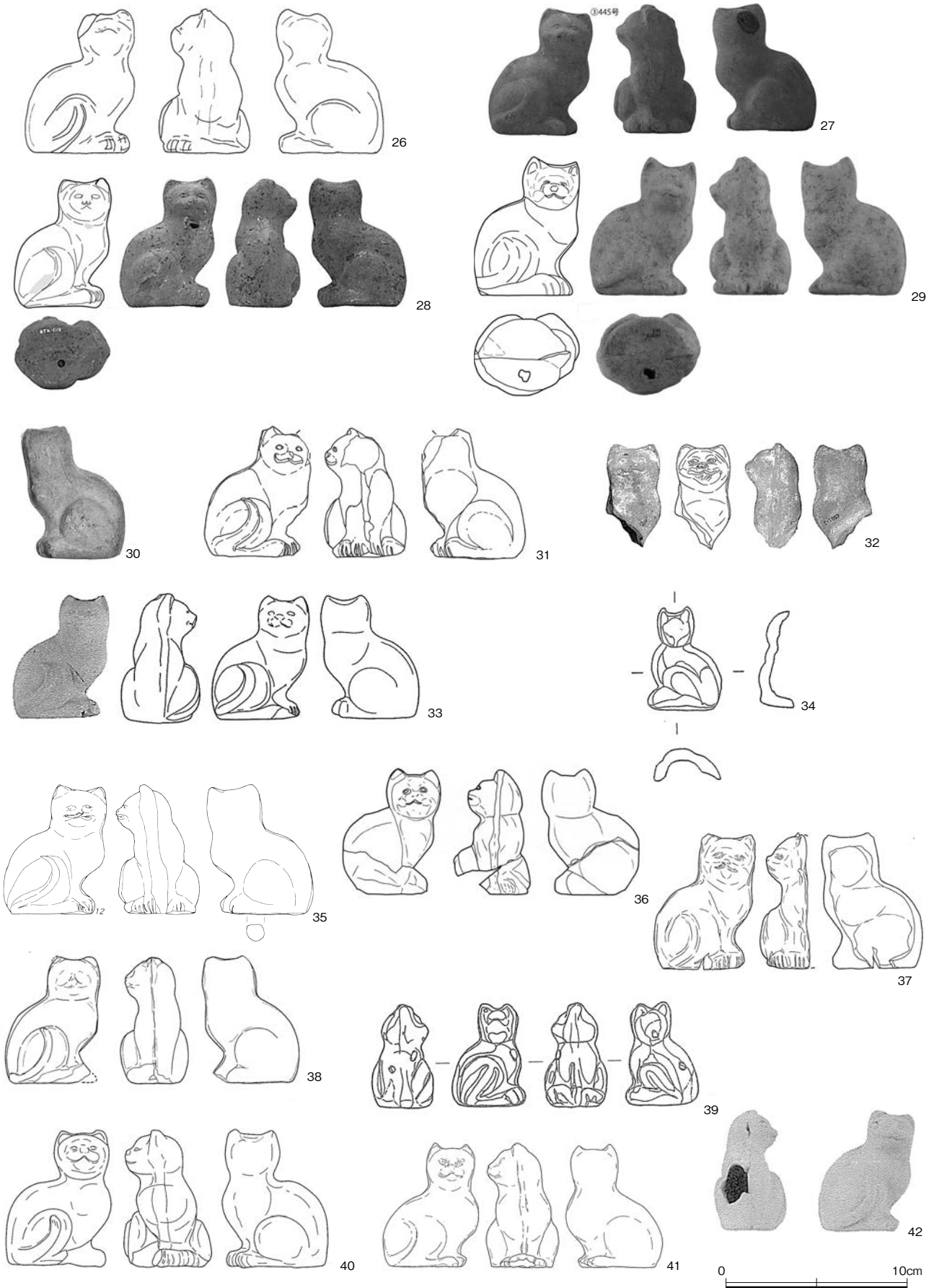


0 10cm

7図 猫の土人形分類 (1)

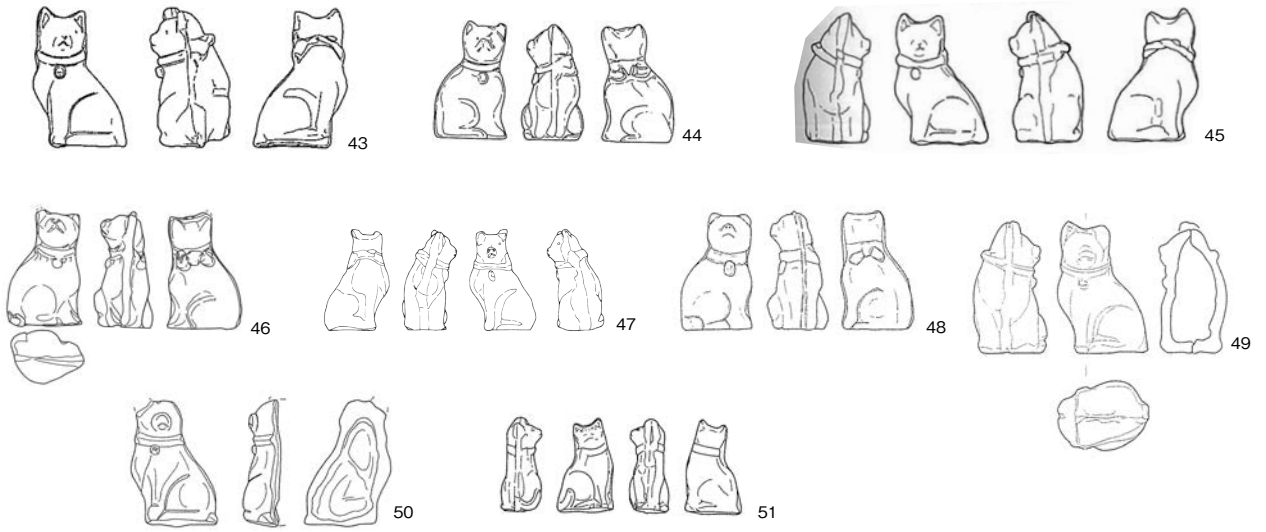


8 図 猫の土人形分類 (2)

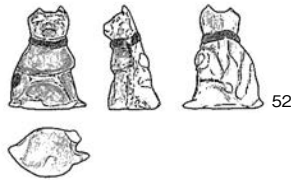


9 図 猫の土人形分類 (3)

A-4



A-5

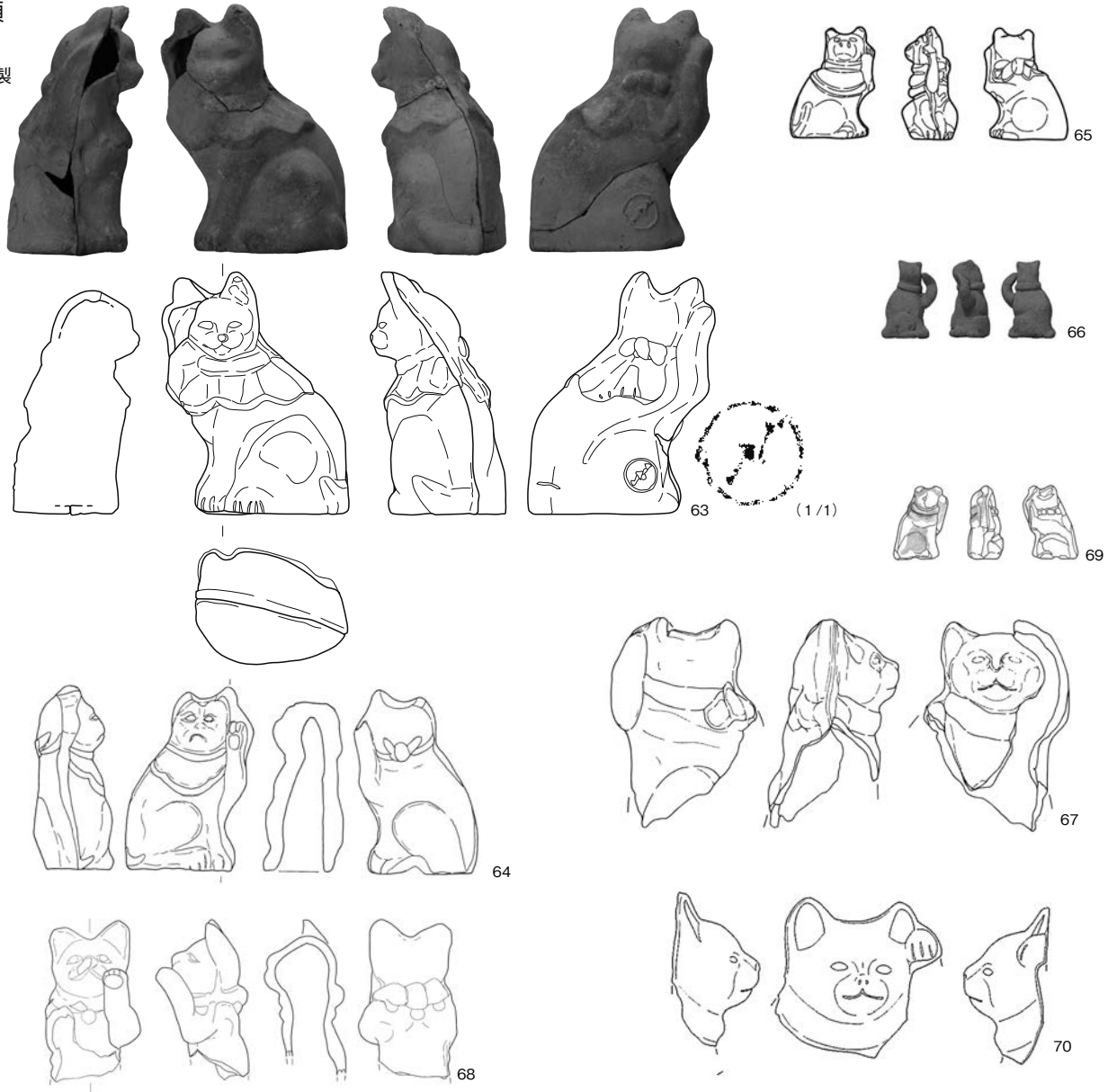


B類

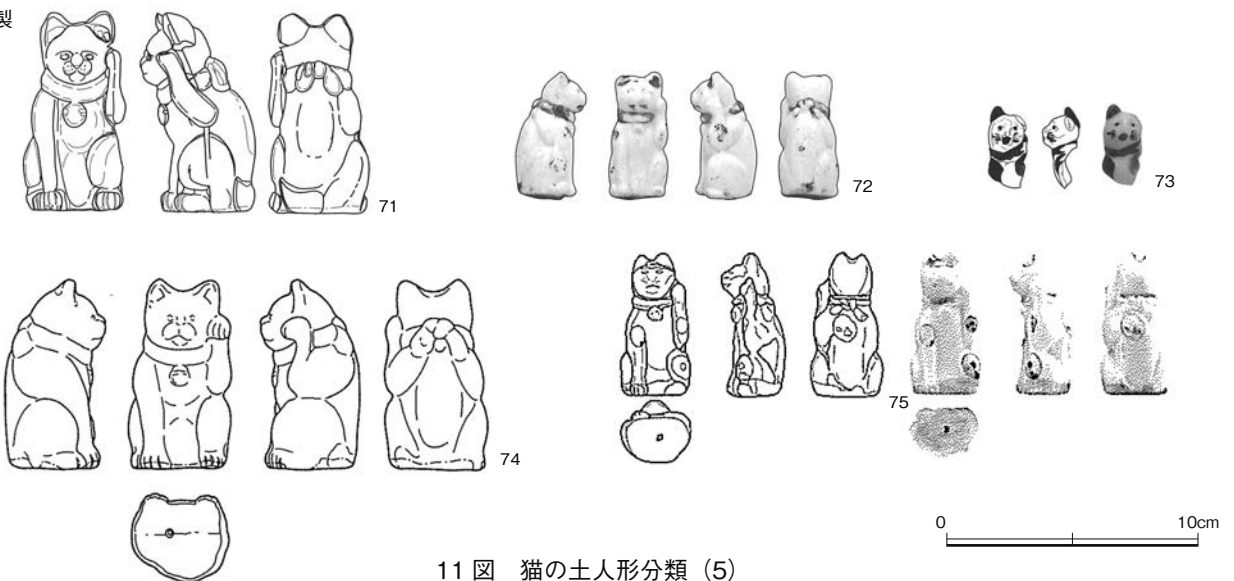


10図 猫の土人形分類(4)

C類
土製

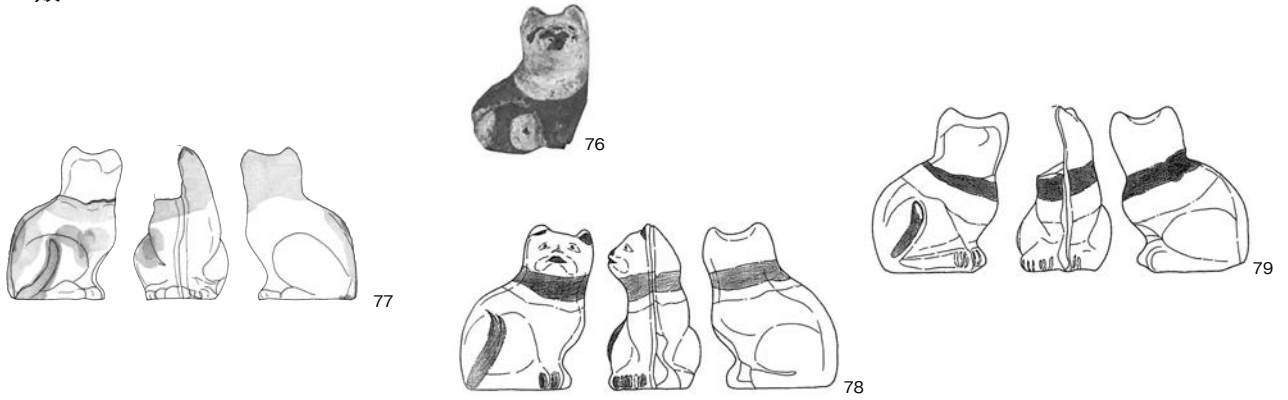


磁製

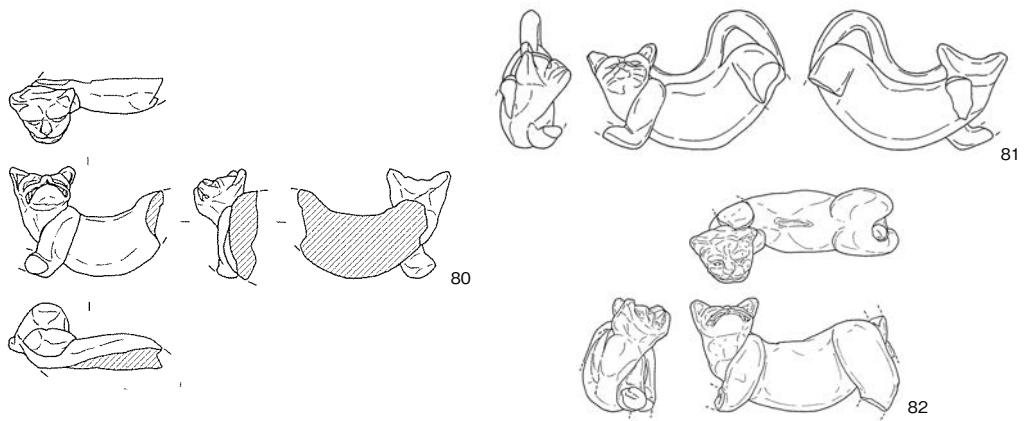


11 図 猫の土人形分類 (5)

D類



E類

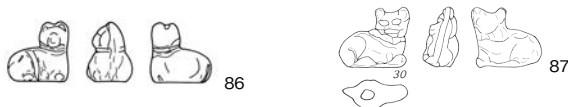


F類

F-1



F-2



12図 猫の土人形分類 (6)

むけている。A-1類の中では若干小さく尾も比較的短い。同遺構から姉様、ネズミ、ミニチュアの羽釜が共伴している。

2676号

方形の土坑である。3066号と同時期で、基準遺構に準じる主要遺構とされている。猫の土人形はF-1類(12図85)が出土している。85は小形の伏せ猫である。

・南山伏遺跡

所在：新宿区南山伏町16(219-b号：A-1類、E類)

調査区は天正18(1590)年から天和3(1683)年まで天龍寺の寺域、天和3(1683)年の火災以降、天龍寺は新宿追分に移転し、その跡地には貞享2(1685)から元禄2(1689)年頃から小規模な武家地が構築されている。219-b号

床面壁際に9基の杭穴を有する半地下室である。陶磁器類から18世紀第3四半期頃に廃絶された遺構と考えられている。遺物総点数は627点、そのうち瓦が53%を占めるが、陶磁器類も遺存度が高いものが多い。猫の土人形はA-1類(7図2)、E類(12図82)が出土している。2は前後2枚の型合わせ成形で器壁は厚く底部は開口である。胎土は橙褐色で左向きで首輪を巻き、若干上を向いており、尾は表現されていない。82は手びねり成形の立像である。4本の足は胴体を上から包むように貼り付け立体感を出している。胎土は橙褐色で白色粒子が混入している。

・湖雲寺跡遺跡

所在：港区六本木4丁目(1358号：A-3類、220号：B類)

曹洞宗祥永山湖雲寺の寺域である。湖雲寺は江戸府内の曹洞宗の寺院を統括した江戸三箇寺である青松寺の末寺にあたる。慶長5(1600)年に四谷仲殿町に起立し、元禄8(1695)年に麻布谷町に移転した。墓域は長く開発を免れていたため、良好な残存状態を示している。

1358号

墓域C-5に位置する円形木棺墓である。被葬者は性別不明の2歳の幼児で、埋葬年代は重複関係等から18世紀末から19世紀前とされている。棺内からは肥前産磁器の戸車、瀬戸・美濃産陶器の餌猪口、木製品のミニチュアの容器、土製品は在地系の人形玩具の恵比寿、大黒、人物、犬、猫、宝珠持ち狐、瓶、祠などが出土している。猫の土人形はA-3類(8図25)が出土している。25は型に首輪が表現されていない座猫で、右向き、尾は長い。

220号

墓域C-1に位置する方形木棺墓である。被葬者は性別

不明の3、4才の幼児、埋葬年代は遺構の重複関係等から19世紀後半とされている。棺内からは猫、天神、三味線弾き、蓑亀、鳩で、いずれも内部に粘土玉が入っている。このほか土鈴、木製品の櫛2点、覆土からは泥面子、ミニチュアの蓋が出土している。土製品はいずれも在地系である。猫の土人形はB類(10図58)が出土している。58は毬抱き猫で、右向き、尾は長く、首輪の下に前掛けをしている。

・東京大学本郷構内遺跡 工学部14号館地点

所在：文京区本郷7丁目(SU2：A-4類、SK99：A-3類、SK101：B類、SK292：A-2類、SK378：D類、SU381：F-2類)

中山道に面している御先手組組屋敷である。明治に入ると本郷森川町として町屋になるが、明治10(1910)年に東京大学用地となり現在に至る。

猫の土人形は6遺構から出土しているが、これらの中で一括資料が出土したSU2、SK101について概要を示す。SU2

階段を有する地下室である。年代は遺物から東大編年Ⅷc期(1830～40年代)に比定されている。遺物は総個体数214点、肥前、瀬戸・美濃系の端反碗が中心で、瀬戸・美濃系の陽刻が施された型皿などが出土している。人形・玩具も多数出土しており、橙色胎土では犬張子を模した犬、ふくら雀の笛、施釉で梅花を白色で花卉を描き、花芯を緑色で描いた瓶、鉢、鳩。白色胎土では「楓山」の刻印をもつ銚子、いずれも「亀」の刻印のある麻葉緑釉六角瓶、布袋徳利、亀乗り童子などである。白色と緑色の梅花文様はD類にもみられ、この時期の玩具によくみられる文様である。猫の土人形はA-4類(10図47)が出土している。47はA-4類の中でも小型の座猫で、左向きで尾は表現されていない。

SK101

不整形の採土坑である。出土遺物は個体数603点を数える。肥前系磁器の広東碗、端反碗、瀬戸・美濃系の端反碗、湯呑碗、施釉土器の油受け皿など、東大編年Ⅷa～b期(1800～1820年代)の一括資料が出土している。人形・玩具の出土数は本地点の中では一番多く、橙色系胎土ではぶら人形、着物狐のほか、施釉の狐拳遊戯を模した狐、漁師、庄屋などである。白色胎土系では施釉の狛抱き、裏面に「楽」の刻印のある皿、各面に麻葉文様を施し「亀」の刻印をもつ緑釉六角瓶が出土している。猫の土人形はB類(10図55)が出土している。55は右向きの毬抱き猫。頭部、前面を欠損している。

・水野原遺跡

所在：新宿区若松町4 (C001-528号：C類)

『御符内場末往還其地沿革図書』によると、延宝年間(1673-1681)には、調査区北側は紀伊新宮城主水野家下屋敷、北西部は旗本永見、筒井家の敷地である。南側は「本多備前守」の敷地であったが、元文年間(1736-41)には「本多修理」が西に、「尾張殿」が東に、嘉永5(1852)年には本多家の土地は二分され南側に「中川圭水」の敷地とされている。「尾張殿」とは宝永2(1705)年に拝領された川田久保屋敷で、幕末には本田家部分にまで屋敷を拡張している。

C001-528号

水野家下屋敷と尾張藩川田久保屋敷の境界付近に位置する溝である。総点数41981点と非常に多量の遺物が出土しており、陶磁器、土器類は66%を占める。出土遺物の年代は19世紀初頭から中頃であるが、嘉永6(1853)年初鑄の銭貨「嘉永一朱判銀」と1855年を上限とする「寿」字を型押しした白磁小皿が出土していることから、遺物の廃棄年代は1855年以降1860年代と考えられる。被熱している遺物も多いことから、安政2(1855)年の大地震の際の火災、もしくは安政6(1859)年の火災による廃棄が考えられ、遺物、遺構の傾向から、尾張藩川田久保屋敷の長屋に居住する藩士の生活財が廃棄されたものと考えられるが、一部水野家下屋敷の廃棄遺物と思われる資料も含まれている。猫の土人形はC001-528号遺構からC類とした招き猫(11図63)が出土している。

63は腰部に丸メの刻印を持つ招き猫である。高さ10.6cmと大型である。左向きで顔を前面に向け右手をあげている。首輪の下にはフリルのよった大きな前掛けをつけており、尾は前面に短く表現されている。胎土は橙褐色で白色粒子混入、比較的精緻である。

・巣鴨遺跡 巣鴨1-3-21地区

所在：豊島区巣鴨1丁目(24号：A4類)

中山道の北側に展開する武家地である。

24号

不整形の土坑である。比較的短期間に埋められた可能性が指摘されており、武家地が一般市街地に組み込まれる明治初頭に廃絶した遺構と考えられている。19世紀中葉の碗、皿、徳利、鉢などの陶磁器、焔炉、火消壺、燈火皿などの土器、食物残渣など生活全般に及ぶ遺物、総点数1172点が出土している。趣味、娯楽に関する遺物も多く、228個の基石がまとまって出土している。猫の土人形はA4類(10図46)が出土している。46は高さ4.6cmと小型で尾が短く、右上を向く座猫である。鈴

をつけた首輪をしている。

・南町遺跡

所在：新宿区南町12, 13(26号：D類)

江戸時代初期は天龍寺の寺領であったが、その後寛永年間(1625-1651)以降に、「御徒組大縄地」として御徒組同心の組屋敷に利用されるようになった地域である。「牛込御徒町」とも称されていた地で、明治初期には、牛込北町、牛込中町、牛込南町となり、さらに北町、中町、南町と呼称は変わるが地割りはほとんど変更されていない。

26号

遺物量が多く、整形が粗い土坑でゴミ穴と考えられている。総点数は670点で、揃いの小坏68個体、瀬戸・美濃系の揃いの中碗32個体、銅版染付の中碗破片が出土しており、廃絶年代は20世紀前葉まで下る可能性がある。猫の土人形はD類(12図78, 79)が2点出土している。78, 79は施釉の座猫である。A-3類とほぼ同様の意匠であるが、首輪、前掛け、尾を描いており、全体に透明釉をかけている。

・荒木町遺跡

所在：新宿区荒木町5丁目(4号廃棄土坑：F-1類)

江戸時代を通じて御先手組同心大縄地である。

4号廃棄土坑

大形の土坑で、多量の陶磁器、土器片、食物残渣が出土しておりゴミ廃棄土坑とされている。「泉湊伊織」の刻印をもつ塩壺、11波の四文銭、信楽系灰釉の灯明皿、台付灯明受皿が出土しており、廃棄年代は18世紀後半から19世紀前半とされている。猫の土人形はF-1類(12図83)が出土している。83は幅12.9cmと大型で、左向きの伏せ猫である。太い首輪と長い尾をもち、目と鼻は棒状の工具で穿孔して表現している。

3-2 各類型の消長

13図は、各資料の出土年代⁽³⁾をもとに作成した類型別変遷図に、後述する文献、絵画資料のトピックを加えた変遷図である。

猫の土人形が出現するのは18世紀中葉である。初めはA-1類、E類、F類が混在していたが、徐々にA-1類の系譜をひくA-2類、A-3類が主となり、A-2、A-3類の形状に毬などの付属物を加えたB類が平行して存在する状況がみられる。

19世紀に入るとA-4類、D類が現れ、19世紀中頃にはA-2、A-3類と同様の形状で片手を上げたC類が現れ

	A 類					B 類	C 類	D 類	E 類	F 類	
	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5					F-1	F-2
猫を放つ 『ねこの草紙』(1602) 猫をつなぐ 『富山御家旧記略』(1662)											
1750											
猫絵売り 『武江年表』(1764-82) 「猫また」画 『画図百鬼夜行』(1776) 虎絵売り「一話一言」 (1781-1801)											
1800											
馬一画猫五画 『甲子夜話』(1821) 「江戸じまん名物 くらべ」(1840年代) 短尾猫流行 『朧月猫の草紙』(1842)											
1850											
丸メ猫流行『巷街贅説』 『藤岡屋日記』(1852) 短尾猫の画 『百猫画譜』(1878) 「俳優楽屋影評判」 (1884)											

13 図 類型別変遷

る。近代に入ると A 類はほぼ見られなくなり、若干残っていた B 類、D 類もほどなく終息し、磁製を含めた C 類が残り現在に至る。

出現期から時期が下るにつれ、徐々に小型化していく傾向は、A 類、B 類、C 類にみられる。前掛けの表現がみられるのは A-5 類、B 類、C 類で 19 世紀前後からである。A-3 類は首輪や前掛けの表現はないが、A-3 類とほぼ同じ形状である D 類は施釉のため彩色が残っており、頸部に首輪と前掛けが描かれている。E 類を除く他の類型では、首輪、前掛けをしていない資料は確認できないため、A-3 類も首輪、前掛けが描かれていたと考えられる。

江戸在地系以外の胎土を持つ資料が確認されるのは F-2 類のみである。

4 文献、絵画資料にみる猫

これまで出土資料の様相をみてきたが、遺物は長く土中にあったため、彩色はほとんど残っておらず、当時の彩色は、施釉の資料や、わずかに残存する顔料から想像するのみである。また、猫の土人形の形状は、年代の経過に伴い変化していくが、その要因は土人形からだけでは伺うことができない。

そこで、ここでは絵画資料から土人形の意匠を伺い、文献資料からは変遷の要因となった社会的背景をみていきたい。

4-1 猫の土人形の意匠

14 図は歌川広重画『江戸名所画賛』に描かれた猫の土人形である。白地に頭と背中に黒ブチがあり、赤い首輪をつけている。ブチの周りは薄くぼかしており、猫の毛並みをよく表している。座布団を 2 枚重ねた上に飾られており、この絵が描かれた 19 世紀中頃の、飾り方がわかる。図の上には浅草で土猫が流行していることが記されている。

15 図は年代、作者未詳の江戸玩具を描いた画集『玩具聚図』⁽⁴⁾にみられる猫の人形である。型の合わせ目などの表現から、土人形だと思われる。首輪の部分は盛り上がりしており、A-2 類に該当する。首輪の下には前掛けと鈴が描かれている。鼻は黒、耳の中、口は赤、目は黄色に黒い点で表している。頭頂部と体部には黒ブチがあり、ブチの周囲には枠線が描かれている。尾の部分には「ニカ〇（ニカワ）」、後足の窪みには赤色で陰影をつけるためか「タン（丹）」との指示書きがあり、目、尾の位置は赤で修正されている。

16 図は歌川国芳により 1840 年代に描かれた「江戸じ

まん名物くらべ 今戸のやきもの」である。子供をおぶう女性が、今戸焼の土人形の彩色をしている。土人形の彩色は、落語の「今戸の狐」でも知られるように、女性の内職が多かったようだ。手に持つ人形は B 類とした毬抱き猫である。白地で頭頂部と身体に黒ブチ、尾は黒く前面に弧を描いている。赤い首輪の下には、青地に赤と黄の縁取りのある前掛け、前足で押さえている毬は黄色に赤で文様が描かれている。

17 図は招き猫である。白地に黒のブチ、赤い首輪は他の猫の土人形と同様である。大きな前掛けは緑青とあり、16 図の毬抱き猫の前掛けと同様の青色だったのであろう。この時期は派手な前掛けをつけることが流行しており、犬の土人形にも前掛けをつけているものが多数みられる。

描かれた土人形の猫は、いずれも白地に黒のブチである。白黒に赤い首輪はコントラストも美しく、人気が高かったのかもしれない。

4-2 猫の土人形の背景

4-2-1 鼠除けとしての猫

平安時代、猫は紐につながれて飼われていた。迷い込んできた猫の綱が絡まり、御簾が巻き上がり女三の宮の姿が外にいた柏木の目に触れてしまうという『源氏物語』中のエピソードは、よく知られている。では猫はいつから放し飼いになったのだろうか。

近世前期の御伽草子である『猫のさうし』では、慶長 7 (1602) 年、洛中に猫の綱を解けとの高札が立てられたことから、猫と鼠双方が僧の夢の中で提訴する物語である。これは実際に出された禁制をもとにしており、その背景には深刻な鼠害があった（上田 2003、黒田 1996）。

慶長のお触れより 60 年後の寛文 2 (1662) 年に、富山藩では逆に放し飼いを禁止する禁制が出されている。

「富山御家旧記略」⁽⁵⁾

猫御停止之事

其頃猫飼候事流行して、売買杯して事
騒かしく候ければ、向後猫つなき候事、尤売
買々いたし候儀御停止、若右違背之もの
於有之者過銀可出旨、寛文二年四月九日ニ
御家中江被仰渡けり、

(現代語訳)

猫御禁止の事

その時分、猫を飼うことが流行して、売買などしていろいろと騒々しいので、今後は猫をつなぐこと。

当然売買することも御禁止である。もしこのことについて背くものがいたら、罰金を命じる。このことについて寛文2（1662）年4月9日に（富山藩の）家中へご命じにられました。

猫の人気が高まり、もめ事が増えたため、今度は猫の放し飼いを禁ずる禁制が出されている。この時代でも、猫の需要は高かったことがわかる。

慶長のお触れから約150年後、都市江戸の人々は相変わらず鼠害に悩んでいた。「武江年表」⁽⁶⁾によると明和・安永（1764～1781）の頃に、鼠除けの猫の絵を売り歩く商売があったという。

曳尾庵云ふ、明和安永の頃、鼠除猫の絵かかんとて市中を歩行しは、常州の者にて名を雲友といふ

描かれたのは猫ばかりではないようだ。江戸後期の文人、大田南畝の随筆『一話一言』⁽⁷⁾では、天明～寛政年間（1781-1801）に上野で猫と虎の絵を売っている坊主がいたと記している。

画猫虎人

近頃（天明寛政の頃也）、白仙といへるもの年六十にちかき坊主なりき。出羽秋田に猫の宮あり、願の事ありて猫と虎とを画きて、社に一枚ツ、奉納すと云、自ら猫かきと称して猫と虎とを画く、筆をもちて都下をうかれありき、猫書ふ、といひし也。呼いれて画しむれば、わづかの価をとりて画く、その猫は鼠を避しといふ。上野山下の茶屋の壁に虎を画しより人もよくしれり、近頃はみえず

鼠害に悩んでいたのは都市だけではない。地方の養蚕農家にとっても、繭を食べる鼠は蚕の天敵であり、猫の需要は高かった。猫が簡単に手に入らない地域では、猫は大変高価なものであったようだ。平戸藩主松浦静山の随筆『甲子夜話』⁽⁸⁾では、文政4（1821）年の項に、地域によっては猫は馬よりも高価だと記している。

奥州は養蚕第一の国にて、鼠の蚕にかかる防として、猫を殊に選ぶことなり。上品の所にては、猫の値五両位にて、馬の値は一両位なり。

『物類称呼』⁽⁹⁾によると、養蚕が盛んな地域では、蚕神を祀る神社から小石を借りてきて、猫と称し蚕棚に置く風習があったようだ。

三月廿三日を春志と云参詣のもの其社地の小石を猫と名付て借て下向す是は蚕に鼠のつかぬ呪なるべし

4-2-2 化け猫と短尾猫の流行

江戸時代の猫のイメージは、可愛いだけではない。

江戸時代後期の辞典『和訓栞』ではねこの語源を「寝子」としているが、「寝子」は私娼の異称でもあった。三味線を使う芸妓のことを「ねこ」と呼び、「猫には遊女が成る」という俗説もあるなど、猫と遊女の関わりは深い。遊女薄雲を大蛇から守った猫の話「烟花清談」⁽¹⁰⁾、遊女屋の窓から外を眺める猫を描いた「浅草田圃西の町詣」（歌川広重画）など、猫と遊女をテーマにした読本、浮世絵も多い。

また、老いた猫は猫又になり、人を惑わすと信じられていた。

江戸中期の有職家である伊勢貞丈（1718-1784）の随筆『安斎随筆』⁽¹¹⁾では

数年の老猫形大に成り尾二岐になりて妖怪をなす是れを猫マタとも云ふ尾岐ある故なるべし

とある。安永5（1776）年に刊行された『画図百鬼夜行』には、後足で立ち上がり、長い尾が二つに分かれている「猫また」が描かれており、そのイメージをみることができる（18図）。また歌舞伎では、文政10（1827）年に「独道中五十三駅」が上演され、猫の怪異を主題とした猫騷動物（ねこそうどうもの）の流行の端緒となった。猫と怪異を結びつけるイメージも強かったのである。

猫又を恐れる人々が尾の短い猫を好んだためか、江戸後期になると短尾の猫の人気が高くなったようだ。

猫を擬人化した小説『朧月猫の草紙』（山東京山作、歌川国芳画）は、天保13（1842）年頃から6年間続いた合巻本であるが、作中幕間で猫が作者に「猫の尻尾も長い流行らん」と、長く続いた連載小説の終りを促している。短尾猫の流行は明治になっても続いており、仮名垣魯文による雑誌『魯文珍報』の挿絵で、後に単行本になった「百猫画譜」で描かれる猫の尻尾もみな短い（19図）。

明治6（1873）年にお雇い外国人として来日したチェンバレンは、長い尾を持つ猫を嫌う原因を、長い尾を何本も持つ猫は人間をたぶらかすという迷信のためとしている。また、短尾猫を好むのは全国的な傾向ではないとも述べており、短尾猫の流行は主に都市部でのことかも



14 図 19c 前半 歌川広重「浅草土猫」
(国会図書館デジタルコレクション)



15 図 年代・作者未詳「玩具聚図」(部分)
(吉徳資料室蔵)



16 図 1840 年代「江戸じまん名物くらべ 今戸
のやきもの」(部分) (吉徳資料室蔵)



17 図 嘉永 5 (1852) 年「浅草の猫」『巷街贅説』
『近世風俗見聞集』吉川弘文館



18図 鳥山石燕「猫また」『画図百鬼夜行』
(国会図書館デジタルコレクション)



19図 仮名垣魯文「百猫画譜」
(国会図書館デジタルコレクション)

拡大図



20図 推定嘉永5(1852)年 歌川広重「浄瑠璃町繁花の図」(部分)
(国会図書館デジタルコレクション)



21図 明治10(1884)年 長谷川貞信「俳優楽屋影評判
坂東寿三郎」(立命館大学アート・リサーチ・
センター所蔵)arcUP7304

しれない (チェンバレン著 高梨訳 1969)。

4-2-3 招き猫の登場

招き猫の記述、絵画は多数あるが、そのほとんどは嘉永5 (1852) 年の作である。

『巷街贅説』 浅草の猫⁽¹²⁾

今戸焼なる土製の猫を買取て、去年の冬浅草寺の境内、隨身門の内に店を開きて猫を売出すに、聞伝へ言伝へて、請求る者お猫さまと号して、初尾と唱へ、或は願望成就の神酒代備物代として、奉納金を置ぬ、子年の春に至りては、さまざまの小蒲団迄製し添て売るとなん、猶猫の大小製作の粗密、張子なども追々に増ぬらん

『増訂武江年表』 嘉永五年二月間 今戸焼の猫⁽¹³⁾

今戸焼と称する泥塑の猫を造らしめ、是を貸す。かりたるは布団をつくり、供物をそなへ、神仏のごとく崇敬して、心願成就の後金銀其の外色々の物をそへて返す。其の店は浅草寺三社権現鳥居の傍にありて、此の猫を求むる者夥し。此の事、兒女輩といへども心ある人は用ひず。まして丈人の驚くべきにあらずといへども、この頃は丈夫もひそかにこの猫をかりて祈りけるもこれあるよしなりしが、四、五年にしてこの噂止みたり

『藤岡屋日記』 嘉永五子年春 浅草観音猫の由来⁽¹⁴⁾

浅草随神門内三社権現鳥居際へ老女出で、今戸焼の猫をならべて商ふ、是を丸メ猫共、招き猫共いふなり、是ハ娼家・茶屋、其外音曲の席等ハ余多の客を招き寄候とて、是を求メ信心致ス也

「浄瑠璃町繁華の図」(20 図) は歌川広重の戯画で、やはり嘉永5 (1852) 年作と推定されている。此の図は人形浄瑠璃「軍法富士見西行」の一場面を、江戸の商売の場面に見立てたもので、左上の部分に、西行が花魁になった娘の江口に招き猫を売っている図が描かれている。露店の暖簾と提灯には丸メと書かれており、この招き猫は丸メ猫だということがわかる。僧が売っている丸メ猫は、白地に黒ブチ、右手をあげ赤い首輪と前掛けをつけている。

いずれも嘉永5 (1852) 年、浅草寺の境内で、招き猫、丸メ猫と呼ばれる今戸焼の猫が売られたことが記されており、そのきっかけとなった逸話として、猫のおかげで病が治り、生活が楽になったという報恩譚が語られてい

る。

丸メには「お金を丸くしめる」「お金を丸もうけする」という意味がある。浅草猫、丸メ猫は当時の流行り唄や拳遊び「三獣拳」にもなり大流行した。これより前の文化文政頃には福助、撫で牛の流行もあり、開運をもたらす招福人形が流行する下地は充分できていたのだろう。

5 江戸における猫の土人形の変遷とその背景

これまで出土遺物の様相と、絵画、文献資料の記述をみてきたが、これらとの関連から猫の土人形の変遷について考察していきたい。

5-1 猫の土人形の誕生

猫絵が流行したのは明和・安永 (1764 ~ 1781) 頃であるが、猫の土人形の出土が確認されるのも18世紀中頃であり、その時期はほぼ一致している。

養蚕信仰の社とされる丹波の大原神社では、江戸時代から養蚕農家は春に猫と称する小石を持ち帰り蚕棚に飾り、秋にこの石を返すという風習があった。同様の信仰は各地にあり、宮城県黒川郡では、祠内の小さな素焼きの猫を借りていき、秋には2個にして返したという記録もある(大木1975)。鼠除けを頼み猫絵や猫の塑像を飾ったのだろう。

ここで一点注目したいのは、猫絵ばかりではなく虎絵も売っていたということである。E類は猫の土人形の中では唯一立像で、手捻り成形である。身体の割に頭が小さく、背から後足へ続くラインは筋肉質で尾が太い。まぶたの上が厚く、険しい容貌も他の猫の土人形にはみられない表現である。またE類は18世紀後半の一時期のみ出土しており、虎絵が売られていたとの記述がある天明~寛政年間(1781-1801)の時期と一致する点からも、E類は虎である可能性が高い。

5-2 尾の長さの変化

3-2項では、時期的な変化として小型化をあげたが、もう一点変遷に伴う変化として、尾の長さがあげられる。2表は各類型の出現時期と尾の長さである。

18世紀中頃に出現したA-1類では、尾は表現されないか、短めである。A-1類と平行して存在したF類も尾の長さはまちまちである。この頃はあまり尾の長さは意識されていなかったのだろう。

18世紀後半にあらわれるA-2類、A-3類、A-2、3類の意匠を継承しているB類は、尾は背の方へ巻き上げる形で長さを強調して表現されている。この時期江戸で

は鼠除けの猫絵、虎絵などが売られ、猫の土人形も鼠除けとしての需要があった。猫は尻尾で動きのバランスをとる。尾の短い猫は、尾の長い猫より高いところに飛び乗れるようになるのが遅いといわれている。江戸の人々には長い尾の猫が、早くから鼠をとるイメージがあったのかもしれない。

19世紀前～中頃にあらわれるA-4類、A-5類、C類と19世紀後葉に出土するB類、C類は、突起のような表現か短尾で、短尾猫の流行を反映した意匠となっている。

5-3 招き猫はいつ現れたのか

招き猫は突然現れたわけではない。巷街贅説には「其始は有ふれし今戸焼の猫なりしを後は此形に作りかへて専らに鬻ぎぬ」とある(17図)。

A-3類は猫の土人形の中で最も出土数が多く、江戸市中では「有ふれ」た猫の土人形だったことがうかがえる。A-3類は横向きの座猫であるが、新宿区水野原遺跡から出土した63はそれに片手をあげるポーズを加えた意匠で、A-3類の意匠と連続性がみられる。C類はA-3類を流行に合わせ「作りかへ」たことにより発生したと考えられる。

63は安政2(1855)もしくは安政6(1859)年の火災で廃絶した遺構から出土しており、この遺構が機能していた時期は、丸メ猫が流行した時期と重なる。このほか、新宿区払方遺跡762号からは、刻印はないが、横向きで大きな前掛けをつけた招き猫が出土している。後面一部が欠損しているため、刻印の有無は確認できないが、762号からは嘉永一朱判銀(1853-1865 铸造)が出土しており、遺構廃絶年代は19世紀中頃とされている。また千駄木三丁目北遺跡⁽¹⁵⁾からは「本丸メ」の刻印を持つ資料が出土しており、この時期起源を争うほど、丸メ猫が流行していたことがうかがえる。これらの出土例から、C類があらわれのは1850年代と捉えることができ、文献資料の記述とも矛盾しない。

嘉永5(1852)年に始まった招き猫の流行は「四、五年にしてこの噂止み足り」とあるが、C類はこの後も出土する。尾張藩の時計師・鍛冶職頭の津田助右衛門家に伝わる文書によると、招き猫が流行した嘉永5(1852)年から8年後の万延元(1860)年に石部村で書かれた戯文には、江戸で招き猫が流行していることが記されている(名古屋博物館 2015)ことから、廃れたのは丸メ猫の流行を指しているものと思われる。

初めは横向きだったC類だが、後には正面向きのものが主流になる。C類で正面向きの資料は、本体は型合

せ成形で、手は手捻りで貼付の物が多い。横向きの座像だと、あげる手によって型全体を変えるため、型を何種類も作る必要があるが、正面向きならば上げる手の部分を変えるだけですむ。正面向きが主流になった要因は、製作時の省力化かもしれない。

5-4 人形の置場所

猫の土人形にみられる変化は顔の向きにもみられる。猫の顔の向きは、基本的に上向と水平の二種類である。上向：A-1類、A-2類、A-3類、A-4類、D類、E類、F-1類

水平：A-5類、C類、F-2類

この差異の要因として考えられるのは、猫の土人形が置かれた場所である。上向の人形は、目線より上に飾ると顔が見えなくなってしまうので、目線より下に飾られていたと考えられる。

養蚕農家は前述のように鼠除けとして、猫と称する小石を蚕棚に置いた。猫の土人形も台所、屋根裏、蔵など鼠が現れる場所に置かれていたと考えることができる。またガラガラ機能を持つA-2類、A-3類、B類も手にとれる場所に置かれていたと思われる。

3表は『ひな人形の故実』(上編 2004)にみる人形の置き場である。『ひな人形の故実』は嘉永6(1853)年に京都の人形店清水家次右衛門が出版した人形カタログである。144種の人形が紹介されており、当時の京都で売られていた人形と、人形に付されていた縁起を知ることができる。開運、病除けなどの縁起を付された人形は神棚に置かれるが、虫除け、鼠除けなど実用的な用途のものは、害悪の発生元近くに置かれている⁽¹⁶⁾。

一方、招福人形である招き猫は、縁起棚、もしくは神棚に飾られている(21図)。これまでは目線より下の場所に飾られていた猫の土人形は、招福人形や観賞用に用途を変え、置き場所も目線より高い場所へと変わっていったのであろう。

江戸時代の鼠害対策は補鼠器、枅わなが一般的だったが、その効果はあまり期待できなかった。19世紀になると「石見銀山」を代表とする殺鼠剤が普及しはじめ、鼠除けのための人形の需要は減ってきたのかもしれない。

3表では懷中に持つとされる人形も多い。A-5類、F-2類のように極小型の人形は、棚に飾るのではなく、懷中に持っていた可能性も考えられる。

おわりに

2表 尾の長さの変化

類型		18中	後	19前	中	後	20前
A	1	○					
	2		●	●			
	3		●	●	●		
	4			○			
	5			○			
B			●	●		○	
C					○	○	○●
D				●			
E			●				
F	1	●	●				
	2	○					

○短尾 ●長尾

3表 人形の置き場所（『ひな人形の故実』より）

項目	御利益	飾り場所
1 元三人形	開運、諸願成就、子孫繁栄	膳の上
2 設財人形	福德、開運、無病息災	神棚、仏壇
3 恵方人形	幸福、子孫長久	年徳棚
4 初寅人形	商売繁盛	神棚、仏壇
5 元日恩金祭	福德	神棚
6 福德恵比須	家業幸、福德	神棚
7 左扇人形	家業栄、福祿	神棚
8 七草鳥	食祿	荒神棚
9 猿田彦大神	疱瘡軽微	神棚
10 白馬人形	家業繁栄、酔止	神棚、懐中
11 鶯鳥	商売利益	神棚
12 神ひな	家業繁盛、子孫長久	家、蔵、物入棟木
13 壬生人形	良縁、流行病除、頭痛止	棚
14 誕生人形	食祿、長寿	神棚、川へ流す
15 鯉の伝	疫病除	屋上へ建てる
16 獅子頭	邪神除、疱瘡軽微	家中、船荷
17 妊帯安産人形	安産	荒神棚
18 魂祭人形	家業繁栄	神棚
19 已成金祭	金銀苦勞なし	神棚
20 冬至人形	萬福	子の方角
21 年越人形	年中息災	神棚
22 節分宝船	諸願成就	枕元、布団
23 厄除人形	難逃	懐中、辻地藏堂
24 童子人形	流行病退散	家に立置く
25 納雛	井戸神、廁神へ病除祈願	地中に埋める
26 組合人形	勝負必勝	常に所持
27 月代人形	月代慣れ	棚
28 埋人形	家運長久	床下に埋める
29 両面人形	商売繁盛、安産、渡航安全	戸口の見返し
30 力者人形	武術上達	神棚
31 耳人形	物事的中	懐中
32 疱瘡神祭	疱瘡軽微	東南南向の机上

項目	御利益	飾り場所
33 子求人形	子授	枕元
34 渡海人形	渡航安全	懐中、荷物
35 虫除人形	虫除け	地面、家の四隅
36 夜道人形	夜道難逃	懐中、荷物中
37 長座人形	客返し	棚
38 亀上臑腰元撫牛	富運、人気運	床、机上
39 人寄人形	集客	神棚
40 愛嬌人形	良縁	懐中
41 盗難除人形	盗難除、大願成就	神棚、仏壇
42 撫牛人形	家富	居間
43 茅の輪	疫病除	家の門口
44 夜啼留人形	夜泣止、寝言止	竈神
45 邪折人形	邪心消去	仏壇
46 布袋人形	家業繁盛	荒神棚
47 勢い虎	商売繁盛	年徳棚
48 日和人形	晴天祈願	南天の木
49 亀人形	悪夢除	懐中
50 牛馬の病除人形	牛馬病除	牛馬小屋入口
51 瘡人形	疱瘡留	座敷先の地面
52 痔人形	痔病治癒	雪隠
53 有卦人形	幸運祈願	神棚
54 鼠除人形	鼠除け	船荷
55 水の替人形	水あたり逃	懐中
56 家内和順人形	家内和順	着物の中
57 寝尿人形	夜尿	布団の下
58 船玉人形	渡航安全	懐中
59 鬨羽人形	盗難除	家
60 胞衣納人形	開運名声	土中衣壺中
61 蔵詰人形	水干難除	神棚
62 疱瘡軽くする人形	疱瘡軽微	膳の上
63 老人人形	誤嚥除	膳の隅
64 幸立人形	往古は六銭	土肌（焼物）入

本稿では、土人形の中で「猫」という一器種に焦点を当て、分類を行い各類型の変遷をたどった。また文献、絵画資料を加え、その変遷の背景について考察を行った。

人形・玩具は陶磁器・土器に比べ出土量が少ないため、定量分析の手法だけでは、年代相、社会相の復元が難しい(安芸、小林、堀内 2012)。本稿では絵画、文献資料との対比を加え、変遷の要因は社会的な変化と関連性が高いことを示した。

今後は他の器種でも同様の検討を重ね、土人形独自の編年構築に近づいていきたい。

謝辞

下記の方々には大変お世話になりました。記して感謝いたします。

小林寛子氏、栩木真氏、林直輝氏、新宿歴史博物館

【注】

- (1) 主に土製品を対象としているが、C類では一部磁製の資料も扱う。
- (2) 対象地域で出土例がある場合でも、報告書に記載がないか、分類条件に当てはまる資料がない場合は、2図に反映されていない。
- (3) 報告書に記載された年代は、出土陶磁器によるもの、遺構の切合い関係、帰属面によるものなど根拠は異なるが、報告書に記載された年代をそのまま使用している。
- (4) 表紙に天保3年と記されている資料だが、元吉徳資料室長で同資料室客員研究員の林直輝氏は「天保三年と記されているが、それを実際の作画年代とするには疑義がある」との見解をお持ちである。
- (5) 金沢市立玉川図書館近世史料館「富山御家旧記略」(加越能文庫、特 16.29-14)より。小松愛子氏にご教示いただいた。
- (6) 斎藤月岑著、金子光晴編 1968『増訂武江年表』1 東洋文庫 116 平凡社 p.187
- (7) 吉川弘文館 1978『日本随筆大成別巻 一話一言 2』吉川弘文館 p.378
- (8) 中村幸彦、中野三敏校訂 1992『甲子夜話』東洋文庫 314 平凡社 p.11
- (9) 国立国語研究所「物類称呼データベース」(参照 2022-10-23) <https://cid.ninjal.ac.jp/brskdb/> 卷二 26 オ 178 : 蚕
- (10) 千葉大学学術成果リポジトリ 「『烟花清談』－解題と翻刻－」(参照 2022-8-12) <https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900051762/jinshaken-18-18.pdf>
- (11) 国立国会図書館デジタルコレクション 「故実叢書・安齊

随筆(伊勢貞丈)」(参照 2022-8-12)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/771895>

- (12) 森銑三、北川博邦監修 1983『続日本随筆大成別巻 10 近世風俗見聞集 10 巷街贅説』p.188
- (13) 斎藤月岑著、金子光晴編 1968『増訂武江年表』2 東洋文庫 118 平凡社 p.129-130
- (14) 鈴木棠三、小池正太郎編 1989『近世庶民生活史料 藤岡屋日記 第五巻』p.65
- (15) 報告書非掲載
- (16) 挿図がないため、この鼠除け人形の形状は不明だが、土人形の場合は「素焼き人形」「焼土ひねり人形」などの表記があることが多いため、土人形ではないと思われる。

【発掘調査報告書】

- 荒木町遺跡調査団 1994『荒木町遺跡』
 エーアイシー、加藤建設 2007『昌林院跡』
 岡三リビング株式会社 2007『東京都新宿区南町遺跡 VI』
 落合公園遺跡調査会 1988『落合遺跡』
 株式会社パスコ 2021『湖雲寺跡遺跡』Great Eagle Tokyo
 TMK、(株)パスコ
 (株)パスコ 2014『麻布龍土町町屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
 四門株式会社 2015『南榎町遺跡 III』
 白金館址遺跡調査会 1988『白金館址遺跡 I』
 新宿区 2016『信濃町南遺跡 VII』
 新宿区遺跡調査会 1996『若松町遺跡』
 新宿区河田町遺跡調査団 2000『東京都新宿区河田町遺跡』
 新宿区払方町遺跡調査団 1999『東京都新宿区 払方町遺跡』
 新宿区南山伏町遺跡調査団 1997『東京都新宿区南山伏町遺跡』
 墨田区教育委員会 2011『陸奥弘前藩津軽家上屋敷跡 II』
 墨田区江東橋二丁目遺跡調査団 1997『江東橋二丁目』
 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997『千駄ヶ谷五丁目遺跡』
 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2次調査』
 大成エンジニアリング 2016『小石川三丁目東遺跡』
 大成エンジニアリング 2014『真砂町遺跡第 10 地点』
 台東区教育委員会 1997『池之端七軒町(慶安寺跡)』
 大和建設、加藤建設 2019『山吹町遺跡 III』
 中央区教育委員会 2017『新川二丁目遺跡 II』
 千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988『紀尾井町』
 テイクイトレード 2018『東京都新宿区 新小川町遺跡 III』
 テイクイトレードほか 2002『東京都新宿区白銀町遺跡』
 天徳寺寺域第 3 遺跡調査会 1992『天徳寺寺域第 3 遺跡発掘調査報告書』
 東京都住宅局 1996『練馬区小竹町 2 丁目遺跡』
 東京女子医科大学、新宿区生涯学習財団 2002『水野原遺跡』
 東京都新宿区教育委員会 1988『三栄町遺跡』

- 東京都新宿区教育委員会 2005 『萩藩毛利家屋敷跡』
- 東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 2014 『愛宕下Ⅲ港区 No.149』
- 東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 2021 『長崎一丁目周辺遺跡』
- 東京生命保険相互会社、新宿区市谷仲之町遺跡調査団 1992 『市谷仲之町遺跡Ⅱ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2008 『尾張藩徳川家下屋敷跡Ⅴ』
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『汐留遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2017 『霞ヶ丘町遺跡・千駄ヶ谷北ノ脇遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005 『新宿六丁目遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2002 『内藤町遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2007 『内藤町遺跡環状第5の1号線』
- 東京都埋蔵文化財センター 2008 『柏木淀橋町遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 『汐留遺跡Ⅲ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2006 『汐留遺跡Ⅳ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2007 『和泉伯方藩・武蔵岡部落上屋敷跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001 『板橋山之上遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2020 『小石川内貝塚・原町遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2020 『四谷一丁目遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2019 『四谷一丁目南遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2011 『市ヶ谷仲之町遺跡Ⅹ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2014 『市谷薬王寺町遺跡Ⅴ 市谷柳町遺跡Ⅱ』
- 東京都埋蔵文化財センター 2018 『巢鴨遺跡4』
- 東京都埋蔵文化財センター 2009 『千駄木三丁目北』
- 豊島区遺跡調査会 1999 『巢鴨町Ⅲ』
- 豊島区遺跡調査会 2010 『巢鴨町Ⅳ』
- 豊島区教育委員会 2003 『雑司が谷Ⅰ』
- 豊島区教育委員会 2010 『雑司が谷Ⅲ』
- 豊島区教育委員会 2006 『巢鴨Ⅴ』
- 豊島区教育委員会 2011 『巢鴨Ⅵ』
- 豊島区教育委員会 2015 『巢鴨遺跡3』
- 豊島区教育委員会 1996 『巢鴨町Ⅱ』
- 日本橋一丁目遺跡調査会 2003 『日本橋一丁目遺跡』
- 八丁堀遺跡調査会 1990 『京葉線八丁堀遺跡』
- 兵庫県、新宿区南町遺跡調査団 1994 『南町遺跡』
- 文京区遺跡調査会 1993 『駕籠町遺跡』
- 文京区教育委員会 2011 『小日向一・二丁目南遺跡第2地点』
- 文京区教育委員会、文京区上富士前町遺跡調査会 1997 『上富士前町遺跡第Ⅱ地点』
- 文京区教育委員会、文京区上富士前町遺跡調査会 1997 『上富士前町遺跡第Ⅱ地点』
- 文京区教育委員会、文京区上富士前町遺跡調査会 1997 『上富士前町遺跡第Ⅱ地点』
- 真砂遺跡調査会 1987 『真砂遺跡』
- 三井不動産株式会社、加藤建設株式会社 2007 『東京都新宿区市谷仲之町遺跡Ⅷ』

【参考文献】

- 安芸毬子 1990 「土人形について」『山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊考察編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 安芸毬子 1994 「成形技法からみる土人形」『江戸在地系土器の研究Ⅱ』江戸在地系土器研究会
- 安芸毬子、小林照子、堀内秀樹 2012 「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 東京大学埋蔵文化財調査室
- 上田穰 2003 「歴史家の見た御伽草子『猫のさうし』と禁制」『奈良県立大学研究季報』14 奈良県立大学
- 大木卓 1975 『猫の民俗学』田畑書店
- 加藤雄太 2016 「近世京都の土人形」『江戸遺跡研究』第3号江戸遺跡研究会
- 加藤雄太 2022 「近世京都の土人形の基礎的研究」『日本考古学』第54号日本考古学協会
- 川村紀子 2008 「大阪出土の土製品－大阪市内を中心として－」『関西近世考古学研究』16 関西近世考古学研究会
- 川村紀子 2010 「江戸時代の大阪におけるミニチュア土製品の考察」『大阪歴史博物館研究紀要』第8号大阪歴史博物館
- 川村紀子 2019 「城下町和歌山の土人形について－鷺ノ森遺跡出土資料から－」『和歌山地方史研究』77 和歌山地方史研究会
- 木立雅朗 2008 「考古学から見た土人形の出現と展開」『関西近世考古学研究会編『土人形がみた近世社会』』0 関西近世考古学研究会
- 木立雅朗 2001 「伏見人形の成立と発展を巡る二つの背景」『立命館大学考古学論集』Ⅱ立命館大学考古学論集刊行会
- 木下直之 2000 「前田公爵家の西洋館-天皇を迎える邸-」『加賀殿再訪-東京大学本郷キャンパスの遺跡-』東京大学総合博物館
- 黒田日出男 1996 『歴史としての御伽草子』ベリかん社
- 小林照子 2016 「西行の系譜－CT画像からみた土人形の成形技法－」『医学部附属病院入院棟A地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室
- チェンパレン著 高梨健吉訳 1969 『日本事物誌』1 東洋文庫 131 平凡社
- 中野高久 1997 「刻印・箋書きからみる「玩具類」」『江戸在地土器の研究』Ⅲ江戸在地土器研究会編

- 中野高久 2011「江戸遺跡における「亀」在印資料の流通と展開」
『江戸時代の名産品と商標』吉川弘文館
- 名古屋市博物館 2015「いつだって猫展」図録
- 能芝勉 2008「京域 江戸時代の土製品」『関西近世考古学研究会編『土人形がみた近世社会』』16 関西近世考古学研究会
- 平井和 2001「徳川氏大阪城期における土製玩具の三様相」『大阪市文化財協会研究紀要』第4号大阪市文化財協会
- 中野高久 2011「「亀」在印資料の流通と展開」『江戸時代の名産品と商標』吉川弘文館

東京大学構内遺跡調査研究年報 15

2021 年度

2022 年 12 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 株式会社イセブ
